

仮面ライダーWAR—Z [ウォーズ]

津上幻夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2020年2月29日、その日に常盤高校の3年2組の生徒30人が学校に集められた。そして、彼らは実験の為に異世界に連れて行かれてしまう。その異世界で、生徒達は仮面ライダーとしてライダーバトルを強いられる。

その1人、山田康介は仮面ライダーウオーズの力を手にし、相棒の清宮一美、仮面ライダーエレクスと共にライダーバトルに足を踏み入れる。

目次

アーカイブ	1
第1章 ウォーズ・サンライズ	
第1話 ウォーズ・バース	12
第2話 ライトニング・エレクス	17
第3話 デッド・サバイバル	23
第4話 ライフ・オンリーワン	29
第5話 マツハ・ウォリアー	34
第6話 シークレット・メモリー	39
第7話 ストーム・ナイトメア	45
第8話 スペシャル・シャイニング	50
第9話 デビル・カリバー	56
第10話 ジャツジ・デステイニー	62
間章 壊された日常	67
第2章 アイ・ニード	
第11話 ライフ・ブレイク	69
第12話 ブルー・フレイルム	74
第13話 デビル・モンスター	81
第14話 グレース・ゼロ	86
第15話 ミート・アゲイン	92
第16話 デス・ファイト	98
第17話 デイスパレット・デステイニー	105
第18話 レゲイン・ウォーズ	110
第19話 間章 新たな挑戦者	117

第20話 間章 兄

第※章 歩み寄る、2人

記憶1 別に、気にしてないよ

記憶2 俺、応援するよ

記憶3 だって：私達友達でしょ？

記憶4 分かった、約束だ

第3章 ロード・ノヴァ

第21話 ロスト・ライダー

第22話 ローディ・エクシード

第23話 ライダー・ビギンズ

第24話 マッド・ラブ

第25話 サンダー・ストーム

間章 禁呪、暗闇の玉座

第26話 ブリーズ・ライフ

第27話 グッド・バイ

第28話 ヒー・ロード

第29話 ダイ・ワンス

第30話 スーパー・ノヴァ

間章 覚醒、天裂く新星

第4章 クローズ・ワールド

第31話 クローズ・ウォーズ

第32話 間章 彼女を守る盾

第33話 クローズ・ユートピア

第34話 クローズ・ロード

第35話 クローズ・アイズ

119

122

129

135

143

148

155

161

169

175

182

185

191

197

208

213

218

222

227

231

235

240

第36話	クローズ・アトランティス	245
最終章	終わりになき戦の果て	
第37話	それは二度繰り返す	251
第38話	戦場に一筋の光	260
第39話	古き都の従姉弟	267
第40話	彼女の表と裏	272
第41話	東の都の恋人達	279
第42話	戦う運命、救う人命	284
第43話	誤解のあの日	289
第44話	最終手段	295
第45話	呪いの過去	301
第46話	閉ざされし炎	313
第47話	遠き頂へ	327
最終回	彼らの夜明け、永遠に	340
第49話	消失した都市と鍵の騎士	354
NEXT	WAR Z 仮面ライダーエレクトス	369

アーカイブ

1. メインの登場人物

山田康介（やまだこうすけ）／仮面ライダーウォーズ
仮面ライダーオタクの高校3年生。1月25日生まれで一人称は俺。生まれた頃から仮面ライダーと共にあると自称するほど仮面ライダーを視聴している。

基本自分から動くことはなく、追い詰められないと本気を出さないタイプ。ちなみに好きな仮面ライダーはディケイド。

清宮一美（きよみやかすみ）／仮面ライダーエクス

ゲームマーの高校3年生。8月8日生まれで一人称は私。ゲーム大会で賞を総なめするほどの腕を持っている。

なんでもまずは行動し、精一杯取り組むタイプだが、おつちよこちよい。好きなゲームジャンルはRPG。

黒夜道永（くろやみちなが）／仮面ライダーローディ

10年前のアトランティス消失の際に行方不明になっていた一美の兄で一人称は俺。イケメンで人のいい好青年に見えるが、実は極度のシスコン。それは一美が嫌がる程。しかし、根が悪い奴ではない。

2. 康介達の前に現れるライバル、仲間達：

平リユウ（たいらりゆう）／仮面ライダーユニット

康介達の前に最初に現れた仮面ライダー。姑息な手を好んで使う。

鮫島拓真（さめじまたくま）／仮面ライダーメガロドン

海洋生物マニアで、康介の友人。康介達と共闘はするが仲間になるつもりはなかったが、説得により仲間となる。

足立レイ（あだちれい）／仮面ライダーウエザー

心優しいが少し気が弱い青年。とある理由で従姉にあたる恵理の事を常に心配している。

虎山恵理（とらやまえり）／仮面ライダーバイパー
レイのいとこで康介とは幼馴染。学校生活では学級委員長を務めるほど信頼をされている。

八代忍（やしろしのぶ）／仮面ライダークノイチ
忍者の末裔とされており、実際に忍術についてある程度の知識がある。康介をとある理由で忌み嫌っている。

神谷昭彦（かみやあきひこ）／仮面ライダードウアリテイ
医者を目指す真面目な男。父親が医者をしており、憧れを持っている。しかし、友達作りが苦手。

不知火香（しらぬいかおり）／仮面ライダービクトリケン
一美以上のゲーマーで、昭彦の彼女。人の名前を読むのが苦手で一美をイチミと読み間違えた事も…。

3. その他の登場人物
白夜総三／プロトウォーズ
科学実験都市アトランティスに関わった人物。現在は死んだとされている…が、康介達の目の前に現れた…

東雲早苗（とううんさなえ）／仮面ライダー悪道
康介らを呼び出した張本人。その正体は、炎と剣を使いし仮面ライダー悪道。

北川光司（きたがわこうじ）／仮面ライダー絶王
早苗と共に行動する。その正体は、氷と槍を使いし仮面ライダー絶王。

南条翔（なんじょうかける）／仮面ライダー豪炎

早苗と光司が死んだ事によって動き出した幹部。雷と弓を使う仮面ライダー豪炎へと変身する。

西本鷲花（にしもとしゅうか）／仮面ライダー怪駕

南条と同じタイミングで動き出した幹部。風と斧を使う仮面ライダー怪駕へと変身する。

4. ライダー紹介

ライダーチェンジキーで変身したライダー達…

「仮面の戦士」

仮面ライダーウォーズ（WAR—Z）

山田康介が変身する仮面ライダー。

左胸のZライン、ウォーズラインは周囲の環境を瞬時に読み取り、分析する能力を持っている。胸、肩、膝下を覆う緑のアーマー、ウォーズプロテクターは防衛だけでなく自身の格闘性能を極限まで生かせるようになっている。

必殺技のウォーズドロップは右足にエネルギーを貯め、敵に着弾したと同時に解放し、爆発させる。

「Masked warrior! KAMEN RIDER WAR—Z！」

仮面ライダーウォーズスペシャル（WAR—Z Special）ウォーズがスペシャルキーによって更に進化した姿。

背中に装備されたグランウイングによる飛行が可能となり、攻撃力もウォーズから進化した。ウォーズプロテクターSPは、格闘性能だけでなく剣撃、銃撃も極限まで生かせるようになった。

必殺技は、格闘攻撃をするウォーズスマッシュ、武器攻撃をするウォーズプロミネンス、スペシャルキーを再スキャンし発動させるウォーズドロップSPの3種類ある。

そして、更に複数のキーの力を同時発動させるオーバーユニッターを利用した戦法も得意としている。

「I win the battle! KAMEN RIDER
WAR—Z Special!」

仮面ライダーウォーズ・ノヴァ（WAR—Z・NOVA）

ウォーズがノヴァ・バツクルを使い変身した最強形態。

敵の攻撃を反射する能力、ノヴァリターンを有しており、それを利用したカウンター戦法を得意としている。星座を象った様な見た目の大剣ノヴァ・セイバーを使う。

必殺技は、強力な蹴りを見舞うウォーズドロップノヴァとノヴァ・セイバーに力を込め振り下ろすウォーズビックバンの2種類がある。

「Destiny more than the space! K
AMEN RIDER WAR—Z・NOVA!」
ウォーズスペック

「雷鳴の女神」

仮面ライダーエレクス（ERE—X）

清宮一美が変身する仮面ライダー。

頭部の王冠型のパーツ、エレクスクラウンは体内の電気を自由に操る能力がある。胸、肩、膝下を覆う白金のアーマー、エレクスプロテクターは一定下の電撃攻撃を無効化することができる。

必殺技のエレクスライトニングは稲妻の如く敵にドロップキックを打ち込む技。

「Lightning goddess! KAMEN RIDER
ERE—X!」

仮面ライダーサファイアエレクス（Sapphire ERE—
X）

エレクスがサファイアキーによって更に進化した姿。

全身がブルーサファイアのような鎧、サファイアプロテクターに包まれ、一定下の物理攻撃を無効化する。更に6つの角のようなものを持った剣サファイアブレードを召喚し使える。剣はサファイアキーをスキャンする事でグレードアップし、必殺攻撃サファイアライトニングスターを発動させる。

必殺技はサファイアキーをベルトに再スキャンして発動させるプリズムエレクスライトニング。

「Blue flame! Brave fire! KAMEN RIDER Sapphire EREREX!」

エレクススペック

「大数の暴力」

仮面ライダーユニット (UNIT)
平リュウが変身する仮面ライダー。

他のライダーより、アーマーの数が少なくスペックが低い、そのかわり2体分身を生成することができ、分身を自由に操作することができる。

「Violence majority! KAMEN RIDER UNIT!」

「恐怖の荒牙」

仮面ライダーメガロドン (MEGALODON)
鮫島拓真が変身する仮面ライダー。

両腕とかかるとにサメのヒレの形をしたメガカッターを装備しており、手刀やかかと落としなどの技を得意としている。

「Phobic fangs! KAMEN RIDER MEGALODON!」

「天空の大嵐」

仮面ライダーウエザー (WHETHER)

足立レイが変身する仮面ライダー。

天候を小規模にし、自由に操作できる能力モーゼテンランを頭部に備え、天候を利用した光、水の攻撃を得意とする。

[Sky calamity! KAMEN RIDER WHET
HER!]

「爆炎の猛者」

仮面ライダーバイフー (BAIHU)

虎山恵理が変身する仮面ライダー。

チャイナドレスを模した鎧、バイフープロテクターは戦況と変身者の感情に合わせて攻撃力を操作する能力がある。格闘攻撃を得意とする。

[Fight master! KAMEN RIDER BAIH
U!]

「陰影の正義」

仮面ライダークノイチ (KUNOICHI)

八代忍が変身する仮面ライダー。

全身に装備されたサイレントシノビにより、音もなく敵に近づく事ができ、それを利用した奇襲作戦を得意とする。

[Shadow justice! KAMEN RIDER KU
NOICHI!]

「大敵の破滅」

仮面ライダーレイド (RAID)

味方、及び敵の数が増えるごとに自身のスペックが上がる能力を持っており、実際にそれを戦闘に生かそうとしていた。

[Enemy breaking! KAMEN RIDER RA
ID!]

「暗黒の魔刃」

仮面ライダードウアリティ ドミネート(DUALITY Dominate)

神谷昭彦が変身する仮面ライダー。

サバイブソードガンの二刀流で戦う騎士の様な姿をしている。単
純な戦闘能力で彼に勝るものは数少ない。

「Darkness sword! KAMEN RIDER DUALITY!」

「危険な殺刃」

仮面ライダードウアリティ デス(DUALITY Death)

ドウアリティのもう一つの形態。

サバイブソードガンの二丁拳銃で戦う事が多く、毒沼など相手を変
則的な攻撃で苦しめる。

「Mad murder: KAMEN RIDER DUALITY
Y…」

「勝利の神風」

仮面ライダービクトリケーン(VICTORICANE)

不知火香が変身する仮面ライダー。

風を発生させるビクトリークリエイターを利用した竜巻の様な攻
撃を得意としている。

「Victory cyclone! KAMEN RIDER VICTORICANE!」

「未来の構築」

仮面ライダーローディ(ROADY)

黒夜道永が変身する仮面ライダー。

他のライダーと違い、ロードライバーで変身する。空間に道を生成
する能力を持っており、それを利用した閉鎖空間での戦闘、奇襲戦に
長けている。

「Remake the future! 「未来を創り変える!」仮面ライダーローディ!!」

「悪魔の覇道」

仮面ライダー悪道（α-D.O）

東雲早苗が変身する仮面ライダー。

蛇腹状に変形する魔剣『悪魔覇剣』を片手に戦う。ヘルファイアと呼ばれる炎を操る事ができる。

「悪魔ノ覇道…仮面ライダー悪道…」

「絶対の烈王」

仮面ライダー絶王（ZET-Ω）

北川光司が変身する仮面ライダー。

遠近両用の魔槍『絶対烈槍』を装備している。ヘルブリザーと呼ばれる氷を操る事ができる。

「絶対的烈王…仮面ライダー絶王…」

「豪快で厄災」

仮面ライダー豪炎（GO-Ψ）

南条翔が変身する仮面ライダー。

強力な魔弓『豪快厄弓』を使い戦う。ヘルサンダーと呼ばれる雷を操る事ができる。

「豪快且厄災…仮面ライダー豪炎…」

「怪火を凌駕」

仮面ライダー怪駕（X-G.A）

西本鷲花が変身する仮面ライダー。

最強の魔斧『怪火凌斧』を奮う。ヘルウィンドと呼ばれる風を操る事ができる。また、邪剣ティルフィングと呼ばれる剣も帯刀している。

「怪火ヲ凌駕…仮面ライダー怪駕…」

「古の仮面戦士」

仮面ライダープロトウオーズ

白夜総三が変身する仮面ライダー。

Zと呼ばれたその姿は、ウオーズを黒く塗りつぶしたかのような様。

5. スタイルチェンジキー紹介

スタイルチェンジキーとは：

ライダーが持つ変身用キーとは別のキー。基本各ライダーに一つ配布されており、使用者に特殊能力を授ける。

・ダミーキー

主な使用者：ウオーズ、ユニット

ユニットが持っているキー。分身能力を持ち、戦況を有利に持っていける。

・スパークキー

主な使用者：エレクス

エレクスが持っているキー。電撃を放つ事ができ、周りを翻弄させる事ができるが、味方にも当たるので、使用の際は周りを見て使おう。

・マツハキー

主な使用者：ウオーズ

ウオーズが持っているキー。使用者の感覚を高め、スピードが上昇する能力を持つ。更に、ウオーズが使うことによって、マシンウォーリアーを召喚する。

・ファングキー

主な使用者：メガロドン

メガロドンが持っているキー。サバイブソードガンの威力を高めたり、手刀攻撃を強化したりする。

・ブリザードキー

主な使用者：ウエザー

ウエザーが持っているキー。冷気を放ち、敵を凍らせることができる。味方は凍結注意!!

・ファイアーキー

主な使用者：バイファー

バイファーが持っているキー。炎を放ち、敵や武器、自分自身を焼き尽くす事ができる。

・グラビティキー

主な使用者：レイド

レイドが持っているキー。現時点では使われていないが、恐らく重力を操る能力を持つ。

6. 怪人紹介

・ホッパー

大量に現れる戦闘員。蝗害のようにライダー達に襲いかかる。

・ダークホッパー

悪道が精製した戦闘員。剣と魔法を使い戦う。召喚には専用のキーが必要で、最大2体までしか召喚できない。

・デビル

悪道が限界突破で変身した姿。悪魔のようなその見た目は相手に恐怖心を植え付ける。

・カイザー

絶王が限界突破で変身した姿。皇帝のようなその見た目は相手を

屈服させる。

7. アイテム紹介

・サバイブバツクル

ウォーズらが使うシアンのバツクル。右側にライダーチェンジキー、左側にスタイルチェンジキーを装填できる。

・ライフバツクル

サバイブバツクルを装着するためのユニットが装備されたベルト。これが碎けると、死んでしまう…

・サバイブソードガン

全ライダー共通武器のサバイブソードガンは、剣と銃になり、それぞれキーを装填することで、必殺技を発動できる。

・サバイブバツクル—α

悪道らが使うベルト、通常のものより高出力で能力を発動できる。キーはライダーチェンジキーのみしか刺せない。

第1章 ウォーズ・サンライズ

第1話 ウォーズ・バース

全ての始まりは、1人の生徒の一斉送信メールから始まった。

差出人は東雲早苗、内容は

「2月29日午前9時、常盤高校の校庭に全員集合。来てみれば分かる。」

ということだった。

俺は、とりあえず行くつもりはなかった。

しかし、1人の友達が、「一緒に行こう!」と強く誘われてしまい、結局行くことになってしまった。

で、今その彼女を彼女の家の前で待っていた。

「遅いな…仕方なく行ってやろうって言ってるのに…」

俺は、山田康介。まあ、一言で言えば仮面ライダーオタクだ。俺は生まれた時からライダーと一緒にいたような者だ。そして、今やってる仮面ライダーゼロワンも、もちろん見てる。

「康介、ごめん!遅くなっちゃった!」

すると、彼女の家の扉から、待ち合わせ相手の清宮一美が出てきた。髪は首辺りで、胸は小さく、身長は俺とほとんど同じくらいだ。

「一美、遅いぞ。そっちから呼び出しておいて寝坊だなんて…」

俺はやや呆れ気味に言った。彼女はごめんごめんと頭を下げた。

「早く行くぞ。」

清宮一美、彼女はゲーマーで、いろいろな大会の賞を総なめしている凄いやつだ。まあ、勉強は結構やばいがな。それにおっちょこちよいだ。彼女は両親がいない代わりに叔父叔母が営むパン屋に住んでいる。

俺達は、徒歩で学校へ行った。俺は自転車を押しながら、一美はゲーム機を片手に歩いた。

一美は、ゲーム機を両手持ちし、ゲームを始めようとした。

「ゲームやりながら歩くと事故るぞ。」

俺は注意した。俺の目の前で事故なんて起こされたら溜まったもんじゃない。

「はいはい、分かりましたよ真面目君。」

一美はそう言うのとゲーム機を片手に持った。

俺はよく一美と居ることが多い。まあ、1番は話し相手がいないと言うことだ。俺はライダーオタクで彼女はおっちょこちよい。どちらも人に好かれる性格じゃない。

そんなこんなで、学校へ着いた。

今日は土曜日だ。部活をやってる生徒が多く居ると思ったが、全くと言って良いほど人影はなかった。唯一、グラウンドの隅で3年2組の生徒が居るぐらいだった。

「あつ、康介！こつちこつち！」

俺を最初にこつちに呼んだのは呼び出した本人、早苗だ。

「なんだ、この休みの日に呼び出したりして…言っておくが、何か良からぬことを始めようとしたら、俺は帰らせてもらうからな。」

俺は早苗に強く言った。

「わかってるって。」

早苗は周りを見回した。どうやら、俺達が最後だったらしい。早苗は、小声で全員いるね、と言うと、台の上に乗った。

「これより、このクラス最期の思い出作りをしようと思います！」

早苗の声にみんな騒めいた。

「じゃあ、私達のバッタちゃん、後はよろしく！」

すると、早苗の後ろから現れたのは、バッタ型の怪人だった。

「何あれ！」「気持ち悪い！」

女子達が次々とそう言った。

「これ、かなり不味いんじゃないか。」

俺は、足を少しずつ後ろに下げた。

「さあ、ゲームスタート。ライダーバトルの始まりよ。」

早苗の声は先程と違い、暗く、不気味な声になっていた。

その声と同時にホッパーは次々と現れ、生徒達に次々と攻撃を始めた。

「一美！」

俺は一美の手を強く握り校門から外へ出ようとした。

しかし、校門にも大量のホッパーが押し寄せていた。

「康介！校舎の中に逃げよう！あと、手離しなさいよ！」

「ああ…」

俺は一美の手を離し、校舎へ急いで逃げ込んだ。

校舎には既にクラスの3分の1が逃げ込んでいた。

「とりあえず、北校舎に行こう！」

中にいた1人の男がみんなに北校舎へ行こうと言い、皆それに着いて行った。

「私達も！」

一美も皆と一緒に行こうと言った。

「いや、俺達は上に行こう。」

「なんで？」

「大人数で行動したら見つかりやすいだろ。」

俺は再び一美の手を握り、一気に4階まで駆け上った。その間、一美は何回も手を離すよう言ってきたが、階が上がるにつれて、それは少なくなった。

「着いた！」

そして、俺達は屋上に着いた。俺達はもう息切れを起こしていた。フエンスにもたれかかり、座り込んだ。

俺達はふと下を見てみた。グラウンドや、花壇などいろんな所で、生徒達が倒れていた。少なくとも、校舎に逃げ込んだのは正解だったらしい。

「みんな…やられちゃったのかね…」

一美が、心配そうに聞いてきた。

「さあ…どうだろうな…とりあえず、助けが来るまでここで待とう…」
すると、空からバタバタと音が聞こえた。

「ヘリコプターか？」

しかし、その音はホッパー達の羽音だった。西側からホッパーが大群で攻めてきた。

「空からかよー！」

俺達は立ち上がり、東側へ逃げようとしたが、階段から上がってきたホッパーに進路を絶たれた。

「ねえ…私ここで死ぬのやだよー！」

一美が俺にしがみついた。

「俺だって嫌だよ、こんな所で…死んでられるかよー！」

俺は、一美を庇うように手を添えた。

「ここで終わらせるかよ…俺と…一美の運命を！」

その時だった。ホッパーの大軍の中から、二本ベルトが投げ込まれた。二つとも同じ盾のような形で、色も同じシアンだったが、左側に刺さっている物の色が緑の物と、金色の物があった。

「それを使い、変身しろー！」

そして、男の声が聞こえた。

「これをどう使えって言うのよー！」

一美がそう聞き返したが、返答はなかった。

俺は緑の物が刺さっている方のベルトを手に取り、腰に巻いた。

「一美…今はやるしかない。」

俺は、ベルトの緑の物を引き抜いた。どうやら「鍵」らしい。俺はその鍵を右手で持ち、天に掲げた。

「変身！」

俺はそのキーをベルトに刺し、回した。

「W A R — Z key — open！」

俺の身体は、少しずつ灰色に変化していき、肩、胸、腕、足に黒のアーマーが装着された。

更に、身体に力が溢れてくるのと同時に、ベルトから身体中に緑色のラインが流れてアーマーが緑に染まった。最後に、複眼が青に染まり、俺は変身した。左胸には「Z」の文字があった。

「なんだ？マジで変身したのか？」

俺は状況理解が全くできていなかった。

「康介！後ろ！」

俺は一美の声で、ふと我に帰った。そして、後ろから迫るホッパー

を避けた。

ホッパ―は、俺の姿が変わったことに一瞬動揺したが、すぐさま攻撃を始めた。

俺は、まず向かってくるホッパ―に右ストレートを放った。ホッパ―は、吹っ飛ばされ、校庭に真つ逆さまに落ちた。

「これなら行ける！」

俺は更に右脚を上げ、ホッパ―を蹴り飛ばした。

「康介！」

その時、一美が俺を呼んだ。

俺が一美の方を見ると、一美はベルトをつけたまま変身しようと思わず、ホッパ―から逃げる為にフェンスによじ登っていた。

「一美！変身しろ！」

「無理！どうやるの！」

「ベルトのキーを回せ！」

「ベルトのキーって！きやあ！」

その時、一美がフェンスから足を滑らせ、校庭に真つ逆さまに落ちた。

「一美!!!」

俺は、一美を追いかけようと飛び上がろうとしたが、左足を誰かに掴まれ、倒れてしまった。

「誰だ！っ……！」

俺が誰であるかを聞く前にそいつは剣で俺を突き刺した。唯一分かったのは、血のような色をした仮面ライダーであるということだけだった。

「Zのライダーとまさかここで出会すとは……これは楽しみだ……」

第2話 ライトニング・エレクス

「どこだよ……ここ？」

気がつくのと、俺―山田康介は木陰に寝ていた。

「俺はなんでここに？」

正直、何故ここにいるのか全く分からなかった。まさか転生？とか思ったけど、姿形全部俺まんまだった。それに、ベルトのキーも刺さったままだ。

「確か俺は……」

俺は少し前の事を振り返った。

「えっと……仮面ライダー逃げる変身して、ホッパーを何体か吹っ飛ばして、一美が屋上から落ちて、俺が追いかけてようとしたら、誰かに刺された……えっ、俺って死んだ？」

「この目にはつきりと見えてますよ。」

俺が顔を上げると一美の姿があった。

「一美、なんでここに？」

俺は立ち上がった。

「なんでって……私もよく分からない。」

一美は、木にもたれかかった。

そして、バックルを手を取った。

「仮面ライダーねえ……でも、ここで何をすればいいのさ？」

俺は、ベルトを外そうとした。が、前の水色のパーツしか取れなかった。ベルト本体は巻き付いたまま取れなかった。

「さあ、俺もよく分からない……だが、早苗はライダーバトルって言うていた。もしかしたら、ここでサバイバルするのもかもな。」

「ライダーバトル……とりあえず、早くここを離れよ。」

俺と一美は、とにかくこの森から出る為に歩き始めた。

一時間後……

「ねえ、今どこ当たり？」

「そんなこと俺に聞くな！」

俺達は完全に迷ってしまった。

どこを歩いてても、どこまで歩いてても森。

俺も一美も、ここまで森の中を歩くことはないからどうすればいいかすらわからない…

「はあ…詰んだね…」

「だな…」

その時だった。ガサガサと前から何か近づくと音がした。

「隠れろ！」

俺達はとつさに木の後ろに隠れた。

前からやってきたのは、さつき俺達を襲ったホッパーの集団だった。ざっと30匹ぐらいはいる。

「…どうするのよ…」

一美が小声で聞いてきた。

「仕方ない、どうせバレるなら、真正面から突っ切るぞ！」

俺は、ベルトを装着した。そして、木陰から飛び出し、ホッパーの前に立った。

「さつきは色々やってくれたな。今度はこっちの番だ！」

俺はキーを右手で持ち、手前に構えた。

「変身！」

そして、キーを天に掲げ、ベルトに装填。キーを回した。

「WAR—Z key!」「open!」

「Masked warrior! KAMEN RIDER

WAR—Z!」

ハイテンションなbgmとボイスと共に俺の身体は灰色に変わり、黒のアーマーが装着され、緑に染まる。仮面ライダーウオーズの誕生だ。

「俺の名は仮面ライダーウオーズ。お前達の運命は、俺の手の上だ。」
「何かっこつけてんのよ！」

隠れていた一美が俺の隣に立ち、頭を叩いた。

「というか、私に変身の仕方教えなさいよ！」

そして、俺の身体を揺さぶった。

「やめろ！気持ち悪くなる！分かったから！まずはベルトをつける！」

一美は水色のパーツを腰に装着した。

「次は？」

「それでっ！」

その時、ホッパ―達が一斉に襲いかかってきた。

「キーを右側に挿せ！」

「右？」

「右だ！」

「EREX key！」

俺はホッパ―をなぎ払い、一美を守りながら変身の方法を教えた。

「そして、キーを回せ！」

「う、うん！えっと、変身」

「open！」

「Lightning goddess！KAMEN RID

ER EX！」

一美の身体は金色に包まれ、頭に王冠のようなパーツが装着されたライダーに変身した。

「えっと…これが私？」

「ああ、お前もなれたなら手伝え！」

「私の名前…うーん、仮面ライダーエクス？かな。」

「なんか決め台詞言えよ…」

「そんな事言われてもね…」

エレクスの前にホッパ―が襲い掛かった。

「はあっ！」

エレクスは身体を後ろに逸らし、右脚で蹴り上げた。

そして、起き上がると、ホッパ―達を電気を浴びた手刀で次々と切り裂いた。

「なんか武器ないのかな…？」

エレクスがベルトに手をかざすと、黒に金色のラインが入った剣武器が出現した。

「survive swordgun!」

「おー！剣だ！」

エレクスは手にした剣で、ホッパー達を次から次へと切り裂いた。
「あっ！いいな！俺も武器出るかな！」

俺もベルトに手をかざした。すると、エレクスと同じ形だが、金色が緑になっている剣が召喚された。

「survive swordgun!」

俺はホッパーの腹に剣を突き刺した。そして、その剣を引き抜き更にやってくるホッパーを薙ぎ払った。

俺達がこうして戦う事でホッパーの数も数体になっていた。

「これで終わりにしようか。」

俺はベルトのウォーズキーをもう一度回した。

「Re open!」 「WAR-Z drop!」

俺は、両手を握りしめ、自前の脚力で飛び上がった。

そして、空中で一回転し、右足を突き出した。右足のエネルギーが解放されると同時にホッパーに着弾、爆発的なエネルギーを注ぎ込む事でホッパーは爆発を起こした。

「決まった！」

一方、エレクスも後一体というところまで追い詰めていた。

「私のプレイにシビれなさい！」

「Re open!」 「EREX lightning!」

エレクスは、空中で数回回転し、両脚蹴りをホッパーに放った。そして、着弾と同時に再び蹴り上げ、着地すると同時にホッパーが爆発した。

「やった！私倒したよ！」

「それはよかった。それより、早く進むぞ。」

「ちよつと！反応薄い！」

それからすぐだった。

「なんだこれ？街か！」

俺達は、森を抜けた先に街がある事に気がついた。

「私達ようやく助かる…！やった!!」

「おい先行くな！」

一美は、子どもみたいに走り出し、街に向かった。

俺達は早速街の中に入っていった。しかし、建物には、植物が張り巡らされ、道路はデコボコ、そして人影は一つもない。

「何……」

一美は街に入る時はめちやくちや興奮していたのに、気がつけば、俺にしがみついて歩いていった。あの時あれだけ手を離せ言ってたくせに。

「分からない……」

それからしばらく街を歩いたが、どこも同じような場所ばかりだった。

そんなこんなで日も暮れかけていた。

「仕方ない。今日はどこかで休むぞ。」

「えー…汚いのやだ！」

「お前な……」

俺達は適当に比較的綺麗で大きい家を選んだ。

俺は玄関を開けた。

「お邪魔しまーす……」

中に入るとまず居間へと繋がる扉が前に現れ、右には二階へ繋がる階段があった。

とりあえず俺達は居間に入った。中はとても綺麗で、最低限の机とソファア、それから右側にキッチンがあった。

「どうした？」

一美はブーツと部屋を見つめていた。

「いや、なんでもない。なんか一度来たことあったような気がしただけ。でも勘違いだから気にしないで。」

「あ、ああ。とりあえず、俺はここで寝るから、お前はどうする？」

「私もここで寝る。だって、怖いじゃん！」

俺達は、完全に暗くなる前に布団を探し、2人分を広げた。

「言っておくけど、こっちに入ってきたら殺すよ！」

一美が強く言った。

「入るか！むしろこっちのセリフだ！」

俺達は布団に潜り、互いに相手と反対の方向を向いて寝た。

こうして、俺達のここでの生活が始まった。これから先にある強大な運命を知らずに。

第3話 デツド・サバイバル

この廃墟に住み始めてから、3日ほど過ぎた。あれ以降、俺達の前からホッパーらが現れることはなくなった。

しかし、そのかわり別の事態が俺達を襲った。それは食事だ。俺達はこの住処を隈なく調べた。しかし、見つかったものの殆どが8〜10年前が期限のものばかりだった。とりあえず、その中から食べれそうなものを選び、食している。が、流石にもう2日ぐらいでそこを尽く程の量しか残ってない。

「もう…限界…」

「ああ…俺達、ここで飢え死にするのか…」

一美も、俺も、体力の限界だった。常に頭がクラクラする。

「一美…こうなったら、最後の賭けだ。ここの周りを探す。」

「それが1番だね…なら、早速行こう…」

俺達は立ち上がり、廃墟に食料を探しに行くことにした。

俺達は、拠点から伸びる長い一本道を歩いていった。歩き始めて数分で、広場のようなどころに出た。広場の真ん中には大きな噴水があったが、そこから水は出ておらず、池にも水は溜まってなかった。

更に歩くと、工業地区だったであろう場所に出た。

「なんか、突然人がいなくなつた街みたいだね。」

一美が周りを見ながら言った。

「ああ。しかも、これだけ歩いて誰にも合わないとは…」

工業地区を抜け、大きな橋を渡ると、5階建ぐらいのビルが並び始めた。

その時だった。一美が目の前の建物を指差した。

「ねえ、なんかあそこ。ショッピングモールみたいところがあるよ！」

一美が指差した場所にあったのは、大きなショッピングモールだった。

「一応、探してみるか…」

俺達は、そのショッピングモールに向かって歩き始めた。

「獲物が二匹、恨むなよ。」

そのショッピングモールには幸運なことに沢山の食料があった。それも、棚にびっしりと。

「良かった！沢山ある！」

一美はそう言うと、近くにあった菓子の棚からポテトチップスを手に取り、バサツと開けると、バリバリと食べ始めた。

「おい、そうやってすぐ食うな。食えないもんだったらどうするんだよ。」

「そんな事言っても、お腹空いてるんだから仕方ないでしょ。空腹に人間は勝てないのよ。」

そう言って一美はポテトチップスを平らげると、今度は別の味のポテトチップスを手に取った。

「はあ…しようがない。確かに一美の言う通りだ。俺もなにか食うか。」

俺は店の中にあつたカートに籠を乗せ、食料を入れた。食料と言っても、非常食やカップラーメンなど長持ちするものを選んで入れた。

しかし、どの食品も賞味期間、消費期限が7〜10年前のものばかりだ。まあ確かに、今は期限同行言っていられないからな。

俺は、菓子の棚から適当にものを取って食べようとした。

「あつ！これは！」

「どうしたの？」

一美が隣の棚から顔を出した。

「見てよ！これオースのチョコピーナッツボール！昔食べてたな…懐かしい。」

俺は一美に仮面ライダーオーズがパッケージに描かれているピーナッツボールの箱を見せた。

「へえ…あつそう…。」

「ちよつと食べよ。」

こうして俺達はなんだかんだ言っただ籠四つ分の食品を手に入れた。とりあえず、これでしばらくは持つし、無くなってもここに来ればまだまだ沢山あるからな。まあ、それでも腹一杯食うつてのは控えないといけないがな。

「大収穫だね。」

「ああ。」

俺達はカートを押しながら店を出ようとした。

「あっ!!」

「うおっ!どうした?」

一美が突然声を出して止まった。俺はびっくりして転びそうになった。

「お金払ってない!どうしよう、一銭も持ってない!」

「なんだ…そんなことか。考えてみる、お前ここ来た時に真つ先にポテトチップス食ってただろ。でも誰も怒らなかつたじゃないか。」

「あつ…そんな事すっかり忘れてた。」

一美はテヘツつとした。

「康介、一美、悪く思うなよ。変身!」

その時だった。俺達に弾丸の雨が降り注いだ。

俺は咄嗟に一美を庇ったが、その勢いで土手から二人揃って転がり落ちてしまった。

「イタタ…なんなのよ!」

「ちつ…そっちがその気ならやってやるよ!」

俺達はバックルを装着した。

「E R E E — X key!」

弾丸の雨の中、俺はウォーズキーを手前に構え、一美はエレクスキーを装填した。

「変身!!」

「WAR—Z key!」「open!」

「open!」「Lightning goddess! KAMEN RIDER ER—X!」

「Masked warrior! KAMEN RIDER WAR—Z!」

「仮面ライダーエレクス、参上!」「survive swordgun!」

「行くぜ!」「survive swordgun!」

俺達は仮面ライダーに変身、剣を構え、弾丸の発射地点であろう場所に向かって走り出した。

「はっ!」「おらっ!」

その時だった、俺達の死角から二人の仮面ライダーが剣で攻撃を仕掛けてきた。

「何よ! 死角からなんて卑怯よ!」

エレクスが剣を構えた先にいたのは、銅色の仮面ライダーだった。どちらとも同じ造形で、蟻のような顔に、胸や肩のアーマーはとても簡素なものだった。

「えっ…双子?」

「多分、分身攻撃だ。どちらかが本物だ。」

俺は右に立っているライダーに、エレクスは左に立っているライダーに攻撃を仕掛けた。

2体とも簡素な装備だからかちよこまかと動き回り、俺達を混乱させた。

「何よ…さつきから不意打ちに分身で尚且つ動きが素早いなんて、ゲームの迷惑キャラ要素満載じゃない!」

「ああ、ここのまですんなのに圧倒されるとはな…本気出させやがって!」

俺は剣を敵に投げつけた。

敵はその剣を避けた。俺の次の攻撃も知らずに。

「Re open!」「WAR—Z drop!」

俺は避けた敵の位置を予測し、倒れるタイミングを見計らってカウ

ンターキックを放った。これを仮面ライダーに変身したら一度はやりたかったから決まってよかった。

「これで一体倒したか。と言うことは残った方が本物か。」

俺は残った方のライダーに近寄ろうとした時、前にいるライダーとは真逆の方向から声が聞こえた。

「流石だな…だが、そいつらは偽者、と言うよりも俺の手下だ。」

「誰？」

「俺の名は仮面ライダーユニット。」

「仮面ライダー…だったら協力して…」

俺はそいつに協力を申し出た。

「悪いがそのつもりはない。」

仮面ライダーユニットは分身の後ろから姿を現した。基本的な姿は分身とは変わらないが、頭に戦闘用ヘルメットを被っていた。

「戦闘に置いて卑怯も恨みも無しだ。」

ユニットはベルトの左側に変身に使うキーとは別の朱色のキーを装填した。

「Dummy key!」

すると、ユニットが二人に増えた、しかもただの分身ではなく、丸々同じものが。更にそれぞれで分身を作り出し、合計で6体になった。

「まじかよー!」

俺は驚き、少し足を後ろに下げた。

「どうする一美…一美？」

俺がエレクスの方を見ると、左手にエレクスキーとは別の火花のような色をしたキーを持っていた。

「私にも使えるかな…とりあえずやってみよ。」

「おい、実戦でいきなり使うなよ!」

「バトルで使えるものは使っていかなきゃ。」

一美はそう言うとき、キーを左側に刺した。

「Spark key!」

エレクスがキーをセットした瞬間、エレクスの頭部の冠のパーツから大量の電撃が発生、ユニットに攻撃した。

「なるほど…これで放電できるんだ！もつとやってみよ！」

調子に乗り始めたエレクスは更に電撃を放った。まだそれだけなら良かった。

その電撃は暴発し、俺にまで降り注いだ。

「おいやめろー！痛い！やめっ！ヤメロー！」

「あつごめん、そうだね、遊んでないでとつと決めますよ。」

エレクスはエレクスキーを回した。

「R e o p e n !」「B l i t z l i g h t n i n g !」

エレクスは先程より強力な電撃を剣にため、ソードビームを放った。

「あれ…逃げられた。」

ユニットは、分身をうまく使い逃げたようだ。

「おい…このキー使うときはもつと周りを見て使えよ！」

俺はエレクスに文句を言った。

「ごめんごめん…」

エレクスは手を合わせていた、が、仮面の内側では先程のテヘツとした顔をしてるんじゃないかと思うと一発殴りたくなってきた、まあそんな事しないけどな。

第4話 ライフ・オンリーワン

俺達は、なんとかユニットの猛攻を耐え抜いたが、これらの事態で積んでいた食品等はカートごと焼き焦げていた。

「はあ…せつかく集めたのに…」

一美が、溜め息を吐き、顔を下に向けた。

「仕方ない…集め直しだ。それにもう日が暮れそうだ。今晚はあのモールに泊まるぞ。」

俺達は、モールに急ぎ戻った。

「何これフカフカで気持ちいい!!」

一美は家具売り場にあつたベッドに抱きついた。

「はっ、きつきの落胆が嘘みたいだな。」

俺はそう呟き、一美とは別のベッドに入った。

「おやすみ…」

一美が眠そうな感じに言った。

「おやすみ。」

翌朝…

「ふわあ…よく寝た。」

俺は目を擦った。モールは外の光がほとんど入ってこないから朝かどうかいまいちわからん。

とりあえず、このモールの屋上に出た。

そこからみえる景色は、どこにでもあるような街の風景だった。そして、俺はその風景にどこか懐かしさを覚えた。

「俺は…ここに来たことがあるのか？」

はつきりとは覚えてないがこの風景、絶対見たことあるはず、忘れてはいけない物。なのに思い出せない…何故だ…

「何故だー」

俺は叫んだ。だが、それでも思い出せない。

俺は下に降りた。

すると、そこにいたのは、一美とは別の見覚えのある顔だった。

「久しいな、康介。」

「平…リユウ…」

平リユウ、俺のクラスメイトだ。

「何故ここに？」

すると、リユウは俺達と同じバツクルをつけた。

「悪いがお前らには死んでもらう。現世に戻る為にな！」

そして、銅色のキーを取り出した。そのキーには見覚えがあった。

「そのキー、お前がユニットか。」

「正解…変身！」

「UNIT key!」「open!」「violence majority!」

「戦うしかないみたいだな。」

俺はバツクルを装着し、キーを取り出した。

「変身！」

「WAR—Z key!」「open!」「Masked warrior」

Or! KAMEN RIDER WAR—Z!

俺達は屋上に移動した。そして互いにサブライブソードガンを構えた。

「来いよ…」

ユニットは手招きをした。

「…やるしかないみたいだな。」

俺は剣を構え走り出した。

「はあっ!!」

俺は剣を振りかざした。ユニットはそれを剣で防ぎ、振り払った。

「やれ、俺の家臣！」

すると、ユニットは2人分身を発生させた。それらは俺に一直線に向かって来た。

それらは剣で俺を次から次へと斬りつけた。

俺は必死に反撃をしようと試みるが、息の合った連携攻撃で手も足も出なかった。

「ぐっ……こういう時に一美がいればなんとかなるが……」

俺はふと右腰のホルダーを見た。そこには鮮やかな緑色のキーがあった。

「一美じゃないが、使ってみるか。」

俺はそのキーをバックルの左側に装填した。

「M a c h k e y !」

「マツハ……という事は……」

俺は迫りくるユニットの攻撃を一瞬で避けた。

「なっ、高速移動か。そんな物！やっちゃまうぞ！」

「R e o p e n !」 「U N I T f o r m a t i o n !」

ユニットは、3人の剣を天に掲げ、雷を俺めがけ落とした。俺はそれを避けユニットに一気に近づいた。

「ぐはっ!!」

「どうだ。」

「まだ、まだ……!」

ユニットはダミーキーを取り出した。

「使わせない!」

俺はダミーキーを風のスピードで奪い取った。

「返せ!」

「返して欲しければ……っ!!」

その時だった。俺に何かが激突した。

俺は倒れて、変身を解かれてしまった。

「誰だ!」

俺が体勢を立て直し、正面を見ると、新たなライダーの姿があった。「緑の方、康介だったのか。まあいい。漁夫の利ってやつだ。銅のライダー、俺と勝負だ。」

そのライダーは全身を紺色で包み込み、所々に魚のヒレがあった。顔の口部分はギザギザ模様になっていた。その姿から察するに、サメ

のライダー…？

「いいぜ、サメ野郎、かかってこい！」

ユニットは、分身をサメのライダーにしがみつかせ、爆発させた。「流石に数の暴力には勝てないだろう？」

ユニットは今の攻撃で大ダメージを与えたと勘違いしていた。

「数の暴力？太古の王者、メガロドンにそんな物通用しない。」

サメのライダーは、サメ型のエフェクトによって守られていた。

「何!!」

「絶滅せよ。」

サメのライダーはベルトのキーを回転させた。

「Re open!」 「MEGALODON viking!」

サメのライダーは地面を泳ぐサメの如く滑り、スライディングキックをユニットに放った。

「ぐはっ！」

サメのライダーのキックはユニットに直撃した。

ユニットはバックルとベルトごと打ち碎かれ、地面に倒れた。

「俺は…元の世界に…帰れたかっただけ…なのに…！」

ユニットは俺の方に手を伸ばしながら霧のように消えてしまった。

「な、何が起きたんだよ…」

俺は目の前の状況を理解できなかった。

「何って、死んだんだよ。」

サメのライダーは変身を解いた。

「鮫島…」

サメのライダーの中身は鮫島拓真だった。

「お前は高校の時の誼みで見逃してやる。」

「…なんで殺した。確かにあいつは俺に襲いかかって来た。でも、倒す必要はないだろう！」

鮫島は俺に近づいた。

「…ここで生き残るには、こうやってかつての仲間を殺すしかないんだよ、お前も聞こえただろう！ここで生き残るには全ての仮面ライダーを殺せと！」

「なんだよそれ、そ、そんな物知らない！」

俺はそんな事、聞いていない。

「…そうか。」

鮫島はここを去ろうとした。

「なあ、待ってくれ！」

俺は鮫島を引き止めた。

「まだ俺に用事か？」

「俺も、協力させてくれないか？ 鮫島に。そのかわり、ここでの話を聞かせてくれ。」

俺は、鮫島に近寄ろうとした。

「待って、康介！」

その時、鮫島と俺の間に一美が現れた。

「あなた、人殺しについていくの？ ふざけないで！」

一美は鮫島の方に向かった。

「だいたい何よ！」「ここで生き残るには全ての仮面ライダーを殺せと！」。そんな物知らないわよ。どんな理由があれ、人殺しを正当化するなんて許せない！」

鮫島は眉をひそめた。

「…そういうのは、世の中を知らない子供が言うんだよ！ ふざけてるのはそっちの方だ。」

鮫島は再び俺の方を見た。

「どうする、お前の連れはこう言ってるが。」

俺の答えは最初からひとつだ。

「俺は、着いていく。どうやら、俺達とは何が違うみたいだ。」

「…仕方ない、私は康介に着いていく。それでいいね。」

一美は不貞腐れて言った。

第5話 マツハ・ウオーリアー

俺達は、鮫島と数日前までいた古家への道のりの間、ここまでの事を話しながら歩いた。俺は、今まで起きたことをありのまま話した。「ここまでが俺達の身に起きたことだ。」

鮫島は、不思議な顔をした。

「ここに来る前にベルトを？俺は、この世界に来たときにベルトを手を取った。それに…」

「私達と違うなら早く話さないよ。」

一美が割り込んできた。

「うるさいな。お前は引っ込んでろ！」

鮫島は一美を突き放した。

「ちよ、女に暴力振るうなんて最低!!」

一美が鮫島に詰め寄った。

「知るか、だいたい、お前は康介についてきてるんだろ？だったら康介の後ろにでも黙って歩いてろ！」

「お前ら、喧嘩は他所でやってくれー。」

俺は呆れた顔をして言った。

鮫島は、咳払いをすると、話を始めた。

「俺は、この世界に来た時…」

鮫島が目覚めた直後…

「ここは…」

俺は、橋の下で寝ていた。俺の腰にはコアパーツ、懐にはバックルとメガロドンのキーが入っていた。

「なんだこれ？」

俺はキーを手を取った。その時、ある声が俺の脳に直接語りかけてきた。

「この世界へきた以上、君も私のモルモットだ。」

その時間こえた声は、様々な声が混ざっている声だった。男の子ど

もの声、おばさんの声、老人の声、どこにでもいる女の声…それらが合わさってその声を形成しているようだった。

「誰だ!!」

俺は立ち上がり、辺りを見回した。

「この世界で生き残る術はただ一つ…全ての仮面ライダーを倒すこと…。勝者は、全知全能の力を手にできる。現世に戻ることも容易い。さあ、戦え。」

「なんだよ…戦うって、お前は誰だ!」

「勝ち残っていけば、いつかお前の前に姿を現すだろう…勝ち残ればな。」

ここでその不気味な声が聞こえなくなってしまった。

「仮面ライダー…これを使えと言うことか?」

俺は、ベルトを装着し、メガロドンのキーを刺し、変身した。

現在…(再び康介視点)

「俺は今までユニット含め3人倒した。」

「3人…」

俺は呟いた。

「仮面ライダーオニコ、仮面ライダーアイズ、この2人が俺が倒してきたライダー達の名だ。」

「2人の最期は…?」

俺は聞いてみた。

「2人とも、ユニットと同じような最期だ。この戦いにのめり込んでいったことを後悔し、嘆いていた。」

鮫島は、躊躇いもなく話した。

「助けようと、しなかったのか?」

「…多少は思ったかもな。だが、それ以上に、お前達を犠牲にしなければ生き残れない。そう思って切り捨てた。」

「…そう、無慈悲に人を殺してると思っていたけど、そう言うわけじゃないのね。」

一美が鮫島に言った。

「これで話すべき事はすべて話した。もう俺たちが共にいる必要はない。」

鮫島がバックルを装着した。

「何よ、見逃したっていいじゃない。」

一美が言った。

「見逃すも何も、いずれ戦うんだから、今倒そうが後に倒そうが関係ないだろ?」

「あんたね…!」

一美が鮫島に近づこうとした。

俺はそれを抑えた。

「康介?」

「一美、お前は下がっている。」

俺は一美の前に立った。

「戦うしかないんだろ?ならやってやる。お前が勝てば俺の命も…一美の命も自由にしていい。」

「ちよ、康介…!」

「そのかわり、俺が勝ったら、俺の言う事を聞いてもらう。」

鮫島は、ポケットからキーを取り出した。

「面白い、やってやるよ。変身。」

「MEGALODON key!」「open!」「Phobic f
angs! KAMEN RIDER MEGALODON!」

鮫島はベルトにキーを装填、回して仮面ライダーメガロドンに変身した。

「変身!」

「WAR—Z key!」「open!」「Masked warr
ior! KAMEN RIDER WAR—Z!」

俺は、仮面ライダーウォーズに変身し、サバイブソードガンを召喚した。

「どこからでもかかってこい。」

俺は、メガロドンに向け強く言った。

「ならそうさせてもらう。」

メガロドンは、ベルトの左側に白のキーを装填した。

「Fang key!」

すると、腕や脚から生えている刃が白く輝いた。

そして、メガロドンは飛び上がると、右足を上げ、かかと落としをしてきた。

「危ない!」

一美が叫んだ。

俺はマツハキーを装填した。

「瞬間移動か!」

メガロドンは、俺の思った通り瞬間移動をしようと思っていた。

マツハキーには、仮面ライダーになくはならないあれの力を使うことができる。

そのあれが、俺を飛び越え、メガロドンに激突した。

「なんだ!」

倒れたメガロドンは何が起こったか分かっていなかった。

「バイクだよ、バイク。マシンウオーリアー。それがこいつの名だ。」

俺はマシンウオーリアーにまたがった。

「ちっ…バイクかよ。」

鯨島の怒りが頂点に達した。

「そっか…仮面ライダーだもんね…」

一美は、驚きで口が塞がらない。

「さあ、これで決着だ!!」

俺はベルトのウオーズキーを回した。

「Re open!」「Sonic drop!」

メガロドンもキーを回し、構えた。

「Re open!」「Sharp viking!」

メガロドンは、地面を蹴り、左腕で手刀を放とうと構えた。

俺は、バイクのアクセルを回し、超高速でメガロドンに駆け寄った。

「吹っ飛べ!!」

俺はバイクの前輪でメガロドンを跳ね飛ばした。

「ぐっ…」

メガロドンは宙に浮きながらもがいていた。

俺は、バイクから飛び降り、ライダーキックを放った。

「とりゃ!!」

俺のキックはメガロドンを、戦闘不能まで追い込んだ。

メガロドンは変身を強制的に解かれ、鮫島の姿に戻った。バックルは壊れていないようだ。

「ぐっ…俺の負けだ…」

鮫島は地面に膝をついた。

「分かった、なら、俺の言う通りにしてもらおう。」

俺は、剣を構えた。

「えっ…康介!」

そして、鮫島に振りかざそうとした。

俺はその剣を振りかざす前に変身を解いた。

そして、鮫島に手を伸ばした。

「俺と共に戦え。」

「康介!こんな奴と手を組んでいいの?」

一美が言った。

「…分かった、共に戦おう。」

鮫島が言った。

「もし、裏切ったら、今度はバイクで轢き殺す。それならいいだろう?」

俺は一美に言った。

「はぁ…仕方ない。」

「鮫島、これからは頼むぞ。」

「ああ。」

鮫島は俺の手を取り、立ち上がった。

第6話 シークレット・メモリー

「ただいま!!」

俺はいつも通り家に帰ってきた。いつもなら母が「お帰り」と言ってくれるが、その気配は全くなかった。

俺は、二階にある自分の部屋にランドセルを置き、下に降りた。そしてリビングでテレビを見ようとドアを開けた。そのドアの先では、母がテレビを前に涙を流していた。

俺は最初、メロドラマを観て泣いていると思った。しかし、そのテレビ画面を見ると、ある山の一角が削れ、無くなっている様子が映し出されていた。

「今、何が起きたか理解できません。ただ唯一わかることは、科学実験都市アトランティスが消えてしまった事です。」

アトランティス、それは俺にも聞き覚えがあった。そこでは俺の父さんが責任者として働いていた場所だ。

俺はこの状況がようやく理解できた。

「父さん…」

「はっ…んん?」

俺が目を覚ますと、部屋の窓から朝日が差し込んでいた。

「康介、うなされていたぞ。」

俺の隣にいた鮫島が言った。

「ああ、悪い夢を見ていたさ。父さんの…」

俺は父さんのと言いかけた。

「…アトランティスの夢さ…」

「アトランティス…あの科学実験都市か。俺もあそこにはあまりいい思い出はなくてね。」

鮫島は、少しだけ過去の話を始めた。

「俺の祖父母がさ、アトランティスに住んでいたんだよ。だが、あの惨劇に巻き込まれて生死不明。まあ、気にしてることではないけどな。」

鮫島は鼻で笑う様に話した。

「そうか…」

俺は布団から抜け出し、洗面台に向かった。

今日、私はいつもより早く起きてしまった。いつもは9時まで寝るのが普通。だが、今日は何故か目が覚めてしまった。私はふと目に違和感がある様に感じ、目を擦った。すると、目の周りが少し湿っていた。

「汗かな…」

私は身体を起こし、窓を開けた。そして、服を寝巻きから普段着に着替え、一階に降りようとした。

その時、窓の外から視線を感じた。

「誰!!」

私は咄嗟に後ろを振り向いたが、誰も居なかった。

私は改めて下に降りると、丁度康介が洗面台に向かっていた。

「おはよう。」

康介が私に言った。

「おはよう。」

私は、康介に言い返し、リビングに入った。

「アトランティス…か」

鮫島はそう呟いた。

アトランティス…どこかで聞き覚えがあった。ただ、思い出したくなかった。何故か分からないが。

太陽がが南東の空に見える頃、鮫島は、康介達に「夕方までに帰る」とだけ伝え拠点を離れた。

鮫島は、常に人と距離を置く。人との関わりがどちらかと言えば苦手であり、人と話すとどうしても辛く当たってしまう。そんな彼の高校生活が始まってから最初に友人になったのが康介だった。互いに変わり者同士であるためか引き寄せられ、今では鮫島が心を許す人物

となっている。

今日出掛けたのも、1人になりたかったからだ。

鮫島は全く気がついていないが、鮫島の後ろを怪しい人影が横切った。

その人影は、気弱そうな男であり、目の色が黒目ではなく灰色だった。

「メガロドン…その終焉は近い。」

その男の声は高く、明らかに女の声だった。

鮫島は、ただひたすら道を歩いて進んだ。

「…にしても、本当に何も無いな…」

鮫島は辺りを見回した。周りの建物のほとんどが植物に覆われ、壁にビビが入っていたが、そんな中に一際目立つ建物があつた。その建物だけは、明らかに手入れされているほど綺麗なものだった。

「なんだ…?」

鮫島はその建物に少しずつ近づいた。

その建物の札にはこう書かれていた。

「A—SEC総合本部」

「A—SEC…まさか…そんなことがあり得るのか?」

鮫島はA—SECの名を見て、信じられないという顔をした。そして、目の前の総合本部に入っていた。

中は、ほとんど何もなかった。机や椅子があつたであろう場所や、何か重要な物が保管してあつたであろう場所全て何もない空っぽの部屋になっていた。ただ一部屋を除いて…

「…物が消えてる…ここはもう何もないのか…ん?」

鮫島は、二階の奥に扉が少しだけ空いている部屋があるのに気がついていた。

「あそこは、見てないはず。」

鮫島は、その扉の前に立ち止まった。

鮫島はふと、嫌な予感がした。扉のドアノブを手にする前にバックルを装着した。

「誰も…居ないよな。」

鮫島はそう呟くと、扉を開けた。

「な…なんだこれ…」

扉の中には、様々な物が保管されていた。

その中でも特に目立っていたのは赤のバックルだった。基本の構造は彼らがつけている水色の物と同じだが、どこか禍々しく感じる物だ。それに、周りには銀、翠、紅、蒼のスタイルチェンジキーと、カードキー型のアイテムが金と青でそれぞれ一つずつあった。

「まさか、ここで作られて…」

その時、鮫島は初めて後ろに人が居るのに気がついた。

「…これはなんだ!」

鮫島はそう言いながら振り返った。鮫島の後ろにいたのは先程から追いかけていた青年だった。鮫島はその姿を見て一瞬安堵した。

「…お前か…居るなら言ってくれば…」

「変身…」

「Open!」
「Sky calamity! KAMEN RIDE
R W H E T H E R !」

その青年は、仮面ライダーへと変身した。その姿はウエザーの名に相応しく天候を司るゼウスの様な姿をしており、オレンジと金の間の色をしていた。

「ぐっ…騙されたか!」

鮫島は、メガロドンに変身した。そして、ファングキーをセットし、ここにあった6つのキーを奪い取った。そして、壁を突き破り、外に脱出した。

日が暮れた地上をメガロドンは水中を泳ぐサメの如く駆け抜けた。しかし、それ以上に早くウエザーが迫った。

ウエザーは、メガロドンに追いつくと、すぐさまサイブソードガ

ンのソードで攻撃を仕掛けた。ウエザーの剣は光を帯びると、メガロドンを斬り裂いた。

「ぐはっ！」

メガロドンは咄嗟に手に取ったキーをウエザーの攻撃で落としてしまった。ウエザーはそれを一つ一つ手に取った。

「鮫島拓真、お前のストーリーは終わりだ。」

ウエザーはそういうと、ベルトにシアンカラーのキーを挿した。

「Blizzard key！」

メガロドンは本当に終わりだと感じ取り、その場を去ろうとした。が、その足をウエザーはブリザードキーの力で凍結させた。

「俺は、まだ死なない…死にたくない！」

鮫島はそう叫んだ。しかし、その言葉はウエザーには響かなかった。

「Re open！」「Freeze storm！」

ウエザーは氷の竜巻をメガロドんに放った。

「遅いな…」

その頃、康介は鮫島が日が暮れても帰ってこないことを不審に思った。

「どうせ一人でいたいからわざと帰ってこないんじゃない？」

一美はそこまで彼のことは気にしていなかった。

「…だとしてもおかしい！」

康介は勢いよく立ち上がった。

「一美、探しに行くぞ。」

康介は一美に探しに行くことを提案した。

しかし、一美はとても嫌そうな顔をした。

康介はやはりと思ったが、流石に夜に女を一人残していくのは危険だと感じた康介は一美の手を無理矢理引っ張って外に出た。

「ちよつと…」

一美は立ち上がる時だけ抵抗したが、玄関を出る頃にはなんだか

んだで康介について行っていた。

康介はマシンウオーリアーを召喚すると、一美を後ろに乗せて常闇の中を走り出した。

しばらく走ると、康介達の前の方で動く影があるのを見つけた。

「なんだ？」

康介は確認のためにバイクを止めその影の方へ行くと、鮫島が倒れていた。鮫島の身体は凍傷がたくさんあり、顔色も青冷めていた。

「鮫島！」

康介と一美は駆け寄った。

「…もう無理そうだ…お前にこれを渡す…」

鮫島は、康介にある物を渡すと消滅してしまった。

「鮫島…」

一美が残念そうな声で言った。

康介の手には、あの部屋にあった金色のカードキーとファンングキーが固く握り締められていた。

第7話 ストーム・ナイトメア

鮫島が居なくなつた日の翌日。俺達は鮫島が息を引き取つた場所に來ていた。

「鮫島がやられるなんて…」

「ああ、相手はかなりの強者だ。」

俺達は鮫島を殺した相手に恐怖を覚えていた。もちろん、鮫島を殺すほどの強さを持つているからというのもあるが、それ以上に同じ学舎で共に学んだ相手をここまで陥れてるほど残酷な人間がこの近くにいる、そう思うだけで身体の震えが止まらない。

俺達はそれぞれ草むらの中、木の根本、瓦礫の下などを探したが、手掛かりになる物は何も見つからなかった。そう思っていた。

それを見つけたのは一美だった。

「何もいないな…ん？なんだろう、これ…」

一美が手に取つたのは、青のカードキーだった。

康介は、一美が何か見つけたのかと思ひ近寄ってきた。

「どうかしたのか？」

一美は突然の声かけに驚き、カードキーを隠してしまった。

「いや、気のせいだったみたい、気にしないで、」

「怪しい…」

康介は一美を見た。

その時だった。

森の木々が突然強風に吹かれ、揺れ始めた。

枝が擦れ合い、ガサガサと音を立てた。

「なんかまズくない？」

一美が康介にしがみつき、震えた声で言った。

「…」

康介は黙つたままだった。

やがて風は強くなり、雨が降り始め、雷鳴が響き渡つた。

「…戻るぞ。」

康介は、少しずつ後ろに下がった。それに合わせて一美も一緒に下がった。そして、大木にぶつかった。

その時だった。

その大木が康介達に向け倒れてきた。

「危ない！」

康介が一美を押し倒し大木を避けた。

「何？」

一美が起き上がると、折れた大木の切り株に和風の装備をつけたホッパー、「ダークホッパー」がいた。

ダークホッパーは二体。黒のカラーリングで右手には剣が握られていた。

「そういう事か…」

康介も続けて起き上がった。

2人はベルトをつけ、キーを装填した。

「W A R — Z k e y !」 「E R E — X k e y !」

「変身」

「[open!」

「M a s k e d w a r r i o r ! K A M E N R I D E R W A
R — Z !」

「L i g h t n i n g g o d d e s s ! K A M E N R I D E R
E R E — X !」

2人はウォーズとエレクスに変身した。

「[s u r v i v e s w o r d g u n !」 「[s w o r d — m o d e
!」 「[g u n — m o d e !」

ウォーズは剣を、エレクスは銃を構えた。

「行くぞ！」

ウォーズの声でダークホッパー達が動き出した。ウォーズとエレクスもそれに合わせて攻撃を仕掛けた。

「やつ!!」

エレクスは左足でダークホッパーを蹴り上げるために足を上げた。ダークホッパーはそれを巧みに交わし、剣をエレクスの喉元に突き刺そうと剣を前に出した。

エレクスもその攻撃を避け、ダークホッパーと距離を持った。

「こう見えて私は射的得意なのよ。」

エレクスはサブライブソードガンのガンモードでダークホッパーの身体を次々と狙い撃ちした。

ダークホッパーは反撃を試みようとするも、忙しいエレクスの攻撃に全く動くことが出来なかった。

「私のプレイにシビれなさい!」

エレクスはスパークキーを銃にセットし、キーを回した。

「full open!」 「Blitz blast!」

エレクスは電撃を纏った弾丸をダークホッパーに放った。

その弾丸はダークホッパーに着弾した。

ダークホッパーは確かに爆散した、かのように見えた。

ダークホッパーは無傷だった。しかも、ダークホッパーの前には魔法陣が張られていた。

「魔法剣士ってやつか…」

エレクスは、スパークキーをベルトに装填した。

「Spark key!」

そして右腕から電撃を放った。

ダークホッパーはそれを回避し、炎魔法を放った。

エレクスはその攻撃を避けるために体を伏せた。

火球はエレクスの頭上を通り過ぎた。

「あつつい!火傷するじゃん!」

エレクスは再び立ち上がり、攻撃を仕掛けた。

ウォーズはもう1人のダークホッパーと戦闘していた。

「はあっ!!」

ウォーズが剣を振り下ろすと、ダークホッパーはそれを剣で受け止めた。

ダークホッパーはウォーズを押し倒した。

ウォーズは、後ろに下がり、体勢を整えた。

「中々やるな…」

ウォーズは剣を構え直した。

ダークホッパーは左手で空中に紋章のような物を描いた。すると、魔法陣が現れ、そこから炎が放たれた。

その攻撃にウォーズは驚き、避けきれずに喰らったしまった。

「何！魔法だと！」

ウォーズは攻撃を喰らった左肩を押しさえながら立ち上がった。

「俺は猫舌でな、熱いの嫌いなんだよな…」

ウォーズはフッキングキーを剣に挿した。

「full open!」

ウォーズはダークホッパー向け走り出した。ダークホッパーは間髪入れずに魔法攻撃を仕掛けた。

「Mach key!」

ウォーズはマツハキーを装填し、超高速で攻撃を避けながらダークホッパーの懐に潜り込んだ。

「Sharp slash!」

白く輝く剣をダークホッパーに突き刺した。

ダークホッパーは、叫び声と共に消滅した。

「ぐはっ!」

エレクスはダークホッパーの魔法に苦戦していた。

「魔法剣士って、敵だとすごい厄介なんだよな!」

エレクスはベルトのキーを回した。

「Re open!」 「Blitz lightning!」

エレクスは剣を構えて迫るダークホッパーの腹にカウンターパンチを放った。

エレクスのパンチはクリティカルヒットし、爆散した。

「一美！」

同じくダークホッパーを撃破したウォーズがやってきた。

「康介、早く戻ろう。」

エレクスは嵐に覆われている森を見ていった。

「ああ、そうだな。早くバイクに……」

その時だった。突然ウォーズとエレクスの足元を冷気が襲った。

その冷気にウォーズとエレクスの足は凍結させられてしまった。

「何！」

「何これ！」

「full open！」

「Freeze slash！」

氷の刃がウォーズとエレクスを貫いた。

「ぐはっ!!」

「きやあっ!!」

ウォーズとエレクスはその攻撃に弾かれてしまった。

「貴様……まさか、貴様が鮫島を！」

ウォーズとエレクスの目の前に立っていたのは、ウェザーだった。

第8話 スペシャル・シャイニング

「full open!」

「Freeze slash!」

「ぐはっ!!」

「きゃあっ!!」

「貴様…まさか、貴様が鮫島を!」

ウォーズとエレクスの目の前に立っていたのは、ウエザーだった。

「お前がウォーズだな。」

ウエザーはウォーズに聞いた。

「ああ、俺が仮面ライダーウォーズだ。」

ウォーズは言った。

「それより、お前が鮫島を殺したのか?」

「メガロドンのことか。あの男は知ってはならない真実を知ったから消した。それだけだ。」

ウエザーはウォーズに刃を向けた。

「お前もメガロドンのようになりたくなければ、『スペシャルキー』を渡せ。」

「スペシャルキー?…もしかして!」

ウォーズは鮫島に託された金色のカードキーを見た。

「どうやらビングゴのようだ。さあ、そのキーを渡せ。」

ウォーズは俯き、考えた。

そして結論を言おうとしたその時、エレクスがその言葉を遮った。

「悪いけど、渡すつもりはない。これは鮫島が命懸けで康介に託したものだ。そんな大切な物渡すわけにはいかない!」

エレクスはサブライブソードガンの銃口をウエザーに向けた。

「そうか、残念だ。対象を破壊する!」

ウエザーは、剣をウォーズ目掛け突き刺そうとした。

エレクスはそれを弾丸で弾き、ウォーズの前に立った。

「一美…」

「ボサつとしてないで、私を手伝いなさい！」

「…ふつ、分かったよ。手が掛かる女だ！」

ウォーズはウエザーの死角から剣を突き出した。

ウエザーはそれを避けた。

「私は銃であいつの逃げ道を塞ぐから、康介は必殺技を叩き込んで。」

エレクスはウォーズに作戦を提案した。

「ああ、ハマするなよ！」

ウォーズは、剣先を撫でると、ウエザーに向かって走り出した。

エレクスは弾丸をウエザーの足元に次々と撃ち込み、自由を奪った。

「力を貸してくれ、鮫島！」

ウォーズはフアングキーを剣に装填した。

「full open！」

ウォーズは、飛び上がり、ウエザーに刃を振り下ろした。

「Sharp slash！」

「うおりやああ!!！」

ウォーズの剣がウエザーに激突し、爆発を起こした。

「康介…」

エレクスは勝敗を息を飲んで見ていた。

煙が晴れると、ウォーズの姿が現れた。

しかし、剣は完全に振り落とされていない。

「何!？」

ウォーズは正面を向いた。

煙が完全に晴れた。そこには、氷で盾を作っていたウエザーの姿があった。

「そんな子供騙しで、私は倒せない。」

ウエザーはウォーズを蹴り飛ばした。更に氷を自由に操り、数本の短剣の様な形にし、ウォーズに突きつけた。

「ぐはっ!!！」

「康介！」

エレクスは吹き飛ばされるウォーズをキャッチした。

「すまん。」

「私に任せて。」

そう言うとエレクスはスパークキーをベルトに装填、エレクスキーを回した。

「Re open!」 「Blitz lightning!」

エレクスは空中に飛び上がり、電撃を纏ったドロップキックを放つた。

ウエザーは、ブリザードキーを引き抜き、ウエザーキーを回した。

「Re open!」 「W H E T H E R s t o r m !」

エレクスのキックはウエザーを貫く勢いで迫った。

「はあっ!!」

しかし、エレクスは途中でバランスを崩してしまう。

「二美!!」

エレクスの周りには大量の竜巻が発生していた。そして、その一つがエレクスに攻撃をしていた。

「まずい!!」

エレクスが上を見ると、大粒の雨と共にウエザーがキックを放っていた。

「M a c h k e y !」

ウォーズはマツハキーでエレクスの救出を試みたが、突風に吹き飛ばされそうになってしまう。

「二美!!止める!!」

康介は声を上げた。その想いは届かないかと思われた、が…

「なんだ?」

すると、突然竜巻が消えた。

エレクスは、右脚を引きずりながらウォーズに近づき、変身を解くと同時に倒れた。

「二美!」

「うぐっ、ああ…!!」

ウォーズが視線を上げると、ウエザーがもがき苦しんでいた。

「今度はなんだ？」

すると、ウエザーは先程とは違う若い男の声で喋った。

「助、け…僕を、助けてー!」

「その声…まさか!」

康介はその声に聞き覚えがあった。

その声を最後にウエザーの苦しみは治った。

「貴様の意思は消したはず…」

「それがお前の弱みか…」

ウォーズは右手にスペシャルキーを持っていた。

「一美をここまでボコボコにして、更に変身者を意のままに操るなんて…俺は許さん。」

ウォーズは立ち上がり、スペシャルキーを構えた。

「レイ、今助けてやる…」

ウォーズはウエザーの本当の変身者の名前を言った。

「許さんのはこっちのセリフ…障害は排除する!」

ウエザーは、剣を構えた。

それと同時にウォーズはバツクルの真ん中にスペシャルキーをスキャンした。

「open!」

「I win the battle! KAMEN RIDER

WAR—Z Special!」

ウォーズの身体に走る緑色のラインが赤に変わり、体色は灰色から金色に変わる。胸のZラインが緑に変わり、更に右胸にはSラインが入った。

V字のアンテナは二本に分離し、逆さまのPの様な形になる様に複眼と合体した。

背中には鳥の翼の様なウイングが装備され、クリアグリーンに輝いている。

最後に複眼が赤色に縁取りされ、ウォーズスペシャルが爆誕した。

「お前の運命は、俺の手の上だ。」

「はあっ!!」

ウエザーはウォーズに襲い掛かった。

「とりあ!!」

ウォーズはそのウエザーの脇腹に鋭いパンチを放った。

「Re open!」 「WAR-Z smash!」

ウォーズは、ウエザーをアッパーで空中に上げると、右拳でウエザーを殴り飛ばした。

「Special key!」 「WAR-Z drop SP!」

ウォーズは、スペシャルキーをバツクルにもう一度スキャンし、ウォーズキーを回した。

ウォーズは翼で空中に飛び上がると、金色のエネルギーを持った右脚でキックを放った。

「はあっ!!!」

ウォーズのキックはウエザーを貫いた。

「ぐはっ…」

ウエザーは、その場に膝から崩れると、変身が解けた。そこには、ウエザーの変身者の足立レイの姿があった。

「レイ!!」

康介はレイに近づき、身体を支えた。

「ありがとう…」

レイはウォーズに向けて言った。

「ウォーズ、やはり予想通りの強さだ。」

ウォーズが顔を上げると、灰色の煙が立ち込めていた。そこから女性が姿を現した。

「…東雲…早苗…だと…」

「久しぶり、正確には1週間ぶりか…」

煙の中から姿を現したのは、彼らがこの世界に送ったあの事件を引き起こした犯人、東雲早苗だった。

「貴様がレイを…」

「ウォーズ、いずれ会おう。戦場で。」

そう言うとき早苗は姿を消してしまった。

「仮面ライダーウォーズ、やはりあの男が作ったライダーは危険です。」

「だが、今倒すべき存在では無い。それよりも、我々はその者を早急に見つけ出さなければならぬ。」

「ロスト-Yの事ですか…分かりました。」

第9話 デビル・カリバー

私は、ウォーズ達の前から姿を消した後、報告の為、拠点に戻った。そして、外へ直接通話できる電話を手に取り、「怪駕」へ報告をした。「怪駕。仮面ライダーウォーズ、やはりあの男が作ったライダーは危険です。」

電話口から怪駕の声が聞こえた。その声は、変声機で男女も分からないようになっていた。私は怪駕や他の仲間が誰なのかは知らない。ただ唯一分かることは、全員同じバツクルを持っていることのみ……「だが、今倒すべき存在では無い。それよりも、我々はある者を早急に見つけ出さなければならぬ。それを分かっているよな、悪道。」

「ロストーYの事ですか……分かりました。」

私は電話を切った。

私は、真紅のバツクルを装着し、ダークホッパーキーを左側に装填し、ダークホッパーを2体召喚した。

「異変があつたら報告しろ。特にロストーYと……ウォーズだ。」

俺達ー康介達は拠点に戻った。

とりあえず、疲れた身体を癒させるためにレイを拠点に迎え入れ、ココアを出した。

一美は、個包装されたクッキーを2、3個差し出した。

「ごめん、ありがとう。……までしてくれて。」

レイが俺達に言った。

「気にするな。それより、落ち着いたらでいいから、なんで早苗に乗っ取られていたのか、教えてくれないか？」

俺はレイと向かい合うように座った。一美は先程の戦闘の疲れでソファアームに抱きついていたが、レイの話に聞き耳を立てていた。

レイはココアをちよびつとだけ飲むと、口を開いた。

「実は、記憶がないんだ。」

「記憶がない……？」

レイは「うん」と頷いた。

「覚えているのは、あの時、清宮さんに必殺技を放とうとしていた事だけ。後は全く。」

「そうか…」

レイは俺が残念そうな顔をしているように見えたのか、「ごめん…」と言った。

「…まあ、早苗はどうやら何か知っているようだし、何か知られたくない事があるのだろう。」

しばらく沈黙が流れた。その沈黙を破ったのは俺だ。

「それより、一つ提案があるんだが。」

レイは顔を上げた。

「俺達と戦わないか？この世界を抜け出すには、アイツらと戦うしか他に方法はない。」

レイの顔に笑みがほんの少しだけ浮かんだ。

「うん、こんな僕で良ければ。」

俺とレイは手を取った。

早苗の集団は、巨大なダム放流口上部にいた。

「ここなら潜伏にはうってつけた。探せ。」

ダークホッパーとホッパー達が頷くと、ガラスの破片が散らばるように様々な場所に散った。

早苗は先程から自分達を追い回すライダーの気配に気づいていた。

「そろそろ出てきなさい。いるのは分かっているのだから。仮面ライダーバイファー。」

「幹部にしては気付くの遅いんじゃない？」

すると、女の声が聞こえた。早苗は後ろを振り返った。

目の前には、チャイナドレスのような鎧を着込んだ白銀のライダー、仮面ライダーバイファーの姿があった。

「いつからつけ回していた？」

「そうね…鮫島が核心に近づく前、かしら。」

「そんな前から…まあいい。ここで消し炭にすればいいだけの話だ。」
早苗は、真紅のバツクルを装着した。そして、グレーのキーを手にとった。

「変身。」

早苗はバツクルの右側にキーを装填、怪しげな変身bgmとともにキーを回転した。

「施錠…」

早苗の身体は炎の牢獄に包まれた。そして、炎の中から刃を突き出し、炎を切り裂いた。

「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

中から現れたのは、鉛灰色の仮面を着けた悪魔、仮面ライダー悪道だった。

「地獄で苦しみなさい…」

悪道は鉛灰色の刃、悪魔覇剣を手に、バイファーへ迫った。

バイファーは、刃を避けながら後ろにバク転し、脚を高く上げ、蹴りを放った。

悪道はそれを身体を逸らし避けた。

バイファーは間髪入れずに右手でボディーブローをかました。

バイファーは、左脚で飛び上がり、悪道と距離を取った。

「中々やるわね。」

バイファーが悪道に言った。

「確かに。私の本当の強さを知らないのに、よくここまで対等にたたかえるとはね!!」

悪道は刃を勢いよく振り下ろした。すると、剣先が蛇のように伸び、蛇腹剣になった。

悪道は蛇腹剣を鞭のように操り、バイファーへ次々と斬撃を与えた。
「ぐっ…近づけない…ならこれで！」

バイファーは、深紅のキーを取り出し、ベルトにセットした。

「Fire key！」

すると、バイファーの両腕を炎の籠手が包み込んだ。

「トライ&ゴーで、お前を倒す！」

「Re open!」「Frame burst!」

バイフーは、両腕の籠手を悪道向け放った。

「やらせない!!」

悪道は、籠手を蛇腹剣で払い除けた。

その払い除けた衝撃で、周りに巨大な火柱が起きた。

その時、突然山の一角から火柱が起きた。その光景を3人は拠点で見ている。

「ねえ!!今山から炎が!!」

一美が二階から降りてきた。

「お前も見えたか！」

「何かあったのかな…」

康介とレイもリビングから出てきた。

「様子見に行こうよ、康介バイク出して!!」

「…仕方ない、レイ。留守番頼む。」

康介と一美は玄関から勢いよく出て行った。

「あ、ちよつと！僕も行きたかったな…」

レイは少ししよげていた。

一美とウォーズに変身した康介は、マシンウォーリアーで火柱が出た場所に最速で向かった。

「ちよつと、今何キロ出してるの？」

一美が聞いた。

「今は402km/hだ！」

ウォーズが答えた。

「ちよつと！スピード違反で捕まるじゃん!!」

「警察なんてこの世界にいないだろ!!」

そんな会話をしているうちに火柱が起きたであろう場所の近くに着いた。

「こつからは走るぞ。」

ウォーズはバイクを降り、一美に行った。

「分かった。変身！」

一美はエレクスに変身すると、ウォーズと共に山の深部へ入って行った。

「はあっ!!」

その頃、バイフーと悪道は共に技の出し合いで体力を消費していた。

「ぐっ…見誤ったわね…」

悪道は刃を地面に突き刺し言った。

「そろそろ限界のようね。」

バイフーが悪道に言った。

「それはそっちもでしょ。」

その時だった。一体のホツパーが悪道の元に現れた。

「何かあったのか！」

すると、ホツパーは謎の言語で悪道に言った。

「何！ウォーズがこの山に…」

その時だった。山を登ってきたウォーズとエレクスが現れた。

「ここか…ライダー、が2人…」

「しかも、一体…は、バツクルが赤…」

ウォーズもエレクスも疲れ気味に言った。

「ウォーズ、まさかここに来るとは…まあいい、ここで始末してやる！」

悪道は、刃を蛇腹状にし、振り回しながらウォーズに迫った。

「その声、早苗か！」

ウォーズは避けようとしたその前に悪道に斬られ、崖ギリギリのところに倒れた。

「康介!!」

エレクスが叫んだ。

「あなたも、メガロドンと同じところへ送ってあげるわ！」

悪道はバツクルのキーを回した。

「再施錠…」「悪道炎舞！」

悪道は灰色の炎を纏った左脚で、キックを放った。

「はあっ!!」

ウォーズはスペシャルに変身しようとしたが、スペシャルキーを落とすとした。

そして、悪道の左脚がウォーズに突き刺さった。

「ぐはっ!!」

ウォーズは、キックの衝撃でダムからはじき飛ばされ川に向かって真っ逆さまに墜落した。

「うわああ!!」

「康介…」

「あっ…」

エレクスとバイフーは、ウォーズが悪道にトドメを刺されたのを啞然とした見るこゝろしかできなかった。

第10話 ジャツジ・デステイニー

「あなたも、メガロドンと同じところへ送ってあげるわ!」

「再施錠…」「悪道炎舞!」

「うわああ!!」

「康介…」

「あつ…」

僅か10秒程の出来事だ。悪道―東雲早苗によってウォーズ―山田康介は遙か下のダムの水底に墜落してしまった。

バイフーとエレクス―清宮一美は、その光景を見ていることしかできなかつた。

「後はお前達だけだ。ここで始末してやる。」

悪道は刃をエレクスとバイフーに向けた。

「康介を…よくも康介!!」

エレクスは銃を構え、怒りに任せて次々と弾丸を放った。

「落ち着け!」

怒りに満ちたエレクスを収めようとバイフーが近寄るが、彼女は手で払い除けた。

弾丸は次から次へと悪道に放たれるが、悪道はそれらを全て蛇腹剣で払い除けた。

「そんな怒りに任せた攻撃など、私には効かない!!」

悪道は剣先をエレクスに向け放った。エレクスは攻撃することばかりに気を取られ、防御するのに一足遅れて、弾かれてしまった。

「大丈夫か!」

バイフーが駆け寄ろうとすると、悪道が炎でその行手を阻んだ。

「2人仲良く、あの世へ行くんだな!」

「再施錠…」「悪道炎舞!」

悪道がキーを回し、必殺技を発動させた。

エレクスは立ち上がるろうとしたが、炎の鎖がそれを阻んだ。

悪道は、炎の刃をエレクス目掛け放った。その炎の刃は徐々に大きくなり、炎の渦となり迫った。エレクスははっと顔を腕で隠した。

炎はエレクスに激突すると周りを炎で包み込んだ。

「これで2人目……」

悪道がそう呟いたその時。炎の中から人影が2つ見えた。

「full open!」「Freeze slash!」

人影の一つは剣を振り下ろし、周りの炎をかき消した。

その人影は一美を庇うように立っていた。

「ウエザー……」

悪道が人影の正体に言った。そこに居たのは、先日まで悪道が乗っ取っていたウエザーの姿だった。

「大丈夫？ 清宮さん。」

「うん……ありがとう。」

一美は立ち上がった。

「貴様、何故ここに？」

「僕は、戦う。僕を利用した貴女を倒す為に！」

「なら、その戦いに私も入っていいかしら。」

ウエザーの隣にバイファーが立った。

「ここは一緒に戦いましょう。」

ウエザーが言った。

「そうね、私の足を引っ張らないでよ。」

バイファーがウエザーの肩を軽く叩いた。

そして、2人は悪道向け走り出した。

一美はそれを見て自分も変身しようとした。が、一美は何かを感じ、後ろを振り返った。

「今、誰か居たような……」

一美は、康介と共に登った山道を戻り、その違和感の正体を探し始めた。

その頃、川の下流では、康介が岸に流れ着いていた。

康介は気絶しており、意識はなかった。

その姿を見つけたダークホッパーとホッパーは、生死を確認する為に近寄った。

ホッパー達は謎の言語を話しながら、顔を見合わせた。恐らく、「生きているから始末しよう」という内容だろう。ダークホッパーは剣を構え、突き刺そうとしたその時、2人の前を何が通り過ぎた。

ホッパーはその何かが分からなかった。そして、前に見た時、康介の身体が無いことに気がついた。

「お探しの男は預かった。」

ホッパーは突然聞こえた声に戸惑い、声の主を探した。

「上だ。」

ホッパー達が上を向くと、大木の枝の上に、康介と、彼を抱えた黒に黄色の複眼を持った仮面ライダーが居た。

ホッパー達は、戦闘しようとその木の枝に飛び上がると、黒の仮面ライダーは風のように消えた。

ホッパー達は枝の上に乗ったまま先程の光景に混乱していた。

「KUNOICHI assassin!」

その音と共にホッパーは無残に斬り殺された。

「この件は貸しだな…」

そういうと、黒の仮面ライダーは康介を抱えその場を去った。

その頃、バイフーとウエザーは悪道に苦戦していた。

バイフーは、体力を消費し、無理やり身体を動かしていた。

ウエザーは、体力こそまだあるものの、悪道とはまともに戦えず、剣を振り下ろしては弾かれの繰り返しだった。

「あいつの攻撃、体力、技…全て人間とは思えない…」

「ええ、この場は一旦引いた方がいいかもしれません。」

「さあ、遺言はそこまでだ…」

悪道はベルトのキーに手をかけた。

「私が時間を稼ぐ、あんたは氷で壁を作って！」

バイフーは悪道に一瞬で近づき、右ストレートを放った。

「はい！」

「Blizzard key！」

「Re open！」「Freeze storm！」

ウエザーはその隙に剣を地面に突き刺し巨大な氷の壁を作った。

「貴女を仕留めるのはまた今度よ！」

バイフーは高く飛び上がり、氷の壁の内側に入った。

「逃がさん！」

悪道は刃で氷を一瞬で砕いたが、その先には2人の姿はなかった。

その頃、一美は山中で先程の違和感を探していた。

すると、突然声が聞こえた。

「一美、ここは君が来る場所じゃない。今はまだ、君には会えない。」

一美はその声に反応した。

「誰？」

その時、一美に激痛が走った。

一美の目の前には、その声の主である男が一美を抱えていた。

「久しぶりだな、一美…」

悪道が拠点に戻ると、クリアブルーの仮面ライダーがそこに立っていた。
いた。

「お前は…絶王。」

悪道は変身を解いた。

「君だったのか、悪道の正体は。」

絶王と呼ばれた仮面ライダーは、ベルトのキーを引き抜いた。

そして、中から1人の男が姿を現した。

「へえ：絶王の正体は、アンタだったわけか…、北川光司。」

「そういう悪道も、東雲早苗とは…」

「アンタもロスト―Yを？」

早苗は聞いた。

「違うさ、私の任務はウォーズ、エレクスの抹殺。」

「ウォーズは私が殺したはず…」

「まだ死んでいないのさ。水に落ちたぐらいではそうそう人は死なない。ましてや、仮面ライダーなら尚更だ。」

光司は、クリアブルーのキーを眺めた。

間章 壊された日常

「お前の父さんって、アトランティス消失の犯人なんだろう。」

「えー、マジで？」

「近寄るなよ…」

「お前は今日から『怪物の子供』だ。」

科学実験都市アトランティスが消失してから半年が経った。あの一件以降、俺を取り巻く環境が変わった。

皆、俺のことを怪物の子供と蔑み、避けた。

父さんはアトランティスの研究部門の偉い人というのは知っていた。アトランティスの完成にも貢献し、未来を創る男と呼ばれていたことも。だが、それは都市の陥落で幕を閉じた。

大人達は、この事態を「何からの実験」とし、その責任を死んだ父さんに擦りつけた。そのことによって、俺や母さんが攻撃的になってしまった。

俺は、本当に父さんがこの惨劇の首謀者だなんて思わないし、思いたくもない…

私の人生は、あの日、あの惨劇で変わってしまった。

「あの子、随分と物静かになったわね…」

「仕方ないよ、あの一件で全て失ったんだから…」

アトランティスによって家族を失った。父親も、母親も、兄さんも…もつと言えば、住む家も、お気に入りの服も、好きなゲームも…全部。

私は独りになってしまった。

孤独が私を虐めた。でも私は、それに抗おうとしなかった。何もしたくなかった。何をして、見てくれる人は居ない、褒めてくれる人も居ない。

この空いた心を埋める事は一生出来ない、そう思った。

私は、とにかくこの世界にいる意義が分からなくなっていた…

「おねえちゃん…ゆうき…」

彼女が壊れたから、数日が経った。

僕は、彼女の為に何かしようとして色々考えた。とにかく元気づける為に。

僕は、こんな彼女を…恵理を見たくない。見ていられなかった。

ある時、ふと彼女の隣に座って、こう言った。

「もう…過ぎたことはどうにもできない。愛理さんや悠紀ちゃんの分まで生きるしか…ないよ。」

「…2人の分まで…生きる…そんな事、どうやって…どうやってするのよ!」「返して…あの時を返して!」

僕はこの言葉に何か返してあげる事ができなかった…

「じゃあね、シノブ!また遊ぼう!」

それが最後に聞いた彼女の声だった。

私はその日、誕生日だった。でも、両親は仕事で忙しく、そんな事お構いなしだった。

私が公園で独りで遊んでいると、彼女が声をかけてくれた。

「一緒に遊ぼう!」

「…うん!」

彼女の名はミカ。苗字や名前の漢字は知らない子だけど、私と馬が合うらしく、とても楽しかった。

しかし、それをたった一つの事故で切り裂かれた。

その事故から一週間、世間では「白夜総三」と呼ばれる人物に全責任が押し付けられた。

私はその男―怪物が憎い…

第2章 アイ・ニード 第11話 ライフ・ブレイク

「私が戦う目的は唯一つ……」

男の声だ。その声の主は、俺を庇うように立っていた。

「…変身。」

その男は、漆黒の仮面ライダーに変身した。しかし、そこに禍々しさはなく、純粋な正義の眼差しがあった。

「私の罪は、私が背負う！」

「…きろ。起…ろ。」

その時、女の声が脳に直接語りかけてきた。

それと同時に視界が暗転した。

「起きろ。」

その声に起こされ、目を開けた。そこには、黒の忍者装束を見に纏った仮面ライダーの姿があった。

「なんだ…(こころ)?」

「話の説明は後だ。今は私と戦え。」

俺は重い身体を勢いよく起こし、周りを見渡した。すると、既に何人かのライダーに囲まれていた。敵は全部で5体。

待てよ、つまりこいつは俺が寝ている間一人で相手していたのか…余程の強者だ。

「分かった、とりあえず、何が何だか分かんねーけど。」

俺はベルトを巻いた。

「変身！」

「Open!」
「Masked warrior! KAMEN RI
DER WAR—Z!」

「そつちの奴も変身できたのか。面白くなってきたじゃねーか!!」

忍者ライダーの目線の先にいた銀色の西洋鎧に身を包んだ仮面ライダーが言った。

「こっちはなんも面白くないね。レイド。」

銀色のライダー、レイドに忍者ライダーは言葉を返した。

「さあ、今日こそこのチョロスケをぶった斬ってやる！」

レイドはサブソードガンを構えた。

「…殺し尽くしてやる!!」

レイドの掛け声で、周りのライダー達は一斉に俺達に向けて駆け出した。

「緑の奴を倒してやる!!」

まず先陣を切って現れた石灰色の仮面ライダーが俺に拳を振り下ろした。

「はあっ!!」

俺はその拳を受け止め、カウンターを決めた。

更に、右脚で蹴り上げ、続いてやってきた白衣を見に纏ったライダーにぶつけた。

「いった！何すんの！」

白衣のライダーは女か。石灰色のライダーの右肩を叩いた。

「悪い悪い。思っていたより強くてな。」

「なら私に任せなさい。」

白衣のライダーは右手を太陽に翳した。

「おっ、いつものあれか。」

石灰色のライダーは何かを察したのか、サブソードガンの剣先を俺に向け駆け出した。

そしてその剣を俺の喉元に突き刺そうとした。

俺もすかさず剣を取り出し、弾こうとした。その時。

「剣で弾かれる。」

白衣のライダーが俺のしたい事を突然言葉にした。

「あいよー！」

すると石灰色のライダーは剣を引き、右脚で蹴り上げた。

そして剣を銃に変え、吹き飛ばされている俺に弾丸を撃ちつけた。

俺の身体に激痛が走り、地面に屈した。

「終わりだぜ。」

石灰色のライダーと白衣のライダーはベルトのキーを回した。

「Great bomb!」

「Nobel intelligence!」

2人のライダーはそれぞれ銃を構え、強大な弾丸を叩きつけた。

「…やったな。」

石灰色のライダーが銃を下ろした。その時、彼のベルトはウォーズの剣によって砕かれた。

「は…」

状況の読み込めない彼はそのまま消え失せてしまった。

「…何が起きたのよ…」

「折角予知能力があるのに、そこまで見通せなかったのか…」

彼女の目の前にはウォーズが2人いた。

「ダメーキー。こいつはただ分身するだけじゃなく、片方を身代わりにできるんだ。」

「ふ、ふざけるな!!」

「Re open!」 「Gemini drop!」

2人のウォーズは、一気に距離を詰め、ダブルタイキックを喰らわせた。

その攻撃はベルトを破壊、そしてライダーを消滅させた。

「…生き残るには、この手しか無い。」

康介はそう呟いた。

「ふっ!」

忍者ライダーはその身の軽やかさを利用し、3人のライダーの攻撃

を次々と避けた。

あるものは眼に似た自立行動をする二つ銃口を使い不規則な攻撃を繰り返す、あるものは野性の猪の様に飛び付こうとした。レイドは、剣を使い、切り刻もうとした。

しかし、これら全てをそよ風が吹いたかの様に避け、姿を隠した。

「どこへ行った…」

すると、レイドを取り囲んでいたライダー2人に手裏剣型のエネルギー弾が激突、それぞれベルトを貫き、命を絶たせた。

「何が起きてやがる…」

その時、忍者ライダーは天高く舞い上がり、剣を逆手持ちし構えた。

「KUNOICHI assassin!」

「そこか!!」

「RAID calamity!」

レイドの一太刀が忍者ライダーの胸元を貫いた。

「俺の勝ちだな!」

その声と共に爆発が起きた。しかし、その爆発はレイドを中心としたものだった。

「変わり身の術だ。」

忍者ライダー…クノイチは吐き捨てた。

「君、すごいな。」

変身を解いた康介が近寄ってきた。

「お前、戦闘後にしては気を抜きすぎだ。斬られても知らないぞ。」

クノイチは変身を解いた。中から姿を表したのは、長髪が目立つ地味な青色の服を着た女だった。

「君、八代忍だったのか…」

「ああ」

忍は冷淡に返した。

「俺の事、助けたのか。」

「そういうことね。」

俺は気になった事を尋ねた。

「いずれ殺し合うのにか？」

「お前は殺す殺さぬ以前に役目がある…『怪物の子』としてな。」

その言葉を聞いた時、頭の中が真っ白になった。

俺がこの世で一番嫌いな言葉、口にする事すらしたくないもの。

「…関係ないだろ…君には」

俺は冷静を保とうとしたが、忍には即座に見破られていた。

「関係なくない。私もあの事件の被害者だから」

「うるさい…うるさいうるさいうるさい!!」

俺は耳を塞いだ。

「どいつもこいつも…何で俺が怪物の子供呼ばわりされなきゃならない！確かに、俺の父さんは科学実験都市アトランティスの研究に関わってた…だが、人は絶対に殺さない！あの全てが滅んだその時も！」

「何も私はそこまで言って…」

忍は俺を落ち着かせようと言葉をかけた。

「…俺を…人殺しの息子と言っているような奴に話すことなど何もない！失せろ!!」

俺は忍を押しつけ、山中に逃げるように入ってしまった。

父さんは…人なんて殺さないよな…絶対に

第12話 ブルー・フレイム

「一美：お前だけは逃げろ。」

「お兄ちゃんは？」

「：お兄ちゃんは、大丈夫だから：」

待って、その一言すら言えず、お兄ちゃんは瓦礫の山の中に消えた。今思えば、私も一緒に行くべきだった。そう後悔している。だから：だから：

「一美、大丈夫？」

「恵理：私は大丈夫。」

私は自室のベッドで寝ていた。その隣には私の少ない友人の1人、恵理の姿があった。

虎山恵理、彼女は私が通っていた高校のクラスの元学級委員長であり、2年生からは生徒会長として学校を支えてきた。

一年の頃、学校に行くのも一苦労だった私を支えてくれた1人だ。その時の話は：またそのうちに。

「はい、スープ。」

恵理が私にスープを差し出した。

「ありがとう。」

私はそれを手に取り、スプーンで掬い上げた。

あの日から数日経った。あの日、私が山中で意識を失っているところをレイと恵理が助けてくれた。特に怪我をした訳ではないが、あの日以降、重りがのし掛かったかの様に身体が重い。そんな私を恵理は看病してくれた。

「じゃあ、ゆつくり食べて、しっかり寝てね。」

恵理は扉を閉め、一階に戻った。

「恵理：一美の様子は？」

恵理が廊下に出ると、レイの姿があった。

「うん、とりあえず食事が喉を通るぐらいには大丈夫。」

恵理は下に降りようとレイの左を通った。
すると、レイが声を出した。

「恵理は…大丈夫なの？」

恵理は足を止めた。その顔には少し暗がりがあったが、レイには見えていない。

「愛理さんと悠紀ちゃんの事、やっぱりまだ引きずってるよね…」

レイの言葉にはいつも以上に力が入っていた。

「…」

「いつも無理して明るく振る舞わないで。僕は君の事が心配だ。相談したい事が有ればいつでも…」

「レイ君」

レイの言葉を恵理は遮った。恵理は振り向き、笑顔で言った。

「私は大丈夫だから、レイ君は心配しなくていいよ。」

そういうと恵理は階段を降りていった。

「嘘だ…絶対に隠してる。」

レイの目には恵理が話してくれない事の悲しさと頼りない自分への悔しさが滲み出ていた。

「そんな事実、初めて知った。」

東雲早苗は、北川光司から渡された資料を見て、驚きの目をしていった。

「その割には顔には出ないんだな。」

光司が早苗を茶化した。

「私は顔に出にくい方だな。」

2人が見ていた資料、その題目は

「清宮一美の経歴」

「まさか、清宮一美が……なんてな。」

光司が言い放った。

「だが、そんな事が今の科学力でできるのか？」

「さあ、白夜の事だ。それぐらいの力を身につけていてもおかしくないだろ。」

「だが、白夜総三は死んだはず……まさか!？」

早苗の脳に電撃の様な物が流れ込み、一つの結論を導き出した。

「そのまさかさ。白夜総三は、なんらかの形でまだ生きている。」

光司は薄気味悪い笑みを浮かべた。そして、ベルトを手に取り、扉の持ち手を持った。

「どこへ行く？」

早苗が聞いた。

「ちよつとそこまで」

そういうと、光司は部屋を後にした。

居間では恵理とレイがコーヒーを嗜んでいた。

レイは、角砂糖一個とミルクを少々入ったものを、恵理はブラックだ。

レイはどこか哀しそうな目で恵理を見ながらコーヒーをゴクリと飲み干した。

それから数刻後、拠点の上方から何かが降りた音がした。

「なんだ？」

レイが上を見た。

「もしかして、一美に何かあったんじゃない？」

恵理は立ち上がるとすぐさま2階に上がった。

その直後、居間の窓ガラスをぶち破り、ホッパーの大群が現れた。「なんでここにコイツらが！」

レイはベルトを巻き、ウエザーに変身した。

「変身ー!」「open!」「WHEATHER!」

剣を取り出し、迫り来るホッパーに突き出した。

同じ時、2階に上がった恵理は身構えた。ホッパーの大群が2階の廊下を埋め尽くしていたのだ。

急ぎ一美のいる部屋の扉を開けると、一美は既にエレクスに変身した状態でホッパーと戦闘していた。扉を開けると廊下にいたホッパーが次々とエレクスの元に向かっていった。

「まさか…一美が狙い…?」

恵理はベルトを巻いた。

そして、白銀のキー、バイフーキーを構えた。

「変身!!」

「BAIHU key!」「Open!」「Fight master
!KAMEN RIDER BAIHU!」

恵理は、白銀の拳闘士、仮面ライダーバイフーにその身を変えた。

「はあっ!」

バイフーの拳がホッパーを一気に2体貫いた。

「恵理、ここでは不利だ。外に!」

「分かった!」

その声と共に、エレクスとバイフーは外へ飛び出した。

更に、ウエザーも遅れた外に脱出、3人は円陣を組むように並んだ。

ホッパーはそれを囲むように立ち塞がった。

「囲まれた!」

レイが言った。

「落ち着いて、ここは私に任せて!」

バイフーは深紅のキーを装填した。

「Fire key!」

すると、地中から火柱が上がり、ホッパーを次々と焼き尽くした。

「おお…」

エレクスは火柱を見上げ、驚いていた。

「流石はバイフー。格闘と炎の戦士なだけある。」

「…誰？」

声のした方を見ると、北川光司がいた。その腰には紅のバックルが巻かれ、手にはクリアブルーのキーを持っていた。

「えつと…北川光司？」

エレクスが聞いた。

「そうさ、この僕が北川光司、絶対的烈王…又の名を、仮面ライダー絶王さ。」

「絶王ノ鍵…」「施錠…」

ガイダンス音と共に、氷の牢獄が現れた。その牢獄は光司を飲み込んだ。

「変身…」

その声と共に、牢獄は蒼の槍で貫かれ、砕けた。

「絶対的烈王…仮面ライダー絶王…」

氷のような鋭い紫色の眼を持つ仮面ライダー絶王が君臨した。

「地獄から、御迎えさ…」

絶王は絶対烈槍と呼ばれる槍を構えた。

「一美が目的？」

バイファーが聞いた。

「そこまで読んでるとは、頭が冴えてるね。」

絶王は走り出した。

「絶対に殺させない！」

「Re open!」「Frame burst!」

バイファーはキーを回し、炎のライダーパンチを放った。

その拳は、絶王の胸部に命中、炎が燃え広がった。

が、その攻撃が絶王に効いた様子は一切ない。むしろ、自身の氷で炎を消し、左手でバイファーの拳を振り払った。

「恵理！」

ウエザーとエレクスがバイファーの元に駆け寄ろうとするが、ホットパー達が行方を阻んだ。

「バイファー、まさかこれで終わらないよな？」

絶王はキーを回した。

「再施錠…」「絶王氷槍！」

絶王は、槍を地面に突き刺し、氷柱をバイフーに喰らわせた。

「恵理!!」

レイが叫んだ。

「本当に終わっちゃったよ…」

絶王は槍を振り払った。その時、氷柱が溶け、バイフーが姿を現した。バイフーの身体は白銀ではなく、黄金に輝いていた。

「これで終わりなんて、私は言っていないわ。」

数秒前、バイフーは氷柱が突き刺さると同時にあるキーを装填した。

「その光、まさか!」

「そう、これは康介が使おうとしたキー、スペシャルキーの力よ。」

バイフーはウイングを広げると、空へと高く飛び上がった。

「Re open!」「BAIHU burst SP!」

炎のドロップキックが絶王に迫った。絶王は氷の盾を作り、これを防ごうとした。

「はあっ!!」

バイフーは更に威力を高め、絶王と激突、絶王は一時押されかけたが、それをすぐさま弾き返した。

「ぐはっ!!」

バイフーは恵理の姿に戻ってしまった。

「恵理!」

ウエザーが駆け寄った。

「恵理! しっかり!」

ウエザーは恵理の身体を起こした。幸い、ベルトは破壊されておらず、息もあつた。

「レイ、ここは私に任せて、」

エレクスがウエザーに言った。

「でも…身体がまだ…」

「それなら…今は大丈夫。さ、早く！」

その声をレイは信じ、恵理を連れて逃げた。

「一対一か…楽しみだね…」

絶王が言った。

「そうね。」

一美の手には、あの時拾った青のカードキーが握られていた。

「私の友達を傷つけるやつは…許さない！」

エレクスはカードキーをベルトにスラッシュさせた。

「Sapphire key!」「open!」

「Blue flame! Brave fire! KAMEN R

I D E R S a p p h i r e E R E X !」

エレクスの身体が蒼炎のように燃え上がり、炎の勇者の鎧に身を包んだ。仮面ライダーサファイアエレクスの爆誕だ。

「…サファイアキー…君が持っていたのか…」

「…私のプレイにシビレなさい！」

第13話 デビル・モンスター

あれからどれぐらい山中を歩いただろう。

ひたすら進んでも木々が俺を邪魔するように生い茂っている。

怪物の子…

俺は…そんなはずはない…父さんが…怪物な訳…

「まさかあの攻撃を喰らって生きてるなんてな…」

その時、どこからか女の声があった。

俺は当たりを見回し、木々の間にいる女を見つけた。

東雲早苗だ。

「お前…」

「山田康介、ここで倒す。」

「施錠…」「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

早苗の姿は炎の使者、仮面ライダー悪道に姿を変えた。

「…変身。」

「open!」Masked warrior! KAMEN RI

DER WAR—Z!

俺はウォーズにその身を変え、拳を構えた。

悪道は剣を構え、刀身を光らせた。

「はあっ!」

悪道は一瞬で間合いを詰め、斬り込んだ。

俺はそれを避け、左脚で蹴り上げた。

悪道はその攻撃に反応する事なく、再び剣で切り裂こうとした。

俺も剣を取り出し、防いだ。

飛び上がり、悪道と距離をとった。

「これで終わりだ。」

「再施錠…」「悪道炎舞!」

「full open!」WAR—Z slash!

悪道とウォーズは必殺技を発動、紅と翠の刃が、木々と相手を切り裂いた。

木々が次々と倒れた。

ウオーズは地に膝をつけた。

悪道は、何事もなく立っていた。

「光司、悪いがウオーズを倒すのは私だ。」

その時、木々を掻い潜り、クナイ型のエネルギー弾が悪道を襲った。

悪道は腕で攻撃を防いだ。

「なっ！」

悪道の目の前には、クノイチの姿があつた。クノイチはウオーズを庇うように立ち尽くしていた。

「…お前…」

ウオーズが上を見上げた。

「先程の詫びだ。」

そう言うと、クノイチは剣を逆手持ちし、構えた。

「…俺も行く。」

ウオーズも立ち上がり、剣を構え直した。

「二対一、無謀だな。」

悪道は、剣を蛇腹状に変え、2人に振り下ろした。

ウオーズとクノイチはさつと左右に避け、悪道向け走り出した。

悪道はそれを防ごうと再び剣を振り下ろした。その攻撃は2人に激突。しかし…

「そつちは偽物だ!!」

ウオーズとクノイチは悪道の上方にいた。

「何!」

悪道は、剣で防ごうと構えたが、それよりも早くウオーズとクノイチの剣が激突、火花を散らした。

「ぐっ…私は確かに攻撃したはず…」

悪道はふらふらしながら、聞いた。

「変わり身の術よ。」

「ダミーキーの力さ。」

2人はそれぞれ答えた。

「ぐっ…私は、負ける訳にはいかない…」

悪道は立ち上がった。その身体からは漆黒の炎が湧き上がっていた。

「なんだ…この力は…」

すると、その炎は悪道を包み込んだ。

「ぐっ…ああっ!!」

「なんかやばいぞ。」

ウオーズは身構えた。

クノイチもこの光景に釘付けになっていた。

しばらくすると、漆黒の炎は消えた。しかし、そこに悪道の姿はなかった。代わりに悪魔の形相をした『怪物』がそこにいた。

「ウグ…ウギヤアア!!」

悪道の意味はそこにはなく、純粹に獣が立ち尽くしていた。

怪物は、ウオーズとクノイチに飛びかかった。

2人が身構えるよりも早くウオーズに飛び付き、剣で切り裂いた。

「うがっ!!」

ウオーズが吹き飛ばされ、変身が解けた。

「なっ、1発で!」

クノイチはこの状況に動揺していた。

しかし、だからといってこの状況が止まるわけではなく、怪物は今度はクノイチに、尾を突き刺した。

クノイチも変身を解かれ、地面に屈した。

怪物は遠吠えをあげ、ウオーズの息の根を止めようとした。その時、バイクの走行音が鳴り響いた。

その音で怪物は動きを止めた。

しばらくすると、怪物の背後から、漆黒の戦士が現れた。

怪物はそのことに気がつき、振り返った。

その戦士は左胸に『Z』の文字が浮かび上がり、頭部には黒いアン

テナが2本立っていた。それを一言で表すなら『漆黒のウォーズ』。
漆黒のウォーズは剣を振り下ろし、怪物と康介を引き剥がした。

「俺の…に手を出すな。」

漆黒のウォーズは剣を銃に変えると、何か薬品のようなものを怪物に投与した。

すると、怪物はもがき苦しみ始め、悪道、そして早苗の姿に戻った。

その隙を見て、漆黒のウォーズは康介と忍を抱えて立ち去った。

しばらくすると早苗は意識を取り戻した。

「なんだ…今のは。」

自分の腕を見た。確かに人間のものに戻っていた。

早苗はあの強大な力を操ることはできなかった。

漆黒のウォーズは、小川の辺りで2人を下ろした。

「ここまでこれば安全だろう。」

そう言うと、漆黒のウォーズはスマホぐらいのサイズのスイッチを押しした。

すると漆黒のウォーズの身体は光に包まれ、その場から消えた。

それからすぐ、康介と忍は目を覚ました。

「…ここは…」

忍は当たりを見回した。

「とりあえず、あの森からは出たのか。」

康介が言った。

「ここならしばらくは安全だろう。」

忍はそう言うと、康介の方を向いた。

「さっきは、あんな呼び方をして済まなかった。」

忍は頭を下げた。

康介はしばらく考えた。そして、拳を振り上げようとした。

「それを見た忍は警戒をした。

が、その必要はなく、康介は握りしめた拳を開き、差し出した。

「さっきの戦いで、無かったことにする。」

忍の顔に笑みが浮かんだ。

「そのかわり、教えてくれ。なんでさっきはあんな呼び方を…？」

忍は一瞬躊躇ったが、すぐに覚悟を決めた顔になり、口を開いた。

「それは…」

第14話 グレース・ゼロ

「私の友達を傷つけるやつは…許さない!」

「Sapphire key!」[open!]

「Blue flame! Brave fire! KAMEN R
I D E R Sapphire E R E — X !」

エレクスの身体が蒼炎のように燃え上がり、炎の勇者の鎧に身を包んだ。仮面ライダーサファイアエレクスの爆誕だ。

「…サファイアキー…君が持っていたのか…」

「…私のプレイにシビレなさい!」

「楽しくなってきたじゃん!」

絶王は再び槍を構えた。

エレクスは、右腕をベルトにかざした。するとサバイブソードガンとは別の新たな武器が召喚された。

「Sapphire blade」

その剣は透き通った青をしていた。刀身には6本の鬼の角のようなものが飛び出していた。エレクスが手に取ると、その青が光り始めた。

「…はあっ!!」

エレクスは剣を絶王に振り下ろした。そして、手前に引き抜いた。

絶王は、その攻撃で左肩を痛めたが、そんな事はお構いなしで槍を構えた。

「再施錠…」[絶王氷槍!]

エレクスもキーを回転させ、必殺技をを発動した。

「R e o p e n !」[P r i s m E R E — X l i g h t n i n
g .」

「やあっ!!」

「おらっ!!」

2人の攻撃は、ぶつかり合うと同時に爆発、周りは閃光に覆われた。

閃光が収まるとそこにはエレクスだけがいた。

「…逃げられた…」

一美は拠点に戻った。私がついさつきまで寝ていたベッドでは恵理が寝かすつけられていた。

レイは彼女の姿を見ると、難しい顔に安堵の表情を浮かべた。

「よかった…恵理もとりあえず意識はある。」

「2人とも無事でよかったよ。」

一美は椅子に座った。

「ねえ、一つ聞きたいんだけど。」

「何？」

レイは一美を見た。

「前から思ってたんだけど、恵理とレイってやけに親しいよね。友達とはまた少し違うような…なんといえればいいか…」

レイは一瞬恵理の顔を見て、話始めた。

「恵理とは、従姉に当たるんだ。自分の母さんの兄の子ども。」

「へえ、」

「恵理生まれた時期も近かったから、赤ちゃんの頃からの付き合いで、親戚同士集まる時はだいたい一緒にいたと思う。」

一美は納得の表情を浮かべた。

「僕は、恵理に悲しい顔をしないでほしいし、何か悩みがあれば相談して欲しいと思ってる。けど…」

レイは俯いた。

「実際はいつも恵理はわざと明るく振る舞ってる。ただでさえボロボロなのに…そんな彼女を僕は見ていられない…」

「…恵理に、何かあったの？」

レイは一瞬躊躇った。

一美はそれに気づき、無理に話せとは言わないよ。と言った。

「ううん。話すよ。」

レイはそう言った。

「恵理には、弟がいるのは知ってるよね。」

「うん、確か翔君だっけ?」

「そう、でもそれ以外に『姉』と『妹』がいたんだ。」

「姉と妹…?」

姉は愛理、妹は悠紀。恵理の家庭は6人家族でとても朗らかだった。見ているこつちまでも楽しくなってくる。そんな家族だった。

「お姉ちゃん!悠紀!」

当時8歳で周りから姉妹の中で1番大人っぽいと言われていたが、見えないところでは姉妹にべったりだった。何をするにも一緒に行動していた。

だが、それをある事件が引き裂いた。

アトランティスの消失。科学実験都市アトランティスが街ごと行方不明になった大事件。大きな街のため、行方不明者も計り知れないほど出た。その中に愛理と悠紀の名前もあった。

愛理は中学校に通う為に、悠紀は小学校の遠足でたまたまアトランティスに居た時だった。

あの時の恵理の、言葉に表せないほど絶望した哀しみの表情は未だ忘れられない。

それからしばらく、彼女はずっと哀しみに暮れていた。僕も心配で時々様子を見に来た。

ある時、僕は彼女にこう言った。

「もう…過ぎたことはどうにもできない。愛理さんや悠紀ちゃんの分まで生きるしか…ないよ。」

「…2人の分まで…生きる…そんな事、どうやって…どうやってするのよー!」

「返して…あの時を返して!」

その日は追い返されたが、どちらにしろ、あそこで止まっていたと

ころでかけるべき声はなかった。

翌日、謝罪の為に再び家を訪ねた。だが、そこには…

「いらつしやい、レイ君!」

いつものように振る舞おうとする恵理がいた。

「そう…だったんだ。」

一美が同情の顔をしていた。

「少し前、親戚同士で集まった時、夜寝静まった頃、恵理の部屋から泣いている声が聞こえた。でも、僕はそれを見ていることしか出来なかった。」

レイは後悔の顔をしていた。

「…ごめん、辛いこと聞いて。詫びに何かお菓子持ってくるよ。恵理が起きたら一緒に食べよ。」

そう言うで一美は下へ降りていった。

「起きているんだよね?」

レイが一美が居なくなると、言った。

「…バレた?」

恵理は目を開かせ、起き上がった。

「うん」

「ごめん、恵理。君の事、話してしまつて。」

レイは恵理に頭を下げた。

「ううん。私の方こそ、今までごめんなさい。」

恵理は、レイの目を見ていった。

「レイ君がこんなに心配していてくれていたなんて…私…」

「…ありがとう」

恵理は泣きそうな声でレイに言った。

「いゝよ。」

その日の夜…

「はは、まさか2人揃って惨敗とはね。」

光司は椅子に座っていた。

「…そうね。今回ばかりは油断していたわ。」

早苗は壁にもたれかかっていた。

「ここで一つ提案がある。」

光司は、早苗を見た。

「なんだ？」

翌日

私達は、拠点を変えることにした。居場所がバレた以上、止まる訳にはいかない。

少しの荷物と食料を持って、拠点を後にした。

もしかしたら、康介が戻ってくるかもしれない、そう思った私達は机の上に、「バレたのでここを去ります」と置き手紙を置いて出た。

「さようなら。」

私はそう呟き、後にした。

その様子を絶王が遠くから眺めていた。

「やっぱりな」

3人は、少し前に戦ったダムに来ていた。

「この近くに私が昔いた拠点がある。」

恵理がダムの湖の辺りを指さした。

「よし、行ってみよう…」

一美が歩き出したその時、待ち伏せをしていたホッパーの大群が一斉に襲いかかった。

「ぐっ…待ち伏せ!」

「とにかく…変身!」

「open!」[Lightning goddess! KAMEN RIDER ERE—X!」

「Sky calamity! KAMEN RIDER WHE THER!」

「Fight master! KAMEN RIDER BAI H U!」

3人は変身すると、すぐさま応撃の体制をとった。

ホッパーの数は数十体。更にダークホッパーが2体いる。

「数が多い…」

「みんな得手分けして戦おう!」

一美の声で、3人は、攻撃を始めた。

第15話 ミート・アゲイン

「……」

1人の女の子が公園のブランコに俯いて座っていた。

周りには同じ歳ぐらいの子ども達も達が追いかけてっこをして遊んでいた。彼らは彼女に見向きもしなかった。

その女の子が私だ。私は友達を作るのが苦手だ。小学校に入学した後、私はまともに友達を作れず一年半を過ごした。

私はそんな自分がみつともなく、許せなかった。でも、それとは裏腹に人と会話する回数はどんどん減っていく一方だった。そんな時だった。

「一緒に遊ぼう。」

私に1人の女の子が手を差し伸べた。

その時、私に天使が舞い降りたと思った。あの時の彼女の容姿がまるで天使のように美しかった…

「名前はなんていうの?」

彼女が聞いてきた。私は最初怖かった。何かされるんじゃないかと。でも

「…忍…八代忍…」

恐る恐る言くと、彼女は満面の笑みで答えた。

「私は、ミカ。よろしくね。」

私も彼女の笑みに絆され、つい笑ってしまった。

「うん!」

私と美唯は好きなアニメが一緒だったり、有名な戦国時代の人物の血を引いていたりと何かと馬があった。

私は次第に彼女だけでなく他の人とも話せるようになった。学校は違うけど、いつもそばに居てくれる、そんな気がした。

あれから半年、私達を引き裂く悲劇が起きた。

その日は私の誕生日だった。だが、親はそんな事はお構いなしで仕事に向かった。

私は気にもしなかった。いつもの事だから、そう思い公園に行くと彼女はいつも通り遊んでいた。

「ミカちゃん！遊ぼう！」

「忍！」

私が彼女に近寄ろうとしたその時、地面が揺れた。

あの感覚は未だ夢に出てくるぐらい忘れられない。

「忍、逃げよう！」

彼女は私の手を握りしめ、走った。

周りの大人達は逃げ惑う者もいれば、腰を抜かし倒れている者もいたが、私達はとにかく走った。

「忍、もうすぐで町を出られるよ！」

ミカはそこで足を止めた。

「ミカ、どうしたの？」

「私、パパとママが心配、ちよつと見てくるから先行つてて。」

「ミカ！」

「じゃあね！必ず追いつくから！」

必ず追いつく、その言葉は叶わなかった。

私は一人森を出た。しかし、一向にミカは姿を見せなかった。

そのうち、街は一溜りもなく消え去った。彼女と共に：

「私は、ミカに会えなかった事が悲しくて仕方なかった。」

私の目の前には先程の森ではなく、今一山田康介がいる。康介は暗い顔をして私の話に聞き入っていた。

「…そんな事が。」

「それが、私が白夜総三を憎む理由。私はこの事を本人に謝られても許せない。」

「…」

「このお陰で、私は二度も同じ友人を目の前でなくしたからな。」

「二度も？」

彼は疑問を浮かべた。

「西園寺美叶。クラスに居ただろう。そいつが、私が亡くしたと思っていた…唯一の親友。」

「西園寺さん、ちよつといい？」

私はその事実気づいたのは入学直後だった。

西園寺美叶、かつてこの一帯を収めていたとされている槍の使い手西園寺美ノ介の子孫であり、私と同じアニメが好き、そして何より名前が同じ、私は確信していた。彼女はミカであると。

「西園寺さん、私のこと、覚えてない？」

「…前に会ったことあつたっけ？」

それが彼女の返答だった。風の噂で、彼女はある時期の記憶が全くないらしい。その時期が私と出会った時…私は悲しみに胸が一杯だった。せつかく出会えたのに、私を覚えてない。「今までずっと心配していた」そう言いたかったが言うに言えなかった。

二度目、それはこの世界に来てからの事。彼女は仮面ライダーシキブとして私とコンビを組んでいた。

「忍！そつちにホッパーが！」

「承知！」

私達は最強のコンビだった。

それも終わりを告げた。

私の親友は目の前で八つ裂きにされた。

私を庇い、彼女は死を迎えた。

2本の剣と2丁の銃と2つの姿を持つ仮面ライダーに…

「私は弱い人間だ。2回も大切な人を亡くすなんて。」

「…俺も、目の前で仲間を失った。気持ちは分かる。」

康介は私を見た。

「だけど、それで止まるわけにはいかない。この世界は、誰かを殺さないで生きていけない。だからこそ、死んでいった者達のために俺は戦い、生き残る。仮面ライダーウォーズとして…」

「…私も、康介の道に付き合わせてくれ。美叶のために…私も生き残る。」

康介はあの時の美叶と同じような笑顔で頷いた。

「ぐっ…待ち伏せ！」

「とにかく…変身！」

「open!」[Lightning goddess! KAMEN RIDER EX!]

「Sky calamity! KAMEN RIDER WHEATHER!」

「Fight master! KAMEN RIDER BAIHUI!」

「数が多い…」

「みんなで手分けして戦おう！」

同時刻、一美達はホッパの大群に襲われていた。

剣で、銃で、拳で薙ぎ払うがそれよりも早く次のホッパーが襲いかかる。

無限に続く戦いに、3人も疲労が蓄積していた。いくら雑魚であっても数が多ければ多いほど苦戦を強いられる。

「キャッツ!!」

「ぐはっ!!」

「うっ!!」

3人にもはや戦う気力はない。その時、

「無様だな。清宮一美。」

彼女達の目の前に現れたのは悪道と絶王だった。

「ここで終わりだ。」

絶王は槍を構えた。

「地獄で苦しみなさい…」

「地獄から御迎えだ…」

2人はその言葉と共に3人目がけ走り出した。

避ける術もない3人は死を覚悟した。その時!

「Re open!」 「WAR—Z drop!」

「Re open!」 「KUNOICHI assassin!」

「はあっ!!!」

二つの閃光が、悪道と絶王の背後に迫った。

咄嗟の攻撃に2人は回避した。

「ウォーズ!!」

悪道が声を上げた。

一美が顔を上げると、ウォーズとクノイチの姿があった。

「ここは撤退だ。」

「忍法、煙幕の術!!」

クノイチは球体のようなものを地面に投げつけ、破裂させた。すると、周りが煙に覆われた。

「Mach key!」

マツハキーを使ったウォーズはエクスとウエザーを、クノイチはバイフーを担ぐと、風の如く煙から脱出、逃亡した。

「待て!!」

悪道は剣を蛇腹剣にし、煙を追い払った。が、煙が晴れたら先にはライダーは1人も居なかった。

「くそっ、逃した。」

「早苗、焦るな。まだ機会はある。今は報告が先だ。」

2人は撤退した。

その様子を山の上から1人の男が見下ろしていた。あの時、一美に接触した男だ。

「二安心だ。ありがとう、ウォーズ。」

そう言うと、バイクに跨り、後にした。

第16話 デス・フアイト

「康介！心配したんだから!!」

一美が康介に泣きついた。

「ごめん…連絡する手段もなかったからさ。」

康介は一美に言った。

「とりあえず無事でよかったよ。康介」

恵理が康介の肩を叩いた。

「八代さんもありがとう。」

レイは忍に言った。

「…あくまで康介について行くと決めただけだ。」

忍はちよつと照れていたが、それを顔には出さなかった。

「しかし、これからどうする。」

今、彼らがいるのは先程のダムから程近い森の中。居場所がバレルのも時間の問題だ。

「行き先もないし、多分この感じからして私の元拠点も無くなっていくだろうし。」

恵理が続けて言った。

「…とりあえず、あの拠点に戻るぞ。」

康介がそう言った時、一美、恵理、レイの3人は正気かという目で見た。

「でも、あそこはもう見つかって…」

「大体、おかしいと思わないのか？アイツらはここの支配者みたいな者だ。そんなアイツらがなんで今まで攻めてこなかった？」

「確かに…」

一美は言い、頷いていた。

「それにどちらにしろアイツらとは戦う運命、いつそのこと誘き出すんだ。」

康介は胸を張って言った。

「という訳で、逃してしまいました。」

早苗は電話越しの相手にそう伝えた。

「…悪道、絶王。お前達は失敗を犯した。本来なら処罰を受ける…が、最後のチャンスを与えよう。もし失敗したら、その時が終わりだ。いいな。」

「分かりました。」

彼女は電話を切った。

光司は、気に入らない表情をしていた。

「俺たちに処罰…ねえ。酷い話だ。勝手に身体をいじっておいて、要らなくなったら簡単に捨てるのか！」

彼は目の前の机を怒りに身を任せ蹴り飛ばした。

「…こうなったら、最終手段だ。」

彼女は覚悟を決めた。

「最終手段？」

光司は目を見張った。

拠点にて…

康介と恵理は仕掛けの準備を終え、敵を密かに待っていた。

「そうだ康介、返さないといけないものがあった。」

そうやって彼の手に置いたのはスペシャルキーだった。

「…使ってくれたんだな。」

「まあ、ボロ負けだったけどね。」

彼女は笑い気味に言った。

「…恵理、君には色々感謝している。」

「えっ？」

「康介は恵理に目を向けた。

「俺がこうして立ち直れたのは、恵理のお陰だ。ありがとう。」

俺があの時ー10年前に立ち直れたのは彼女の一言がきっかけだった。

「私は康介の味方だから、怖がらないで。」

あの一言が無ければ、俺は心を閉ざしたままだった。

「…そんな事ないよ、ただ…放っておかなかっただけ…」

恵理は、何処か悲しそうな目をした。

「敵よ」

恵理が言った。

ダークホッパーを先頭にホッパーの集団、その後ろには悪道と絶王の姿がある。

ダークホッパーはある地点に足を置いた、その時、凄まじい音と共にその身体は何処へ消えた。

「地雷か！」

悪道が言った。

「今だ！」

忍の声と共に彼らは一斉に攻撃を始めた。

2階にいるエレクスとウエザーは銃で敵の行動範囲を狭め、クノイチは素早い攻撃で敵軍を攪乱、そこをウォーズとバイフーの攻撃が貫く。

前回は嘘のように次々とホッパーを薙ぎ倒す。

悪道はウォーズに迫った。

「今日で終わりよ！」

その剣がウォーズに振り下ろされる。ウォーズはそれを剣で受け止めた。

「作戦成功！」

エレクスはホッパーの軍団を見下ろしながら言った。

「まだ油断してはいけませんよ。」

ウエザーが言ったその時、部屋の後ろからホッパーが数体現れた。

「こいつら！」

エレクスは銃を剣に変え、切り倒した。

更に外から羽を広げたホッパーが外から侵入、ウエザーに飛びついた。

「離れろ!!」

最初は勝っていたウォーズ達、しかし、時間が経つにつれて少しずつ押されていく。

「full open!」[KUNOICHI slash!]

「Re open!」[BAIHU burst!]

クノイチの剣捌きとバイフーのパンチがホッパーを一瞬にして薙ぎ倒す。

「楽しくなってきたな!!」

絶王がクノイチとバイフーに迫る。

クノイチが槍を受け止め、バイフーが蹴りを入れる。

ウエザーとエレクスは地上におり、応戦していた。

「これで蹴散らす！」

エレクスはサファイアキーを取り出した。

「Sapphire key!」[open!]

「Blue flame! Brave fire! KAMEN RIDER Sapphire ERE-X!」

「Blizzard key!」

エレクスはサファイアエレクスに、ウエザーはブリザードキーを装填した。

「Re open!」[Freeze storm!]

「はあっ!!」

ウエザーが剣を地面に突き刺すと周りが凍結、ホッパー達は動きの自由を奪われた。

「Sapphire key!」

エレクスはサファイアブレードにキーをタッチ、剣先を構えた。

「Grade up!」 「Prism lightning star!」

その瞬間、エレクスは星を地面に描くように高速移動、次から次へとホッパーを切り刻む。

一瞬の出来事にホッパー達は自分が斬られた事に気づく事なく死んでいく。

「ウォーズ、死ね!!!」

蛇腹剣がウォーズに振り下ろされる。

ウォーズはそれを身体を逸らしギリギリ避けた。

そして武器を銃に変え、剣を撃ち落とそうとするが、全て避けられる。

悪道は、剣を元に戻すと一瞬にして距離を詰める。

そして、ウォーズの喉元に剣を突き刺そうとする。

彼はそれをギリギリで避ける。しかし、それによって体勢が崩れ、ウォーズは倒れた。

「これで終わりだ!!」

「再施錠…」 「悪道炎舞!」

炎を浴びた剣がウォーズに迫る!

「危ない!!!」

ウォーズは、顔を伏せた。

その剣は、身体を貫いた。
その身体が崩れ落ちた。

ベルトが砕け散り、地面に屈したのはレイだった。

「レイ…レイ!!」

ウォーズがレイの身体を起こした。

「これで…あの時の借りは返せた…ね、」

レイはそう言い残し、消滅した。

「嘘でしょ…」

バイファーはその光景を目の当たりにし、今にも絶望しそうだった。
ウォーズは、身体を震わせた…

青の複眼が光り輝き、拳を強く握りしめ、立ち上がった。

「…お前はただのクズだと思っていた…」

その言葉に皆手を止めて、ウォーズを見ていた。

「今ので分かった…お前は…人間なんかじゃない…」

康介は今までにないほどの声で言う。

「…獣畜生が…お前の心臓を貫いて、身体を切り裂いてやる…」

ウォーズの姿がウォーズスペシャルに変わった。

剣を引き抜き、走り出した。

「まんまと策に乗せられたな。」

悪道が言う。それと同時に、プログラムが作動する音がした。

次の瞬間、ウォーズの動きが止まり、剣を握る手が緩んだ。

その目は黒く染まっていた。

「康介に何をした!」

一美が悪道に向かって叫んだ。

「スペシャルキーには変身者を操る能力がある。そのかわり、キーは破壊されるけどね。今のウォーズは、私の手先のようなものよ。」

「まさか、それが狙いでー！」

忍が言った。

「ウォーズ、3人を殺せ。」

悪道が命令すると同時にウォーズが動き始める。

「そんな事させない！」

クノイチがウォーズに襲いかかる。

その一瞬、クノイチの身体には剣が突き刺さっていた。

ウォーズがクノイチに剣を突き刺したのだ。その剣はベルトを砕いた。

「そん、な…」

忍は地面に倒れた。

「…くっ…」

エレクスは呆然としているバイファーを担ぎ、その場から逃亡した。

敵を見失うとウォーズは止まった。

「私も…そっちにいくね、ミカ…」

その足元で忍が消滅した。

「光司、ウォーズは貴方に任せる。」

「どこへいく？」

「仕上げよ。」

第17話 デイスパレット・デステイニー

「一緒に、学校行こう。」

俯く私に彼女は手を差し伸べた。彼女の顔には、一片の曇りなき笑顔だった。

そうじゃない、私を連れ出して欲しいんじゃない。そう思った。私
がして欲しかったのは…

「…ん…いつのまにか、寝てたのか。」

清宮一美は、過去の記憶から目を覚ました。その顔には、悲しみがあつた。

「康介…なんとしても私が。」

隣には、虎山恵理の姿がある。彼女は未だ寝ている。

「…レイ…」

彼女は寝言で帰らぬ人の名を呟いた。

「…恵理。」

「これで俺達の勝ちも同然だな！」

そう勝ち誇った声で言ったのは、北川光司だ。

その隣でウォーズspは立ち尽くしている。一切動く事なく、康介の意思は全くない。

「このままコイツを使ってめちやくちやにしてやる。」

光司は肩を鳴らした。

「そう油断は出来ないわよ。まだエレクスがいる。」

光司の後ろから東雲早苗が現れた。

「エレクス、確かにな。でも、コイツと同じように、サファイアキーを壊して…どうのこうのすれば良いんじゃないのか？」

彼はウォーズの肩をポンポンと叩いた。

「：サファイアキーには、その装置を付ける前に盗まれた。」

「そうか：ま、その方がアイツとの戦いがあるしな。なら早速、アイツをぶっ叩きに行こうぜ！」

光司はウォーズを連れて出ようとした。

「待て、私も行く。」

その道を早苗が遮った。

「ほう、いいぜ。」

「エレクスは、もう1人仕留め損ねた仲間がいる。恐らくそいつと行動している。」

彼女の脳裏にはバイファーが思い浮かんだ。

「私がそいつを引き受ける。お前はエレクスを始末しろ。」

「それってつまり、俺に勝ちを譲るって事だよな？ いいのか？」

「いいのよ。サファイアエレクスに勝てる見込みがあるのはあなたしかいないから。それに：」

それに、私は財団ライダーの中でも最低ランク、ここで始末できたところで、この実験が終わったら始末されてしまう。それなら有望な光司の方がいい、そう喉まで出かかった。

「それに？」

光司が聞く。

「なんでもない。」

早苗は、光司から目を逸らした。

早苗は10年前、財団に保護された子供の1人であった。

保護は聞こえが良すぎる、実際はモルモットにされたというのが正しい。

彼女ら他3名、計4名は、財団のモルモットとして、様々な実験に加担させられた。

早苗はその中でも、一番低い成績だった。彼女らの長官はいつもこう言っていた。

「お前がここに居られるのは数合わせの為、全てが終わればどうなるかわかるよな。」

早苗は、その言葉で全てを理解した。自分は所詮数合わせでしかない。それなら、どれだけ頑張ろうが意味ない、いずれ消されるのだから。

「…恵理、起きてる？」

夜闇に包まれた森の中で、一美は恵理と共にいた。

「…うん。」

恵理は頷いた。

「私、康介を助けたいと思ってる。いや、私は康介を助ける。」

一美は恵理の方を向いて言い切った。

「…私は、反対よ。」

恵理は、そっぽを向いてない呟いた。

一美は予想だにしない回答に目を見張った。

「なんで？」

「…」

「…私は、康介に救われたから。康介はあの時の私に、同じ目線になって寄り添ってくれた。だからこそ、今度は私が救いたい。」

恵理が一美の方を見た。

「恵理にも、もちろん感謝はしているよ。でも、私にとってあの時欲しかったのは、手を差し伸べる事じゃなかった。」

一美に無言の視線が突き刺さる。

「…怒らせちゃった？それならごめん。でも、本当のことだから。親友だからこそ言っておきたい。」

「…別に、怒ってなんかかないよ。むしろ言ってくれて嬉しい。」

恵理は、いつもの優しい声で言った。

「…分かった。私も行くよ。」

彼女は力強く言った。

「えっ…？」

「親友の為なら、行くしかないでしょ。康介だって、10年以上の付き合いなんだし。何より、そういうことなら、2人は一緒の方がいいよ。なんというか、生涯のパートナー、みたいな。」

「生涯のパートナー…要するに、相棒、みたいな感じ？」
「そ、そうね…」

恵理は、「夫婦みたいな感じだねって言ったんだよ。」という言葉を奥にしまった。

一美は、ふふって笑った。

「恵理、ありがとう。それなら早速行動よ！」

「行こう、一美!!」

翌朝、朝日昇る平原には、一美と恵理が。月が沈む平原には早苗、光司、ウオーズの姿があった。

「奇遇ね、こんなところで会うなんて。」

早苗が言う。

「康介を返してもらおう！」

一美が言うと、一美と恵理はバックルをつけた。

「変身!!」

「Blue flame! Brave fire! KAMEN RIDER Sapphire EREREX!」

「Fight master! KAMEN RIDER BAIH U!」

サファイアエレクトスとバイフーの身体は朝日に照らされ、輝いている。

「今日で決着だ。」

そう光司が言うと、早苗と光司はベルトを着ける。

「変身」

「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

「絶対的烈王…仮面ライダー絶王…」

月闇から解放された悪道と絶王は武器を構えた。

平原を暁風が駆け抜け、草木を揺らした。

風が止まったその時、4人は一斉に動き出す。

エレクスは両手で剣を持ち、絶王に叩き込む。一振り、また一振り
と斬撃を与える。

絶王も負け座と槍でエレクスの急所を狙おうと攻撃を仕掛ける。

バイフーの炎の拳は、悪道の顔面すれすれを突き抜ける。体勢を直
すと、すぐさま次の攻撃に転じる。

悪道は、剣を装備、その拳を切り刻まんと迫る。

「我々も行くか。道永。」

「はい、博士。」

第18話 レゲイン・ウォーズ

「俺は、誰よりも強くなる…絶対的な帝王になって、俺を傷つけた人間を1人残らず、服従させてやる!!」

そう決意した10年前、そして、それは未だに実現できていない。

「お前は弱い。だから勝てない。」

その言葉が常に脳を彷徨っている。だが、その連鎖を今日で終わらせる。エレクスに勝ち、全てを手にする！

そう決意し、槍を力強く握りしめ、エレクスに振り下ろす。

エレクスとは紙一重の差。手数で言えばあっちが上。だが、俺はその分今まで鍛え抜いた。その力は、絶対に裏切らない。

「はあっ!!」

槍の一突きがエレクスを弾き飛ばす。

「ぐっ…」

エレクスは、倒れた身体を起こす。

「もう終わりだ。お前に勝ち目はない。」

俺は、槍を構え、ベルトを操作する。

「再施錠…」「絶王氷槍!」

二度キーを回し、必殺技を発動させた。

その時、ふと身体から力が抜けた。変身が解かれ、後ろに下がってしまった。

ベルトを見ると、中心が剣で抉られていた。

「貴様!」

「かかったわね。」

エレクスはあの一瞬で俺のベルトを…

「お前はもう戦えない。私がやらなきゃいけないのは、康介を…康介を助ける事。」

「だったら、その助けたい人に殺されてしまえ…ウォーズ、殺せ!!」

俺は、怒りで声を滲ませ、放った。

その一声でウォーズspは、剣を構え、エレクスに迫った。

俺の身体が熱さで震えている。

「はあっ!!」

「やあっ!!」

2人の拳が交わる。

悪道とバイフーは、それぞれ攻撃の手を緩めない。

バイフーは、悪道に右膝で腹を蹴り上げ、顔面に右ストレートを放つ。

悪道はそれを防がず、敢えて喰らい、弾き飛ばされた。

悪道は、地にひれ伏した。

「何故、本気で戦わない。」

バイフーが聞く。悪道は、バイフーの方をゆっくりと見上げる。

「私は、どんな選択をしても、死ぬ。なら、せめて苦しみたくない。自我を失って、楽になりたい…そう思った、ぐっはっ!!」

悪道の身体が徐々に変異し始める。漆黒の炎が悪道の…早苗の身体を包み込む。

「貴女も道連れよ…虎山恵理…グギャアアツ!!!」

「ヴァツ、グアアツ!!!」

悲痛な叫びとも取れる声と共に、早苗の姿はあの時と同じ怪物の姿に変わった。

「そうね。私も、その道に付き合おう。でも、先に逝くのはアンタだ！」

バイフーが剣を構えた。

悪道は、高速でバイフーに迫る。彼女はそれを剣で防ぐ。

それを振り払う前に、悪道はそらへ飛ぶ。

赤褐色の翼で炎を起こしバイフーを飲み込む。

悪道は最後の一撃を決めようと剣を突き立て、バイフーに迫る。

突き刺した剣はバイフーのバツクルを貫いた。

だが、それと同じくバイフーの剣も悪道の胸に突き刺さった。

「終わりだ!!!」

「full open!」[Frame slash!]

炎の剣が火柱となり、悪道ごと飲み込む。

「うおおおおお!!!」

バイフーの変身が解けてもなお、恵理は攻撃の手を緩めることなく剣を突き刺す。

レイ…今行くから…

凄まじい爆発が二人を包み込んだ。

「康介！」

私は彼の名を叫び続けた。

しかし、ウォーズはそれに反応することなく攻撃の手を緩めない。

「無駄さ、今のウォーズは負の力に囚われている。何度呼んだって変わらない！」

「確かに無駄、なのかもしれない…」

光司が意外な回答に、目を見張った。

「でも、康介は、その無駄な事を私にしてくれた。だから私は…私は、康介を助ける！」

かつて、部屋すら出るのが辛かった私。それを無理やり出すんじゃないくて、その扉を私が開けるまで待っていてくれた。

私は、嬉しかった…今度は私の番よ！

ウォーズは私の左肩に剣を振り下ろした。

その攻撃を、私は、受け止めた。

「あなたは…一人なんかじゃないよ。」

そして立ち上がり、その剣を振り払い、抱きしめた。

「私が、ついてるから…私がいるから」

「康介。」

「ありがとう、一美。」

その時、康介の声が聞こえた。

「康介…！」

ウォーズspの姿のままだったが確かに康介に戻っていた。

「許さん…お前たちは、俺の手で必ず…！」

その時、蒼の氷河が光司の体に張り付き始めた。

それらは、光司を異形の怪物へと姿を変えた。

「必ず殺す。」

「一美、まだ行けるか？」

「もちろんよ、康介！」

二人は剣を構えた。

「私たちの協力プレイにシビレなさい！」

「うおおおおお!!!」

怪物は、氷を纏った槍を二人に向けて突き出した。

「私に任せて。」

氷槍は、前へ出たエレクスと激突、エレクスは怪物の動きを止めた。

「今よ！」

「full open!」「WAR—Z slash!」

「了解！」

ウォーズの剣が、怪物の体に突き刺さる。

「ウグッ。」

怪物は地面に膝を落とした。

「お前の運命は、俺達の手の上だ！」

「WAR—Z drop SP!」

「Prism ERE—X lightning!」

二人の閃光のような蹴りは、光司の体を貫いた。

「ごめん、一美。色々迷惑もかけたな。」

戦いが終わった後、康介は、一美に頭を下げた。

「…許さない。」

「…。」

「許してほしいなら、これからは、私と一緒にいなさい。」

康介はため息をついた

「わがままなやつだな、お前は。」

康介は笑っていった。

「清宮君、君のおかげで康介に暴走停止剤を打てたよ。」

「博士、そろそろ俺達も。」

「そうだな、どう接触するかは、君に任せる。」

「承知しました。」

第19話 間章 新たな挑戦者

戻ってくる者が居なくなつた財団の構成員達の拠点に、新たな人物達がやってきた。

「いやー、案外短かつたな。アイツらの天下。」

最初に話したのは、黒髪で根暗そうな男だ。彼は能天気そうな声で言った。

「あの2人は、どちらも弱い。悪道は、弱さを受け入れ、前へ進もうとしない。絶王は、弱さを受け入れず、ただ鍛錬しただけ。そんな奴らが天下など取れるわけがない。必要なのは、我々のような、完璧かつ、臨機応変に変えられる者…」

その隣にいるのは、茶髪でロングの女。彼女は、早苗が残した翠と紅のキーを手にとった。

「悪道、ちゃんと役目は終わらせていた見たいね。私達のキーが完成している。」

「へえ、俺は翠がいいぜ。俺の好みだ。」

「そんなことは聞いていない。」

そう女は言うど、翠のキーを渡した。

「やはり、互いに偽りの姿だと違和感大有りね…豪災。」

女は男の名を言った。

「俺はそんなことないぜ。誰とでも違和感なく話せるぜ。なんならこいつの真似もできるし。『俺に構うな。』なんつって。」

男は、乗っ取っている男の声を一瞬真似てみせた。

女はふふつと笑った。

「あいも変わらさず面白い男ね。貴方は。普通の男と女なら惚れていただろうね。」

男は意外そうな顔をして彼女の顔を見た。

「へえ、奇遇だね。俺もさ。」

「…冗談よ。」

彼女は、拠点の窓を開けた。そこには綺麗な月が浮かんでいた。「私はいずれ財団を継ぐ者、仮面ライダー怪駕。これより、作戦を開始する。」

その眼差しは、鋭いものだった。

「本当、お前さんは名乗るの好きだね。」

「悪い？」

「いいえ。そういうカッコつけるの、俺は好きだぜ。」

「別にカッコつけてる訳じゃ…」

女と男は、再び、窓の外を見た。

風が窓から吹いてくる。その一瞬で2人の姿は仮面ライダーへと変わった。

1人は、2つの剣を持つ紫色の仮面ライダー、シキブを討ったライダーだ。

1人は、風のような姿をしている青の仮面ライダー。

月光が2人を照らす。その影にはその姿とは違うライダーの影が2つある。

2人が見据えているのは、未来。財団の頂点に立ち、全てを司る存在になる。その為にこの世界での実験を成功させるという未来が。

「私の霸道か、貴方の道、どちらが未来になるのかしらね。」

「そうだな。悪いが、こう見えても俺は道を譲るつもりはないぜ、嬢さん。」

「それはこちらの台詞よ。私が未来を掴む。」

彼女達は、地平線に沈む月を見ながら、決意を新たにした。自分が全てを手に入れると…

第20話 間章 兄

「兄さん!!」

幼い一美が俺の名を呼んだ。彼女は笑顔で俺に抱きついた。

「一美!お前は可愛いな…」

俺は彼女を抱きしめ、頭を撫でた。これでもかと言うぐらい。

俺にとって一美は宝物同然。命をかけて守りたい。そう思っていた。

俺は誰がどう見ても幸せだった。父親、母親、そして妹に愛されて。俺は生まれてよかった。

本当に…

あの時、全てが終わりを告げた。

崩れる建物、下敷きになる人。全てがこの世のものとは思えなかった。街が地球から消えた。科学実験都市アトランティス、まさに名前の通り消失してしまったその事件。俺達兄妹はそこにいた。

その時は、俺と一美の2人で家に留守番していた。その時、突然揺れが起きた。これはまずいと思った俺は、一美の手を握った。

俺は一美を連れて逃げた。だけど、知らず知らずのうちに瓦礫に挟まれ、身動きが取れなくなっていた。

「兄さん!!」

その時、一美の上にガシャンと看板が崩れ落ちてきた。

俺が近づく前に、一美の姿は看板の下に消えた。

「一美!!!」

俺は泣き叫びながら看板を退かそうとした。しかし、小学校中学年ぐらいの力では全く動かなかった。

「絶対に助け出す!」

その時、看板がふわっと持ち上がった。

そこにいたのは、漆黒の戦士。青色の目、鋭く伸びた触覚、左胸の特徴的なライン、まるで仮面ライダーだと、俺は思った。

「大丈夫か？」

漆黒の戦士は、俺に向けて言った。

しかし、それを無視した俺は、下敷きになっていた一美に駆け寄った。

一美の身体を揺すり、起こそうとした。だが、そこに息はなかった。泣いた。泣き叫び、目の下が腫れている。

帰らぬ者の名を叫びながら…

「ここには危険だ。逃げるぞ。」

その戦士は生き絶えた一美と俺を担ぎ、急いでその場を後にした。

「…ん？朝か…」

俺は寝ていたのか。いつ振りだろうか、あの時の夢を見たのは。

俺の顔には朝日が降り注いでいた。

「兄さん、起きた？」

そこには、一美がいた。すっかりと大人に成長した一美が。

「おはよう…一美。ありがとう…俺に生きること許してくれて。」

彼が、幸せを取り戻すにはまだこの先、未来の話。

彼はその名の通り道を…未来を創り出す仮面ライダー、ローディ。彼とウォーズ、エレクスが交わる時、全ての謎が紐解かれ、歯車が動き出す。

その時は、きっと漆黒のウォーズも姿を現すだろう。

「俺の名は仮面ライダーローディ。失われしYの名を持ち、未来を創

り変える者。」

「R e m a k e t h e f u t u r e ! 「未来を創り変える!」仮
面ライダーローディ!!」

第※章 歩み寄る、2人

記憶1 別に、気にしてないよ

「山田康介！」

俺の名が呼ばれた。

厳粛な雰囲気のある会場に俺の返事が響く。

その日の空は、花曇りだった。太陽の光は、弱く儂いものに見えた。ただ、弱く儂くても手に入りたい。そう感じた入学式。

その日の帰り、母さんが、学校近くのコンビニに車を止めて待っていた。

その車の助手席の窓をノックすると、母さんはドアのロックを解除し、俺を招き入れた。

「ごめんなさい、今日行かなくて。」

それが第一声だった。

「別に、気にしてないよ。」

俺は、そう返した。

ドアを閉め、シートベルトを装着するのを確認すると、車はゆっくりと走り出した。

ふと、窓の外を見ると、皆、笑顔で家族と接していた。それを一瞬羨ましいと思ってしまう。

「学校、馴染めそう？」

母さんは徐に聞く。

「…多分。」

正直、自信がない。いくら同じクラスに知り合いが居ても、そう

思ってしまう。

「…そっか。」

車は、桜並木を通り過ぎていく。

俺が再び外を見ると、俺と同じ学校の制服を着た女の子が、1人歩く姿がこの目ではつきりと映った。

女の子は、しっかりと手入れされた長髪で綺麗な肌色をしていた。だが、それなのに暗く感じた。

俺は彼女と一瞬目が合ったような気がした。

しかし、それよりも早く車は進んで行った。

翌日から早速授業があった。とは言っても、学生としての心構えだとか、生活の仕方、授業に必要なものの確認などほとんど楽なものばかり。非常に退屈だったが、昼になる前に一つある事に気がついた。何かと言うと、昨日、桜並木で見かけた彼女が同じクラスにいるのだ。正直、全く記憶になかった。いくら昨日入学して、初めて会ったとはいえ、あのような雰囲気の人に気がつかないわけがない。

まあ、だからと言って、声を掛けようとは思わなかった。というより、掛けられなかった。

「山田、飯食おうぜ。」

1人の少年が俺の目の前に椅子を置いて弁当を広げた。

「ああ、鮫島か。分かった。」

鮫島拓真、この学校に来てから最初に出来た話し相手…というか、今は彼しかない…

鮫島とは、入学式前に少し世間話をした程度だ。その後、再び顔を合わせた時は同じクラスの人間だった…というだけだ。

俺も弁当を広げた。中身はおにぎり3つとたくあんと唐揚げ。いつもと同じだ。

「そんな簡素なもので午後持つのか？」

鮫島は不思議そうに聞く。彼の弁当は2段弁当で1段目には白米がびっしりと、2段目には色とりどりのおかずが隙間なく敷き詰められていた。

「これで充分。というか、これ以上腹に入らない。」

俺はふと彼女の席の方を見た。しかし、そこに彼女の姿はない。周りを見渡してもどこにも居なかった。

「どうした？」

「ん、なんでもない。」

俺は、おにぎりを一つ手に取った。

放課後、俺は筆箱をしまい、帰る準備をしようとした。

「康介！」

その時、後ろから女の声が俺を呼んだ。

「恵理、なんだ？」

後ろにいたのは虎山恵理、小学校の時から同級生だ。同じクラスだ。更にその後ろには気弱そうな男がいた。名前は確か、足立レイと言ったな。もう仲良くなっているのか。

「いや、大丈夫かなあって。康介、積極的に人と関わらないからさ、あの時と同じように孤立してないかなあって。」

あの時…俺が思い出したくない事。独りで…怖かった時。

「…もう、あの時の俺とは違う。別に、話し相手ぐらいはいる。心配しなくていい。」

「そう…ならよかった。」

恵理は、その可愛らしい顔に笑みを浮かべた。

「じゃあ、私、この後学級委員長としての仕事があつて、まだ残らなきゃいけないから、先帰ってていいよ。」

「分かりました。学級委員長さん、お仕事頑張ってくださいね。」

俺はそう彼女の肩を軽く叩いた。

俺にとって恵理は、ありのままの自分を出せる人だ。

何か大きな理由があるわけじゃない。ただ、一緒にいて楽だから。彼女は、表裏のない人間だと、俺は思う。彼女の全てを見ているわけじゃないから本当にそうなのかはわからないけど。

俺は教室を後にした。

廊下には沢山の生徒が早速作った友人と並んでお喋りをしていた。その森を俺は掻い潜るように抜けていく。

俺にとって、人混みは、夜の森と同じだ。入るのを戸惑うくらい嫌いだ。喋り声や笑い声が、自分に対して向けられているのではと思っ
てしまい怖くなる。俺が人と積極的に関わらないのもそれが原因だ。
相手は俺のことを蔑んでいるのでは…俺のことを『怪物の子供』と
思っているのでは、そう錯覚してしまう。もちろん、そんな事は一切
ないだろうけど、はっきりと言えるわけでもない、自信がない。

俺が下駄箱に着くと、丁度暗い感じの女が丁度外靴を出したところ
だった。

俺も下駄箱から靴を取り出そうとした時、たまたま目が遭ってし
まった。

どうしよう…そう思った。とりあえず、俺は軽く会釈を試みた。

しかし、彼女は、何か怯えるように無視して去ってしまった。

「はあ…俺、初日で早速嫌われているのか…」

そう独り言を呟き、靴を取り出した。

ふと、彼女の下駄箱が見えた。そこには彼女の名前が書かれた名札
があった。そこにあった名前は「清宮一美」だった。

それから一美とは特に進展はなく気がつけば4月も終わりに近づ
いていた。ただ、彼女は、身体が弱いのか、1週間に1日2日ぐらい
欠席、早退をしてしまう。

その日も彼女の姿は学校になかった。明日からゴールデンウィークだからか、皆浮かれていた。

今日も何事もなく過ぎ、帰ろうとしたその時、恵理に呼び止められた。

「康介、ちよつといい?」

「ああ、なに?」

「あのさ、康介と会わせたい人が居るんだけど、会ってくれる?」

意外な頼み事だった。今までこんな事は一度もなかった。

「いいけど、誰?」

俺は聞いた。率直に誰か気になった。一体誰なのだろう。

恵理は会えば分かるといい、自転車で俺と一緒に学校を出た。

学校から程近いところ、あの桜並木沿いにある一つの店に着いた。

店名は『ベーカリー清宮』

その名前で、俺はなんとなく誰か分かった。

その店に入ると恵理はカウンターにいた40代くらいの女の人の声をかけた。

その女の人は、恵理と俺を家の中に招き入れた。

「もう、誰か分かったよね。」

恵理が聞く。

「ああ、同じクラスの清宮一美、だろ?」

「うん。」

恵理は、家の階段を登り、3階まで登った。その間、俺に事情を説明した。

「実は清宮さん、入学以前に康介に会ったことあるかも知れないって、言ってたの。」

「俺に?」

俺と一美が?そんなわけないだろ。

「人違いじゃないのか？」

「私には分からない。とにかく、会ってみて欲しいの。」

「…分かった。」

気がつけば、彼女の部屋の前に立っていた。

「清宮さん、恵理だよ。」

彼女はノックした。すると、扉がゆつくりと開けられた。

「清宮さん、今日も会いにきたよ。後、康介も一緒だよ。」

俺はあの時と同じように軽く会釈した。

彼女は俺達を部屋へ招き入れた。

彼女の部屋は、非常にシンプルだった。白い壁に、ピンク色のカーテンが敷いてあるベット、小さなサイズのテレビが一台、テレビ台の中にはゲーム機らしきものが2、3見えた。窓から朗らかな日差しが差し込んでいた。

「とりあえず、座って。」

それが俺が覚えている限りでは初めて聞く彼女の声だ。

俺と恵理は、ベージュ色のカーペットの上に座った。

「清宮さん、着いて早々あれだけど、トイレ借りてもいい？」

「うん、いいよ。場所は分かるよね？」

彼女の声は、綺麗だった。けど、元気な声ではなかった。

恵理は一旦席を外した。

しばらく沈黙が流れた。

何を話すべきか、そもそも男女2人きりなんて恵理としか経験のない自分からしたらかなり緊張する。

そう考えていると、彼女は口を開いた。

「その…この前はごめんなさい。」

この前、恐らくあの下駄箱での事だろう。彼女は続けて口を開く。「別に、山田君の事が嫌いとか、そういうわけじゃなくて…ただ、怖くて…」

「その、私、人と目を合わせたり、あいさつしたりするのが苦手で…だから…とにかく、ごめんなさい。」

彼女は震える声で言った。

「…そうなんだ。じゃあ、俺がなんかした訳じゃないんだね。」
彼女はうんと頷いた。

「いや、俺何か気に触る事してしまったかな…って思ってた。清宮さんの思いを聞けてよかった。」

俺はしばらく間を置くと、聞きたかったことを切り出した。

「その、恵理から聞いたんだけど、清宮さん、俺と前に会った事あるって言ってみたんだけど…」

俺が言い切る前に彼女の口が開いた。

「あっ…その事なんですけど…」

俺は黙って彼女をみた。

「多分、勘違いです…その、山田君と同じような雰囲気のおじさんと子供の頃会った事があって…でも、苗字が違うから親族でもないだろうし…」

「そうなんだ。」

その時、恵理が部屋に入ってきた。

それから、恵理がする世間話を俺はただ聞いてるだけだった。一美も、正直退屈そうにしていた。

帰り間際、恵理は、「学校で待ってるね」と言った。

俺も「今日はありがとう。」といい、部屋を後にした。

記憶2 俺、応援するよ

気がつけば、ゴールデンウィークも終わり、高校生活にもだいぶ慣れてきた。

友達…と呼べる人は少ないが、話せる相手は沢山いる。最初はイロモノが多いと思っていたが、いざ話すと面白い奴が多い。

まあ、そんな事は正直どうでもいい。

5月になつてから、とうとう一美は学校に来なくなった。一応保健室に登校する事はあるらしいが、少なくとも教室には一切来ていない。

その日も、いつもと同じ日だった。

「なあ山田、頼むよ…ノート写させてくれ！」

俺の前の席の男、南条翔が俺を必死に引き止めようとしている。

「そんなもの、授業を寝ている方が悪い。」

俺は、目を合わせようともせず会話をした。

「そんなこと言わずに…なんか奢るから！」

「奢ってもらうものはない。」

「山田君、見せてあげれば？」

自分の隣の席に座る女子、西園寺未叶が貸すように言う。

「そうだ！西園寺さん、俺にノートを…」

翔は標的を未叶に変えた。

「南条君、山田君に見せてもらってね。」

未叶は満遍の笑みで翔に言った。

「書いていない自分が悪いのよ。」

未叶の後ろにいた八代忍がボソリと言い残して去った。

「は、はい。そう言うわけで…」

「さようなら。」

俺はその隙を見て教室を後にした。

「うあーちよつとー！」

南条が何か叫ぶ声が聞こえたが、それを他所に下駄箱へ急いだ。

すると、前から恵理がやってきた。副委員長の北川光司も一緒だった。

「あつー！丁度いいや。康介！頼み事頼んでもいい？」

恵理が俺に話しかけた。

「虎山、部外者に仕事を手伝わせるなんて…」

「別に、人を頼ってもいいでしょ。現に私達仕事に追われてるんだから。」

俺は足を止め、彼女を見た。

「で、何して欲しいんだ？言っておくが書類作業はお断りだ。」

「そんなことしないよ。」

恵理は、一つの封筒を俺に渡した。

「これを清宮さんに届けて欲しいの。」

中身はおそらく今日配られた書類だろう。

「そんな事を彼に任せていいのか？」

光司はそう恵理に厳しい声で言う。

「…まあ、それぐらいならいいけど。」

俺は、そう答え、鞆にしまった。

「ありがとう、康介。」

そう言うのと二人は後にした。

「はあ…人使いの荒い学級委員長さんだこと。」

俺はそう呟きその場を後にした。

俺は、自転車に乗り、校門を後にした。

偶然にも俺の登下校の道に彼女の家がある。俺はいつも通りの道を走る。行きはきつい上り坂だが、帰りには緩やかな下り坂を通り抜けると、今は緑の葉をつけている桜並木に差し掛かる。

その通りに彼女の家がある。

俺は彼女の家の駐車場に邪魔にならないように自転車を止め、一階の店から入った。

カウンターには、前恵理が話していた人と同じ人が居た。
「どうも、」

俺はその人に声をかけた。

「あら、この前恵理さんと来てた男の人。今日はお一人？」

「はい、一美さんに会いに…」

「恵理さんを放っておいて一美ちゃんとデート？」

女の人は冗談を言った。俺は一瞬何か返そうかと思っただ、いい返しが思い浮かばなかった。

「いえ、書類を届けに。」

「…冗談よ、一美ちゃんは部屋にいるよ。」

俺は前と同じように階段を上がり、3階にたどり着いた。

そして、彼女の部屋の扉をノックした。

「清宮さん、山田康介だ。恵理に代わって書類を届けに来た。」

しばらく応答はなかった。代わりに、大きな音が何度も鳴り響いた。

「あの…大丈夫か…？」

俺は扉を開けようとした。

「はい！大丈夫です！」

その時、扉が勢いよく開けられた。彼女の額には大量の汗があった。

「あっああ…」

「とりあえず、中入って。」

彼女は俺の中に入れた。

そして、前と同じ場所に座った。

「あつ、これ今日渡しにきた書類。」

俺は靴から封筒を取り出し、彼女に渡した。

「ありがとう…」

彼女はその封筒をデスクの上に置いた。

そこに、幼い少女と彼女より年上の少年、そして大人の男女が立っている写真がある事に気がついた。

俺はその写真に写っていた男に見覚えがあった。

「その写真…私の家族。」

俺の思考に突然一美の声が入ってきた。

「家族…か。」

その時、ふと彼女の寂しさが何か分かった気がする。

「少し…私の話、聞いてくれる?」

彼女は俺に視線を向けた。

それは、何かを探すような目だった。

「…分かった。聞くよ。」

「私の家族…7年前に私残して死んだの。」

彼女は俺の顔を伺った。俺は、特に顔を変えなかった。というより、変えたら本音を聞けないと思ったからだ。何故そう思ったのか、分からない…

「みんな、事故に巻き込まれて…私は、一人取り残されて…正直、どうすればいいのか…私には分からない。みんなを残して一人生きていくなんて、許されるのか…自分が生きている事は罪なんじゃないかって。」

「…そんな事…ないんじゃないか。」

俺はここで口を開いた。

「何で全てを奪われた人が、罪を背負わなきゃいけないんだ?」

「えっ?」

彼女は顔をあげた。

「…俺がもし、その家族なら君には生きて欲しいと願うよ…」

彼女はしばらく考え込んでいた。

「…ごめん、長居しすぎた。それじゃ。」

「あっ、ちよっ」

彼女は俺を引き止めようとしたがそれよりも早く俺は部屋を後にした。

翌日、俺が学校に着くと、教室がいつもよりざわついていた。何かと思い覗いてみると、そこには一美の姿があった。

彼女は俺の姿に気がつくと、少し笑みを浮かべた。

俺は放課後、彼女に話しかけた。

「清宮さん…」

「山田君…昨日はありがとう。話したら、なんか楽になった。私、これから頑張って学校行けるよう…頑張るよ。」

俺は笑った。

「そっか、俺、応援するよ。君の事。」

彼女も笑った。

「ありがとう。」

その時、彼女が初めて心の底から笑ったような気がする。

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

俺が家に帰ると、母さんがリビングから言った。
俺は2階の部屋に入った。

鞆を机の上に置き、ベッドに跨った。

ふと棚を見るとその棚の下に紙切れが落ちているのに気がついた。
「なんだ？」

俺はそれを拾った。

そこには父さんと幼い一美とその親らしき人物が写っていた。
そこに驚愕のものと一緒に…

「一美と…その父親？」

写真の裏を見ると『黒夜志呉、一美親子と』

「黒夜志呉…？」

俺はふとスマホで検索を試してみた。

すると、そこに経歴がでた。

そこには『科学実験都市アトランティスで総督を務めた、アトラン
ティス消失と同時に死亡』と記されていた。

「嘘…だろ…」

スマホが手から滑り落ちた。その手はとても震えていた。

「俺の…父さんが…一美の…家族を…」

俺は震えで立てなくなり、ベッドの上に倒れた。

「ぐっ…俺の父さんが…」

記憶3 だつて…私達友達でしょ？

「あつ…雨…」

私が教室から窓の外を見ると、雨が降り始めた。

「そういえば、もう梅雨の季節だからね…」

窓際にもたれ掛かりながら、茶髪ロングの女、不知火香が言った。

「そういえばイチミン、学校近くのゲーセンに新しいマシンが導入されたつて知ってるか？」

彼女は私をみた。ちなみに、何故イチミンかと言うと、彼女が初めて私を呼んだ時、『イチミ』と呼んだからだ…いくら私でもそんな読み方はしない…

「そうなんだ…どんなの？」

私はあの日から1ヶ月、全く休んでいない。なんというか、気が楽になったというか、背負いこんでいたものが軽くなったというか…。それに合わせて長く伸びた髪を短く切り、ショートヘアにした。だが、それと同時に彼がどんどん遠くに感じた。

彼―山田康介とはあれ以降話さなくなった。

『俺、応援するよ。』

そう言ってくれた日の翌日から、避けられている…そんな気がした。

「おーい、イチミン。意識がバーチャルに飛んだか？」

私が思考から現世に戻ると、香が私の顔をマジマジと見ていた。

「バーチャルって、VRじゃないんだからー」

それから更に数週間後、期末テスト最終日放課後…

「イチミン、今日放課後ゲーセン行くか？」

「うん、行こうか、カオリン。でもその前に昼飯食べよ？」

「そだな…マックにする？」

マック…『マック・ドーナツトル・バーガー』の略、決してマク○ナル○ではない。

「うーん、昨日も食べたしな…他のものがないな…」

私はふと康介の席を見た。しかし、そこにはもう彼の姿はなかった…

また聞けなかった…そう思った。

「ねえハヤナエ！なんか美味しい店知らない？」

香は机に座って帰る支度をしている東雲早苗に言った。

「私をハヤナエなんて呼ぶな！早苗！さ・な・え！」

早苗は怒りの形相でこちらを見た。

「そうかつかしなさんなって、ハヤナエ！」

香は早苗の肩に両手をついた。

「だ…か…ら！」

「早苗さん…怒らない怒らない…」

私は早苗を宥めたが、彼女は聞く耳持たずだった。

結局私達はマックで昼食を取る事にした。

「何で私まで…」

早苗は不機嫌そうだったが、香はそんな事気にせずダブルバーガーを頬張っていた。

「ハヤナエも今日ゲーセン行くだろ？」

「行きたいのは山々今月出るソフトの為に貯金しなきゃいけないのにゲーセンなんて行けるわけないじゃん。」

「着いてくるだけでいいから」

香は早苗に抱きついた。

早苗はまた怒ると思ったが、フフツと笑った。

「しようがないな…」

私は、この瞬間に幸せを感じた。家族が居なくても…人は幸せになれると…誰かが側に居てくれるだけで、見方が変わるって…

「どうした？そんな笑って？」

「そんなに可笑しい？」

2人が私を見ていた。どうやら無意識のうちに笑っていたみたいだ。

「そんな事ないよ、ただ、こんな私にも友達が居て、幸せだなあって。」

「なんだ、そんなことか。私達、前から友達だろ？」

香が微笑んだ。

「まあ、人の名前を覚えられない人は置いといて、私の事を友達だと思ってもらえるのは嬉しいね。」

早苗は香をチラツと見ながら言った。

「それは心外だな…」

そこから更に3週間経過し、とうとう終業式当日になってしまった。

その日も、彼は足早に帰ろうとしていた。

「イチミン、今日も…」

「カオリン、先行つてて。ちよつと用事があるから。」

「あつ、ああ…分かった。」

香は拍子抜けした顔をしていたが、そんな事を気にせず、康介の席の前に立った。

「ねえ…ちよつといい？」

康介は、顔を上げた。

しかし、すぐにその顔を背け、走って教室を出た。

「あつ、ちよつと！」

私もすぐさま追いかけてようと教室を出た。

何で…寄ってくるんだよ…

せつかく…避けているのに。

俺は、彼女に最低な事をした…だから…近くにいちや行けないんだ！

俺は、自転車に跨り、急発進した。

その様子を一美が見ている事に気がついたが、そんな事どうでもよかった。

ただひたすら走った。とにかく離れようと…近づかれないように…

気がついたら、家に着いていた。俺はすぐさま家の中に入り、部屋のカーテンを閉めた。

「はあ…はあ…。逃げられた…」

私は、また逃してしまった…

「どうしたの、一美？」

私が息切れしているのを見た恵理が寄ってきた。

「そうなんだ…」

私は恵理ととりあえず食事を取る事にした。

近くの喫茶店に入り、対面で座った。

私は今までの康介との事を話した。

「私、嫌われるような事、したかな…」

「…ねえ、貴女のご家族が亡くなられた理由ってなんなの？」

恵理は、何かピンと来たのか、私に聞いてきた。

「…アトランティス消失の時に…」

私はそう口になると、恵理は「そう言うことが…」と言った。

「どう言うこと？」

恵理は、顔を近づけた。

「あまり大きな声では話せないこと。他言無用で。」

恵理は一瞬躊躇おうとした。が、覚悟を決め、私の耳に小さな声で言った。

「康介は…そのアトランティス消失に大きく関わったとされる科学者の子どもなのよ。」

「えっ？」

驚きだった…そんな事、初めて聞いた…

「白夜総三、それが父親の名前。当時ニュースでも大きく取り上げられた。彼がやったなんて決まってるのに、報道陣はあたかも彼の父が全てやったかのように報道、それが彼を苦しめたのよ。」

白夜総三、私も聞き覚えがあった。確か、家族の葬式の時も、「全て白夜総三のせいだ」と言っている人が居たような気がする。

「もしかしたら、貴女の家族がアトランティス消失で死んだ事を何かで察して、一緒に居られなくなったのかもしれない…」

「でも…それは山田君の責任じゃないじゃん！なんで…」

『蛙の子は蛙』その言葉通り、康介も父親と同じようになるのではと周りの誰しもが思ったから…だから、寄ってたかって康介を陥れた。そのせいで、彼は責任は全て自分にある、そう思ったんだと思う。」

そんな…私がああの話したから…康介を苦しめる事に…

「私だったら…最低ね。人のこと、知らないのに自分の事ベラベラ喋って傷つけるなんて…」

私は下を向いた。

「そんな事ないよ…」

恵理はそう口を開いた。

「康介も、一美も悪くない。悪いのは、彼を拒絶した現実よ。間違いかもしれない事を本当の事にすり替え、人を騙し傷つける世の中が…」

「…そうかもしれない…」

「今、貴女がするべきは誤解を解く事、そうしないと、康介はこのまま苦しんだまま過ぎす事になる…」

恵理は私の目を見て言った。

「もし、康介の事を想っているなら…側に居たいって想ったなら、行くべきよ!」

恵理は私の心に訴えるように言った。

「…分かった。やってみるよ。」

私は立ち上がり、店を出た。そして彼の家がある方面へ足を進めた。

俺はふと、カーテン越しに外を見た。

すると、一美が俺の家の目の前にいる事に気がついた。

「なんでいるんだよ!」

それからすぐインターホンの音が鳴った。

俺は玄関に近づいた。

外から一美の声が聞こえた。

「康介…お願い、少しだけでいいから、話を聞いて欲しいの。だから開けて!」

俺は正直放っておこうと思った。が、身体が勝手に動き、扉の鍵を開けてしまった。

それと同時に扉が勢いよく開かれた。

「よかった…居てくれて。」

一美は安堵の表情を浮かべた。

「なんで…なんで来たんだよ!」

「だって…私達友達でしょ?」

友達…俺とお前では友達になんてならない。

「俺はなれない…お前の…大切な家族を奪った…そんな奴の子どもと馴れ合おうとしないでくれ!!」

俺は自分の部屋に戻ろうとした。

しかし、それを一美は止めた。

「私は…そんな事思っていない！私は、親がどうだったから子ども同じだなんて思わない！親同士で何かあって交わらないとしても、子どもまでそれが一緒だなんて思わない!!」

一美は俺の手を握った。

「離せ!!」

俺は必死に振り払おうとした。

「絶対に離さない!」

「なんで俺に構うんだ!」

「側に居たいと思ったから!一緒に居て欲しいって思ったから!!」

一美は強く手を握りしめた。

「康介のお父さんのことなんかどうでもいい!ただ、側に居て欲しいのよ!!」

「でも、その運命は変えられない!」

「過去の運命は変えられない…でも、これからの運命は変えられるはず!この手で!」

「一美…」

一美は、俺の顔に近づき、訴えるような顔をしていた。

しばらくすると、一美は突然俺を引き剥がした。

「はっ、ごめん!いつのまに!」

「一美…ありがとう。こんな俺を必要としてくれて。」

「康介…」

一美は、泣きそうな顔で笑った。

俺も正直、泣きそうだった。初めて俺を必要とされた気がして。

「ごめん…心配させて。」

「そんな事ない、こっちこそ…」

「とりあえず、一つ気になったこと聞いていいか？」

「何？」

「さっきの『側に居て欲しい』ってどう解釈すれば良いの？」

一美は先程の事を思い出したのか、顔を赤く染めた。

「そのことは忘れて!!」

記憶4 分かった、約束だ

「よっしゃ!!今年最後の学校終わりだぜ!!」

放課後、そう叫んだのは香だ。彼女は一美の机の上に座っていた。

「イチミン、ハヤナエ!ゲーセン行くぞ!!」

「悪い、私この後用事が…」

一美は、香にそう伝え、先に教室を出た。

「ハヤナエは行くよな?」

「別にいいけど、その前に先生に呼び出しくらってるから、先行つて。」

早苗もそう言って教室を出た。

「はぁ…つまんな。」

香は机の上から降りた。

「お前は退屈しないだろ?隣のクラスに彼氏いるんだろ?名前は確か、神谷昭彦だっけ?」

そう言ったのは鮫島だ。

「別にあんたには関係ないでしょ?それともあれ?嫉妬?」

「さあね、ま、いつでも中指立てる準備はできてる。」

そう言つて彼も教室を後にした。

「こわっ…しようがないか…アツキーに連絡するか。」

同刻、資料室にて

「ありがとう、レイ君。お陰で早く終わらせれたよ。」

恵理とレイは、資料室で整理を終わらせていた。

「ううん。気にしてないよ。それにしても大変だね。一人でこんな作業を…」

「本当そうだよ…光司のやつ…どこに行ったのよ…」

その頃、北川光司は応接室である男に会っていた。

「一体、どのような用件でここに？」

「山田康介について、どこまで情報を入手した？」

「いえ…殆ど何も…」

「はあ…やはり君ではその役目は無理だったか…もういい。お前は下がれ…これからは彼に頼む。」

そう言うのと、後ろから南条翔が姿を見せた。

「お前！」

「そう言うわけだ。まあ、俺に任せてくれよ。」

光司は、半ば追い出される形で応接室を後にした。

そこへ今度は入れ替わるように東雲早苗が入っていった。

「お呼びですか？」

「ああ、ライダーシステムについてだ。」

「それなら、すでに2機完成しております。」

「全部で4機、と言ったな。それを5機に変えてくれないか？」

「はい、でも、データは？」

「そのデータは私が用意する。お前は詮索するな。それともう一つ……」

「なんででしょう？」

「お前、でしゃばりすぎだ。数合わせは数合わせらしく角で大人しくしている。」

「はあ……ようやく学校終わりだ……帰ったら何しようかな……とりあえずエグゼイド1話から見直そうかな……」

その頃、康介は昇降口を後にしようとしていた。

「康介君！」

その時、脳を刺激するような高音で彼を呼ぶ声があった。

「お前は……西本驚花。」

「そそ、名前覚えてくれてたんだ。」

彼女は擦り寄るように康介に近づく。

康介は、それを振り払った。

「やめろ、気持ち悪い。」

「そんな引くことないって、私と遊んでよ。」

今度は上目遣いで彼を見た。

「嫌だね。興味ない女と遊ぶつもりはない。」

「康介！」

その時、一美が現れた。康介は彼女が助け舟に見えた。

「どうしたの？」

「なんでもない。早く帰ろう。」

二人は、すぐさまこの場を離れた。

「へえ、男を知るためにやりたくもない役をやって取り入ろうってか？」

西本の後ろから南条が現れた。

「そうね、やってて恥ずかしい。」

彼女は、先程とは全く違う低い声で返した。

「それを何なりとやってのける…お前役者志望か？」

「そうだったかもね。私はもう覚えていないけど。」

帰り道、康介は自転車を押し、彼女の歩くペースに合わせていた。

「ねえ、明日遊ばない？私、行きたい店あるんだ。」

一美が康介の方を向いて話す。

「だめだ。お前は勉強優先だ。付き合ってやるから、明日は勉強会だ。」

康介は、表情変えずに言う。

「冬休み早々勉強とか萎えるんですけど…」

一美はわざと大きく残念そうな表情をした。

「だったら宿題を早く終わらせる事だな。」

康介は、一美の方を見て、嘲笑うように言った。

「…しようがない、じゃあ、その代わり明日までに宿題終わらせたら、絶対その店付き合っつてね。」

「分かった、約束だ。」

昔の自分なら、こんな事想像できなかつただらう…

俺が、普通の人間と同じように笑ったり、喜んだりする事に…

俺はこの三年でだいぶ変わった気がする。

ただそれは彼女も同じだ。最初はあれだけ暗かつたその背中は、今では俺にとつて輝きをもたらすもののように感じる。

本当はもっと伝えたいことが沢山あった。でも、それも伝えられな
いまま死んでいく…

そうか…俺、死ぬのか…

死ぬのは怖くない…今まで何度もそんな瞬間があつたから…

俺が行くのは天国だろうか…そんなわけないか。沢山のクラスメ
イトをこの手で殺したんだ。俺こそ地獄にすら行けないな…

きっとこの眼は二度と覚めることはない…

永遠の無…

その時、何か見えた気がする…

黒く、だが何色にも瞬くその姿が…

宇宙のように暗く明るいその身体が…

その時、その光が俺を包み込んだ。

第3章 ロード・ノヴァ

第21話 ロスト・ライダー

一台のバイクが森林を爆速していた。

青いボディをしたそのマシンは、赤いテールランプを砂埃のように巻き晒し走っている。

乗っているのは男、ヘルメットをしていて顔は分からないが、身長が高い方であることは容易に分かった。上は青のライダースジャケット、下は黒のレギンスで装飾がなく動きやすい格好をしていた。

「もうすぐか…」

その男が呟いた時、一つの弾丸が、そのマシンを追いかけるように放たれた。

その弾丸はマシンに激突、しかし甲高い音と共に地面に落ちた。

「刺客か…」

彼はバイクを止め、後ろを振り返った。

そこには、黒の仮面ライダーがいた。腰にはボロボロのローブが巻かれ、顔にはパイプの様な物が巻かれている。その狂気な姿を見れば、誰しもが怯える筈だ。

しかし、男はライダースジャケットの前を開け、相手に何かを見せた。

「そのベルト…ようやくお出ましか…」

黒の仮面ライダーは言う。確かに彼のベルトにはウォーズ達が使うαタイプバツクルでも、悪道達が使うαタイプのものでもない新たな

なベルトが巻かれていた。

その見た目は青と金で構成されており、左側がロッカーのような形になっていた。

「お初にお目にかかれて光栄です…ロストーYさん。」

「お前…幹部の一人か…」

男は初めて口を開いた。その声は若々しいが厳しくも聞こえる声だ。相手を威嚇しているような。

「よくご存知で…さ、あなたの実力…見せてもらおうか。」

黒の仮面ライダーは、両手の銃を構えた。

「悪いが、お前に構う暇はない。本当なら今ここで倒してやりたいが、こっちにもやる事がある、1時間待っている。またここにくる。」

そう言い残すと男は再びバイクで走り出した。

「え、あ、ちよーなんだよ…逃げ足早いな…まあ、待ってやるか…」

そう言うのと黒の仮面ライダーはベルトからキーを引き抜き変身を解いた。

「康介、遅いな…」

その頃、拠点では一美が玄関の扉の修復をしていた。

この拠点、前回の戦闘で滅茶苦茶になってしまい到底住めるような環境ではなかった。そのため康介は、必要な材料の調達の為拠点を開けていた。

その時、バイクの音が森の方から鳴り響いた。

「康介！」

一美はそのバイクが止まっているであろう方へ走った。

「お帰り！どう、だった…？」

そこに止まっていたのは青いバイクだった。乗っているのは康介とは別人の男で一美は困惑していた。

「あのーどちら様？」

「実の兄にどちら様とは…残念だ。」

「は？」

男は、ヘルメットを取った。そこには、ほんのりと一美に顔が似ている凛々しい男の顔があった。

一美はその顔でピンとききたらしく、顔が驚きのものに変わっていた。

「もしかして…」

「そう、そのもしかして…」

「…兄さん…？」

「覚えていてくれたのか…一美。」

男はバイクから降り、彼女の頭の上に手をポンと優しく置いた。

「本当に…？」

「ああ、本当さ。ごめん、今まで会えなくて。」

「なんで…死んだ筈じゃ…」

一美は半泣きだった。

「とりあえず、今日は話があつて来たんだ。」

彼は優しい声で言った。

一美は、扉すらない家に彼を入れた。

「玄関、直していたのか？」

「うん、前の戦いでボロボロになったからね…」

男は、懐かしそうな顔をしていた。

「懐かしの我が家が…」

彼女に聞こえない程度にそう言った。

「それで、話って？」

リビングで彼女は彼の目を見た。

「…ここまで生き残った二人には、真実を知る必要がある。俺について来てくれないか？」

男は真剣な声で話す。

「二人って…康介も？」

「ああ。まあ、その彼は居ないようだけどな。」

同刻、森林では先程の男が大人しく待っていた。

「後10分、果たしてくるかな。夜逃げされたりしてな。」

大きな声で独り言を喋っている。

すると、木々の合間から何かが動く音がした。

「よお、本当に戻って来たんだな。」

「なんの話だ？」

そこにいたのは、康介だった。

「ん？康介じゃないか。久しぶりだな、分かるか？俺のこと？」

男は見せびらかすように立った。

「見た目は神谷昭彦だな。でも、声や喋り方は明らかに違うな。」

康介はそう言った。確かに、真面目そうな見た目からは有り得ないような軽口の多さだ。

「ご明察、まあ、あんたに隠し事しても意味ないか、本当の名前は」

「南条翔、無駄口しか脳にない馬鹿だ。」

康介は冷静な口調で遮った。

「はあ…相変わらず俺には冷たいね。まあ、せっかくだし付き合つてよ。退屈凌ぎにさ。」

そう言うと神谷はサブイブバックルを装着した。

「変身。」

そう言いながら黒紫のキーを構えた。

そしてベルトに装填、開いた。

「Dominate key!」

「Open!」
「Darkness sword! KAMEN RI
DER DUALITY!」

すると、先程とは違う、黒の姿へと変わった。姿から狂気さは消え、代わりに騎士のような姿へと変わる。籠手、アーマー、マント、その全てが黒に染まっている、一言で表すなら、『影の戦士』。

ドウアリティは2本のサブイブソードガンをソードモードにし構

えた。

「その二刀流…まさか西園寺をやったのも…」

康介の脳裏には、彼女の顔と、その時の話を辛そうにする八代忍の姿が湧き上がった。

「そういうええそうだったかもな…」

彼はそう茶化すような声で言った。

「…やはり、俺はお前の事が嫌いみたいだな…見ていだけで気分悪い。神谷の体から出て行ってもらおうぞ。変身！」

康介もキーをベルトに装填、回転させた。

「Open!」
「Masked warrior! KAMEN RI
DER WAR-Z!」

二人は、互いに睨み合う。

少しずつ距離を縮め、剣を構える。

少しの静寂が続く。

先に動いたのはウォーズだ。剣をドウアリティに振りかざす。

ドウアリティはそれを左側の剣で押さえ、右から攻撃を仕掛ける。

ウォーズは、それを防ぐ為に、新たなキーをベルトに装填する。

「Fang key!」

右からやってくる刃を手刀で抑える。

ウォーズは更に右足で蹴り上げる。

ドウアリティは、その攻撃で少しノックバックした。

「やるね、中々面白い。」

ドウアリティは首を鳴らす。

「こつちも燃えてくるよ。」

ドウアリティはそう言うと、2本のキーをそれぞれ剣に装填した。

「Dominate key!」
「Death key…」

「full open!」
「Dominate slash!」
D

death slash!」

同時に必殺技を発動させ、漆黒の剣撃をウオーズ向け放つ。

ウオーズはそれを抑えようと、剣を前に出す。

しかし、ドウアリティの剣撃は通常の2倍、押し切られるのも時間の問題、そう思われた。

「Grade up!」 「Prism lightning star!」

その時、青の剣が攻撃を弾き飛ばした。

「一美!」

「大丈夫? 康介。」

そこにいたのはサファイアエレクスだった。

「ほう: エレクスか。」

「待たせたな。」

ドウアリティの後ろから現れたのは先程の一美の兄だった。

「時間通りに来たぞ。」

「へえ、逃げずに来るとは、関心関心。」

男は、新たなベルトを巻いた。先程彼に見せたものだ

「俺の名は仮面ライダーローディ。失われしYの名を持ち、未来を創り変える者。」

そう言うと、青色のキーをベルト左端に装填した。

「ROAD—Y key!」 「set up!」

機械的な待機音と共に左腕を空気を切るように左に動かす。

「変身!」

その左手はベルトのキーへと行く。そして、そのキーを回転させる。

「大展開!」

その音声と共にベルト左側の箱が右に展開、中から彼が変身するライダーの姿が浮かび上がる。

「Remake the future!」 「未来を創り変える!」 「仮面ライダーローディ!!」

その音声と共に、道路のようなパーツが彼の身体に巻きつく。

それが素体を形成する。更に、ベルトからアーマーが召喚され、胸、肩、足、そして頭部へと装着される。胸には大きく『Y』を思わせるようなラインが走り、ボディのカラーが青色に染まる。

ライダーヘルメットののような頭部から金色の複眼が現れる。まさに近未来感のある仮面ライダーの誕生だ。

「あれが…仮面ライダーローディ。」

ドウアリティに限らず、その場にいた3人はその様子に目を奪われていた。

仮面ライダーローディ、ここに爆誕。

第22話 ローディ・エクシード

「大展開！」

「Remake the future!」未来を創り変える!」仮面ライダーローディ!!」

「あれが…仮面ライダーローディ。」

仮面ライダーローディ、ここに爆誕。

「面白くなってきたじゃねーか。」

ドウアリティはそう言うと、ダークホッパーを2体召喚した。

「ウォーズ、エレクス。お前らはこいつらの相手でもしてろ。」

ダークホッパーは指示された声と共に剣を構え二人に斬りかかる。

ドウアリティは改めてローディを見た。

「さあ、その力見せてもらおうか！」

ドウアリティは両手の剣をローディに向けた。

「障害は全て排除する。」

「survive swordgun!」「swordmode!」

彼の手に蒼のサブマシンガンが装備される。

まず先手を打ったのはローディだ。地面を蹴り、ドウアリティの頭上から一太刀。ドウアリティは、左手の剣で受け止め、右手の剣ですぐ様反撃する。

その剣はローディの左肩に迫る。そして、鈍い音と共にその剣が止まる。

「今のは効いただろ？」

そうドウアリティは聞く。だが、ローディは表情一つ変えず、剣を振り、引き剥がす。

「そのぐらいで倒れるほど、このローディは弱くない。全てのスペックが並のライダーより上で尚且つ、最新技術が取り入れられたこの

体。」

ローディは自慢げに言う。

「俺は挑発には乗るタチだ。煽ったことを後悔しな！」

そう言うと、ローディの後ろからいくつもの『道』が現れる。それらは、ドーム状に周りに伸び、二人を包み込むように組み上がる。

「なるほど…専用のフィールドか。よくできて…な！」

ドウアリテイが軽口叩く間にローディは目の前から姿を消した。

「gun—mode！」

ローディは、武器を銃に変える。

「どこ行きやがった？」

ドウアリテイは周りを必死に探す。すると、頭上から数発の銃弾が降り注ぐ。

「俺は上だ。」

ローディは、天井に足をつけ、逆さまに立っていた。

「ほう…やるじゃねーか。」

更に彼は高速道路を走るバイクの如く天井を移動し何十発もの弾丸を撃ち込む。

ドウアリテイは、これらの攻撃で移動を制限され、身動きが取れなくなっていた。

「これがお前の終点だ。」

そう言うと、ローディはキーをもう一度回転させた。

「再展開！」「ROAD—Y exceed！」

ローディは、ドウアリテイに向かい一直線のライダーキックを放つ。

蒼き閃光は、ドウアリテイを貫く。

ローディが後ろを振り返ると、ドウアリテイがホッパーを盾に凌いでいたのが見えた。

「今日はこれでお開きだ。今度会った時は俺も本気で戦おうぜ。」

そう言うのとドウアリテイは、煙幕で姿を消した。

「今度は逃さない。」

ローデイは、ドウアリテイの居た場所を見て言った。

「一美！このまま決めるぞ！」

「分かった！」

一方、ウォーズとエレクスは、ダークホッパー2体を追い詰めていた。

「Re open!」「Gemini drop!」

「Re open!」「Prism EREX lightning!」

エレクスは、手を前にかざし、ダークホッパー2体を光で拘束。

そこへ、分身したウォーズのダブルキックが激突。

ウォーズがダークホッパーから離れたことを確認すると、エレクスは開いている拳を閉じた。

すると、その行動に合わせてダークホッパーを繋いでいた光が爆発し、完全撃破。

「やったな。」

康介はそう呟いた。

「そつちも終わったようだな。」

そこへローデイが現れた。

「さつきはありがとうな。んで、誰？」

ウォーズは、ローデイに向かってそう言った。そんなローデイはじわじわと彼に近づいた。

「ええっと、私の…」

エレクスは兄のことを紹介しようとした。が、それと同時にローデイの拳がウォーズの顔面に突き刺さった。

「いった！何する！」

倒れたウォーズをローデイは掴み上げこう言った。

「お前な！女に力仕事させておいて自分は散歩するとはいい度胸してんな！しかも俺の可愛い可愛い妹にさせるとは…それでも男か！このガキ！」

「ちよつと！兄さん落ち着いて！」

エレクスは引き剥がさそうと、ローデイの肩を持つが、それでもなおローデイはウォーズを掴みグラグラと揺さぶった。ウォーズは状況を飲み込めず硬直している。

「…いい加減に、してよ!!」

エレクスは、サファイアブレードでローデイの背中を勢いよく斬りつけた。

その攻撃でローデイは吹っ飛び、そのまま変身解除してしまう。ウォーズも変身解除し、一美にありがとうと言った。そして、変身を解いた道永に恐る恐る近づいた。

「お前…大丈夫か？」

「ああ、問題ない。気が済んだし、改めて自己紹介だ。俺は黑夜道永。可愛い可愛い一美の兄であり、めちやくちや強い仮面ライダーローデイの変身者だ。」

「ああ…俺は山田康介、仮面ライダーウォーズだ。」

康介は戸惑いながらも軽く自己紹介した。

道永はさつきとは全く違う、落ち着いた青年に戻っていた。

「康介…兄さんはああ見えても普通の優しい人だから…」

一美はそう付け足したが、シスコン且キレやすいなんてどう考えてもやばいだろ、そう喉まで出かかったが口には出さなかった。

「では、改めて、俺に着いてこい。お前達には合わせなきゃならない人がいる。特に…康介。」

道永は話題を変え、康介達を見た。

「俺に…？」

その時、ふと彼は父親の顔が浮かんだ。が、そんなわけないと振り切った。

一美は康介のバイクに乗り、道永が先導するバイクについて行った。

途中、舗装されていない道を通ったが、目的の場所になるにつれ、道が現れた。

「着いた。ここの中に居る。」

彼らが着いたところには、広い駐車場と白く大きな建物があった。看板には、『A—SEEC 科学実験場』と描かれている。

「A—SEEC:Atlantis—Science Experiment City。聞き覚えあるだろ？」

道永は流暢な英語でそれを言った。

「科学実験都市アトランティス：なんでこんな所に？」

康介は不思議そうな顔をした。

一美も康介の日本語訳を聞き、同じ顔をした。

「ここは、元々科学実験都市アトランティスだったからだ。」

「ここが、アトランティス？」

一美は聞き返した。

「アトランティスは、完全に消えた訳ではない。何者かが、ここにいる『博士』の発明を悪用し、アトランティスを異空間へ飛ばしたんだ。その時の衝撃でここにいた人達は全員死んだ。」

道永は重大な事実を簡単に言い流した。

「じゃあ…兄さんも死んだんじゃ…」

一美はそう聞く。一美の記憶では、彼はこの事故に巻き込まれ死んだ事になっている。

「いや、ギリギリのところまで脱出した…仮面ライダーウォーズのお陰で。」

そう言うと、康介の方を見た。一美もそうなの？と聞くような目で

康介を見た。

「いや、記憶にはないぞ。」

「それはそうだ。そのウォーズは私だからな……」

すると、建物の中から新たな人物が現れた。黒い服を上下に身に纏い、腰には黒いサバイブバックルをつけた初老の男だ。

康介は、その男の姿を見ると、驚きのあまり目が大きく見開かれた。

「父さん……！」

「久しいな、康介。」

第23話 ライダー・ビギンズ

「それはそうだ。そのウォーズは私だからな…」

「父さん…!」

「久しいな、康介。」

彼らの前に現れた男―白夜総三は、康介に近づいた。

「なんで…ここに居るんだよ…!」

康介は、総三に言った。

「とりあえず、中に入って話そう。」

総三は康介と一美を招き入れた。

彼が招き入れた場所は、広々としているが、沢山の機材の山で圧迫感を感じる部屋だった。長椅子に座るよう2人は促され、その通りにした。

康介は動揺を隠さずにいた。死んだと思っていた自分の父親が前にいる…殺人鬼かもしれない人が…

「なんで今まで康介に会おうと…誤解を解こうとしなかったんですか？」

口を開いたのは一美だ。今までにないほど真剣な声と眼差しを総三に向けた。

「…怖かったのだよ、私が人前に姿を現したことで更なる誹謗中傷が康介達に飛ぶことが…だが、これだけは確実に言える。この事件は、私1人が責任を負うべきことではないということだ。」

総三には先程のゆったりとした雰囲気はなく、真面目な趣で話し始めた。

「事件が起きた日、一美君の父である黑夜志呉…総督及び幹部がここ
の視察に来ていたんだ。」

2010年：

「志呉、前に話した時空転移装置、まだ完成しそうにない…すまない。」
その日志呉達が見に来たもの…それは時空転移装置。この開発に成功すれば過去、未来、更に別世界に行くことも可能とする機械だ。だが、まだ未完成の為人の目に触れない、安全な所に置いていたのだが、その日は視察団に見せる為、あえて外に出していた。

「ケセラセラだよ、総三。時間はまだ十分にある。今は無理でも、いつか必ずできる。」

容姿は大人だが、どこか子どもらしさのある男、黒夜志呉は落ち込む私に言った。

私と彼は中学時代からの悪友だ。私は偉大な学者になる、彼は世界を変える政治家になりたいという夢に惹かれあい、親交を深めた。

それから私達は大学を出るとそれぞれ夢へと進んだ。

私は、様々な研究室で研究を行なったが中々芽が出ず。殆ど雑務ばかりだった。

一方志呉は、順調に功績を残した。若くして入閣し科学者を発展させようと尽力した。何故かと言うと、はつきり言って私の為いだ。もちろん日本全体の科学力を上げるなど色々あるがね。

その姿をみた私は独立し、自らの研究室を創り上げた。最初は人が集まらなかった。が、着実に成果を伸ばす事で人も集まり始め、功績を認められた。

それもあつてか、遂にあるものの開発がされる事となった。科学実験都市アトランティスだ。志呉はこの総督に任命され、私も主任になった。

アトランティスは、着実に発展し大きな都市となった。

山を切り開き創った科学の大陸はとても壮観なものだった。

私がそこで二つの研究をした。一つは先程も出た時空転移装置。時間を超越する、これが私の小さい頃の夢だったからね。もう一つは、簡単に武装できる鎧と合わせて使える武器だ。

現在

「当時作られた3タイプ、『X』、『Y』、『Z』のデザインだ。」

総三は2人の前に3枚の紙を並べた。

「これ…ウォーズにそっくりだ。」

康介が手に取った『Z』のデザイン、2本のアンテナに左胸のZライン。色は黒だが明らかにウォーズだ。

同じように『X』には王冠のような頭にXを思わせるような胸の形をしたエレクトスのようなものが、『Y』には全体的にスリムで胸にはY字のラインがあるローデイに似たものが書かれている。

「ああ、これら3人は私が作ったものだ。これを元に今のエレクトス、ローデイ、ウォーズが作られた。」

総三は少し自慢げに言った。

「プロトタイプのエレクトスは、志呉が実際に使用した事が何度かある。実用までに至らなかったがね…いや、実用化前に事件が起きたから実用化出来なかったの方が正しいか…」

「アトランティス消失の事か…」

康介がそう呟いた。

再び2010年…

別の研究を視察していた私達に大きな揺れが襲った。最初は、地震かと思われた。しかし、大きく鳴り響くサイレンで違う事はすぐに分かった。時空転移装置が始動した事を示しているからだ。

時空転移装置は、時空転移自体可能だったが、範囲を設定出来ない為下手をすれば世界を飲み込む可能性があり使用をしたらすぐに知らせる装置が付いている。

装置のある場所に居ると、『ある研究員』が装置を動かしているのが見えた。

「やめろー！」

先に飛びかかったのは志呉の方だ。研究員は近くにあった工具で志呉の腹部と頭部を殴打、更に緊急停止装置を破壊し逃亡した。

犯人を追う事が本来なら正しいだろう。だが私は彼に駆け寄った。「大丈夫か！」

この時、私は彼が助からない事を察した。彼もその事は分かっており、私にこう言った。

「町の皆を…子ども達を頼んだ…」

彼は今にも途切れそうな声で言うのと、息を引き取った。

他の研究員達もこの事態に私の指示を待っていた。

「ここから脱出する。装置の作動には少しだがラグがある、急げ！」

そう促すと彼らは逃げ始めた。

私は、当時完成していたプロトタイプのウオーズのベルトを手に取り、残された僅かな時間を救済に費やした。

その時に救った中の1人に瓦礫を前に泣き叫ぶ道永がいた。

都市の人口のうち6割は脱出、うち1割は私が救った。だが、残り4割は…

再び現在…

「なんか…一気に話されて頭が弾けそうだ。」

康介はそう言った。

「そうだな。私も話疲れたよ。」

総三は、話している途中で出した温かい緑茶が入っているカップに手を伸ばした。

「俺、ちよつと外に出てくる…」

康介はそう言うのと部屋を出た。道永もその後を追って出て行った。

総三は、カップを置くと、一美の方を向いた。

「すまなかった。君の父親を救う事が出来なくて…」

総三は頭を下げた。

「頭を上げてください。あなたが悪いわけではないのだから。」

一美は先程とは違う優しい声で言った。

「君は志呉に似て優しいね。成長した君を見せてあげたいよ。」

2人は笑った。

だが、総三はすぐに顔を変えた。

「今から話す事は、君を深く傷つけるかもしれない…それでも聞いてくれるかい…『本当の真実』を…」

一美は、はいといい総三の顔を見た。

一方、康介は屋上にいた。

「ここが…だからあの時、見覚えがあったんだな…」

「康介、久々の父親との再会はどうだった？」

後ろから道永が声をかけた。

「正直、驚きでいっぱいだよ。それでこの話だろ？疲れるよ。というか、いきなり呼び捨てか。」

康介は、落ち着いているが少し興奮しているような声で返した。

「だって、将来一美と結婚して弟になるだろう？」

道永はさも当たり前かのように言った。

「一美と結婚はしないよ…流石に」

「一美の事が嫌いなのか!!」

道永は一瞬で血相を変えて今にも康介に掴み掛かろうとした。

「違う、一美はもちろん好きだよ。ただ、結婚とかそういうのじゃない。」

その言葉に道永は疑問を持った。どういう事だ？と聞いた。

「そうだな…相棒かな…シャーロックならワトソン、ビルドならクローズ、白飯に味噌汁…みたいな？」

道永はその例えに吹き出した。

「なんだよ。白飯に味噌汁って…まあ、なんとなく分かるけどさ。」

道永は、部屋に戻ろうとした。

だが、振り返り康介を見た。

「これからも一美の事、頼むよ。康介。」

「ああ、分かってるよ。」

康介も、笑って言った。

「あの時、泣き叫ぶ道永の近くに君がいた。」

総三は、重い口を開いた。一美は、そんな物身に覚えないと不思議な顔をした。

総三の目にあの日の道永が浮かび上がった。

「一美!!!」

「絶対に助け出す!」

私は、倒れた重い看板を一瞬で持ち上げ、道永に行った。それと同じに瓦礫の下に無惨な姿の幼い一美がいた。

私は泣き叫ぶ彼を見てある決心をした。この子を生き返らせる、と。

禁忌に手を出し、私は一美を蘇生した。そして、捜索隊に身柄を託した。

「要するに、君は一度死んでいる。」

総三は一美に信じられない一言を放った。

「道永が…必死に助けようとした所に私が来た。だが、君はその時にはもう息はなかった。」

一美は理解できず硬直していた。

「私は、彼との約束を守る為に禁忌に手を触れた。人体蘇生に…君は私が行った人体蘇生によって生を取り戻したんだ。」

総三は、やはり話すべきではなかったか、そう思った。

一美の顔は真っ青に染まり、絶望を浮かべた。

「私が…」

「おい!!」

その時、怒鳴り声と共に道永が割って入り、総三を掴み上げた。

「まさか話したのか…あの事を!!」

総三は、目で頷いた。

「それだけは話すなって言ったよな…一美を悲しませるような事をするなら誰であっても許さんって言ったよな!!」

道永は、総三を柵がある方へ投げ飛ばした。
柵から沢山の物が崩れ落ち、ガラスが割れた。

「…俺は、お前を殺す!!」

道永はローデイに変身した。

「待て、道永!」

ローデイは問答無用に剣を振り下ろす。

総三はドアのある方に避けた。

後ろには騒ぎを聞きつけた康介がいた。

「何が起きているんだよ。」

「康介は下がっていなさい。」

総三は康介を庇うように立った。

ローデイは剣を銃に変え、3発程放った。

敢えて外したとはいえ、総三や康介に当たるところだった。

その行動を間近で見た総三は、自身の身体から何か切れる音がした。

「確かに、君の大切な人に傷をつけてしまった…だが、それを理由に私の大切な人を傷つけようとするなら容赦しない…」

康介はその言葉にはつととなった。

総三は、黒いキーをベルトにセットした。

「Z key!」

そして、そのキーを静かに回した。

「open!」
「Masked warrior! Z!」

そこに現れたのは、黒い仮面の戦士…プロトウォーズ。

プロトウォーズは、ローデイを窓の外へ押し出し、そのまま地上に降り立っていった。

康介は、1人残された一美の元へ駆け寄った。

「何があった?」

一美は震える手で、康介の右手を握った。

「私…生きていちゃ、ダメなのかな…」

本来なら死んでいた。それを禁断の技術で蘇生された。それは、あつてはならない事。一美は、一瞬、生きる事が鎖で縛り付けられたかのように窮屈で、怖いものになっていた。

「俺はそれでも一美に生きて欲しい、大切な人だから…」

康介は、そう言う彼女の手を強く握った。

第24話 マツド・ラブ

「はあっ!!」

2人の男が窓ガラスをぶち破り、地面に飛び降りた。

1人はローディ、銃を相手に連射し動きを封じようとする。

相手はプロトウオーズ、自身の驚異的な瞬発力でそれらを全て避けた。そして、剣を構え火花を散らしながらローディに斬りかかる。

『一美を悲しませるような事をするなら誰であつても許さんつて言つたよな!!』『…俺は、お前を殺す!!』

『確かに、君の大切な人に傷をつけてしまった…だが、それを理由に私の大切な人を傷つけようとするなら容赦しない…』

2人は、真実を伝えたというたつた一つの出来事により対立している。互いが互いの守りたい大切な人のために…

「再展開!」 「ROAD—Y exceed!」

「open!」 「Attack!」

2人は、剣を構え互いに睨み合う。

そして、剣を突き出し前へ駆け出した。

「full open!」 「Freeze slash!」

その時、巨大な氷柱が2人の間に割つて入り、2人の膝下を凍結させた。

2人は氷柱の中から睨みを効かす一つの眼光がある事に気づいた。ウオーズだ。

「お前ら…いい加減にしろ!!」

ウォーズは、まずローデイを見た。

「道永、あんたは一美第一なんだろう、だったら一美の意見を聞けよ！本当にそう思っているかも分からないのに、この行為をあたかも一美が望んでいるかのように振る舞うな！」

「…」

更にプロトウォーズを見た。

「父さんも父さんだ！下手すれば再起不能にさせるような真実を簡単に話すな、そんな事をいきなり言われたって、相手は混乱するだけだ！」

ウォーズは2人を突き放した。

「お前らのような、感情的になって大切な人を守ってるつもりになっているような下衆とは一緒に居られない…帰らせてもらう。」

ウォーズは静かにそう言い放ち、建物に入った。

「康介…」

プロトウォーズはそう呟いた。

康介が再び部屋に戻ると、一美が外の様子を立って見ていた。

「康介…ごめん。私の代わりに…」

一美は、康介を見た。先程の青ざめた顔はなく、いつもの顔に戻っていた。

「別に、気にしてない。それより大丈夫か？」

康介は優しい声で問いかける。

「うん…私、それでも生きていくから。だって、総三さんは悪気があつて禁忌に手を出した訳じゃないから…父さんの、兄さんの為にやったのだから。」

一美は、外の2人を一瞬見た。

「それに一度死んで蘇るとかなんかカッコいいじゃん。ゲームで一度死んだ仲間が敵となって現れるみたいだ。」

一美が言った冗談で康介は一美は大丈夫だと心の中で思った。

その時だった。突然外で剣が擦れ合う音がした。

「またあの2人!」

康介と一美は窓の外を見た。

するとローディとプロトウォーズが倒れているのが見えた。2人の真正面にはドウアリティともう1人水色の仮面ライダーの姿があった。

「いけるか?一美。」

「うん、早く行こう!」

2人は変身し、下で倒れていた2人の前に飛び降りた。

「ウォーズ、エレクスじゃねーか。ついさつき振り。」

ドウアリティがそう言った。

「南条、今度こそ昭彦の体を返して貰うぞ。」

康介は苛立ちを隠しながら言う。

「やれる物なら、やってみな。」

ドウアリティはベルトのキーを取り外した。そして別のキーを装填した。

「Death key…」

「裏・変身。」

「open!」
「Mad murder…KAMEN RIDER
DUALITY…」

ドウアリティの上半身の鎧のようなアーマーが外れ、狂気な姿が現れる。ドウアリティのもう一つの姿、『デス』だ。

「豪災、ウォーズを頼むわ。私はエレクスを倒す。」

隣にいた水色のライダー、ビクトリケンがそう言った。

「ok、任せとけて。」

ドウアリティは銃を2丁構え、ウォーズに撃つ。

ウォーズはそれを交わし、剣を構えた走り出した。

エレクスは、サファイアに変身、剣を構え走り出す。

「道永…きつきは済まなかった…」

後ろにいた総三が道永に言う。

「…俺も、少し暴れ過ぎました。ごめんなさい。」

道永も総三に頭を下げた。

「いくぞ、道永。それぞれの『大切な人』を助ける為に。」

総三は、道永にそう促した。

「はい…」

そう声を上げたローデイはエレクスの元へ走り出した。

「私も行くでしょうか！」

プロトウォーズもウォーズの方へ走り出す。

プロトウォーズは、ドゥアリティの懐に入り込み溝落ちにストレートを繰り出す。

その怯んだ隙を突いてウォーズが飛び蹴りを放つ。

2人の連続攻撃によってドゥアリティは後ろに下がってしまう。

「これはしくじったな…」

そう呟き、ベルトのキーを回転させた。

「Re open!」「Death doubles…」

すると、ドゥアリティからウォーズ達目掛け毒沼のようなものが広がった。

「なんだこれは！」

それらは彼らにへばりつき動きを制限、更に鎧を溶かし始めた。

「酸性の毒物だろ…抜け出さないと身体ごと溶かされるぞ。」

「ご丁寧に解説ありがとう、要するに死ぬんだな。」

ウォーズ達が話す隙に、ドゥアリティは2丁の銃から強力なエネルギー弾を放つ。

「これで死ね。」

「悪いが、ここで死ぬのばゴメンだよ！」

ウォーズは、別のキーをベルトに装填、必殺技を発動した。

「Re open!」「Frame drop!」

身体が一気に燃え広がる。すると、周りの毒沼がどんどん蒸発し始め、自由になった。

「破天荒な息子だな。」

沼から解放されたプロトウォーズは、黒いマツハキーをベルトに装填。

必殺技を発動させた。

「Mach key!」「open!」「attack!」

エネルギー弾をすり抜け、ドウアリティに連続斬りを与える。

「いくぞ、父さん！」

「ああ！」

ウォーズのその声で2人は空へと飛び上がる。

炎を纏ったウォーズの左脚とエネルギーが充填されたプロトウォーズの右脚がドウアリティに激突。

「マジかよー！」

ドウアリティは抵抗する術もなく爆散した。

ドウアリティから南条翔と神谷昭彦が分離する。昭彦はその場に倒れ、南条は自分を倒した2人を見た。

「まさか、ここまでしてやられるとはな。だが、次戦う時はお前達の命日だ。」

そう言い残し煙の向こうへ消えた。

「どうやら、油断したようね。ここは一旦引くとしよう。」

ビクトリケンも、風と共に姿を消した。

4人は、神谷昭彦を研究所の中に入れた。

そして、ベッドのある部屋に運び込み寝かせた。まだ意識は戻らな

い。

ひと段落したところで道永が一美を見た。そして頭を下げた。

「さつきは…勝手に突っ走ってごめん。一美の考えを…無視して…」

「私も、君のことを考えるという配慮を怠ってしまった。申し訳ない。」

総三も続けて頭を下げた。

一美は、2人を見て、同じように頭を下げた。

「私も…勘違いさせるような行動をしてごめんなさい。」

「別に一美が謝ることじゃない！」

すると道永は一美より更に低く頭を下げた。

「私だって悪かったんだから！」

一美は土下座のような体勢になった。

「そんな事はない！俺が悪いんだ！」

道永はもはや地面を舐めたいのかと思わせるくらい頭を地面につけた。

「ふふ、遊んでるのかい？2人とも。」

総三は、笑いながら言った。

「父さんもする？」

康介は聞く。

「流石に…ね。」

第25話 サンダー・ストーム

「そうだ、康介。スペシャルキーを貸してくれないか？」

ひと段落したところで、総三が康介に行った。

「いいけど、壊れているよ。」

康介は不思議そうにキーを渡した。

「大丈夫だ。直しておく。」

そう言うと、総三は部屋を出た。

廊下で総三は、破損しているスペシャルキーを眺めた。

「康介、お前には実験台になってもらう。」

「まさか、ここまでやられるとはな。」

南条は、地面に膝をつきながら言い放った。

「想像以上ね。彼らの強さは。ただ安心したわ。」

ビクトリケーンは、南条の肩に手を置いた。

「あれぐらいの弱さなら、本気の私達に勝てるわけない。」

「想像以上でも、俺達には勝らない、ってか？」

南条が顔を上げると、ビクトリケーンは長髪の女に姿が変わっていた。

「まあ、今回の負けは仕方ないわ。私達はあくまで『彼らと同じ靴を慣れているのに履いて徒競走をする』ようなものよ。貴方は、貴方の慣れた靴で戦えば確実に勝つ。」

彼女はそう言った。

「……ハハハ？」

「目、覚めた？」

彼が眼を覚ますと、見覚えのある女の顔が彼の顔に当たる蛍光灯の光を遮った。

「清宮……？」

彼―神谷昭彦は、自身が寝ているベッドから身体を起こした。

「うん、神谷君は大丈夫？」

一美は、彼の顔を覗き込んだ。

そこで昭彦は血相を変え一美の肩を掴んだ。

「香は、大丈夫なのか？」

「カオリン…なんで彼女が？」

カオリン…不知火香、一美の親友であり昭彦の恋人である。

「…その反応だと知らないか…」

すると昭彦は、自分のサバイブバックルを手に取り、部屋から出ようとする。

「ちよー！一人でどこ行くの？」

一美が引き止めようとする。

「香を助けに行くんだ！まだ彼女は解放されてない！」

一美は解放という言葉でピンと来た。

「もしかして、水色の仮面ライダーが…カオリン？」

昭彦は、振り払おうとしていた腕の動きを止めた。

「そうなんだよね？だったら、私も行く。」

「…俺一人で十分だ。」

「危険よ！敵は…！一人で突っ込んで勝てる相手なんかじゃない。それに…私だってカオリンを解放したい。」

一美は、訴える様な眼で昭彦を見た。

その眼に昭彦は口を開いた。

「分かった、ありがとう。」

昭彦は不器用に笑った。

神谷昭彦、彼を一言で表すなら真面目。

成績は高校二年の頃からトップ3に入る程。それもそのはず、彼は父に憧れ医者を目指しているからだ。彼は医者になる為に小、中学校生活を勉学に注いだ。だが、それが彼を孤独へと誘った。

高校入学してから彼に友人どころか話相手すら居なかった。常に

孤独に飢えていた。それらのストレスのおかげで新学期最初のテストの順位に初めて二桁目が現れた。それにより彼は自身更に追い込んでしまい、学校生活すらも辛いものとなっていた。

そんな彼は遂に過剰なストレスによって倒れてしまった。それも誰も通らないような路地で。もはや助かる術はない…そう覚悟した。だが、彼が眼を覚ますと誰かの家のベッドで寝かされていた。彼に救いの手を差し伸べたのは小学校で少し話した程度で高校も同じとはいえ別のクラスの不知火香だった。

「香…必ず助け出す。」

不知火香は彼にとつて恩人だ。だからこそ救いたい、そう思うと身体が勝手に動いた。

「うん、カオリンは私達の手で。」

一美と昭彦は、彼の記憶を頼りに敵が潜んでいる拠点の近くまで来た。

「おつと、これより先は入場禁止ですよお客さん。」

彼らの前に、南条翔ともう1人の幹部に乗っ取られている不知火香の姿があった。

「南条…香を解放しろ！」

「…俺に聞かれても困る。返すも返さないのも彼女次第だ。」

そう言うと、香はキーを構えた。返して欲しければ力尽くでかかって来いとそう促していた。

「香は…返してもらおう！」

一美はエレクスキーとサファイアキーを構えた。

「必ず…解放する！」

昭彦はドミネートキーを構えた。

「変身!!」

南条を除く3人はキーを装填した。

「open!」
「Blue flame! Brave fire! K

AMEN RIDER Sapphire EREX!

「open!」
「Darkness sword! KAMEN RI

DER DUALITY!」

「open!」Victory cyclone! KAMEN R
IDER VICTORICANE!」

エレクス、ドウアリティ、ビクトリケーンがそれぞれ睨み合う。

「はあっ!!」

「康介。」

康介は直ったスペシャルキーを眺めながら廊下を歩いていると、昭彦が寝ていた部屋から道永が飛び出してきた。

「道永、どうかしたのか。」

「一美と神谷を見なかったか?」

「いや、見てないけど…」

「部屋に居ないんだ、2人とも!」

「なんだって!」

その頃、エレクスはドウアリティと共にビクトリケーンを圧倒し、もう撃破できるところまでになっていた。

「私達の勝ちよ、香を返してもらおう!」

「Re open!」Dominate doubles!」

ドウアリティが、右手に持つ剣をビクトリケーンに突き刺そうと迫る。

『助けて…昭彦…』

その時、ビクトリケーンから香の声が出た。その声に取り残されたドウアリティの剣が止まる。

その隙をビクトリケーンは逃さなかった…ドウアリティを足払いし、転んだところを右脚で蹴り飛ばした。

「手段を選ばない。それが私の流儀。」

ドウアリテイは、昭彦の姿に戻ってしまった。

「卑怯な…」

「卑怯？俺達が大好きな言葉だ。ここからは俺も混ざってもいいか？」

ビクトリケーンの後ろからサバイブバックル—αを装着した南条が現れ、一美に言葉を返した。

「良いわよ、それと、私を貴方と同じにしないで貰えるかな。」

ビクトリケーンは、彼に並んだ。

「ここからは俺のターンだ。完膚なきまで叩き潰す。」

「豪炎ノ鍵…」

南条はキーを装填、左手をベルトに添えた。

「変身。」

「施錠…」「豪快且厄災：仮面ライダー豪炎…」

稲妻が南条の元へと降り注ぐ。稲光と共に翠の牢獄が現れ彼ごと施錠する。

そして、翠色の矢が放たれると同時に牢獄は弾け飛び、新たな仮面ライダーを誕生させた。その名を仮面ライダー豪炎、雷撃の弓術士だ。

「さあ、始めようぜ…」

豪炎は弦を弾き、エレクスに狙いを定める。

「まずは一人…」

エレクスは避けようと動こうとする。しかし、身体が動かない。

「豪炎：今のうちに！」

ビクトリケーンが風の力でエレクスを押しえつけていた。

「なっ…」

雷鳴の矢は放たれ、エレクスにまっすぐ迫る。

避けられない…そう覚悟したその時、前に一台のバイクが止まり攻撃を防いだ。

「大丈夫か、一美！」

ローディだ。その後を追うように翼を広げたウォーズスペシャルが、豪炎とビクトリケーンに突撃した。

「兄さん、康介！」

ウォーズはエレクスの前に着陸し、剣を構えた。

「撤退するぞ。」

「待って！」

撤退しようとするウォーズをエレクスは止めた。

「あのライダーは…香だから…昭彦にとつても、私にとつても大切な人だから救いたい！」

その言葉に康介は、分かったと言った。

「道永、豪炎を抑えてくれ。一美、俺と香を救うぞ。」

「分かった。」

ローディは追撃しようとする豪炎に向かって走り出した。

「ありがとう…」

「行くぞ、一美。」

「うん、私達のプレイにシビれなさい！」

2人は剣を構え、ビクトリケーンに向かって走り出した。

ビクトリケーンはすぐさま迎撃しようとする。が、それよりも早くウォーズの剣が入り込む。

更にエレクスが続いて剣を振りかざす。

ビクトリケーンは、その場に倒れ込む。

「決めるぞー！」

ウォーズは、剣の持ち手に新たなパーツをセットした。

「Over uniter!」「set!」

ウォーズは、マツハ、ファンク、ファイアー、ブリザードキーをオーバーユニットに装填した。

「これで終わりだ！」

ドライブバーのキーを回転させ必殺技を発動。

「Re open!」「WAR—Z prominence!」

4種類のキーの力が同時に発動、頭身に虹色の光が宿る。

ウォーズは一瞬にしてビクトリケーンの間合いに入り、一閃する。

ビクトリケーンはその場に倒れ込んだ。

変身が解かれ、不知火香の姿が現れた。

「香!」

昭彦が駆け寄った。

その側で別の女が倒れているのが見えた。

康介はその顔に覚えがある。一年の頃から他のクラスなのによく

言い寄ってきていた女、西本鷺花だった。

「ここらが退き際か…」

ローデイと戦っていた豪炎は、鷺花を抱え、雷のようにその場を立ち去った。

間章 禁呪、暗闇の玉座

その暗闇に、2人の使者が帰還した。

気を失っている西本驚花は、南条翔に抱え上げられている。

彼は、彼女をその闇に置かれているソファに優しく下ろした。

「…あいつら、ここまでやるとはな。こつちも準備が必要だな。」

「それなら全て用意してある。」

その時、男の声が部屋に鳴り響く。

翔は、辺りを見回す。その声の主を探す。

彼はその声の主を知っている。彼らに数々の指令を出すもの…そして、彼らをここまで育て上げたせんせい師である。

「どう言うことだ？」

翔は、どこから発せられるか分からない声に問いかける。

「ウォーズ達彼らは、内容を知りすぎた。私の正体を暴かれるのも時間の問題だ。そこで、君達2人に指令を出す。」

翔は、息を呑んだ。重い間が少し置かれた後、声の主は口を開いた。

「その錠前で、彼らを闇に消し去れ。そして、その眼を二度と開かせないようにするのだ！」

普段は力強い言葉を発しない主の気迫に、翔は一瞬揺らいだ。

そして、机の上にあるバックルと同じくらいの大きさをした錠前を手にした。

「あの男は、この世界の破壊を目論んでいる。時間は短い。体力が回復後、直ちに攻撃しろ。」

暗黒の玉座に、主は座っていた。

大理石のようなものでできた氷のような玉座は、暗闇の中に冷たい光を放っている。

主は、立ち上がった。

その主は、人ではない。むしろ、ホッパーに近いが、ウォーズの前に幾度となく現れるような個体とは明らかに異なる見た目をしていった。

不気味に隆起する身体。頭から天にかけて伸びる触覚。

「総三、お前の計画は、再び全てを滅ぼす。」

そう呟くと、どこが地面か分からない床を力強く歩み始めた。

翔は、鶯花が目覚めた後、先程の指令をそっくりそのまま話す。最

初は喋り方も真似ていたが、彼女に即却下された。

「と言うわけだ。」

彼女はしばらくその錠前を眺めていた。

「この錠前、誰が持ってきたのだろうか。」

「あのお方じゃないのか?」

彼は、なんの突っかかりもなく聞く。

「彼はここに居ない筈。もつといえ、移動手段を持っていない筈…」

彼女は、錠前を手を取った。

「つまり、私達も知らないもう1人の使者がいる。」

「そう言う事なんだろうな。」

2人は顔を合わせた。

選ばれし者達、彼らはある事件で生き残った。

彼らは、あの事件の中で選ばれた…

家族を失い、露頭に迷っていた彼らに主は手を差し伸べた。

その手を取った時は、温かく、優しいものだったのかもしれない。

ただ、今も同じように主の手を取ったとしても、彼らは同じように
は思わないだろう…恐らくは。

第26話 ブリーズ・ライフ

あの日、彼を助けたのは偶然だった。

4月の少し肌寒い日に、いつもは通らないあの道で、いつもより早い時間に家を出て：

彼を見つけた時、私はとりあえずすぐ近くの家に運び込んだ。痩せ細った彼の身体は軽く、弱々しいものだった。すぐに助けなければ死んでしまうのでは、そう思うと身体が動いた。

生憎、母は出勤していた為私がどうにかするしか無かった。

ベッドに寝かしつけたとき、初めて彼の顔をしっかりと見た。その顔は、かつて小学校で見た覚えがある男、神谷昭彦だった。

彼が眼を覚ました時は昼過ぎだった。

「ここは…」

「神谷くん…大丈夫？」

「不知火…」

彼は飛び起き「学校は！」と聞いたが、私はそれを強制的に寝るよう抑えた。

「今はダメよ。」

彼はその言葉で力を抜き、布団に入った。

「看病してくれた事は感謝する。でも、普通病院に連れて行くものじゃ無いのか？」

彼は、偉そうな態度で言った。

「…それは謝る。なら今からでも病院行く？」

「…そうだな…」

その時、地響きの様な音が鳴り響いた。

そういえば、まだ昼飯食べてないな…

「お前…何も食べてないのか？」

驚きの目で彼は私を見た。

「うん…つい夢中になって看病してたら…せっかくだし、一緒に食べよ。何食べる？」

「なんでもいい。」

「釣れないな…じゃ、適当に作る。」

そう言っただけで出したのは昨日の夕飯の残り物のカレーだった。何か作っても良かったが、単純に私が早く食べたかったと言うのがある。

本来夜ご飯で食べる予定だったが、どうせ母は会社の付き合いでどこかで食べて帰るだろうし作るのは私だからいいやとカレーの入った鍋に火をかけた。

30分ぐらいで白飯が炊き上がり、私の部屋に運び込んだ。

彼はお盆を持つのを手伝おうとしたが、病人なんだからと断った。

「食べていいのか？」

彼は聞いた。多分遠慮しているのだろう。

「もちろん…昨日の残りだけ。」

いただきますと言っただけで彼はカレーを一口頬張った。

「美味しい…」

「私の唯一の取り柄だからね。」

そう言っただけで私も食べ始めた。

後々知ったのだが、彼はカレーが大好物だ。因果なものだ。

彼はその後一人で病院に向かった。送ろうかと聞いたが、「これ以上迷惑かけられない」と突っぱねて帰っていった。

その日の夜、久しぶりに中学時代の夢を見た。

私が親友を保身の為に裏切った事。

親友との友情を優先すべきだった。でも、私はそれよりも自分が大事だった。屑だと言われてもおかしくは無い。罵倒されても言い返せない。

私は、どんなに良いことをしても偽善にしかならないと…

そんな私に転機が訪れた。

5月上旬、私の席の後ろにイチミン…清宮一美が話しかけてきた。

彼女は、私が使っているファイルを指差してこう聞いた。

「もしかして、貴女もf e やってるの？」

※f e…フレイムエンブレムのこと、決してファイオーエブレムではない。

私が使っているクリアファイルには、自分が大好きな女剣士が描かれている。それで気が付いたのだろう。

「うん、少しね。」

「私も大好きなんですよ。このゲーム。」

「奇遇、私も好きなんだ。」

その日は、彼女と放課後までゲームの話をして盛り上がった。他に好きなゲームについて、推しについてとか。

私は、ゲームの話ができる仲間ができて嬉しかった。

だが、それと同時に怖かった。また前の彼女みたいに裏切ってしまうのではないかと…

帰り際、久しぶりに神谷昭彦に出会った。

「久しぶり、元気にしてた？」

私は明るく声を掛けたつもりだった。

「ああ、おかげさまで。それより、元気ないのか？」

彼は私の少しの異変に気づいていた。

「そんなわけ…ないよ。」

私は誤魔化した。

「…俺はいつでも力になるぞ。」

最初は相談するのを戸惑った。だが、すぐに彼を引き止めた。

私は今日のイチミンとの事、過去に何があったか…それらを全て彼に話した。

「私なんて…幸せになっちゃいけないのよ。」

「そんな事、ないだろう。」

彼は、私を見た。

「親父は言ってたよ。人は過去に囚われすぎだつて。過去ばかり見て

いたら未来へは歩めないって。」

「過去に囚われる…」

「だから、まずは彼女と向き合わないと。」

私が未来なんか見て良いのだろうか…

その日の夜、早速連絡先を交換したイチミンに電話をした。メールでも良かったが、それでは気恥ずかしかった。

「もしもし。」

彼女の声だ。私もすぐに返した。

「私、不知火香。」

「ああ、香さん。わざわざ電話なんて…」

彼女はややよそよそしかった。

「うん、どうしても伝えたい事があって。」

私は続けた。

「私と…友達になってもうえませんか？こんな私と…」

私は一瞬時が止まった様な気がした。

彼女は、明るい声で返答した。

「もちろん、喜んで！よろしくね。」

私は、こうして晴れて彼女と友達になった。その後更に同じゲーム仲間として東雲早苗とも友達になり、学校生活が更に楽しくなった。

その後、昭彦とも毎日連絡を取り合う仲になり、夏休みが始まる直前、ついに…

「香…俺と付き合ってくれ。」

彼から告白された。前から意識されているのではと薄々気づいていたが、いざ言われるととても緊張した。もちろん、答えはずっと前から一つだった。

「はい、喜んで。」

今、私は幸せだ。だが、強いて心残りがあるとすれば、未だ中学時

代の彼女に謝罪できていない事だ。

だが、この頃の私は知らなかった。5年後、その彼女と再会することとを…

「香、おはよう。」

私が目を覚ますと、彼が私の顔を見ていた。

「アツキー…あの時と逆ね。」

「カオリン起きた?」

イチミンも私のすぐそばに駆け寄ってきた。

「イチミン…」

私は、どうやら長い夢を見ていた様だ。この部屋には私とアツキーとイチミンの他にイチミン似の男―黒夜道永と山田康介がいた。

私は、起き上がり、イチミンに聞いた。

「これってどう言う集まり?」

「…仮面ライダー?」

彼女は、自分もよく分からないみたいなの言い方をした。

「ふーん。面白そう。」

私は、仲間に入れてもらえるだけでも嬉しい。

「私、頑張っちゃうわよ!―1人で10体は余裕ね。」

「1人で10体は少ないな。」

康介はそう言った。

「そうなの?」

私が聞くと同時にアツキーが怪物の様な形相で康介を見ていた。

「香に危険を冒させるつもりか?」

「アツキー、やめてよ。やってみたいし。」

「分かった。香が言うならしょうがない。」

アツキーはすんなりと受け入れた。

彼は、基本意見を曲げないが、私が仲裁に入るとすぐ意見を変える。

可愛い奴め。

「君とは初めましてだね。いつも可愛い可愛い一美と仲良くしてくれてありがとう。」

黒夜道永は私の手を握った。

「ちよ、兄さん恥ずかしいからやめてよ。」

なるほど…彼はイチミンの兄貴なのか…へえ。

「仲良さげじゃん。」

私はそう言った。

「だろう、我ら兄妹の絆に勝る力は絶対はない。」

「別に私はそう思わないかな…」

イチミンはやや引き気味に言った。

第27話 グッド・バイ

「道永、本当にいいんだね？」

康介達が眠りについた頃、総三は道永を呼び出した。

「はい、覚悟はできています。」

道永は、キリツとした目で総三を見た。

「分かった。なら、明日の深夜決行だ。」

「父さん、俺たちを呼び出してなんだよ？」

翌朝、康介達は総三に呼び出されて、いつもの研究室にいた。

「率直に言う。君達のキーを渡して欲しい。」

「なんでだ？これが無くなったら俺たちは変身できない。」

昭彦が初めに口を開いた。

「何故ですか？総三さん。」

一美は総三に聞いた。

「康介にこの前渡したオーバーユニッター。あれは今夜の為の実験だった。」

「実験？」

総三は続けて言葉を発した。

「キーを一度に複数を同時発動させ、威力を高めるという実験だ。結果、それは成功した。」

すると、後ろに立っていた道永が腕に付けられるくらいの大きさの装置を出した。

そこには50もの鍵穴がある。恐らくそこにライダーチェンジキーやスタイルチェンジキーを装填するのだろう。

「今まで君達は沢山のライダー達を倒した。それにより26人のライダーチェンジキーとそのスタイルチェンジキーが全てここに揃っている。そのキーの力を全て発動させ、この世界を破壊する。」

「だろ？私達のキーが必要という訳なのね。」

香が納得した表情で言う。

「なら、一つ聞いてもいいか？」

康介が父親を見る。

「なんでも答えよう。」

「あいつらは一体なんなんだ。早苗や南条達は俺達をこの世界に封じ込めて何をしようとしている？」

総三はその事か…と椅子に腰掛けた。

「最初に言っておく。私は全て知っているわけではない。あくまで、全てが本当かは分からない。本人に聞くしかない。」

「ユートピア…それが彼らが属する組織の名だ。ユートピアは元々我々とは別の科学者達の集団で、アトランティスにも関わっていた組織の一つ。私の実験室にも1人交換研究員として所属していた。」

「そんな組織、聞いたことない。」

康介が言った。

「ユートピアは、アトランティスの事件の後、表舞台から姿を消したからな。彼らは、アトランティスが消えてから10年、ある実験をひたすら続けていた。人体改造と人造生物だ。」

「人体改造…」

一美が呟く。

「それも、本格的なもので、人体改造の成功例が悪道、絶王、豪炎、怪駕の4人、人造生物がホッパーとダークホッパーだ。現に、悪道達は本来人間では使えないサイバククルーαを使い、更には異形の姿に変身する。ホッパー達も飛蝗に似てはいるが、どの生態系にも属さない。」

「そんなものが現実にあるなんて…」

香は静かに驚いた。

「そして、君達はその実験の新たな素材にされる。ここで戦わせて勝ち残った者に力を与え、最強の生物を作り世界を支配する。私がかかるのはここまでだ。」

「俺達をそんな風にご利用しやがって。」

昭彦は机を殴った。

「俺達はその実験を阻止する為、この世界に入り、ウォーズとエレクスを君達に託したと言うわけだ。全ライダーのキーを集める為に。」
道永は補足説明をした。

「分かった。私、これを託します。」

最初にキーを出したのは一美だ。

私もと次に香がキーを差し出し、それに釣られて昭彦も出した。
残るは康介だ。

「もし…世界を破壊して元の世界に戻ったらどうなる?」

康介にとつて、そこが肝心だった。

「君達は元の生活に戻れるが、今まで死んでいった者たちは…」

総三はそう濁すように言った。

「…少し考えさせてくれ。」

康介は、その場を後にした。

『…もう無理そうだ…お前にこれを渡す…』

『これで…あの時の借りは返せた…ね、』

『…私も、康介の道に付き合わせてくれ。美叶のために…私も生き残る。』

『…そんな事ないよ、ただ…放っておかなかっただけ…』

康介の脳裏には、鮫島拓真、足立レイ、八代忍、虎山恵理の顔が浮かんでいた。

彼らは皆、康介に力を託して消えていった。

想いと共に…

「俺は、お前達を救えないのか…」

その時、後ろから一美が歩いてくるのが見えた。

「康介、また一人で抱え込んでる。」

一美は康介の隣に並んだ。

「ほら、顔が強張ってる。」

そう言っただけで彼女は左人差し指で康介の頬を上を持ち上げようと…笑わせようとする。

だが、康介は、自然に笑った。

「そうだったな。」

「一つ聞いてくれないか？」

康介は聞く。

「いいよ。」

一美は頷く。

「俺、沢山のライダー達を…クラスメイト達を犠牲にしてここまで来た。己の為に。そんな俺が元の生活をしていいのかって、思う。」

彼は今まで沢山の死を見てきた。自分の知らないところで、自分を庇って、自分の意志に反して、自分を助ける為に、時には自分の意志で殺したこともある。逆にそう思わない方が不自然だ。

「私が彼らだったら、康介には生きて欲しいって思う。自分を犠牲にしたんだから、その分生きろって。」

彼は沢山の犠牲を出した。だが、それと同時に強さを得た。初めよりもずっと強く逞しいものだ。彼には生きる義務がある。彼らの分まで…

「父さん、キーを託すよ。」

覚悟を決めた康介は、ウォーズキーを含めた全てのライダーチェンジーキーとスタイルチェンジーキーを差し出した。

「ありがとう、康介。ここまでよくここまで頑張った。もう、苦勞しなくていい。」

「総三は、彼の頭を撫でた。」

「じゃあ、一美。俺は準備があるから。」

道永は一美に言った。

「うん、頑張ってるね。」

一美は笑顔で彼を送り出した。

康介と一美が部屋に戻った頃には空は暗くなっていた。

昭彦と香は同じベッドに座り、それぞれ読書とゲームをしていた。

「キーを渡したのか？」

昭彦が俺に聞いた。

「ああ。」

俺はそう簡単に返し、布団に潜った。

康介の脳にある姿がぼんやり浮かび上がった。

それは前回の戦闘だ。ウォーズスペシャルがオーバーユニッターを使い複数キーの力を同時発動させて放った。

「…あの時、かなりの負荷があったな…」

その時、康介はある事に気がつく。

「誰が世界を破壊する力を発動させるのか？」

「まさか！」

康介は布団から飛び起きた。

その様子に3人は驚いた。

「どうしたの？」

一美は聞いたが、康介はそれよりも早く『道永』の元に向かわねばと扉を勢いよく開けようとした。が…

「開かない…」

康介は何度も何度も開けようとノブを引いたり押ししたりするが開く気配は一向にない。

「どうかしたのか？」

昭彦が彼を見た。

「くそっ!!扉が開かない！」

その時、部屋の誰も、驚きの表情になった。

「でも、世界が破壊されるから別に……」

香はそう言ったのを康介は遮る様に叫んだ。

「このまま世界が破壊されたら、道永が死ぬ！」

第28話 ヒー・ロード

「このまま世界が破壊されたら、道永が死ぬ！」

「どう言う…事？」

一美の額には冷や汗が湧き出ていた。

「キーを発動させるには、ライダーの力が必要だ。それも50本も有れば、尚更。」

「でも、それだけじゃ黑夜だとは限らないじゃないのか？」

昭彦がそう聞く。確かに、これだけならそうだ。父さんがそのキーを発動させてもいい。だが、それを覆す証拠がある。

「道永は、死んだ事になっている。」

そう、黑夜道永は戸籍上ではあのアトランティスの事件で死んだ事になっている。

だとすれば、あの時道永だけ解放しなかったのも合点がいく。今日、この時の為に…

「父さんは、道永を最初からこうするつもりだったんだ…アトランティス消失したあの時から…道永を敢えて死んだ事にして…」

「そんな…」

一美が膝から崩れ落ちた。香はそれを支える様に側に寄った。俺は、今度は扉に体当たりしぶち破ろうとした。

「俺も手伝う。」

昭彦も、扉の前に立った。

「せいの一！」

「道永、こちらの準備は完了した。そっちはどうだ。」

この研究所の奥深くにある実験室に道永が1人立っていた。

その部屋とガラス窓で区切られた部屋では総三が彼を見ていた。

「はい、キーを全てセットしました。」

ローデイに変身している彼の左腕には50本のキーが全て刺さっ

ている。そして、それらが大きな一つの鍵となっていた。

「了解、開始はお前のタイミングでいい。」

総三は無線でローデイに指示する。その手には、左腕の装置を起動させるスイッチがあった。

「分かりました。」

道永の脳裏には、一美が浮かんでいた。

子どもの頃の…そして再会した時の…

「ありがとう…一美。幸せに生きてくれ…」

彼は目を閉じた。もう無念はない…始めよう、そう声を出そうとした。

「私は…兄さんと一緒にいい!!」

彼が目を開けると、一美が左腕を掴んでキーを無理矢理引き抜こうとした。

「なんで…ここに…」

ローデイが総三の方を見ると康介達がいた。

「やめろ!!」

俺は父さんの右頬を殴り飛ばした。父親だろうと関係ない、道永を死なせない…一美を悲しませない為に。

「康介…」

父さんは、その衝撃で切った唇を拭いながら立ち上がった。

「なんで…なんでこんな事してるんだよ。」

「言っただろ…私は、康介のことが大切だよ。」

彼はは当たり前前だと言わんばかりの声で言った。

「俺させ良ければ…それでいいの。誰かがそれで傷ついてもいいの
か…あんたに託された人が！」

「ああ…そうさ！」

そう言つて俺を殴り飛ばした。香と昭彦は俺に駆け寄った。

「それに…この事は道永が望んだ事だ。お前にどうこう言われる筋合
いはない！康介は…ここで見ていなさい。」

総三は、スイッチに手をかけ、それを押し込んだ。

すると、ローデイの左腕が光輝いていた。

だがその光は、すぐさま収まり、ローデイが吹き飛ばされた。

一美の手にはエレクスキーが握られていた。無理矢理引き抜いた
のだ。

その衝撃でローデイは変身解除、気絶した。

機械は壊れ、周りにキーが散乱している。

「なんて事を…」

総三は机を蹴り飛ばした。今度は一美を殴る気だ。

「やめろ!!」

俺は、父さんを押さえつけた。

「なんで…なんでそんな事するんだよ。これじゃ、アイツらと一緒だ
ぞ！」

その言葉で、動きが止まった…

「確かに、黑夜の事や、託されたものも大切だ。ただ、それ以上に康介
が大切なんだよ。何故分らない。」

「分かるよ…痛いほど…」

俺は叫んだ。

「でも、あんたはおかしいんだよ…だったら、なんで自分の身を守ろうとしてんだよ…」

「自分の身を…?」

「ああそうだよ！自分は安全な所で指啜えて見ててさ。」

俺は言葉を続けた。

「俺が動いたのは…一美の為だ。大切な一美の…悲しむ顔が見たくないんだよ。」

俺を必死に助けてくれた彼女の涙を見たくないから

「まだ道永を使って続けるって言うなら…俺は全力で止める。あんたを、『殺して』でも…」

「…お前の言い分はよく分かった。」

父さんは口を開いた。

「私は、康介の為にと思ってここまでやってきた。でも、それがお前の大切なものを傷つけると言うなら…ここで終わりにしよう。」

その時、後ろから拍手が聞こえた。それも嫌味つたらしくゆつくりと。

「いやー実に面白いものを見せてもらったよ。」

「南条！」

後ろにいたのは南条とホッパー、ダークホッパーの大群だった。

「どうやってここまで！」

南条は、俺を指差した。

「彼らを追いかけてね。」

南条は、腕を下ろし、ベルトを装着した。

「俺達は、親に捨てられている。売られたと言った方が正しいかな。」

だから、お前らみたいなのを見てると凄い気分悪いんだよな。殺していいか？」

先程とは全く違う低い声で南条は話す。

「私怨はその辺りにしなさい。」

すると、ホッパの大群から新たな人が現れた。長髪で翠眼の女、西本鷺花だ。学校で見せていた魅惑の花は、鷺のように鋭く危険な物になっていた。

「鷺花。」

「山田康介とその仲間、白夜総三の計画を止めてくれた事、感謝する。そのお礼に、楽園を差し出すわ：天国というね。」

鷺花も、南条と同じサバイバツクル—αを装着した。

「変身。」

「施錠…」「豪快且厄災：仮面ライダー豪災…」

南条は、仮面ライダー豪災に姿を変える。

鷺花は、キーを右手で持ち、それを顔の前で構えた。

「変身！」

「怪駕ノ鍵…」

彼女はキーを装填し、力強く回転させる。

「施錠…」「怪火ヲ凌駕：仮面ライダー怪駕…」

すると、赤い熱風が彼女を包み込む。それが牢獄の様になり、こじ開ける様に斧が縦に一刀両断する。

風：それも強烈な熱風を思わせるような身体各部。深紅の仮面ライダー、怪駕だ。

「あの時の…」

俺はその姿にピンときた。この世界に行く前に俺を殺したライダーだ。腰に使われた剣を帯刀しており間違いない。

「始めるわよ。ここに存在する全てのキーを回収しなさい。」

怪駕は、斧を右から左へ大きく振り回した。すると、猛烈な突風が実験室を襲った。地面に転がっていたキーが全て巻き上がり、入り乱れている。

その隙に豪災が既に5本のキーを手にしていた。

「変身！」

既にキーを所持していた一美はエレクスに変身、豪災の持つキーを奪い返そうと迫る。

怪駕はゆつくりと康介に近づく。その途中、一つのキーが怪駕の元に落ちてきた。

彼女はそれを取る動作をした。しかし、その手にキーはない。

「…どっか…」

「これのこと？」

彼女の取ろうとしていたキーは、香の手の内に収まっていた。

「不知火…」

「私の身体使って散々悪さしてきたんでしょ？これぐらいいいじゃない。」

そういうと香は、ベルトを装着した。

「変身！」

「open！」[Victory cyclone！KAMEN RIDER VICTORIANE！]

彼女の身体をまた別の風が覆い被さり、水色の身体を作り上げる。巻き上がる風をイメージさせる頭部を持つ仮面ライダー。勝利と風の名を持つ、その名をビクトリケーン。ここに現る。

ビクトリケーンは、怪駕へ攻撃を仕掛ける。

ホッパー達も必死に空を舞うキーを手に取りとうとする。

その中で一体が黒いキーを手にする。デスキーだ。

「返せ！それは俺のものだ。」

そのデスキーを、昭彦は奪い取った。

「変身。」

「Open!」 「Mad murder: KAMEN RIDER
DUALITY:」

ドウアリティは、すぐさま右手に銃を持ち、他のキーを持つホッパー達を次々と撃ち抜く。

それにより再びキーが空を舞う。

その一つ、グラビティキーがドウアリティの手に収まる。

「これでも喰らえ。」

「Gravity key!」

グラビティキーの能力を発動させ、周りのホッパー達の重力を大きくし、潰す。

その混乱の最中、二つのキーがそれぞれエレクスとビクトリケーンの前に落ちる。

「Spark key!」

豪炎の矢の雨の攻撃を交わしながらスパークキーを手に取り、猛烈な電撃を豪炎に放つ。しかし、同じ雷属性の豪炎には焼け石に水、無意味であった。

一方、ビクトリケーンが拾ったのはウォーズキー、彼女はすぐさま康介に渡そうとするが、ホッパーや怪駕の攻撃が邪魔をし動けない。また、彼もホッパーの攻撃を受け危険な状態である。

彼女は、別ルートを考える。例えば、誰かを経由して…

目についたのは、ドウアリティだ。付近で戦っていて、尚且つ邪魔がない。

「アツキー!」

香は、キーをドウアリティに投げ渡した。

なんだこれと反応したが、どうすれば良いかすぐに分かった。

「康介、これを!」

彼は、康介が反応したとほぼ同時に投げる。それらは、ホッパー達を掻い潜り、辿り着こうとしていた。

が、それよりも早くダークホッパーが手に取る。そのダークホッパーは、剣を構え康介に斬りかかる。

「私の息子に…手を出さないで貰えるかな。」

そのダークホッパーの動きが止まった。プロトウォーズに変身した総三が腹部に剣を貫かせていた。

手からこぼれ落ちたウォーズキーを手に取り、手渡しする。

「ありがとう、父さん。」

「礼には及ばん。康介の言葉で目が覚めたよ。」

そう言つてホッパーの大群に入り込む父の後ろ姿を見ながら、ウォーズはベルトを装着、ウォーズキーとスペシャルキーを構える。

「変身！」

「I win the battle! KAMEN RIDER
WAR—Z Special!」

ウォーズスペシャルは、既に拾っていたマツハキー、ファイアーキー、ブリザードキー、ダミーキーをオーバーユニッターに装填。それを剣に刺し、更にフアングキーを剣の挿入口に差し込む。

「Finally power!」
「Specialize Show
rpslash!」

白銀に輝く剣を、ホッパーの大群に振り下ろす。

剣は、地割れの様に光を一気に広げ、ホッパー達を爆散させる。

その勢いで、沢山のキーが地面に散らばる。

「康介、ここは私に任せて豪災と怪駕を！」

「分かった！」

ウォーズは、そう言うのと翼を広げ、豪災と怪駕に迫る。

「何しやがる！」

「離しなさい！」

そして、2人を抱え上げ外へと持ち込もうとする。2人が暴れる

為、身体を安定させれず、狭い廊下を時々身体を擦らせながら外へと進む。

それを追うようにエレクス達も行く。

ウォーズは、外へと勢いよく出ると、豪災と怪駕を勢いよく振り落とし、自身も地面に着陸する。

その後を追ってきたサファイアエレクス、ドウアリティ、ビクトリケーンも追いつき、4対2の状況に追い込んだ。

「ここでお前達を…叩き潰す！」

ウォーズはそう叫び怪駕へと迫る。

エレクスとビクトリケーンは豪災へと攻撃を仕掛ける。

エレクスとビクトリケーンは剣を間髪入れず豪災に叩き込む。右に左に、右と見せかけ上から下から。

豪災は防戦一方へと持ち込まれてしまう。

普段は軽口を叩き余裕の表情を見せる彼も流石に真剣な表情になっっている。

彼は彼女達の攻撃を全て凌ぎ、弓の弦を引く。

怪駕は、斧を振りかざしドウアリティを攻撃する。

その攻撃でドウアリティが吹き飛ばされる。その背後からウォーズが剣を突き刺そうと迫る。

「読んだ！」

彼女は地面に突き刺さったままの斧をそのままに、腰に帯刀していた邪剣を引き抜き、剣を受け止める。

先程のパワーのある攻撃が、しなやかな剣舞に代わり、2人を翻弄させる。

豪災は無数の雷の矢を、怪駕は高速の風の剣撃を放ち、4人を地面にひれ伏せた。

「どうやら俺達の方が上みたいだな。」

豪炎は、弓を撫でながら言った。

ウォーズ達は、地面に倒れたまま、起き上がれずにいる。長引く戦闘による疲労と、圧倒的な力について来れずにいた。

「こんな所で…」

ウォーズは立ち上がろうと、剣を地面に突き刺す。

「これで終わりよ。」

豪炎と怪駕は、ベルトのキーを回転、必殺技を発動させた。

「再施錠…」「豪炎雷雨！」

「再施錠…」「怪駕風撃！」

「全員退場だ！」

豪炎は弓を4人に合わせ、矢を放つ。

それらは、ウォーズ達に一直線で放たれる。

その攻撃による爆発が起きる。だが、怪駕はある事に気がつく。

攻撃はウォーズ達には一切当たっていない。

それらは全て白夜総三…プロトウォーズが受け止めていた。

チャンスだ…そう思った。

怪駕は、神速の剣でプロトウォーズをすれ違いざまに切り裂く。

更に彼が回収した全てのキーを奪取した。

俺にとって、それは信じられないものだった。父親が…目の前で討たれた。敵の手によって…

爆炎の中から、父親の身体が姿を表した。しかし、そこに力はなく膝から崩れ落ちた。

怪駕は、その身体を見せしめのように俺の方へ蹴り飛ばす。

「父さん!!」

俺は叫んだ。駆け寄ろうとした。

父さんは、何かを口にしようとしていた。だが、それよりも早く光の結晶となり、消えてしまった。

俺が触れることすら出来ずに…

第29話 ダイ・ワンス

「父さん!!」

彼は叫んだ。駆け寄ろうとした。

白夜総三は、何かを口にしようとしていた。だが、それよりも早く光の結晶となり、消えてしまった。

彼が触れることすら出来ずに：

康介は、父が倒れていた場所で、下を向き、膝立ちしていた。目に輝きがなく、ただ絶望に打ちひしがれていた。

怪駕は、総三から奪ったキーを確認し、「後はお前達が持っている1本だけだ。」と。

「さあ、残りも全て返してもらおうか…」

豪災は、弓を肩にかけた。その動作にエレクス、ドウアリティ、ビクトリケーンは身構えた。

ウォーズは、立ち上がった。拳に怒りを滲ませていた。

「返して、だど？…違うだろ。」

ウォーズは、怪駕と豪災を睨みつけてた。仮面で見えないが、殺意のある…復讐鬼の顔をしていることはここにいる誰もが気づいた。

「それは…元々父さんが平和のために作ったものだ。こんな悪事に利用しやがって…」

ウォーズはゆっくりと歩き出した。剣をいつでも斬れるように構えながら。

「許さん…お前達のような外道極まりない残酷な人間は、地獄にはいかせない。その首を刎ね落として、見せ様にしてやる。」

そうやって、走り出した。怪駕は剣を突き出す。

が、ウォーズはそれを交わし、背中をとる。更に蹴り飛ばし、地面に押し倒す。

武器を銃に変え、怪駕のアーマーのない関節部分を至近距離で連射する。

そして、左手で掴み上げると、顔面に2発右ストレートを放つ。

その時、彼の身体に衝撃が走る。

豪炎が怪駕への攻撃を阻止する為に矢を放った。

ウォーズは、静かに豪炎の方へ振り向く。

怪駕を投げ下ろし、今度は豪炎に向かって走り出した。

豪炎は、動きを止めるべく左手から雷撃を放つ。ウォーズはその攻撃を受けるが、お構なしに飛び上がり、右膝で膝蹴りをする。

後退した豪炎に、ウォーズは間髪入れずに右ストレートを3回打ち込み、左手で持っていた剣で斬り裂く。

その攻撃で倒れた豪炎に、必殺技を発動させようとウォーズは構えた。

しかし、それを後ろからの攻撃で防がれた。エレクスだ。

「やり過ぎよ。」

彼女はウォーズを止めようと攻撃したのだ。彼の肩を持つとう手を伸ばす。

しかし、その手は、その彼によって弾かれた。

「邪魔をするな。」

そして剣を彼女の喉元に構えた。

しかし、その恐ろしさに怯えることなくエレクスは、立ち向かった。

「仇を討ちたいかもしれない。でも、今は撤退するべきよ。」

「うるさい、下がれ！」

「下がらない！康介を止める！」

ウォーズは、エレクスに剣を振りかざそうとする。

しかし、その剣を寸前に止めた。そして、ドウアリテイとビクトリケーンが2人の間に立ち、制止させた。

ウオーズは、少し思考し、心を落ち着かせた。そして一美に言われた様子を引こうとした。

その時、鋭い風が4人を吹き飛ばした。

そこには、怪駕が左手で風を操り竜巻を起こしていた。そして、力強く壁に打ちつけた。

「ここまでの能力を隠し持っていたとはね…」

怪駕のその手には、あの時渡された錠前があった。

「でも、最早それもここまでよ。」

「どういうことだ？」

ドウアリテイが立ち上がりながら聞く。

「もう、貴方達を生かしておく必要はない。全員切り捨てる。」

そう言う彼女は、錠前の正面にある鍵穴に、漆黒の鍵を差し込み、回した。

そして天に掲げ、『何か』を発動させるための呪文のようなものを唱え始めた。

「永久の闇の力よ。その眼を開き、戦士達を封じよ！」

その時、錠前から紫と黒の毒々しい煙のようなものが現れ始めた。

その煙はやがて溢れ出し、怪駕の前にいるライダー達の元へ雪崩の

ように迫る。

「はっ！」

正面にいたドウアリティは、逃げる間も、声を上げる間もなく飲み込まれていく。

「嫌！」

更にビクトリケーンにも迫る。最初は足に絡みつき、彼女の動きを封じた。そして、じわじわと侵食し腐敗させていく。

2人を飲み込んだ闇は、更にエレクスとウォーズに迫る。

「一美！」

ウォーズは、エレクスに闇が迫る直前に突き飛ばし、その場から離れさせた。

その代償に、ウォーズは闇に飲まれ、あたかも最初からなかったかのように消え去った。

闇は、時間切れか徐々に錠前に衰退していく。

一美はその様子を倒れたまま見ていた…

「康…介？」

「1人だけ残ったか…だがまあいい。残りは、闇に帰る。」

怪駕と豪災は、エレクスを見た。

「そんな…」

彼女の顔は、仮面に隠れて見えていないが、絶望し、動揺していた。仲間を失い、大切な人までも：死んで：

しかし、その絶望はすぐさま心の奥底へ隠れていった。

そしてその足で立ち上がり、剣を構えた。

「闇に帰った…なのよね？」

一美が、俯き気味に怪駕に聞く。

「ええ、そうよ。」

「と言うことは…」

エレクスは、敵をその眼で捉えた。

「まだ死んでいない…という事？」

「まあ、正確に言えばね。でもそれも僅かよ。」

「僅かでも可能性があるなら、私は戦う！帰ってくるまでの時間を稼ぎ、絶対に連れて帰る!!」

そう叫ぶように言い、怪駕に剣を向け走り出した。

「馬鹿ね、貴女。」

怪駕も剣を構えた。

「よく、言われるわー！」

彼女はそう答え剣を振りかざした。

第30話 スーパー・ノヴァ

2人の剣が擦れ合い、火花を散らす。

怪駕は風を、エレクスは電気を纏った剣をぶつけ合う。

その衝撃は、周りに響き渡る。

地面は抉れあがり、突風が巻き起こる。

一美は戦う。康介達が帰ってくる事を信じて。もし帰れないなら自分が闇を切り裂いて助け出す。そんな勢いで迫る。

エレクスは、サブブソードガンにスパークキーを、そしてサブファイブブレードにサブファイアキーをスキャンさせた。

怪駕も、ベルトのキーを回し、剣と斧を構えた。

「Blitz slash!」 「Prism lightning star!」

「再施錠…」 「怪駕風撃!」

先に動いたのはエレクス、左手のソードガンを突き立て迫る。

怪駕はそれを斧を構えて防いだ。

そして怪駕は振り払い、剣を振り下ろす。

エレクスはサブファイブブレードを前に出し防いだ。

そしてすぐさま立ち上がり、2本の剣をクロスするように振り下ろす。

その攻撃を怪駕は耐え抜いた。そして、斧をエレクスの装甲目掛け叩き下ろす。

エレクスはその攻撃に吹き飛ばされ距離を取られるが、攻撃を休めない為にガンモードにし、弾丸を放つ。

一瞬、怪駕の攻撃が鈍る。そのチャンスをエレクスは見逃さなかった。

自らの体勢をすぐさま整え、走り出す。剣を彼女の胸部を切り裂こうと迫る。しかし、それを雷の矢が阻止する。

そこには豪災が弓を構えて立っていた。

「油断は禁物、だろ？」

彼は怪駕を守るように、手を出した。

「次は俺だ。」

そう言うと、彼は、弓の弦を引いた。そしてエレクスに狙いを定め、矢を放つ。

エレクスはその攻撃を避ける。

しかしその避けた先にまた矢が現れる。

豪災は矢を連続で先読みし放つ。エレクスはそれを避け続け、攻撃の機会を探る。

「そこだ！」

エレクスは銃を構え、豪災に放つ。

しかし、その攻撃は別な方向へと飛んでいく。

豪災は、左手をエレクスの方に翳していた。

雷が、エレクスが攻撃する前に落ちていたのだ。その攻撃にエレクスはよろめいていた。

「もう飽きた。決着付けようぜ！」

「再施錠……」「豪災雷雨！」

豪災は、雷の矢を放った。その攻撃は非常にわかりやすく、避けや

すいものだった。

「このぐらいいー！」

残る力を振り絞ってそれを避けると、豪災が一回転し、空中に居るのが見えた。

両脚に蓄えられた電撃が、雷の如く蹴りとして打ち付けられた。

その攻撃にエレクスは耐えきれず、地面を転がった。変身を解かれ、地面に倒れ込むことしか出来ない。

エレクスキーとスパークキーが地面に散らばり、それを一つ一つ豪災が拾い上げた。

「さて、ゲームセットだ。」

豪災は、エレクスをゴミを見るように見下した。

「心配するな、ちよつとシビれるだけさ。」

皮肉めいたその言い方に、エレクスは苛立ちを覚えるが、疲労と怪我で立ち上がれない……ここまでか。そう思った。

その時、彼の右手が光り始めた。電気が徐々に彼の腕に集まっているのだ。そして、その拳をエレクスに解き放った。

倒れ込んでいたエレクスに、眩い光が迫った。

その攻撃が着弾するや否や、目を開けられない程の閃光が起きた。

豪災の蹴りは、確かに彼女に当たるはずだった。彼女に当たるはずだった攻撃は、前にいる人物によって防がれた。

一瞬、ローデイかと思った。しかし、それは全く違う物だった。

黒く……しかし鮮やかな身体。スリムな……だが力強い姿。顔には、2本の天に伸びるようにあるアンテナとオレンジの複眼を持つ。

その姿には、どこか宇宙の始まりを感じさせた。

「誰だ。貴様！」

逆上した豪災が、怒りの矢を放つ。

それらは全てその仮面ライダーに激突。しかし、そのライダーはダメージどころか、ノックバックすらしない。

ゆっくりと歩み始め、豪災にじわじわと近づく。

右の拳に力を蓄え、解き放つ。

豪災は、一気に何メートルも先の外壁に打ち付けられる。

「なんなんだ、あの力は……」

豪災は完全に狼狽していた。見知らぬ仮面ライダーに、勝てそうだったところを形成逆転され、怒りに満ちていた。

そのライダーは、ベルトの右のキーを回した。

ベルトは、今までに見たことのない純黒のベルトだ。

「NOVA reopen!」「WARIZ drop NOVA
!」

「今まで俺達にしてきた仕打ち、きっちり返させてもらう！」

壁から抜け出し、そのライダーを倒そうと拳を振り下ろした豪災に向かって、スーパー・ノヴァの力を纏った飛び蹴りが激突した。

「ぐっ……まだだ……まだ俺には力が残っている！」

恐らく限界突破の事だろう。エレクスは身構える。

しかし、全くその様子はない。それどころか、豪炎は弱っていく一方だ。

「このウォーズ・ノヴァにはお前達の力を抑制させる力がある。もう、人間味のない姿にはさせない!!」

その蹴りは徐々に威力を増す。そして遂に鎧を貫通。豪炎は、言葉にならない悲鳴を上げながら、炎に消えていった…

「康介?」

私は、彼の名を呼んだ。

そのライダーは、ベルトを外し、変身を解いて見せた。

そこには、いつもの笑顔があった。

「ただいま。」

間章 覚醒、天裂く新星

ここは…どこだ。

何も見えない…何も聞こえない。

何も感じない、温度も、風も、地面も。

俺は死んだのか…

「そうだったな…」

俺は一美を命懸けで押しつけ、あの攻撃から庇った。

それによって救われたかどうかなんて分からない。

そうであって欲しい…

「康介…」

その時、女の声が聞こえた。

「一美？」

最初はそう思った。しかし、それはすぐに違うと分かった。俺より先に闇に飲まれた香の声だった。隣に神谷がいるのも分かった。

そして、その後ろで緑にぼうつと光る灯籠がいくつも並んでいた。

「イチミンは居ないわよ。」

「そうか…」

「俺達、どうなるんだろうな。」

神谷は今までに見たことない程の不安に襲われていた。

「分からない…」

『助かる方法ならある。』

その時、どこからかまた違う男の声がした。

「誰？」

『これはウォーズのバックルに搭載されている緊急脱出プログラムの声だ。』

その声はプログラムだが、紛れもなく父さんの声だった…

『ウォーズ、君はまだ死ぬべきじゃない。』

「どう言うことだ？」

康介は聞く。プログラムだから受け答えはしないが。

『君は選ばれたんだ。あの時から…』

あの時、恐らく初めてウォーズに変身した時のことだろう。あのバックルが投げ渡され、初めて変身した…

『だからこそ、君が最後まで戦い抜かなければならない。仮面の戦士

として：仮面ライダーウォーズとして。』

「…」

3人は黙って聞く。

『この空間は、財団が開発した一種の捕縛装置兼暗殺装置だろう。これを聞いている間にも君達の生気は徐々に吸い取られている。時間は限られている。そこで手短かに話そう。』

すると、サバイブバツクルが弾き飛ばされ、地面に転がった。

そして、巻かれているライフバツクルから、新たなバツクルの生成が始まった。

ほんの数十秒で、それは完成した。黒とオレンジのバツクルだ。

俺が落ちたサバイブバツクルを拾うと、声が再び鳴り響いた。

『それはウォーズ専用で作られたバツクル、ノヴァバツクルだ。そのバツクルの力を解放すれば、この闇を切り裂く程の力を発動できる。』

「本当！」

香が喜ぶ。

その時だった。

彼らの背後から、謎の怪物が迫っていた。

「そんな事はさせませんよ。」

「誰だ！」

昭彦と香は変身し、構えた。

その2人に、異形の怪物は掴みかかった。

「康介、早くそれを使って出口を！」

香の声で、康介はノヴァバツクルで、新たな姿へと変身した。

黒い光を纏った戦士、ウォーズ・ノヴァへと：

ウォーズ・ノヴァは大剣で、空間を切り裂いた。

「2人とも！」

ウォーズは後ろを見た。しかし、異形の怪物を抑えるので手一杯だった。

「康介！先に行って一美を助ける！」

昭彦が言う。

「でも…」

踏みとどまった康介に、香が言う。

「一美を救えるのは、康介だけだから！」

その言葉に、康介は覚悟を決めた。

「分かった、必ず来いよ！」

そう言うウォーズは、その切れ目を通り抜け、外へと帰還した。その切れ目はウォーズが抜けた後、すぐさま閉じてしまった。

異形の怪物は、その様子を見て諦めたのか姿を霧のように消した。

暗い空間に、昭彦と香は取り残された。

彼らにはもう座して死を待つしか道はない。

「死ぬのは怖くないのか…？」

昭彦は香に聞く。

「大丈夫…」

第4章 クローズ・ワールド

第31話 クローズ・ウォーズ

「また…俺だけ生き残った。」

雲一つなく、目眩がしそうになるほどの晴天を、窓際から眺めながら康介は呟いた。

また…彼は今まで何人ものクラスメイト達を犠牲にして生き抜いてきた。敵として立ちはだかった者を斬り、味方だった者は彼を庇い死ぬ。

ここまで生き残ったのは康介と一美、道永、驚花の四名と思われる。「もう、後戻りはできない。」

彼は、立ち上がり、父から託されたノヴァバックルを懐にしまった。「どこへ行くんだ？」

道永が、彼の前に立った。彼は左腕を前回の実験で負傷し、しばらく戦闘ができない。

「驚花を倒す。それだけだ。」

康介は、道永を避けて歩き始めた。

「場所は分かるのか？」

「確証はない…」

康介は、部屋を出て行った。

彼は、マシンウォーリアーに乗り、ある場所に向かっていった。

それは数日前、一美が昭彦と共に香を救出した場所。

木々に覆われた遺跡のような場所では植物達がまるで本物かのようには太陽に葉を向けて伸びていた。

ここは、香を助け出した場所であると同時に、ずっと前に殺された仲間、鮫島が息の根を絶った場所でもあった。

鮫島が殺された相手は、ユートピアの使者、そして香もユートピアの使者に操られていた。ならこの近くに敵のアジトがあるので、そ

う考えた。

その頃、一美は屋上で日向ぼっこしていた。

ただ呑気にしていた訳ではない。心を落ち着かせ、今までであった事を一瞬だけが忘れさせてくれる。ゲームのない彼女には、これぐらいしか娯樂が無かった。

彼女は、青色のデツキチエアに寝そべり、青々とした空をじーっと眺めている。

「一美。」

すると、彼女を呼ぶ声がした。道永だ。

「兄さん。」

彼女は、身体を起こし、兄を招き入れた。

「一美は日向ぼっこが好きなのか？」

「違うよ。ただ、今はこれでしか身体を落ち着かせれないから…」

道永は、そつかと返すと、手すりにもたれかかり、風を浴びるように右手を広げた。

「ところで、康介は？」

一美は、話題を変えた。

「彼なら、怪駕を倒しに行くとして出て行った。居場所がわかるらしい。」

一美は、真剣な表情になった。

まさか、一人で乗り込みに行ったのか…

彼女は、屋上から降りようと階段の元へ向かった。

「やめなさい、一美。ここは康介に任せるんだ。」

「…なんで？康介は私の仲間よ、助けに行つて何が悪いの？」

一美は、道永に詰め寄った。

「だったら、康介はなんで行く時一美に声をかけなかった。」

一美は、その答えが分からず、考え込んだ。

「一美を危険な目に合わせない為だ。」

「…だとしても行くよ。私は仲間を放っておけない。」

一美は、道永の意見を無視して行こうとした。

「俺は、もう一美に危険な思いをして欲しくない…俺を救ったあの時のように…」

彼女は、それを聞こえなかった事として立ち去ろうとした。しかし、脚はそれを止めた。

「大丈夫、自分の身は自分で守るから…」

その声を聞いた後、道永から彼女の足音は徐々に小さくなっていった。

「行ってしまった…か。」

「ここか…」

康介は、先程の場所から少し離れた施設の前にいた。その看板にはA―SEC総合本部と書かれていた。

アトランティスの役所的な立場を担っていただけあつてかなり大きな建物だ。

中に入ると、教室二つ分くらいの大きな待合室があつた。

しかし、椅子は全て片付けられ、液晶パネルもボロボロになっている。

殆ど何も無い薄汚れた壁の部屋ばかりで、手がかりになるような物は何もない。

彼は、一階の奥にある電気室に入った。そこも、他の部屋と同じようにそこにあつたであろう配電盤などは全て撤去されている。

やはりというべきか…そう思った彼の前に、更に扉があつた。

「電気室の奥にも部屋が…？」

金属製のドアノブに手をかけた時、一瞬背筋が凍った。そのドアノブは、予想以上に冷たかった。

「何もないといいけどな。」

そう言うと、ドアを開けた。

そこには、小さな黒いソファアールと機材が置かれた机と小さな窓があった。

そして、そのソファアールに女が座っているのが見えた。

「ストーカーかしら？そういうのは嫌われるわよ。」

女は、立ち上がり、康介を見た。驚花だ。

「悪いが、俺にそう言う趣味はない。それに、お前は俺に散々色目使ってたみたいだが、正直興味なかった。」

「それは大胆な告白ね。まあ、あれは演技だもの、好かれようが好かれまいが構わない。」

「演技か…あんだ女優志望か？」

「南条と同じ事を言うのね。」

驚花は、キーンを構えた。

「仇は、取らせてもらおうわよ。」

「仇…お前がそれを言うのか。」

康介は、ノヴァバツクルを装着した。

「お前らは、俺達を使って散々命を弄んできただろ。その行い、悔い改めてもらおう。」

「NOVA…SET!」

ノヴァバツクルの右側のツマミを回し、力を解き放った。

「NOVA open!」

「変身。」

「Destiny more than the space! K
AMEN RIDER WAR—Z·NOVA!」

凄まじい爆発と光と共に、康介はその姿を変える。星雲が、ウォーズの身体を形成していく。その雲が徐々に晴れていくと、青の瞳を持つ

つウォーズの最終形態、ウォーズ・ノヴァを誕生させた。超新星の如く現れた彼に対抗すべく、鷲花も怪駕へと変身する。

「最終決戦と行こうじゃないか…」

第32話 間章 彼女を守る盾

「道永、何しているんだ？」

これは少し前の出来事だ。不知火香を救出した後の話だ。

俺はこの部屋で、あるものを作っていた。

「一美に、渡そうと思って。」

それは、サバイブバツクルと同じくらいの大きさの盾のようなパーツだ。

まだ色は塗られておらず、基盤や配線が剥き出しになっている。

「だが、この世界が閉じるのだから、意味ないだろ？」

博士はそう聞く。確かに、閉じる世界には必要ないかもしれない。でも…

「でも、せめて俺が生き残ったって証を一美に託したいな…つて。」

俺は、もうすぐ死ぬ。一美や康介の為に。でも、それで彼らが幸せになるなら本望だ。

それに、これが成功するとは限らない。その時のためにもこれは必要なものになるかもしれない。博士は、その時のことは考えていないようだが。それだけ成功する可能性があるのだろう。

一美は、俺にとって大切な人だ。何者にも変え難い、唯一無二の…だからこそ、側でずっと守ってあげたい。そう再会するまで思っていた。ただ、俺が思っていた以上に一美は成長していた。強くなった、と言った方がいいかな。それに、彼女に今必要なのは康介だ。彼なら一美を俺に代わって守ってくれる。一美なら康介を一生愛することができる。

そう思った。というより、確信したと言った方がいいかな。

どうやら、寝ていたようだ。

俺が目を覚ますと、散々に荒れ果てた実験場と壊れた装着が無惨に転がっていた。

実験は失敗した…俺が生きているのが証拠だ。左腕もうまく動かない。

俺はローデイのキーを右手で持った。

「一美は…どこへ？」

俺は一美を探しに実験場を出た。

長い廊下の壁には所々大きな傷がいくつもあつた。ここでも戦つたのだろうか…

その時、前に人が居るのが見えた。男か女かは分からないが、声を聞いた瞬間、男だと分かった。

「初めまして、黒夜道永さん。」

「誰だ…？」

「僕は、火神麒麟。君の妹さんとは仲良くさせてもらったよ。」

悪意のあるように感じさせる言い方をする彼はゆっくりと俺に近づく。

「何が目的だ？」

「僕は、かつての級友を自分の手で殺めるのは嫌なんだよね。だから……」

抵抗できない俺の身体を、彼は掴み上げた。

「君の体を使わせてもらおうと思って……ウェザーと悪道、ドウアリティと豪災、ビクトリケーンと怪駕のように……いや、僕に取り憑かれたら、もう死ぬみたいなものだからもつと酷いかな……」

俺の意識は、薄らと残っている。康介も、一美も、騙されている。俺の偽物に……

……

……

⋮

第33話 クローズ・ユートピア

風の如く俊敏な斧は、ウォーズの左肩の装甲に力強く降り注いだ。怪駕は、その斧を手前へと引き抜いた。ウォーズの左腕を狙ったその攻撃は、効き目があった、そう錯覚した。

ウォーズは、肩の装甲が抉られていた。しかし、すぐにそれは修復され、元の状態へと戻る。

「何！」

今度は剣を引き抜くと、ウォーズの脇腹を貫くように突き出した。ウォーズはそれを直前のところで刃を握り、剣を手刀で切断した。

そして大剣を召喚し、サバイバツクルをその大剣に装着、ノヴァバツクルの左側にあるキー、ノヴァリンクキーを引き抜き、サバイバツクルの左側に装着。刃に星のような光が瞬き始める。

「NOVA LINK」「NOVA SABRE！」

ノヴァ・セイバー、余りにも強大な力を持つ為、ウォーズ・ノヴァでないと操ることのできない剣。星座を象ったようなその剣を右手に軽々と持ち、怪駕を十字斬りをする。

怪駕は、後ろに下がり、斧を再び構える。それとほぼ同時にウォーズが大剣に怒りを込めた一撃がぶつかり、火の粉を散らす。

「お前達さえ…お前達さえ居なければ、俺達がこんな思いすることはなかった！」

大剣で、斧を振り飛ばした事で2人とも素手になったが、間髪入れずに今度は殴り合いを始めた。

「勘違いしなくてももらえるかしら。どちらにしろ、アトランティスの消失は、私達が関わらなくても起きたのよ。全てこちらに罪をなすりつけないで貰えるかしら!!」

「どういう事だ。」

康介は腕を止めた。

「あの装置を起動したせいで、私達の人生がめちゃくちゃにされた。あれがなければ、家族を失って、悲しむこともなかった！」

驚花は、一息置くとウォーズを見た。

「…全部、あんたの父親のせいよ。」

「…」

「これは、私にとってこの瞬間は復讐のチャンスなのよ。あの時私から全てを奪った白夜総三への…」

「だったら…その復讐は、もう終わりのはずだろ。もう父さんは死んだ、これ以上なんの意味があるんだ。」

白夜総三は、既に死んでいる。それは紛れもない事実だ。

「言ったでしょ、仇だって。南条は、口の軽い奴だったけど、全てを失った私を唯一しつかりと見ていてくれた…ライバルよ。」

怪駕は、斧を再び手に持った。

「ここでお前を殺して、私は復讐を遂げる！」

怪駕は一直線に斧を振り下ろす。

「…ざけんなよ…」

ウォーズは何かを小声で言うと、怪駕の腹部を容赦なく殴り飛ばした。

「ふざけんなよ!! たった復讐如きで、関係ない命まで奪うなよ! 鮫島が! 恵理が! レイが! 忍が! 昭彦が! 香が! 関係ない仲間が、みんな死んでいった!」

ウォーズが怪駕の胸ぐらを左腕で掴み上げた。

「お前達が苦しい思いをしていたことはよく分かる。でも、それは人を殺していい理由にはならない!」

「そう言うあんただって、その何人もの仲間を生き残る為に葬ってきただろ!」

怪駕も言い返す。

「確かに、それはそうだ。だから分かるんだよ…人を殺して生きる残酷さが…彼らがどれだけ無念だったがな!!」

黒い光を纏った拳で、怪駕の顔面を殴り、放り投げた。

「だから決めたんだ。あんたを倒し、この戦いを終わらせる!」

「NOVA reopen!」 「WARIZ drop NOVA
!」

ウォーズ・ノヴァは、必殺技を発動させた。

怪駕はもはや立ち上がるのに精一杯で、防御すらまともにも出来ない。

「死んで後悔しろ。」

超新星の力を纏った拳が、怪駕のベルトを貫いた。

その衝撃で変身が解けた彼女の口から、鮮血が吐き出された。

そして、捨てられた人形のように地面に倒れ、風でかき消されるように身体が消滅した…

最後の幹部の呆気ない最後に、康介はただ立ち尽くしていた。

その頃、一美は康介がバイクを降りた場所にたどり着いた。

走ってきたため、息を切らしていた。疲れた身体を休める為に彼女は

木陰に座り込んだ。

「この辺りに、いるのかな…」

水を少し飲むと、彼を探す為に再び立ち上がった。

その時、彼女の後ろの木陰から誰かが顔を出しているのが見えた。

「康介？」

最初は、違う可能性を考え身構えた。しかし、その正体を知ってから、その緊張を少し解いた。

「兄さん…？」

そこにいたのは、頭の頂点から足先まで紛れもなく黒夜道永だった。

彼は、ベルトを装着しいつでも変身できるようキーが装填してあった。

その様子を不審に思った一美は、彼に4、5 m離れたところから話しかけた。

「なんでここにいるの？」

「ダメじゃないか、お兄ちゃんの言うこと聞かなきゃ…」

一美の質問に彼は答えない。

道永は彼女に近づきながら右手を伸ばし、掴もうとした。

「…答えになっていないわ!」

一美は、その手を振り払った。

「酷いな…お兄ちゃんにそう言うことするんだ…」

「するわよ…本当の兄さんじゃないから…」

一美は徐々に近づくと彼から必死に離れようとする。不気味なその視線に、恐怖を感じた。

「そつか…ダメな妹には、しっかりとしつけをしないとね。」

ローデイに姿を変えた彼は、剣を構えた。

「さあ、まずはどうしようか…大人しくあそこで待ってれば、遊んでから殺してあげようと思ったのね…一美ちゃん。」

「近寄らないで!」

ちゃん付けで呼ばれた事に、鳥肌が立った一美は、エレクスに変身、銃を構えた。

「これ以上近づくと、撃つわよ!」

しかし、ローデイはその警告を無視して近づく。

壁際に追い詰められた彼女は身動きが取れない。引き金を引こうにも、兄と同じ姿であるが故に引けない。身体が震え、力もまともに入らない。

このままだとやられる。

彼女は、心の中で助けを願った…

第34話 クローズ・ロード

「さあ、まずはどうしようか…大人しくあそこで待つてれば、遊んでから殺してあげようと思ったのね…一美ちゃん。」

「近寄らないで！」

「これ以上近づくと、撃つわよ！」

壁際に追い詰められた彼女は身動きが取れない。引き金を引こうにも、兄と同じ姿であるが故に引けない。身体が震え、力もまともに入らない。

このままだとやられる。

彼女は、心の中で助けを願った…

その時、グサツと何かが刺さる音がした。

それは、ローデイの腹部を貫くように刺さっていた。
ウォーズのサブソードガンだ。

「酷いな…康介、仲間だろ？」

ローデイは言う。

後ろには、紛れもないウォーズの姿があった。

「悪いな、手が滑っちゃった。」

彼は、剣を引き抜きローデイを一美から遠ざける為に蹴り飛ばした。

「で、お前は誰だ？道永じゃないな…」

「さあ、誰でしょうね！」

ローデイは、剣をウォーズに振り下ろした。

2人は、それを避けて下がった。

「お前は誰だ！本物の道永をどこへやった？」

「本物なら、今頃君のお父さん達と一緒にいるよ。」

ローデイは残酷な一言を面白おかしく言い放った。

「それはつまり…」

「そ、もう彼は死んだよ。あの後、君たちが怪駕達に夢中になっているときに…気を失ってたから、抵抗すらしなくて、楽だったよ。」

「…」

一美は、絶望の余り言葉に詰まった…

「お前…一体誰なんだ！あいつらの仲間か！」

「…どちらかと言えば、あいつらは仲間じゃなくて、駒の一つだよ。」

「何」

「まさかウォーズが勝つなんてね。正直怪駕と相打ちになって欲しかったよ。そうすれば簡単に彼女を始末できたのに…ね。」

「ふざけるな！」

ウォーズは、剣をローデイに振り下ろした。

「お前も敵なら、ここで殺すだけだ！」

ウォーズは、バックルをノヴァバックルに変えた。

「NOVA…SET!」
「NOVA open!」
「Destiny
more than the space! KAMEN RID
ER WAR—Z・NOVA!」

ウォーズ・ノヴァへと変身した彼は、ノヴァ・セイバーをローデイに突き刺した。

「道永の姿声を偽って話すのをやめてもらおうか。」

ノヴァ・セイバーを突き刺したまま、剣に刺さっているキーを回転させた。

「WAR—Z Bigbang!」

「僕は死なないよ…」

「黙れと言っているだろうが!!」

容赦ないウォーズ・ノヴァの必殺技、ウォーズビックバンは、周囲を焼き尽くしながらローデイの体も全て消し去った。

「明日、君が怪駕と会った場所で待っているよ…」

そう声が2人にははつきりと聞こえた：

「一美、大丈夫か？」

全ての難が去った後、康介は一美に手を差し伸べた。

「あの男は…」

「逃げられた…というより、あれは分身だった。」

燃え盛る木々を後ろに、2人はその場を後にした。

しばらく無言の間が過ぎていった。兄が死んでいた事を唐突に突きつけられた彼女になんと声を掛ければいいか康介には分からなかった。

「…」

一美も、何かを話そうと口を開くが、思うように言葉に出来ずに時間だけが過ぎていった。

「面白いものを見せると言っておきながら、やられたじゃないか。」

玉座に座っていた男が、前に跪いている男に言った

「まさか、怪駕がやられるとは思っていなかったの…」

「まあいい…時間は少ない、早急にあの2人を抹殺しろ。」

「承知いたしました。」

跪いていた男は、玉座の間を後にし、右手に握られた錠前を開く。それは、あの時ウォーズ達に使ったものと全く同じものだ。

彼の前には、ワープホールのようなものが開かれ、その中へと入っていた。

一美は、実験場に帰還すると、すぐさま兄の部屋へと向かった。

康介は、罨が仕掛けられているかもしれないと一緒に行くとうとしたが、彼女の「1人にさせて」の一言で彼はそれ以上何も言わなかった。

彼女は、彼の部屋に入った。そこには、彼の趣味のサスペンス小説の本と一美の幼い頃の写真をまとめてあるアルバムが立てかけてある本棚とモダンカラーのデスクがあった。

部屋は何か荒らされている様子もなく、綺麗に整頓されていた。

一美は、デスクチェアに深く腰掛けた。

その時、机の右脇にある引き出しに鍵がかかっていた事に気がついた。

その鍵はどこかにある様子はない。

彼女は、まさかね…と思いつながら、エレクスキーを取り出した。

エレクスキーをその鍵穴に差し込んだ。

エレクスキーはしっかりと奥まで刺さった。

「まさかー」

キーを回すと、施錠が解除される音がした。

その引き出しを開けると、ノヴァバツクルとはまた違う新たなバツクルと書き置きが入っていた。

彼女はその書き置きを読み始めた。

『一美へ』

これを読んでいると言う事は、俺は死んだのだろう。最期まで隣に居てあげられなくてごめんなさい。そのかわり、これを託します。本当は自分で使う予定だったけど、使い所が無さそうなので。これはきつと一美の役に立ってくれるはずだ。最後に、こんな俺を最後の短い間兄として慕ってくれてありがとう。 道永』

一美の目からは、綺麗な涙が流れていた。

そして、そのバックルを見た。

「どう見たって…私に使わせる為に作ったでしょ…」

泣きながらそう呟いた。

そのバックルは、ローデイにはないライフバックルを経由して使わなければ使用できないものだ。つまりローデイでは使えないと言う事だ。

「馬鹿……」

ありがとう……」

第35話 クローズ・アイズ

夜明け前、東側の空が少し明るい頃、康介は1人どこかへ向かおうと西へ歩いていった。

「どこ行くの?」

それを止める声がした。

後ろには朝日に照らされる一美がいた。

彼女は、康介の後ろ姿をずっと見ていた。そして、その影に徐々に迫っていく。

「また、一人で行くの?」

「そういうことだな。」

康介はここで初めて口を開いた。

「一美は、もう大丈夫なのか。」

「うん、それよりも今日は兄さんを偽っていた奴を…?」

「そういうことだな。」

康介は、一美を見た。彼女の泣き疲れた目を見て、言った。

「一美、お前は…」

「私は行くよ。」

康介の言葉を一美は遮った。

「止めても行くよ。私わがままなんだから…」

そういうと先導して歩き始めた。

康介はその様子に、少し口元を緩めた。

「しょうがない。来るなら勝手にしろ。」

昨日と同じように、康介は総合本部の中へと入っていった。一美も置いていかれないよう後ろをしつかりとついていった。

待合所を抜け、奥の電気室へと足を踏み入れた。

「アハハ…」

一美はそう呟いた。

康介は前と同じように奥の扉をゆっくり開けた。

そこには、ソファアーに座る男の姿があった。

「久しぶりだね、康介君に一美ちゃん。」

「火神麒麟…お前が…」

康介は、気色の悪い彼の目を睨んだ。

赤と黄色の服を組み合わせている彼は、黒い部屋にいてもよくわかった。

「僕は、今までの戦い。全部見てきて。特にウォーズ、あんたは誰よりも多くライダーを倒してきた。すごいよ。ホント」

「お前には分からないだろうな、俺の気持ちは。」

康介は、麒麟にそう言った。

「別に、どうでもいいし。そんなこと。君達は、ゲームのコンピュータに過ぎない。コンピュータ同士で戦わせて、その中で強いのが僕と戦える。そして、君は選ばれた。」

「俺は、そんな兇戯の為に仲間を殺した訳じゃない。生き残る為に、そして生き残って彼らの無念を晴らす為に……」

「そういうのはつまらないよ。人殺しはどんな理由があろうと人殺しだし、君の気持ちとかどうでもいいし。」

そういうと麒麟は、前に康介達を襲ったあの錠前を手にした。

「それは……」

「僕の為に作られたロックサバイブバツクル。これで僕は最強の仮面ライダーになれる。」

彼はそういうと錠前にキーを差し込み、開いた。

「降魔ノ錠前……」

「変身。」

「激施錠……」[降りユク魔ノ力……仮面ライダー降魔……]

彼はバツクルにロックサバイブバツクルを装填、錠前を閉じた。

そして、恒久の闇が彼の身体を覆う。そして、赤、青、緑、銀の道化師のような面を被った仮面ライダーが姿を表す。仮面ライダー降魔、闇を操りし、最後の仮面ライダー。

「行くぞ、一美。」

2人はそれぞれベルトを装着、キーを回した。

「変身!!」

「Destiny more than the space! KAMEN RIDER WAR—Z・NOVA!」

「Blue flame! Brave fire! KAMEN RIDER Sapphire ER—X!」

ウォーズ・ノヴァとサファイアエレクトスはそれぞれ剣を構えた。

「さあ始めよう、闇の最終決戦を。」

降魔は、両手から『闇』を出現させ、2人を掴み上げる。

ウォーズとエレクスはその闇を払い除けようと剣を振るうが、逆にその闇が分裂し、身体に纏わりつく。

纏わりついた闇は、降魔の拳が閉じると同時に爆発、2人の体力を一気に削る。

「一美、大丈夫か？」

「なんとか。」

2人はすぐさま立ち上がり、剣を降魔に向け走らせる。

降魔は闇の攻撃を次々と出すが、彼らは、それらを次々と掻い潜り、懐まで一気に迫る。

ノヴァセイバーが降魔の左腕を斬り裂く。

しかし、降魔は欠けた左腕をすぐさま再生させた。

「何!」

「僕はあるの4人のように怪人態を持たない代わりに、闇の力へ極限まで対応した。甘く見ないで欲しいね!」

後ろから迫るエレクスの剣撃を降魔は、闇になり避けた。

エレクスはそのまま光を遮った窓に激突。ガラスが割れ、外の光が差し込み、エレクスのサファイアの身体に反射した。

降魔は、エレクスの居る場所とは反対側に立っていた。

「危ないな…」

そう降魔は呟いた。

ウォーズは、降魔に間髪入れず次から次へと攻撃を仕掛ける。剣では遅すぎる為、格闘術で攻撃を仕掛ける。オレンジのエネルギーを纏った拳を降魔に突き出すが無効に避けられ、攻撃が一切当たらない。

「くそっ!何か攻略法は無いのか!」

その時、部屋中に強い光が輝いた。

「なんだ?」

ウォーズは攻撃の手を止めた。

その光はエレクスが発生していた。

スパークキーを使い自ら発光していたのだ。

「康介！今よ！」

その声で再び降魔を見ると、彼は光に狼狽していた。

「光に弱いのか！」

降魔は先程窓から光が刺した時、慌てて奥へ逃げた。その様子を一美は見逃さなかった。

光で彼の動きを止めて、弱体化させれば勝機は訪れると。

「NOVA reopen！」「WAR—Z drop NOVA
！」

ウォーズは、キックの体勢に入った。身動きの取れない降魔の元まで一気に走り右脚を突き出した。

「これで終わりだ！」

その勢いにエレクスも必殺技を発動させる。

「Re open！」「Prism ERE—X lightnin
g！」

「はあっ!!」

エレクスも左脚で降魔を攻撃した。

2人の攻撃が、凄まじい爆発を起こし、闇をも焼き尽くす炎へと変わった…

「フフ…ハハツ…」

第36話 クローズ・アトランティス

「フフ…ハハツ…」

その時、炎の中から高笑いと共に、ボロボロになった康介が地面に倒れた状態で現れた。

「えっ…」

エレクスは、その光景に唾然とした。

「光を使って動きを止める。実にいい対処法だ。ただ、それも慣れて仕舞えば、痛くも無い。その慣れるまで彼には盾になってもらったけどな。」

「そんな…」

エレクスは、狂氣的に高笑いする降魔を見た。そして、彼にどうすれば勝てるか考えた。

先程の光を出しても、慣れた彼には対抗できない。サファイアの火力でも倒せるか分からない。

康介も重症だ…撤退するしか…

「よそ見をするな!!」

その時、降魔の拳がエレクスの顔面に激突する。

その衝撃で、エレクスの変身は解け、地面に屈した。

「…これで…終わりなの…何も出来ずに…」

一美は、立ち上がろうと手のひらを地面につけた。
その時、そこに何かが落ちていてのを感じた。

それは、道永が彼女に遺した最後の切り札、アイギスバツクルだった。

「無駄だ…もうお前達に勝ち目はない。この闘技は僕の勝ちだ!!!」

「まだまだ!!まだ勝負は終わってない!!」

降魔の前に、一美が再び立ち上がった。

「往生際の悪い奴め…」

「私は今まで、何も出来なかった。誰かを犠牲にすることも…戦う事も…でも、今なら覚悟できる。」

彼女はアイギスバツクルを構えた。

「Shield up!」

「今なら、変身できる…本当の仮面ライダーエレクトスに!」

一美は、バツクルにアイギスバツクルを装着し新たなエレクトスへと姿を変える。

「AEGIS open!」
「I protect all an
d fight! KAMEN RIDER AEGIS ERE-
X!」

背後に現れた煉瓦壁のような盾が現れた。それは、一美を覆うように前へと進み、新たなエレクトスに姿を変えた。重厚な鎧を身につけて、動く要塞となったその姿は、神話に登場する神から授けられた盾のようだった。頭部の王冠は、ローディと同じ青も加わり、より神々しく輝く。

仮面ライダーアイギスエレクトス。それが彼女の名だ。

「なんだ…その姿は…」

降魔は、見たこともないエレクスの姿に驚いていた。

康介も、薄れる意識の中、一美の覚悟を見届けた。

「第二ラウンドよ。私のプレイにシビレなさい。」

サバイブソードガンソードモードを右手に少しずつ歩き始める。

降魔は、エレクスに先制攻撃を仕掛ける。

拳をエレクスに再びぶつける。

しかし、エレクスはその攻撃にびくともしない。

次は闇を使い、爆発攻撃を試みる。だが、これも鉄壁の彼女の装甲には無意味だ。ノックバックすらしない彼女の硬さに彼は恐怖を覚えた。

「なんで…なんで効かない!!」

「それは…兄さんに聞きなさい!!」

攻撃に隙が多すぎる彼の攻撃を、エレクスは剣に全て吸収し、闇を光に変え降魔の前に構えた。

そして、上から下へ剣を振り下ろし、闇を打ち払う。

光を一つにまとめたその力に再生能力も虚しく、怪我も治らない。

「貴様…許さん…絶対に!!」

「あんたにとってこれはゲームなんですよ、だったら、恨みっこ無しよ!!」

アイギスエレクスは、バックルを押し込んだ。

「これで終わりよ…」

「AEGIS reopen!」[DISASTER EREX
lightning!]

アイギスエレクスは、降魔に閃光の回し蹴りを喰らわす。

その蹴りは、降魔の身体を抉り取り、今度こそ降魔を追い詰めた。

降魔は地面に転がるように倒れた。

「くそっ…」

「あなたの負けよ…」

「こうなったら…この闇で全てを無かったことにしてやる!!」

すると、彼はベルトの錠前を開いた。前にウォーズ達を葬った時と同じように翳した。

しかし、それはすぐに下げられた。

後ろには最後の力を振り絞って降魔を押しさえつける康介の姿があった。

「一美…今のうちに!!」

康介は叫んだ。降魔は必死に抵抗するが、身動きが取れない。

「でも…そんな事やったら!」

そんな事やったら、康介も…死ぬ。

「俺もここで死ねば…一美だけでも助かる…だからやれ!!」

一美は、葛藤した。いくら自分が助かるとはいえ…今までずっと自分を守ってくれた…自分が愛した人を…

「ごめん…」

そう呟くと、アイギスバツクルを押し込んだ。

右足に力を集中させ降魔に照準を合わせる。

「はっー！」

雷の如く一瞬にして降魔のベルトにキックを放つ。

轟音が彼らを包み込み、今度こそ降魔を撃破した。

爆炎が晴れると、康介を抱える一美の姿があった。

「康介…しっかりしてよ…」

一美は、康介を起こそうとした。

「…一、美…」

康介は、少し目を開き、右手で彼女の頬を流れる涙を拭き取った。

「あり、がと…う…」

その手は、地面に落ちた。身体が徐々に消え、光となった。

「それはごっちの台詞だよ…ありがとう。」

「作戦は失敗…か。仕方ない。彼ら4人にもう一度チャンスを与えてやろう。君達にも丁度いいだろ？」

玉座の男が見下ろす先には、傷だらけの亡骸になっている昭彦と香の姿があった。

「今度こそは成功させる…普通ならやり直す事はできない。時間を巻き戻さない限りね。」

最終章 終わりなき戦の果て 第37話 それは二度繰り返す

「お手を煩わせて申し訳ございません…」

「有能な部下に、手助けするのが正しい上司の在り方だ。」

部下らしき人物が部屋を出てから、上司の外国人の男は窓の外を見た。

「1ヶ月前と同じ景色だな。濁った…汚く混ざり合う…」

「俺は、何故ここに…」

暗闇の玉座の前に北川光司は再び姿を現した…というより、『未来を思い出した』。

「絶王…君は誰に殺されたか、分かるかい？」

玉座に座る男は、身体を前のめりにして聞いた。

「山田康介…清宮一美…」

「そうだ。今から、その2人を討伐しろ。それが、作戦成功の基盤となる。」

「承知致しました。」

そう言うと、光司はその場を後にした。

ピピピ…ピピピ…

デジタル時計のアラームが、彼女の部屋に鳴り響いた。

「んん…」

うるさいアラームを止めようと布団の中から手を伸ばし、時計を手
に取ろうとするが、中々届かない。

諦め、布団から出た清宮一美は、ようやくアラームを止め一息つい
た。

デジタル時計の時刻は9時2分、日付は2月1日土曜日になってい
る。

彼女は、いつもならそこからもう一度布団に入るが、今日は珍しく
ベッドから降り、手鏡を見ながら髪を整え始めた。

それもそうだ。今日は数日遅れとはいえ、親友である康介の誕生日
を祝う日だった。

本来なら1月25日の予定だったが、冬の時期に似合わない大雨の
せいで延期になってしまった。

待ち合わせの時刻は11時。余裕を持って準備を殆ど前日に終わ
らせておいた彼女は、朝食を食べ終え、着替えると、再び自室に戻り
ゲームを始めた。

そこから1時間以上、時計を気にする事なくゲームに没頭してい

た。そんな彼女が画面から目を離れたのは、スマホの通知が鳴った時だった。今日待ち合わせている康介から「寝坊するなよ。ちゃんと1時に来いよ」というメッセージだった。

そのメッセージを見た彼女は、時計を見た。指す時刻は10時40分、すでに待ち合わせの時刻まで20分を切っていた。

「やばー」

彼女は、持ち物が全て入った手提げ鞆を持ち、部屋を飛び出していった。

自転車を漕ぎ、急いで待ち合わせの駅前公園まで風の如く走った。

駅前公園の近くの駐輪場に自転車を停めたのが2分前、そこから大急ぎで走って、待ち合わせ時刻の10秒前にギリギリ到着した。

待ち合わせの場所では、康介がやっぱりなと言う顔でせえせえ息を吐く彼女を見ていた。

「おつかれ、水買ってこようか？」

康介は、彼女に気遣いで水を買おうとしたが、「いらない」と言う返事に少し残念な顔をした。

鞆の中から水を取り出し、それを一気に半分くらいまで飲み干すと、ようやく呼吸が戻った。

「じゃあ、行こっか。」

一美は、立ち上がり彼を見た。

しかし、そこで彼の動きがまるでマネキンの様に動かなくなった。

康介だけじゃない。周りをゆく人皆。空に浮かぶ雲も、冬の乾いた風も……

「……」

そして一美も……

ピピピ…ピピピ…

デジタル時計のアラームが、彼女の部屋に鳴り響いた。

「んん…」

うるさいアラームを止めようと布団の中から手を伸ばし、時計を手
に取ろうとするが、中々届かない。

諦め、布団から出た清宮一美は、ようやくアラームを止め一息つい
た。

デジタル時計の時刻は9時2分、日付は2月1日土曜日になってい
る。

彼女は、いつもならそこからもう一度布団に入るが、今日は珍しく
ベッドから降り、手鏡を見ながら髪を整え始めた。

それもそうだ。今日は数日遅れとはいえ、親友である康介の誕生日
を祝う日だった。

本来なら1月25日の予定だったが、冬の時期に似合わない大雨の
せいで延期になってしまった。

待ち合わせの時刻は11時。余裕を持って準備を殆ど前日に終わ
らせておいた彼女は、朝食を食べ終え、着替えると、再び自室に戻り
ゲームを始めようとした。その時、机の上に水色の箱と何に使うか分

からない鍵が四つほどあった。

「何これ？こんなものあったっけ？」

彼女は不意に金色の鍵を手を取った。

その時、彼女の脳に響く様に『記憶』がのめり込んできた。

アトランティス：黑夜道永：サバイブバツクル……

そして仮面ライダーエレクス。

「えっ…私…なんでここに？」現世に

彼女は、前回の記憶を思い出した。まるでゲームを前回のクリアデータを引き継いで始めたかの様に…

サバイブバツクル、スパークキー、ウォーズキー、マツハキー。エレクスとウォーズが使っていたキーが何故ここに…

彼女は、怖くなった。なんで自分が生きているのか、なんでキーやバツクルがここにあるのか、なんで『2月1日』に戻っているのか…

一美は急いで鞆を持つと家を出た。前よりも焦った。大量の冷や汗で額を濡らし、自転車を漕いだ。

彼女が待ち合わせの場所に着いたのは10時にも満たない時間だった。

とにかく康介が生きているか確かめたかった。こんな早くに来てでも…

しかし、まだ康介はいない。流石にまだ来るわけないかと一呼吸おいた。

「一美にしては早いじゃん。」

その時、後ろから聞き覚えのある声があった。

彼女が後ろを振り向くと、いつもの姿をしている康介だった。

「なんでこんなに」

康介は、彼女が何故こんなに早く待ち合わせ場所に来ていたのか気になり、聞こうとするよりも早く一美は康介に人目も憚らず彼に抱きついていた。

「よかった…よかった…」

何がよかったのか…唐突に抱きつかれた康介は完全に困惑していた。周りの人もその様子をじーっと見ていた。

「か、一美ちよつと離して…苦しい…」

「あ、ごめん…つい…」

彼女はある事を感じた。「康介は記憶を取り戻していない」という事だ。もし知っていたら今の意味が分かるはず…

「ついって…まあいいや。せっかく早く集まったんだから早く行こう。」

「そうだね。」

2人は、目的の場所へ向かおうとしたその時、背後から悲鳴が聞こえた。

何事かと皆悲鳴を上げた1人の女性を見た。

そこには、彼女に手を伸ばし襲い掛かろうとするホッパーの姿があった。

その光景を目の当たりにした市民は、他人の事など考えずスーパーボールが弾ける様に逃げ惑い始めた。

「一美、俺たちも逃げるぞ…?」

康介も、一美の手を引き逃げようとした。

しかし、彼女は動こうとしない。彼女の手には、サバイブバックルが握られていた。

「康介は先に逃げてて！」

サバイブバックルを装着した一美は、康介の前に立ち、逃げる様促した。そして、キーを構えた。

誰もが未知の生物に怯えて、逃げ惑う中、彼女はそれに動じず、まるで歴戦の勇者の様な立ち姿で、「変身！」と叫んだ。

「EREX key!」
「Open!」
「Lightning go
dds! KAMEN RIDER EREX!」

彼女の身体は、黄金色の光に包まれ、雷鳴の女神の異名を持つ戦士、エレクスに姿を変える。

サブライブソードガンを取り出した彼女は、増殖するホッパー達に向けた。

「行くわよ…」

電撃を帯びた剣は、ホッパー達を次々と薙ぎ倒していく。剣を振るうたびに、雷が落ちた時の様な轟音が鳴り響く。

そして、その様子を建物の陰から康介は見ていた。今の彼には一美が見たこともない姿で戦っている事が信じられなかった。

「一美…まるで仮面ライダーみたいだな…」

彼がそう例えた直後、彼女の後ろからホッパーとは別の敵が現れた。氷の様な透き通った青の装甲を身につけた仮面ライダー、仮面ライダー絶王だ。

「久しぶりだな…エレクス。」

その氷の様に冷たく暗い声にエレクスは彼に視線を向ける。

「…何故こんな事を？」

「当然さ、俺たちの計画を無茶苦茶にしたお前らを始末する為にはな!!」

絶王は、そう言う身丈ほどの槍を構えた。エレクスはそれを剣を構え、対抗しようとする。

その槍は、剣が振るわれるよりも早くエレクスの身体を貫く。

いくら一度戦った相手とはいえ、武器のリーチがこちらの方が不利、こちらの剣が届くよりも早く槍が振られる。

そしてついにエレクスの装甲が耐えきれず、変身が解除されてしまう。

彼女が持っていたキーが地面にばら撒かれ、一美は、タイルに叩きつけられた。

「これである時の復讐は果たせるな。」

絶王は、槍を彼女の心臓に向けた。

「…このキー、どこかで…」

一方、康介は自分の目の前に落ちたウォーズキーを手に取った。

「さあ、死んでもらおうか!!」

一美は死を覚悟した。絶王は、槍を突き刺そうと腕を振り下ろす。しかし、その直後、ドスンと何かがぶつかる音がした。絶王は、一瞬ふらつき、地面に足をついた。

彼女の目の前には、ウォーズキーを握りしめた康介が立っていた。

「康介…逃げてなかったの?」

「…男が、女を置いて逃げれるか…それに、コイツらは俺たちにとつて因縁の相手だ。だったら尚更逃げる気はないな。」

「ぐっ…貴様も記憶を取り戻したか…」

絶王が、再び立ち上がった。

「一美、バツクルを!」

その康介の声で一美はバツクルを康介に投げ渡した。

「変身!」

「WAR—Z key!」「open!」「Masked warrior
or!KAMEN RIDER WAR—Z!」

緑の装甲が現れ、それらが装着されていく。康介の身体は、仮面の戦士、仮面ライダーウォーズへと姿を変えた。

「誰が変身しようが、殺すだけだ!!」

絶王は、槍を再び突き出す。

ウォーズは、それを華麗な身のこなしで後ろへ避ける。

そして、残りのキーを拾い上げると、ベルトにマツハキーを装填した。

拳を構え戦う素振りを見せたウォーズ。しかし、その脚は次の瞬間一美を抱え風の様にその場を去っていった。

追いきれないスピードで逃げられた為、絶王は追跡をやめた。

「次こそは、必ず…」

そう誰もいない公園で捨て台詞をはいた。

第38話 戦場に一筋の光

「一美、大丈夫だったか？」

変身を解いた彼は一美に聞く。

「私は特に…というか、なんで逃げたし。」

彼女は、康介の目を見た。

「戦略的撤退と言つて欲しいな。どちらにしろ、今の俺達と絶王は力の差がありすぎる。勝ち目はない。」

「確かに、残念だけどそれもそうね。せめてサファイアキーとスペシャルキーが有ればね…」

絶王、あの世界で2人がそれぞれ強化された姿で協力して初めて倒せた相手だ。今、バックルが一つしかなく、尚且つ使えるキーも限られている。格上の彼に勝てる道は無いも同然だった。

「せめてこいつが2つ有れば話が多少変わるんだけどな…」

康介は、手に持ったバックルを、一美に返すと言つて右手に持たせた。

「…ところで、さつきから気になってるんだけど…」

一美は、康介の顔を覗く様に目を見開いて肝心な事を聞く。

「なのであの世界の記憶を取り戻しているの？」

それもそうだ。彼はついさつきまでここまでの記憶が無かったはず…

「…俺も、なんで思い出したのかは分からない。ただ、ウォーズキーを手にしたら、泉が湧き出す様に感じた覚えのない…というより元の未来で感じた事が蘇ってきた。」

「そういえば、私もエレクスキー触ったら記憶が戻ったのよ…もしかして、自分が使ってきたキーを触ると記憶が戻るのかな？」

「という事だろうな…」

「どうやら彼らは記憶を取り戻した様だな。」

玉座に座る男がそう言った。

「はい、ですがバックルは一つで強化アイテムもない様なので作戦に支障はないかと。」

立膝をついた北川光司は、そう言い放った。

「分かった。後は任せる。」

そう言うのと玉座の男は闇の中に姿を消した。

「大言壮語して、大丈夫なのかしら?」

彼の後ろから西本鷺花が言った。

彼女の後ろには南条翔と東雲早苗の姿もあった。

「俺はこの任務を成し遂げ、あんた達を超えてやる。」

光司は鷺花と翔を睨みつけ、その場を後にした。

「貴女も、そんな所で立っている余裕はないんじゃない?」

鷺花は振り向きもせず、後ろの早苗に言った。彼女はその言葉には何も反応しなかった。

その夜、康介は月明かりに照らされるベランダでウォーズキーを眺めていた。

何故ウォーズキー含め4種のキーとサバイブバックルは一美の部屋に現れたのか…俺じゃなかったのは何故か…

そんな事を考えているうちに、身体が冷えてきたのか、鼻がムズムズしてきた。久々の寒さで風邪をひきそうだ。

部屋に入って灯りをつけるのと同時に、自分のスマホから着信音が鳴った。デイケイドの変身待機音にしてある為時々玩具が誤作動しているのと勘違いしそうになるが、今日は電話だと気づいた。

相手は非通知だった。最初は切ろうかと考えたが、直感がそれを許さなかった。

通話ボタンを押し、スマホを耳に当てた。

「もしもし。」

「……サバ、……。」

そこで聞こえたのは、酷いノイズ音とサバという言葉だった。

「サバ……？おい。いたずらか？」

「明日の10……公園……。待って……。」

悪戯と思い切ろうとした時、声が聞こえた。酷いノイズで具体的な事が全くわからない。強いて言うなら声が男であった事くらいしか分からなかった。

「おい、待てー！」

そう声を出したのと同時に電話が切れてしまった。

「まさか……財団か？」

康介はこの少ない情報から敵の誘導作戦ではと思った。明日の10時？にどこかの公園で決闘でも申し込んだのだろうか。

彼はそう推測すると、すぐ様一美に連絡をした。

翌日、朝早くから2人は地域中の公園を手分けして探し回った。しかし、いくら探し回っても財団どころか怪しい人間は1人も居なかった。

そして、いよいよ10時になろうとしていた。残るは後一つ。

その公園近くの神社にて合流した2人は一緒に捜索しようとしたその時、彼らは現れた。

「ようやく見つけたぞ……。」

絶王は、多数のホッパーとダークホッパーを引き連れ彼らの前に現れた。

「誘導作戦とは、よく考えた割には伝え方が雑なんじゃないか?」

「誘導? なんの話だ?」

絶王は、誘導についてどうでもいい素振りをし槍を振り下ろした。

「康介、下がって!」

エレクスに変身した一美は、剣で氷を纏った突きを跳ね返した。

「こいつを使え!」

康介はマツハキーを取り出し、エレクスに投げ渡した。

「サンキュー!」

それをうまく手に取った彼女は、そのまま滑る様に剣にキーを装填した。

「full open!」 「Sonic slash!」

疾風の如く走る剣先が、絶王の装甲に次から次へと攻撃を繰り出す。

そして、最後の攻撃を繰り出そうと剣を突き出した。

が…

「そんな攻撃、見破る事など容易い。」

絶王は剣が自身の胸を貫くよりも早く槍を彼女の左肩に突き出した。

その攻撃にエレクスは悲鳴をあげ、生えている大木の一つに身体を打ち付けられた。

「一美!」

康介は、その様を見ていられなかった。

「俺にも…力が有れば…」

彼は拳を強く握った。

その間にも絶王は彼女にじわじわと近づいていた。

槍を構え、その喉元に突きつけようと。

その時、康介にはあるものが見えた。

絶王はついに彼女の前で立ち止まった。そして身体を大きく振り

かぶった。

やられる…そう覚悟した彼女は仮面の中で目を瞑った。

キン…

その時、目の前で鳴り響いたのは剣と槍が交わる音だった。

そこでは康介が先程エレクスが落とした剣を使って、槍を塞いだのだ。

「ふざけた真似を！」

「ふざけているのはそっちの方だ。散々人の命を弄んでおいて今度は時間を巻き戻してなかった事にしようとするなんて…」

康介は、両手で剣を持った。

「俺達はお前らには二度と屈しない…この平和を守るため…二度と自分達の様な人達を出さない為に!!」

その言葉に逆上した絶王は、槍を地面に突き、氷柱を2人の立つ地面に発生させた。

しかしこれも塞がれた。氷は叩き割られ、2人の目の前にはローデイの姿があった。

「遅くなった。」

「道永!」「兄さん!」

ローデイは、左手に持っていたものを康介に渡した。ウォーズ用のサバイブバックルだ。

「これを。」

「ありがとな。」

康介は、それを腰に巻き、キーを構えた。

「変身!!」

「WAR—Z key!」

彼はキーを回転させ、変身を発動した。

「open!」「Masked warrior! KAMEN RI
DER WAR—Z!」

グリーンのラインが彼の身体を覆った。そして、顔は青の複眼と翠

の仮面、黒のアンテナへと変化し、左胸には特徴的なZのラインが浮かんだ。

仮面ライダーウォーズの登場だ。

「これ以上、お前達に運命を弄ばせない!」

「私達のプレイにシビレなさい!!」

3人は、それぞれが得意とする技で攻めかかった。

まずローデイが空間に道を作り、回避する方向をなくし、背後に回った。

そのローデイに夢中になっている絶王は、エレクスの電撃を纏った手刀を受けてしまう。更にローデイが回し蹴りし、絶王はウォーズの元まで転がってしまう。

「これでも喰らえ!」

両手にサブライブソードガンを持ったウォーズが次々と絶王の身体を斬り裂いていく。

ついに絶王は立ち上がるのが精一杯なところまで追い詰められてしまう。

「一気に決めるぞ!」

3人はそれぞれキツクの態勢に入った。

「再展開!」[ROAD—Y exceed!]

「Re open!」[ERE—X lightning!]

「Re open!」[WAR—Z drop!]

絶王が顔を上げると、すでに3人は空中にいた。ローデイは左から、エレクスは正面から、ウォーズは右から迫ってきた。八方塞がりの彼はそれを喰らうしかなかった。

そして、彼はその攻撃を喰らい爆発した…

「奴は死んだのか?」

玉座の間でこの様子を見ていた翔が呟いた。

「いや…彼はまだ生きている様だ。」

その事を示すかの様にウオーズ達が必殺技を放った場所には、氷の結晶が降り注いでいた。必殺技を受けるコンマ1秒の間に氷の身代わりを作り逃亡したのだ。

「残念だ…実に都合が悪い。」

「道永、なんでこんな所にいるんだよ？」

変身を解いた3人は、向かい合った。

「昨日連絡しただろ？ サバイバツクルがなくて大変だから10時にこの神社の近くの公園で待ってるって。」

「えっ…」

一美は康介を見た。

康介は、確かに言われてみれば、そんな事を言っていたかもしれないという顔をした。

「でも、ノイズがひどくて…」

「ああ、それは俺がスマホに慣れてなくて、うまく話せてなかったからだ。もしかしてよく聞こえてなかった？」

「はあ…しようがないか。」

「しようがないわよ！ そのせいで朝早くから起きて無駄に走らされたんだから…」

3人はその後、いろんな事を和気藹々と話しながらその日を過ごした。

第39話 古き都の従姉弟

その建物はとてつもなく大きいものだった。平安時代の貴族が住んでいた寝殿造の様なその建物に、少年と少女が大きな庭が見える縁側に腰掛けていた。

「はあ…家の仕来りだがなんだが知らんけど、今日の宴面倒くさいな…」

虎山恵理は、足を外に出し、ぶらぶらと揺らしていた。彼女はゆったりとした黒色のワンピースを着ていた。

「しようがないよ。まあ、夜までの辛抱だよ。」

もう1人、足立レイは壁にもたれかかって座っていた。黒のタキシード風の服を着ている。

彼女らがいる京都にある虎山家の屋敷。そこでは、毎年旧暦の正月に全国に散らばる家族が揃って一年の健康と幸せ祝う宴が行われる。

そんな儀式に、血が繋がっている2人も当然参加する。

虎山家は、朝廷が存在する時代からある由緒正しい家で、名の由来は、最初の当主が虎の様に威勢がいい男だったからと伝えられている。

現在、虎山家は京都を中心に活動している旅行会社、タイガートラベルの頂点に存在しており、この社長こそこの家の当主である。そして、その当主を継ぐものとして恵理が最有力候補となっている。

「ねえ、せつかくだし抜け出そう。」

恵理は、立ち上がるとレイの手を取り、廊下を駆け出した。レイは強く手を握られ半ば強引に連れ出されてしまった。

「京都か…修学旅行以来だな。」

その頃、京都駅の前に名古屋からやってきた山田康介がいた。

その言葉の通り修学旅行の時初めてやってきた京都に再び足を踏み入れた。

何故そうなったのかと言うと…

「つまり、俺たちの様に今までのクラスメイト達が襲われる可能性があるのか。」

康介は、その日道永と一美の2人と共に自身の家にいた。

「そこで提案なんだが…」

道永は、説明を終え、一つ提案をした。

「彼らにもう一度仮面ライダーとして武器を取って戦って貰えるよう交渉しないか？」

「それいいね。私は賛成。」

一美は襲われそうなクラスメイトを逆に仲間の仮面ライダーとして引き入れることに賛成だった。

「俺も賛成だが、無理矢理やらせるのか？」

「それは、無しだな。この世界は現実だ。ここで死ねば本当に死んだことになる。やりたいって言う人は少ないだろうな。」

康介はよく考え、賛成と言う意見を出した。そして、早速向かいに住む恵理にその交渉をしようと立ち寄った。が、なんと彼女らは1週間以上家を空け京都にいと知った。更に、親戚のレイも京都にいたことが分かるとすぐさま新幹線の切符を取り、新たに調整されたロードイと同じタイプのロードライバーを2機とバイパー、ウエザーの新造キーを持ち京都へ旅立った。本来なら3人で行くべきだろうが、誰か1人残っていないと、ここに住んでいるクラスメイトが危険に晒される。また一美は東京へ別のクラスメイトの交渉へ向かった為、残ることになったのは道永だった。

京都は実に広い。町中に広がる道は一本一本規律正しく並んでおり、それらが京都という街並みを形成していた。その中から恵理達を探するのは困難の極みだった。

「どこにいるかぐらい聞くか…」

康介はスマホを取り出し、恵理にメッセージを送ろうとした。その為にメッセージの画面を開くと、丁度彼女とレイが映る写真が送られてきた。

「今どこにいるでしょうか？」

子供染みたそのメッセージを見て、康介は丁度いいと思った。背景には、京都の街中が空から見たかのように広がっている。

「まさか、京都タワーか？」

京都タワー、駅から徒歩数分の場所にある。それならすぐに向かえる。

彼はメッセージにこう返した。

「今から行く」と。

その言葉通り康介は、京都タワーの展望台にいる恵理とレイの2人に顔を合わせた。

「まさか本当に来るなんて。」

「丁度京都に来ててな。」

恵理達には敢えて本当の目的を言わず、たまたま居たという偶然を装った。

「そんな偶然もあるんだね。」

レイは康介に聞こえないくらいの声でつぶやいた。

「まさか、先を越されるなんてな…」

その頃、京都駅にはもう1人別の人物が降り立った。南条翔だ。彼はどうしようかと少し考え込んだ。

そして、一つの答えにたどり着いた。

「あの手で行こう。」

彼は、自信に満ち溢れた足取りで歩き始めた。

その頃、京都タワーを後にした3人は、鴨川を沿うように北へ歩いていった。

「2人はここで何してるんだ？」

「家の年中行事で旧正月に集まって宴を開くんだけど、実際の所は大人が淫らに酒を飲んで遊ぶだけの集まりで、子どもが居ても楽しいものじゃないんだ。だから僕達はこうして抜け出して京都をうろろろしてるんだ。」

康介の問いにレイは丁寧に答えた。

「まあ、抜け出した所で何か問題がある訳じゃないし。」

恵理が続けて言う。

「へえ…」

そんな会話を続けながら、徐々に五条大橋に近づいていた。

五条大橋は、昔牛若丸と弁慶が出逢った場所と知られている鴨川に架かる橋だ。

「もうそろそろ五条大橋ね。」

そう言うと、恵理は顔を上げ橋を指さした。すると、念力で念じたど勘違いされてもおかしくないかのように男性が1人川に転落した。更に人々の悲鳴が響き渡る。橋の上にはホッパの大群が占領している。

「何あれ!!」

恵理達は初めてみたかのような反応を示した。それもそうだ。その時の記憶がないのだから。ただ1人反応が違う人物が居た。

康介は、悲鳴が聞こえた時には既に変身して走り出していた。

次から次へと、牛若丸の如く身軽に体を動かした。そして、ホッパを切り裂き、橋の中腹で動けない観光客達を避難させた。

観光客を避難させたウォーズの元に、雷を纏った矢が放たれた。そ

れは肩を掠めそのまま川へと落ちていった。南条が仮面ライダーに変身した姿、豪災だ。

「久しぶりだな、あの時の借り、返しに来たぜ。」

「要らない貸し借りだな。貸しっぱなしでいいんだけどな。」

2人は互いに見据えた。

その様子をレイ達は橋の西側で見っていた。

レイは、先程康介のカバンのチャックが少し空いているのが見えた。

その中を恐る恐る除くと、見た事ない機械が入っていた。

それを手に取ろうとした。しかし、そのタイミングで控えていたホッパーが2人に襲い掛かる。

「まずい……これが作戦か。」

「そうさ……生身の人間を殺すのには、ホッパーで十分さ。」

豪災は自信ありげに言った。しかし、その自信はあっけなく崩れ去った。

ホッパーは押しのけられ、地面に倒れていた。

そこには、黒と銀に輝くサブライブソードガンを持った仮面ライダーウエザーの姿があった。

第40話 彼女の表と裏

「これを使えば…僕も…」

レイ、彼は康介の鞆からロードライバーとウエザーライダーチェンジキーを取り出し、ドライバーは腰に巻きキーを左手で持った。

そして、キーを左側に装填、回す事でライダーへの変身を遂行する。徐々にオレンジメタリックの身体に変化していく。

仮面ライダーウエザー、彼があの世界で戦った時の姿、それが今ここに再び現れた。

彼はすぐ様剣を装備、隣で危険な目に遭っている虎山恵理の前に立ち、ホッパーへ回転斬りを見舞う。

「なんだと…」

豪災は、目の前に参上するはずのない人物に目を丸くしている。

「レイ。」

豪災の拘束を解き放ち、ウオーズはウエザーの隣に立った。

「ブリザードキーを使え、一旦引くぞ。」

「分かった。」

ウオーズという言葉にウエザーはブリザードキーを持ち応える。

「させるか!!」

豪災は矢を次から次へと放ち、雨の如く差し向けた。

「Blizzard key!」

しかし、その雨が降る前にウエザーは氷の巨壁を作り出した。その隙にウオーズは恵理と自身の荷物を持ち、バイクに乗り込んでその場を猛スピードで去っていった。

「逃がすか!!」

豪災は、雷を氷の巨壁に降らせる。ウエザーはそれに撃たれてしまう。が、それと同時にウエザーの姿は霧に隠れるかの如く消え去ってしまった。

「という訳で、私の友達をここに一晚だけ泊めさせてもらえないかな？」

恵理は、目の前に座る白髪混じりの男に俺を今晚ここに泊めさせてくれる様頼んでいた。もちろんこうして泊めさせてくれる様頼んでくれるのはありがたいし、更に「本当は日帰りの予定だったけど、私が無理して一泊するよう頼んだから」と自分の面が汚れてもいい様な理由付けをした。

「いいだろう。」

白髪混じりの男、後々タイガートラベルの会長である事は後々知ることがその男は重い口を開きそう告げた。

この家にはとにかく沢山の人がいた。それら全員違う家族だろと言われてもおかしくないくらい男や女、子供がいる。レイから聞いた話によると、ここにいる全員血の繋がりが濃い者たちだということ。一体どれだけ居るんだよ。

その日の夕食は豪華なものだった。殆ど和食ばかりだったが、大皿にこれでもかと言うほど料理を載せてバイキング形式でみんなを食べた。自分は大人数で会話しながら食べるなんて事はして事なかったが、周りの人達も悪い顔せずに俺と関わってくれた。

俺は夕食だけいただいたが、今日は宴の日らしくこの後も様々な催し物があったらしい。だが、会長の奥さんが「長旅で疲れているだろうから風呂に入って疲れをとったほうがいいんじゃないですか？」と言われ、その気遣いに甘える事にした。

その屋敷は1人に一部屋配ってもまだ部屋が余るほど沢山の部屋があった。その中でも俺は客間、それも庭が1番よく見える部屋に連れて行かれた。そこからは、庭だけでなく夜の京都の街を見下ろす事

ができ、とても広々としている。しかもそれだけでなく、テレビにコタツにヒーターに、挙げ句の果てにはこの部屋専用のトイレや洗面台まである。ここまで来るともはや旅館だ。

その時、部屋の襖をノックする音が響いた。旅館気分になっていた俺は一瞬女将さんと勘違いしたが、その気分を一瞬にして消し去った。

「どうぞ。」

そう俺が言っただけで来たのは、レイと恵理の2人だった。

俺は2人にある事を問いかけていた。「俺や一美と共に仮面ライダーとして戦ってくれないか。」と。正直、イエスと応える事はないだろうと半分思っていた。

「昼間の話…なんだけど。」

恵理は、話を始めた。手短かに、だけど具体的に答えを言った。

「ごめんなさい。私は…一緒に戦えない。」

俺はやはりなという顔をしたが、隣に立っていたレイは予想外の回答で恵理の方を見た。

「確かに…2人の力になればいい…そう思うけど、怖いから。」

彼女はそう答えた。怖い、という割にはそんな雰囲気はなかったが、問い詰めはしなかった。

彼女が部屋を後にした後、レイは俺を見た。

「レイはどうするんだ？」

「僕は…戦うよ。一緒に。誰かを守る力があるのなら…僕は手を伸ばしたい。大切な人の為に。」

彼のいう大切な人、それは恵理の事だ。

高校に入ってから知ったのだが、2人は従姉弟に当たらしい。それだからだろう。だが…それだけじゃない気がする。レイには、家族以上の想いを彼女に持っているのでは、そう錯覚してしまうが俺の気のせいだろう。

私には言えない…一緒に戦おうなんて…言える訳ない。

散々、彼らのことを利用してきて…今更言えない。

あの日、私が立ち直れたのも…私がこうして私を保っていられるのも…全て。

最低だ…

高校生になつてから少し経つた時、最初は心を開かなかつた康介や一美と関わっている様子を見て優しい人だと言つた人がいた…でもそんな事はない…私は、ずっと利用してきたのだ。自己満足の為に…私は、醜い以外の何者でもない。

だから…だから…

「恵理、ちよつといいい？」

レイだ。今は入られたくない…醜い私が居るここに…

駄目、そう叫ぼうとした。しかし、口から溢れた言葉は全く違う言葉だった。

「うん…」

彼は襖を開け、中に入った。

私も彼も寝巻きを着ていた。一瞬昔一緒に寝ていた頃を思い出したが、すぐ様かき消した。

「どうしたの？」

「さっきの答え…どうしても気になって。」

薄々そんな気がしていた。

「…恵理らしくない、そう思ったから。」

私らしくない…違う。そんな訳ない。

私は、本当の事だから…そう口にしようとしたが、何故か詰まっ
て出ない。

その時、頬を何かが流れ落ちた。レイはそれに驚いた。

「僕が何か傷つけた？」

慌てていたレイを落ち着かせようと涙を止めようとしたが、止まらない。それどころか、一滴…また一滴と落ちていく。何故流れるのか

分からない…止まって…止まってよ…

気がつけば私は彼の身体に抱きつき、身を預けていた。

レイは、それを嫌がらず、優しく包んでくれた…泣き止むまですつと…醜い私を…

「私は…康介をずっと利用してきた…自己満足の為に…彼を、康介を」
泣き止んだ私が、本当の理由を口にしようとした時、レイは首を横に振った。

「僕より、康介にその事を伝えた方がいいよ。」

「康介に…」

深夜、殆どの部屋の灯りが消えた頃、私は康介がいる部屋の前に立っていた。

今、とにかく怖かった。真実を告げる事を。康介、怒るかもしれない…殴られるかもしれない…一生口を聞いてくれないかもしれない…そんな事ばかり考えていた。

そんな恐怖を押しつけ、襖を叩いた。

「康介…起きてる?」

こんな時間に起きている訳ない、そう思った。だから扉がゆつくりと開いた時、びっくりした。

「何かあったのか?」

後ろの暗い部屋の窓が開けられており、どうやらずっと起きていたのではと思った。

「ううん、ちよつと話をしたいなって思ってた。」

「分かった。」

彼は部屋に招き入れた。部屋の灯りをつけようとスイッチを押さうとしていたが、私が窓越しに夜空を見ているのを気遣いつかなかつた。

しばらく私達は、夜空を見上げていた。何か話すわけでもなく、ただずつと。

彼は何も聞かなかった。何故来たのか。私が話し始めるのを待っていた。

私は覚悟を決めた。

「私、謝る為に来たの。康介に。」

謝られる覚えのない彼は、その言葉に少し驚いた。

「私は、貴方や一美を、ずっと利用してきた。陰で。あの時、私が立ち直れたのは、自分の力じゃないの。周りを蠅の様に飛び回るマスコミに追われる貴方を見て、思ったの。」

あの時…アトランティスが消えた時からずっと…

「私より『不幸』な人がいるのだから、私は悲しんで居られないって。だからずっと優しくしていたのは、貴方達を哀れに見ていたから…」

私の一言一言を彼はずっと聞いていた。

「そんな醜い私が、今更いい顔して協力なんてできない。」

気がつけば、私の頬を一滴の涙が伝っていた。

「なら、あの時より前の優しさはなんなんだ？」

「えっ？」

「いつも俺を気にかけていた恵理は、なんだったんだ？」

康介は優しい口調で言ったが、私はそれにいい返しを思いつかなかった。

彼は、右手を差し出すと、私の涙を拭き取った。

「俺は、別にそんな事で恵理を恨んだらり、嫌ったりはしない。俺は知っているからな…恵理が、優しい事を…」

嘘だ…そんなわけない…そんな…

ふと、頭の中にアトランティスが消えた前日の事が浮かび上がった。

公園で、一人でボールを蹴っている康介、そこへ得意でもないのにサッカーしようと誘う私。

それだけじゃない、彼が筆箱を忘れ物をした時筆記用具を貸した事、一緒に校外活動をした時の事、いろんな事が彼から伝わってきた。

私は再び泣き出した。さっきの子どもみたいな泣き声じゃなくて、涙だけを静かに流した。

「今なら、どう応えるんだ？」

収まった私に、再び声をかけた。

私は、答えが既に決まっていた。

翌日、私達は先に帰る康介を見送る為に京都駅に来ていた。

改札前に、レイと一緒に立っていた。

「じゃ、また名古屋でな。」

「気をつけてね。」

康介は改札の中へと入っていった。

「結局、恵理はベルトを受け取らなかったの？」

レイは聞く。そういえば、まだ答え言っていなかったっけ。

私は自信に満ちた表情でキーを見せた。

それを見てレイは、よかった、と笑顔になった。

「どうやら、手に入れる前に殺そうとしたが、これは失敗だな…」

南条翔は、2人が笑顔で屋敷に戻ろうとする姿を睨む様に見送った。

「東京の方はどうかな…」

第41話 東の都の恋人達

「将来、昭彦は何になりたいんだ？」

1人の男、父さんが小さな俺の頭に手を優しく乗せた。

「父さんみたいなすごい医者さんになりたい！」

小さな俺は、綺麗な眼差しでそう答えた。

「私があそこに居なかったから…だからみんな死んだんだ!!」

「あなた、やめて!!」

首に縄を掛けようとする父さんとそれを止めようとする母さん。

その姿は、今でも残っている。

「運命には、逆らえないんだ…この罪は、死んで償うしか!」

結局、あの時の父さんの自殺は母さんによって止められた。

ただ、それ以降父さんは壊れていった。

あの時言った『運命には逆らえない』。あの言葉は、今でも俺の戒めとして脳の中心部に刻み込まれている。

運命に逆らえないと決めつけるのなら、死ぬ運命にある患者は救えないと。そう訴える様に。

だから俺は医者になる事だけ考えればいい…

それだけ考えれば…

…ツキー。

アツキー…きて。

「早く起きてよ、もうすぐ東京着くよ。」

「…ん。もうそんな時間か。」

夢から解放されたばかりの俺に声を浴びせる不知火香。

正直、睡眠を阻害された事に苛立ちを覚えるが、起きなければこのまま新幹線と共に車庫へ連れて行かれるか、清掃員に起こされる羽目になる。

俺達は、共に春から東京で暮らす事になる。住む場所は違うが、俺は有名な医科大学、彼女は憧れの雑誌記者としてそれぞれ新たな道へと入っていく。

その下見に俺は1人で行こうとした…のだが、この女は俺が東京へ行くと知ったその瞬間デートだと言って着いていきたいと言い始めた。まあ、拒否しようとしたが母さんから賛成され仕方なく2人で来る事になった。

ちなみに、母さんは彼女のことを息子の命の恩人だと言って神の様に接して…それは言い過ぎか。まあ、彼女は良い人だと買い被っているが、俺からしたらただの遊び好きの馬鹿だ…

「やっぱり東京と言ったら…」

東京駅から降りた彼女は俺に話しかけてきた。どうやら東京の名所を聞いている。東京の名所と言ったらあそこしかないだろ…

「こうきよ「スクランブル交差点でしょ!!」」

一瞬、騒がしい東京の街に静寂が訪れたた気がした。

東京の名所って皇居じゃないのか…そうなのか？

「だって、ゲームでしか渋谷見た事ないんだから行きたいのは当然でしょ! さあ行くわよ!!」

東京に来てまでわざわざ人混みに行くのか…正直嫌だな…

丸の内駅舎を背に彼女は歩き出した…

が、何故かすぐに立ち止まった。

「ねえ、渋谷のスクランブル交差点ってどうやっていくの?」

その何気ない質問が、再び東京の街に静寂を訪れさせた：

「2人は一体どこへ行くのかな…」

その2人の後ろにいる彼女、清宮一美。彼女は京都へ向かった康介を見送った後、2人が東京行きの新幹線に乗るところを目撃した。ギリギリ切符を購入し、同じ車両に乗り込んだ彼女は2人の駅を行ったり来たりする様子をやや不思議に思いながらも2人の後をつけていった。

2人は、迷路の様になっている東京の色々な所を回った。2人は鉄道で基本移動したが、色で分かれている事の素晴らしさに感動していた。なんと乗り換えしやすい事かと。名古屋じゃオレンジラインの東海道線と中央線で色だけでの判別なんて出来るわけではない。

そしてその2人に着いていく一美もまたその2人に着いていった。普段出歩かない彼女からしたらこんな動き回することは苦痛ではない。

夕方、2人は郊外にある宿泊施設に向かって歩いていった。お土産袋を大量に抱えている香とその一部を持たされている昭彦の姿は、大きな影として映っていた。

「そろそろホテルだ。」

「うん…」

香は不満げな顔をしていた。

「どうした？何か不満なのか。」

「なんで2人一緒の部屋にできなかったのかなーって。そうすればお金も浮くし、2人一緒のベッドで寝れるし…」

「馬鹿なことを抜かすな。俺はその様な事はしたくないぞ。」

「その様な事ってどんな事？」

しまった…彼女のペースに乗せられてしまった。その後の彼女の悪女の笑みは憎たらしいが、どこか可愛げのある気がする…何を思っているんだ…俺は。

「賑やかね。2人とも。」

その時、前から全身黒い服に身を包んだ女が現れた。その女、見覚えがあるどころか、つい最近まで同じ学舎で学業を共にした級友の1人、東雲早苗だった。

「おっ、ハヤナエじゃん！もしかしてお土産待ちきれなくて来ちゃった？」

香は突然現れた彼女にいつものように声をかけた。

しかし、その問いに彼女は答えない。

「すまない、2人とも。だが、命令には逆らえない。」

早苗の腰には、紅のバックルが装着されていた。

「なんだそれは！」

昭彦が聞く。

「変身…」「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

彼女は、灰色の悪魔の姿、悪道へとその姿を変えた。

「許されなくても、それでいい…」

右手に持つ蛇腹状の剣を、地面に叩きつける様に2人へと振り下ろす。

「やめて!!」

しかし、その剣は、2人の後を追っていた一美、エレクスによって蛇が巣へ帰る様に弾かれた。

「一美…」

悪道はそう呟いた。その声を聞き逃さなかった2人は、エレクスに問いかける。

「イチミンなのか…」

「うん。事情は後で説明する。」

エレクスは後ろを振り向き、2人を見た。

「…」

悪道は、不意打ちに失敗し撤退する為はその身を炎で包み、一瞬にして灰のように風に乗せられ消えていった。

「なるほど…ハヤナエはその手先の1人で、私達を消そうと…」

一美はホテルに着いた2人に、ここまで彼女が見聞きして来た話を全て話した。

「うん。だから、その組織を壊滅させる為にも、力を貸して欲しい。」
「…私は、協力するよ。ハヤナエを止めたいし、その組織を壊滅させないと私らが平和に暮らせないからね。」

「ありがとう、カオリン。」

「俺は…その話、聞かなかった事にしてくれ。」

香は、協力すると答えたが、共にいる昭彦の答えはその反対のものだった…

「俺は、戦いに肩入れできるほど余裕もない。危ない事をするつもりもない。」

そう言った彼の背中を2人は眺める事しか出来なかった…

第42話 戦う運命、救う人命

「俺は、戦いに肩入れできるほど余裕もない。危ない事をするつもりもない。」

そう言うしかなかった。俺には、果たしたい願いがある。他の事する余裕なんて、ない。

「どうやら、こちらも先回りされていた様です。」

夜闇の路地裏から、早苗の声が聞こえた。彼女はスマホを顔に当てている。誰かと話している様だ。

「そうか。お前ほどの強さならあの3人が束でかかって来ても勝てるだろ。」

彼女は一美、香、昭彦を頭に浮かべた。

「はい…」

「なら、心配する必要は無さそうだな。」

電話はここで終わった。彼女はスマホを顔からそっと離れた。

そっと溜息をついた彼女は、キーを取り出した。

「私には、もうこうするしか道が…」

もうすぐ暁の刻が迫る頃、昭彦はホテルの部屋の窓から東の空を見ていた。星が瞬く黒い空から赤い朝日の空に変わろうとしていた。

彼はずっと考え事をしていた。医者は戦場には出ない。人を救う仕事だ。なんの繋がりもない仮面ライダーはできない。そう考えていた。だからこそ、彼は断つたのだ。父親の二の舞にならない、運命に勝つ医者になると…

その時、部屋のドアをノックする音が響いた。

こんな朝早くに誰だ、そう思つて扉を開けた。

「おはよう、アッキー。」

香だった。どうやら早く目が覚めて彼を起こして散歩しようとしたのだらう。

昭彦は彼女を部屋に入れ、朝日を見る事を提案した。それを快く快諾した香は一緒に窓際に座った。

「朝日なんて真面目に見たことなんてないや。」

香が興味津々に言う。

「そうだろうな、だいたい香が起きる時刻にはとつくに朝日は顔を出してるからな。」

そう昭彦が言ったのを最後に部屋に静寂が訪れた。

徐々に眩しい光が部屋を包んでいく。

その様子を2人はずっと見ていた。

朝日がほとんど顔を出した頃、香は懐から何かを取り出し、昭彦に渡した。

「イチミンから、渡してくれて。」

「俺は…仮面ライダーにならないって言っただろ。」

昭彦は顔をしかめた。受け取る気配もない。

「…昭彦。」

香は、久々に彼の名を言った。

「…なんだ？」

「人には言えない事情はいくらでもあると思う。それも大事かもしれない。でも、医者と仮面ライダーは繋がってる…似てる気がするんだ。」

昭彦は、はっとした。俺の脳の中を見たのか、そんな顔をしている。ついさつきまで考えていた事を…

「だって、どちらも人の命を救う事じゃない？ 医者は診断したり、手術したりで。仮面ライダーだって、昨日のイチミンみたいに人の命を助ける為のものだから。だから、せめて医者に向けて本格的に勉強する前の少しの時間だけでもいいから、力を貸して…」

医者と仮面ライダーは似てる…か…

一応ベルトを受け取ったものの、彼はまだ決断できなかった。

一美も加わり3人は東京見物をしようと丁度ホテルの地下駐車場でタクシーを待っていたその時だった。

目の前に変身した状態の早苗…悪道が現れた。

「一美、香、今日こそお前達を…」

早苗は言葉を詰まらせた…その詰まりを剣を強く握りしめる事で飲み込もうとした。

「早苗…」

悪道は、ホッパーを呼び出した。戦う準備はできたと言う合図だった。

「私達も。」

「ああ。」

一美と香はそれぞれベルトを巻き、キーを構えた。

「変身!!」

「open!」「Lightning goddess! KAMEN

RIDER ERE—X!」

「set up!」「大展開!」「仮面ライダービクトリケーン!!」

雷鳴の女神エレクス、勝利の神風ビクトリケーン。風神と雷神の様な2人は、互いに剣を構えた。

「私達の神的プレイで」「シビレなさい!」

「臨むところだ、私も負けるわけにはいかない。」

悪道は、右の剣の刀身を蛇腹状に変化させた。

鞭の様にその剣を操り、地下駐車場の壁を傷つけながら2人に迫る。

2人はその勢いに押される事なく武器に力を与え、振りかざす。雷と風が混ざり合い嵐の様に迫る。

その嵐を悪道は蛇腹剣で切り裂いていく。

その切り裂いた隙間からホッパー達が攻めかかる。
不意の攻め立てでエレクスとビクトリケーンは、後ろに下がる。

その姿を昭彦はずっと見ていた。

「…俺は…どうすれば。」

そう考えていたその時、目の前にビクトリケーンが倒れた。慣れない戦いでホッパーに調子を狂わされ、完全に防戦状態になっている。

「香！」

気がつけば彼の体は既にベルトにキーを刺していた。

「set up!」「大展開!」「仮面ライダードウアリティ!!」

昭彦の体は、ドミネートとも、デスとも違う新たなドウアリティに変身していた。二つの姿が混ざり合った姿、ドウアリティデュアルに…

彼は彼女に近寄り、庇う様に立った。

「アツキー、決心ついたんだね。」

「ああ、だが1ヶ月の間だけだぞ。」

そう言うとうドウアリティは2本の剣を構えた。

そして、迫り来るホッパーの群れを次々と薙ぎ倒していく。

エレクスは、悪道との一騎打ちの状態まで持ち込んでいた。

ほぼ互角、そこまで持ち込んでいた…が、エレクスは悪道に脇腹を蹴られ、その場に倒れ込んだ。

「一美…」

悪道は、剣をエレクスに振りかざした。

が、その切先は寸前の所で止まっていた。

「なんで…」

一美はそう呟いた…その答えを彼女は知る前に横槍が入った。
ドウアリティが全てのホッパーを始末し、悪道に迫っていた。

「また次だ…」

悪道はそう言うとうドウアリティに切られる前に姿を消した。

「とりあえず、昭彦がドウアリティになってくれてよかったよ。」

一美は言う。

「あくまで、俺が本格的に東京で暮らす1ヶ月後までだぞ。だから…
それまでに決着をつけてくれよ。」

「分かった、約束する。」

昭彦は、そう言うのと微笑んだ。

「ちよつと、浮気ですか!」

その2人に香が割り込んだ。

当然そのつもりのない2人は、顔を見合わせると大笑いした。

第43話 誤解のあの日

「そう言うわけだ、そっちへ行くにはもう少し時間がかかりそうだ。」
「分かりました、博士。」

2人を見送った道永は今、近くのカフェに向かっていた。その途中、ある人物から電話がかかって来た。

道永はその電話を切ると、待ち合わせのカフェに着いた。
中に入ると、窓側の一番奥の席に待ち合わせの人がいる事に気がついた。

道永がその人物と会うのは初めてだったが、何も繋がりがない人物というわけではない。

相手も、道永が入った事に気がつくのと、目を合わせて軽く会釈した。

「はじめまして、鮫島拓真さん。」

道永はそう先に座る人物に言った。彼の名は鮫島拓真、山田康介の友人であり、一美以外である世界で初めて共闘した人物。道永はその人物と交渉をしに来ていた。

「道永さん、こちらこそはじめまして。」

彼は既に康介から事情は聞いていたらしい。ライダーになる事を快く引き受けてくれた。

「俺は、出来る事なら彼の力になりたい。だから、よろしくお願いします。」

その言葉に彼が康介とどの様な関係かがよくわかる。だが、康介の話によると、あの時は割と協力的に否定的だったそうだ。これは康介が勝手に考えたことだが、自分が全員倒して生き残りたいと願っていたから、友達だろうが殺す気で居たから協力しようとしなかったのではと。

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

そう言つて俺はロードライダーとメガロドンのキーを渡した。

このロードライダーやキーは全て彼が先ほどまで会話していた人

物が作ったものだ。といってもロードライバーは既存のローディの物を誰でも使える様改良したもの、キーはウォーズ達があの世界で手に入れたキーを模倣して作ったものだ。

「後残るキーは一つか…」

道永が持つているキーは後一つ。その人物は康介によると一番説得が難しいと言っていた。その人物とは午後別の場所で待ち合わせしていた。

白い大理石で出来た噴水が特徴的な公園で彼女は腕時計を見ながら待っていた。黒一色であるにもかかわらず見惚れる様な服装の彼女は、周りを見て該当する人物を探した。

正直、行くのをやめようかとも考えた。だが、康介から送られてきたメールで、「あの日の真実を伝える」と書かれていた。あの日…どう考えてもアトランティスが消失した日のことだ。行かないわけがない。

「忍?」

その時、後ろから声をかけられた。その声は、康介とも、ましてや道永とも違う女の声だった。

その声の主を彼女はよく知っていた。

「美叶。」

西園寺美叶、彼女の昔の、そして今の親友だ。どうやらたまたまここを通りかかったらしい。

「どうしたの?こんな所で。」

「待ち合わせてを…」

忍は、彼女に相手の名前をあえて告げなかった。あの日の事を聞いてほしくないから。

その時だった。周りから小さな悲鳴が聞こえはじめた。

周りを見渡すと、ホッパー達が2人を囲う様に立っていた。

その真ん中に、斧を構えた女性の様な姿の仮面の戦士がいた。

「久しぶりね。でも、すぐにさよならよ。」

「西本鶯花…」

その声が多少低いが、明らかに西本鶯花であるとすぐに分かった。ホッパー達は、彼女達に襲い掛かろうとした…その時だった。

銃声と共にホッパーが1人倒れた。

その後ろには、漆黒の仮面の戦士がいた。

「貴様…」

鶯花はその男を見た。

「あの人…どこかで…」

美叶はそう呟いた。

「お前達、やれ！」

ホッパー達は鶯花の指示で一斉に襲いかかった。

「きゃあっ！」

その拍子で美叶は転び、頭を打った。

「美叶！」

忍が近寄り、体を起こそうとする。

彼女は先程の衝撃で気絶している。その体を起こすと、彼女に黒い影が映った。ホッパー達は2人の目のところまで迫っていた。

「嫌!!！」

恐怖で動けない忍は叫んだ。先程現れた戦士は、鶯花と戦闘中で手が離せない、絶対絶命の危機だった…

「はあっ!!！」

その時、目の前にいた3体のホッパーが一斉に斬り倒された。黒い鮮血が空を切るその後ろには、ローディの姿があった。

「大丈夫ですか？」

「美叶が…」

忍は半泣きで言った。ローディは、彼女の脈を測り息をしているか確認した。口元に手をかざすと、正常に息している事がわかった。

「大丈夫だ、気絶しているだけだ。」

「道永、彼女達を！」

黒い戦士がローデイに向かって叫ぶ。鶯花は、ローデイの乱入に驚いていた。

ローデイは、逃げる為に空間に道を出現させ、目眩しの様に使つてその場を後にした。

「あの男…」

「いいだろう？ 私の一番弟子さ!!」

ローデイがいた所を睨みつけた鶯花は、黒い戦士の腹部への攻撃に一瞬身体の色を奪われた。

「待て……」

彼女が顔を上げると、黒い戦士の姿すらそこには無かった……

「とりあえず、ここまで来れば安心だろう。」

3人は、先程の公園から離れた運動公園に降りた。ローデイは変身を解き、道永の姿に戻ると抱きかかえていた西園寺美叶の体をゆつくりと近くのベンチに寝かせた。

「さつきは、ありがとう。」

頃合いを見計らい、忍は道永に礼を言った。美叶の無事を確認でき、敵も撒けた為、一安心したのだろう。

「別に、逃げただけだよ。」

その時、バイクの走ってくる音がした。一瞬、敵かと思えば彼女はビクビクしていたが、正体を知っていた道永はバイクに合図をした。

乗っていたのは、先程の黒い戦士だった。

「2人は無事か？」

「ああ、1人は気絶しているがすぐに意識は戻るだろう。」

彼は安心のため息をつくとき、ベルトのキーを引き抜き、人肌を露わにした。

忍は、その姿を見て驚愕した。自分がずっと忌み嫌い、憎んできた

男、白夜総三だったからだ…

「どうした？」

その感情は表情にも現れていた。睨みつける視線に総三はその意図をすぐに察した。

「康介が言っていた通りか…」

白夜総三は、キーを自分が来ていた背広の内ポケットにしまうと、彼女を見た。

「君に辛い思いをさせてしまった事は詫びよう。だが、憎む相手を間違えないでほしい。」

その言葉に、彼女の沸点はピークを迎えた。

「ふぎけるなよ…あんたのせいでどれだけの人が苦しんだと思っっている。」

「確かに、アトランティス消失の引き金となった装置は私が作ったものであり、管理体制が不充分であった事は認める。だが、その引き金を引いたのは私ではない。」

「そんな嘘、信じられるか！」

気がつけば忍の右の掌は握りしめられ、総三の顔面に迫っていた。

「待って！」

その声に、彼女の拳は寸前で止まった。

「美叶…」

その声は、ついさつき目が覚めたばかりの西園寺美叶だった。白夜総三がやってきた辺りから聞いていたらしい。

「その人が、あの時私を助けてくれた黒い人だから…」

「あの時…まさか記憶を？」

「うん…」

どうやら彼女は先程の衝撃で記憶を取り戻した様だ。その記憶には、すっかりとあの時の思い出が刻まれていた…

「ごめん…忍。今までずっと思い出してあげられなくて…」

美叶は泣きそうだった。その表情に釣られ忍も泣きそうだった。泣き顔を隠す様に彼女を抱きしめた。

いいよ…気にしてないから…そう耳元で呟いた…

「感動の再会って奴だな…」

「ええ…」

その様子を見ていた男2人も映画を観て感動している感覚に陥った。昔一緒に遊んでいた親友が再会した時には記憶がなくて。そんな感じの映画になりそうなの…そんな事はどうでもいいな。

忍はその後、道永の交渉に応じ、ベルトとクノイチのキーを受け取った。

これで今ある六つのキーは全て本来の持ち主の元へ行き渡った…

終わりは近い…

第44話 最終手段

「久しぶりだな、康介。」

「父さん…」

白夜総三が再び現れたその日の夕方、康介と一美は早速総三の元に現れた。

「一美君も、元気そうで。」

「いえいえ。」

白夜総三は、手短かに用件を済ますと言うと、持っていた黒の鞆からスペシャルキーとサファイアキーを取り出した。

「これを作っていて合流が遅くなった。」

「これはスペシャルキーにサファイアキー。」

康介は驚きを口にし、スペシャルキーを手にとった。一美も、サファイアキーを手にとった。

「私は一度見たものはある程度複製できるからな。前と同じ使い心地かは分からないがな。」

「あるだけでも嬉しいです。ありがとうございます！」

「それと康介にはもう一つ。」

そう言うと、今度は白い布に包まれたものを取り出した。丁寧にその布を開くと、ノヴァバックルが姿を現した。

「ノヴァバックルか…それまで作っていたんだな。」

康介はそれを右手で取ろうとした。しかし、総三もノヴァバックルを強く握りしめ、取れない。

「なんで力入れてるんだよ。」

「ノヴァバックルはあの世界では何事もなかったが、現実では違う。強大な負荷がかかる。だからあくまで最終手段として使ってくれ。」

康介は、分かったと頷いたことでようやく力を抜き、手に取ることができた。

「私は一旦帰る。知り合いを待たせているんでね。」

そう言うと総三はバイクに乗り、夕日に背を向けて走り出した。その姿を康介と一美は見えなくなるまで見送った。

「そういえば、この事をせめて担任には…湯山先生には話した方がいいんじゃないの？」

一美はそう呟いた。

「いいや、だめだ。この戦いに関係ない人を巻き込むわけにはいかない。例えそれが担任でも…」

湯山玄武：彼らの担任の教師だ。とてもいい教師として生徒には人気がある。そんな人を巻き込みたくない。康介は思っていた。

「明日、お前達は私と共に行動してくれ。」

西本驚花は、後ろに立つ北川光司と東雲早苗に言った。

「承知しました。」

驚花がその場を後にした後、2人は顔を見合わせた。

「驚花、学校にいた頃の煙たい女とは別人の様だな。」

「そうね、前は女優志望だったのかしら…」

翌日、鮫島は親の遣いで買い物をしていた。鮫島はこう見えても買い物の名人で、新鮮なものを安く買ってくる。特に魚は。

生憎今日の夕食はカレーで魚介類は一切使用しないため、腕を振るえなくて残念だ。

「よし、これで全てだな…」

「よお、鮫島。」

帰路についていた彼に後ろから声をかけた人物がいた。

「…北川か…」

「今日はお前の命日だ。」

鮫島が後ろを振り返ると、絶王の他、悪道と怪駕の姿があった。

「俺を仕留めようという訳か…やってみろよ。」

鮫島は買物袋を道の端に避けると、ロードライバーを取り出し、装着した。

「変身。」

「set up!」 「大展開!」 「仮面ライダーメガロドン!!」

腕や脚から銀に輝く鱗の様な刀を見せる仮面ライダー、メガロドンが再び現れた。

剣、槍、斧を振りかざそうと迫る。それらを右腕の手刀で振り払う。後ろへバク転しながら下がり、敵を寄せ付けない。その姿はまさに海の王者メガロドン。

しかし、地に脚をつけた瞬間、身動きが取れなくなった。

絶王のヘルブリザーによって凍らされた脚を動かそうと錯誤するが、それよりも早く悪道の剣が彼の体を切り裂いた。

怪駕はトドメを刺そうと斧に風のエネルギーを吸収し始めた。

その時、横から新たな戦士が怪駕を攻撃しながら現れた。

電撃を纏った剣を振りかざしたのは、エレクスだった。

「大丈夫か?」

「まさかこんな所で会うなんてな。」

エレクスは、剣で氷を突き刺し砕いた。

「2人になった所で変わらない。」

「それはどうかな。」

エレクスはそう言うと、サファイアキーを取り出し、変身した。

「Sapphire key!」 「open!」 「Blue flame! Brave fire! KAMEN RIDER Sapphire ERE-X!」

「その姿か…俺は大嫌いなんだよ。」

絶王は、自分が2度も敗北したサファイアエレクスを見ると激昂した。

氷柱の様な氷、プロミネンスの様な炎、竜巻の様な風を3人は放出

し、エレクスにぶつける。

しかし、氷は弾かれ炎は効果なく、風も重量があり持ち上がらない。
「前より強化されている…」

サファイアエレクスは、6本の角が生えたサファイアブレードを構え歩き出す。怪駕は武器を邪剣に変え、迫る。

剣の攻撃をエレクスは横へと流し、絶王も難なく斬り裂く。

しかし、やはり数が多いため決め手に欠けていた。

その時だった。

「私も助太刀する。」

「set up!」「大展開!」「仮面ライダークノイチ!!」

現れたのは、クノイチに変身した八代忍だ。漆黒の鎧に身を包んだ彼女は変幻自在な攻撃で敵を攪乱していく。

3人は、防戦するしかできない。

「俺も負けていられるか!」

メガロドンも完全に回復し、敵を斬り裂く。

3人の戦士は、それぞれ武器を構えた。

「Grade up!」「Prism lightning star!」

「再展開!」「MEGALODON viking!」

「再展開!」「KUNOICHI assassin!」

流星群の如く降り注ぐ光弾、銀の斬撃エネルギー、漆黒の手裏剣弾は、敵を爆散させた…

が、彼らは炎の中から再び姿を現した。それも怪物の姿として。

悪道が変身したデビル、絶王が変身したカイザー、そして怪駕が変身したのは指輪の様な装備を身体の至る所につけ、左右でブルーとピンクで正反対の色をした怪物、ラバーリング。

「さあ、第二回戦とシヨウ ज्याナイか…」

濁った声ながらも、怪駕は意識を留めていた。しかし、悪道とカイザーは完全に力に飲まれ今にも暴走しそうだった。

いや、すでに暴走を始めライダー達に襲いかかろうとしている…

「はあっ!!」

その時、頭上から大剣を振り下ろし地面に着地する戦士が現れた。漆黒の鎧を身につけた最強の戦士ウォーズ・ノヴァだ。

「一美、鮫島、八代。大丈夫か?」

「遅いよ、康介。」

「ああ、悪い悪い。」

ウォーズは軽く詫びると、剣を再び構えた。

「前より重く感じるが、戦えなくはない。」

そう言うと、ラバーリングとカイザーに攻撃を始めた。

エレクスも、デビルに攻撃を仕掛ける。

ウォーズ・ノヴァは、メガロドン、クノイチと共に2人を追い詰めていく。

暴走で目が眩んでいるカイザーは、ウォーズの一太刀を喰らった後、クノイチの連続斬撃とメガロドンの踵落としをくらい撃沈。そのまま人間態に戻った。

ラバーリングはトマホークの様な斧を2つ握りしめて仕掛ける。が、ウォーズノヴァノヴァ特効能力には敵わず、弾き返される。

「もう2度と、傷つけさせない。」

「WAR—Z Bigbang!」

ビックバンの様な力を持った大剣が、ラバーリングに降り注ぐ。

間一髪の所で死を免れた彼女は、変身を解き気絶している光司と共にその場を後にした。

一方エレクスはデビルと互角に戦っていた。

どちらも一歩も譲らず、倒れる気配もない。

その一瞬だった。エレクスは、足元を滑らせ転びそうになった。その隙をデビルは逃さず攻撃を仕掛けようとした。刃の様に鋭い尾を

エレクスに突き刺そうとした……が、そちらも動きが止まった。
しばらくもがき苦しむと、デビルは元の早苗の姿に戻った。

「早苗……」

早苗は何も言わず姿を消した。

「康介、一つお願いがあるのだけど。」

戦いが終わった後、鮫島と忍と別れた2人は並んで歩いていた。

「なんだ？」

「悪道を……早苗を倒すのは……止めるのは、私に任せて欲しい。」

「なんでだ？」

康介はそう聞いた。

「親友だから……」

そう言った後、しばらく沈黙が流れた。

そのまま家に着いた康介は答えを出さずに一美と別れた。

第45話 呪いの過去

季節外れの大雨が地面を叩きつけている。

私はその中を歩いていた…

「作戦は失敗したのか…まあいい。どちらにしろ戦いの仕上げといこう…その前に。」

闇の玉座に座る男は、突然立ち上がると北川光司の前に立った。

「絶王、そして悪道。お前達は用済みだ。」

男は光司の首を片手で持ち上げた。そして、右脚を異形の姿に変え蹴り飛ばした。

彼は最期の言葉を発するまでもなく壁にめり込むように打ち付けられた。

男は、彼が死んだ事を確認すると今度は私に標的を変えた。

私は急いでその場を後にしようと走り出した。

「逃がさない。」

背後で突然火の手が上がった。爆発だ。その爆風で私は倒れそうになったが、悪道に変身しその場を過ぎ去った。

「豪災、怪駕。追いなさい。」

追手は撒いただろうか…

背中に降り注ぐ雨が傷口に染みて痛い…

足も動かない…

その時、私は地面に倒れた。こんな時に足を挫いてしまった…

ここで…死ぬのか…

一美…香…

その時、背中に当たっていた筈の雨が止んだ。だが、周りを見ても雨は降っている。

それは薄れゆく意識の中で分かった…

どこだ…どこへ行った…

あの女はどこだ…

私は、何かの物陰に隠れていた。

声は、明らかにあの男だ。

それもそうだな…私はあの時貴方を殺そうとしたのだから…

その時、外から聞こえていた彼の声が消えた。

そうか…他の場所に…

「ようやく見つけた…仲間の敵だ。」

その時、目の前の暗がりからその男山田康介が現れた。憎しみに満ちたその

眼で怪我を負い、疲弊している私を見つめる。

私は…ここで死ぬのか…

私は、彼が剣を振り下ろすと同時に瞼を閉じた。

痛みはなかった。ただ、そのかわり私を現世へと誘った。

最初に見えたのは白い天井だった。

私は、ベッドの上で寝かされていた。

それに、服も乾いたものに着せ替えられている。

見覚えのないその部屋は、清潔な空気が保たれているのはまだ寝ぼけている私にもよく分かった。

身体をゆっくりと起こすと、その部屋の全貌が分かった。木目調の勉強机、黒や黄色、白などの謎のオブジェクトが飾られている棚。そして、その棚の前で本を読んでいる男の後ろ姿がある。間違いない、彼だ。でもなんで…

「なぜ…助けた？」

「うわっ！びっくりした…」

彼は驚きながら後ろを振り返った。私站了起来事に少し安堵の表情を浮かべたが、すぐに掻き消した。

「大丈夫か？」彼はそう聞いた。私は素直に「今は」と答えた。

私は、改めて不思議な事を質問した。

「なぜ私を助けた？」

「そうだな、普段の俺ならあの時見捨てるか、そのまま殺していただろうな。」

「なのに助けた？」

「…一美に言われたんだよ。早苗を倒すのは…止めるのは私だって。何故なら、親友だから…ってな。」

「そうか…一美が…」

「後で一美に感謝しろよな。」

「そう言うとは彼は部屋を後にした。」

「一美に感謝…か。」

「流石に連絡しておくか…」

大雨の中、清宮一美はダークブルーの傘をさして歩いていた。

雨のせいか、人の通りがない大通りを進む彼女の前に緑の傘をさした初老の男が迫ってきた。

その人は、一美の姿を見ると、口を開いた。

「清宮さん？」

「一美は、声の主に覚えがあり、反応した。」

「湯山先生、こんにちは。」

「その男こそ、康介達の担任の湯山玄武という男だった。」

「こんにちは、清宮さんはこれからどこに？」

「友達の家に…」

「東雲さんの？」

湯山は、彼女にそう聞いた。何故ピンポイントに聞いてきたのか分からなかったが、素直に違います、と答えた。

「気をつけて行くんだよ」と先生の言葉を後ろに聞きながら、康介の家に向かった。そこにいる早苗に会う為に……

「彼女の家では無かったか……」

何か意味深な事を口にした湯山玄武は、再び正面を向き歩き始めた。

「……」

早苗は、茶色のシミ以外何も無い天井を見上げていた。これから先、どうすればいいのか……このまま死ぬのか……

彼女にとって人生は「既に諦めた」ものだった。

あの時、バイフーとの死闘で死ぬつもりでいた……このまま生き残っても組織に捨てられる、それなら自分から死を選んだ方がいいと。

そして実際捨てられた……

行き場のない彼女は、今こうしてベッドの上で時が過ぎて行くのをぼーっと寝て感じていた。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

入ってきたのは、康介だった。

彼は、何か腹の満たしになればとお粥を作ってきた。

彼女は、そのお粥を受け取ると恐る恐る口にした。正直、お粥自体美味しいと思わないが、それでも食べればする……筈。

だが、彼が作ったお粥はお世辞にも食べれるとは言えないものだった。まず水分量がおかしい。正直水の中に米粒が入った物を飲んでいる感覚だ。味も何か違う味がした、それもお粥に入るべきではない

物の：

「上手くないだろ？」

康介が自虐気味にいう。彼女は、それを当然の如く「美味くも上手くもないね。」と言った。だが、彼女はそれをなんとか完食した。

彼は無理して食べなくていいと言ったが、彼女は無視した。

「とりあえず、腹を満たす事はできた。感謝する。」

「ああ。」彼は生返事を返すと机の上に食器を置いた。

そして、何か聞きたそうな顔をして彼女を見た。

彼女もそれを感じ取った。

「何から話せばいい？」

「そうだな、まずは何故あそこで倒れていたのか？だな。」

「：私は、組織に捨てられた。ただそれだけのことだ。死んでもいい、なんて思っていたのに逃げ出してね。」

「あんたでもそんな事思っただな。」

「私は、とつくに心は死んでいる：体だけ生かされている。実際その様な物だからな。」

「そうなのか？」

「あのアトランティスが消滅した日、私や他の仲間達は死んだ。そして、その中の一部から私達を選び、蘇生し、身分を偽らせ、飼い慣らした。」

その様な重大な事を簡単に口にする彼女に少し驚いたが、彼はそれを押し込めた。

「私の本当の名前はもう覚えていない。家族は誰か、どこで生まれたのか、そもそも何故あそこに居たのか。」

そう言うと、彼女は押し黙ってしまった。思い出せない記憶がある事が悔しかった：寂しいと感じた。

「俺についても聞きたいか？」

ネガティブな感情に陥っていた彼女に康介は声をかけた。

「：そうね。でも、話していいのかしら？私は敵なのよ。裏切るかもしれないのよ？」

「確かに。でも、あんたもその敵に割と多くの事を話しただろう？」

言い返せなかった彼女は、仕方なく気になっていた事を聞いた。

「今でも夢に出てくる…レイを私が消した時に見せたあの怒り、なんなのかしら？」

「…そりゃ、もちろん友達がやられたんだから…」

「それだけじゃないでしょ？いくら他人が殺されたとしても、あそこまで怒りに包み込まれる事はない…そう私は思うのだけど…」

康介は、重いため息を吐いた。痛いところを聞いてくるな、そう思った。

「…俺が昔アトランティスの一件で誹謗中傷を受けた事は当然しているだろう？」

「ああ、よくその話を聞かされたからな。」

「俺が中学生の頃までその様な事は続いた。話しかけても無視される、心ない言葉を浴びせられる。だが、その日はそれだけじゃなかった…」

中2の頃、放課後彼は教室で1人残って帰宅の準備をしていた。部活に入っていたが幽霊状態だった為、いつも早く帰っていたが、その日は日直の仕事で遅くなっていた。そんな時だった。

教室に2人の女子と3人の男子が入ってきた。いつも彼を寄ってたかつて虐めている主犯格の人物だった。

丸刈りで野球の男は、ポケットの中からマッチを取り出した。

「これ、マッチなのは分かるだろう？」

「…だからなんだ？」

康介は、睨む様な口調で言う。

「火をつけて、お前を痛めつけるんだよ。」

そう言うと、マッチを一本取り出し火をつけた。そして、それを制服で隠れる左肩に押しつけようとした。逃げようとする康介を残り2人の男子が抑え、1人の女子がカッターを突きつけた。

「抵抗すると殺すわよ。」

恐怖で頭が真っ白に染まる中、火は彼の体に押し付けられた。

「お前の父さんが人殺しなのが悪いんだよ。」

「人の痛みを知れよ。」

「お前、責任とって死ねよ。」

「お前達、何している。」

その時、見回りの教師が彼らの元へ寄ってきた。

「康介がマツチで遊んでたんで、止めようとしたんですよ。」

その言葉で、康介の中の何かがぷつりと切れた。

「そうなのか？山田、そんな事しちゃ……」

「ふざけんなよお前ら！」

教師が近づいてきたのを両手で払い除けた康介は、女子が持っていたカッターを手にした。そのカッターからは銀に煌めく刃が出ていた。

「やめなさい！」

「何がやめなさいだ。やめさせるべきはこいつらだ！俺の事を……散々傷つけておいて、そいつらの味方をするのか？俺が父さんの息子だから虐められても容認するのか？」

感情の高ぶりですぐ右手を振り回してしまった。

「嫌っ！」

その時、そう叫んだ女子がいた。彼女の左頬からは血が流れ出ていた。

「山田、お前！」

立ち上がった教師は、康介の体を掴み、カッターを手放させると廊下側に投げ飛ばした。

その当時、康介は生徒だけでなく教師からの態度も冷たいものだった。その為、この件については「マツチで火遊びする山田康介を止めようとした生徒が逆上された上、カッターで斬りつけられた」と言う間違った事実が広まった。

康介は反論しなかった……でも、生徒を斬りつけた事は紛れもない事

実であつたが為に出来なかつた。

それ以降、彼の中に新たな自分が生まれた。その自分は、抑えることのできない物、極端に死を恐れた彼が生み出した…良いとは言いがたい存在だ。

あの時、あの世界では生き残る為に仕方なかつたとはいえ、人の死を体感するのは非常に怖かつた。それがあそこで爆発した。それが答えだ。」

その話を聞き終えた早苗は言葉が出なかつた。

あまりにも深く重い話で何気なく聞いた事を、そしてその様な思い出を話させてしまったことを恥じた。

「よく、それで死を選ばなかつたのね。」

「そうだな…俺は父さんを信じていた。だからかも…」

一美は、康介の家の近くまで来ていた。ようやく着くと胸を撫で下ろそうとした。その時だつた。

何かを探す様に歩く南条翔の姿があつた。

「南条!?!」

「おつ、一美じゃないか。こんな所で会うなんて奇遇だな。」

南条翔はベルトを取り出し装着した。

「せっかくだ。餌として使わせて貰おうか。」

豪災に変身した彼は、エレクスに変身しようとする彼女のバックルを矢で弾き飛ばした。そして彼女の動きを電気を纏った鎖で拘束した。

「きゃあっ!!」

一美は叫んだ。

その声は、部屋で話をしていた2人にも聞こえた。

「今の声は？」

「分からない。俺見てくる。」

康介は、部屋を後にし、家を出た。

ほぼ同じタイミングに早苗の携帯に着信音があった。電話だ。相手は南条翔だ。

ゆつくりと電話に出ると、南条の声が聞こえた。

「君の親友、清宮一美を今捕まえた。無事に返して欲しければこい？」

「一美!!」

「康介!」

その時、電話の先から康介と一美の声が聞こえた。まさかこの近くか…彼女はそう考えた。

「海老で鯛を釣る。金目鯛を狙ったが、餌にかかったのは普通の鯛だったな。」

「一美を返してもらおう。」

ウオーズに変身した康介は剣で豪災の元に迫る。

しかし、豪災の雷の攻撃で近づけない。一旦距離を取る為に後ろに下がったウオーズは後ろから人が近づくのを感じた。

「どうやら金目鯛も釣れたみたいだな…」

後ろには、東雲早苗の姿があった。

「あんだ…」「早苗!!」

早苗の腰にはバックルが巻かれていた。

「康介、私もお前と同じだ。死を恐れ生きてきた。」

悪道のキーを握りしめ、一美を見た。

「その恐れに、私は屈しない。私を本気で止めようとする親友友の為にだから共に戦ってくれないか…」

ウオーズはその答えに、右手を差し出した。

「早苗、頼む。」

早苗は、ウォーズの右手を掴んだ。

そして、キーをバツクルに装填した。

「変身！」

「悪道ノ鍵……」 「施錠……」 「悪魔ノ覇道……」 「仮面ライダー悪道……」

悪道はウォーズと共に並び立った。ウォーズはスペシャルキーを手にし、変身した。

「Special key!」 「Open!」 「I win the battle! KAMEN RIDER WARRIOR Special!」

2人は顔を見合わせた。

「行くぞ。」

「ああ。」

そう言うウォーズは背中の翼を展開して豪災向かって飛び出した。

豪災は雷を次から次へと浴びせようと迫るが、それらを蛇腹剣で悪道が空間を切り裂く様に消していく。その剣の隙間をウォーズは飛び、豪災の元に居る一美を救出した。

豪災は、ウォーズに攻撃を仕掛けようとしたが、それよりも早く悪道が右脚でその攻撃を防ぎ豪災を蹴り上げた。

豪災はそのダメージで戦闘継続が難しくなり、その場を後にした。

救出された一美含めた3人は、康介の部屋にいた。

早苗は、ジーツと見つめる一美の視線に目を何度か逸らした。

一美は、本当に早苗と共に戦ってくれるのか心配だった。が、すぐにその心配は無くなり、泣きながら早苗に抱きついた。

よかった、よかったと叫ぶ一美を康介は見ていた。

その時、背後から道永が帰宅してきた。この訳の分からない状況に、道永は康介に「何があった？」と聞いた。

「……ケンカの仲直り……的なの？」

彼の部屋に雲の隙間から漏れる太陽の光が指し込んだ：

第46話 閉ざされし炎

「はあ……ここまでやられるなんてな……」

傷だらけの南条翔は、荒い息を吐きながら常盤高校の倉庫裏に居た。

壁にもたれかかり、座り込んだ所で誰かがやって来るのが分かった。

「豪炎、惨めにもやられて来たようだな。」

「ははっ、少し羽目を外しちまってね：俺もあんたに肅清されんのか？」

物陰から、不気味な笑みを浮かべながら男は現れた。

「君はあの2人とは違って、私の計画に必要な人間の1人だ。そう簡単に殺しはしない。」

その男は、右手に傘を、左手に絶王のキーを持っていた。

「そういえば、悪道は山田康介と行動しているみたいだぜ。」

「ほう：珍しい事もあるのですね。」

男は再びニヤッと笑って見せた。

「で、肝心な彼女は出かけちゃったのか。」

康介の家には、鮫島、レイ、恵理の3人がいた。

肝心な彼女、東雲早苗は一美と仲間になった事を先に告げられた香と共に外へ出かけてしまった。本来なら顔合わせをしたかったが。

「でも、いいんじゃない？たまには気分転換させても。」

「そうだね。」

鮫島、恵理、レイと続けて言葉を発した後、康介は口を開いた。

「でも、本当に共闘してもいいのか？あの世界で彼女はお前達の事を…」

「あの世界って、俺達には記憶がない。まあ、多少苛つきはするし許す気にはならないが、共闘ぐらいならしてやってもいい。」

鮫島はベッドに勢いよく座った。

「僕を乗っ取り悪事を働いた事は一生許さない。でも記憶がなく、尚且つ未来の話…だから、共に肩を並べる事に嫌とは思わない。」

「私はどちらにしろ賛成だけだね。敵だった人物が味方になるだなんてこれ程頼もしい事はないし。」

「みんな…」

更に2人の言葉を康介は聞き入れた。

「アイツに後で礼を言わせないと…」

そう心の中で呟いた。

「次はあつちに行こう!!」

「あつ、ちよつと!」

一方、その早苗は一美達に無理矢理連れて行かれる形で街を歩いていた。

2人に手を引かれ翻弄されているが、嫌な気持ちは無かった。

本当の私だったら…どれほど2人と楽しめたのだろうか。いくら彼女達が気を許し達とはいえ、元々敵だった私をそんなすんなりと受け入れてくれるのか…そんな事ばかりを考えると、知らぬ間に1人じゃ入れない様な可愛らしい店に入ってスイーツを食べていた。

虹の様にカラフルなパフェに正直驚いたが、食べてみるとこれまた

美味しいものだった。

「美味しいでしょー！」

香は笑顔で早苗を見た。その笑顔についつい彼女も笑みを浮かべた。

その時だった。外で沢山の悲鳴が聞こえてきた。外に目を向けると沢山の人が逃げ惑っていた。

「行ってみよう！」

3人は、即座に店を出て街の様子を見た。そこには大量のホッパーとその奥にいる降魔と怪駕の姿を見た。

「降魔…怪駕…」

早苗が睨みつけた。

「まさかこんな所で再開するなんてね。」降魔が楽しそうに言う。

「お前を、消す。」怪駕は剣を抜き構えた。

「悪いが、私はそう簡単にやられるつもりはない！」

早苗達は逃げ惑う人々の中横に並びキーを構えた。

「変身!!」

「K A M E N R I D E R S a p p h i r e E R E — X !」

「仮面ライダービクトリケン!!」

「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

「行くわよ！」

一美の声に合わせて2人はすぐ様攻撃を開始する。

悪道は剣を伸ばし迫り来るホッパーを次々と薙ぎ倒していく。鮮血が飛び交う中ビクトリケンが風を起し降魔と怪駕に攻撃を仕掛ける。

降魔は風を拳でかき消すと、走り出し迫るエレクスの元へ右ストレートを放つ。

ビクトリケンは怪駕に再び風の攻撃をする。蒼く靡く風を怪駕は赤い烈風で防ぐ。2人の剣が交わる時、暴風が吹き荒れた。

「貴女達は、あの女を庇うのね。」

「当然よ！友達なんだから！」

怪駕の問いにビクトリケーンは答えた。

「例え昨日まで敵だったとしても、この前までの思い出が彼女にとって偽りだったとしても、私にとっては大切な友達だから！」

そう言うのと剣を銃に変え、弾丸を次々と放つ。高速の弾は怪駕を少しずつ押しつけた。

「大切な…友達…！」

悪道は、その言葉を聞くとビクトリケーンの隣に立った。

「ありがとう。私を受け入れてくれて。」

「早苗…こちらこそ、友達になつてくれてありがとう。」

2人は、仮面の中で笑顔を浮かべていた。

しかし、それとは裏腹に戦況はあまり良くは無かった。数の多さに徐々に3人は圧倒され、追い詰められていた。

「まだまだ遊び足りないな…！」

降魔は撫で回す様に地面に倒れる3人を見た。

「悪道、貴女の役目は終わったのよ。」

怪駕は、武器を斧に変え地面に叩きつけた。

地割れを引き起こす程の竜巻が3人に迫る…

その時だった。3人の前に壁が立ち塞がった。その壁によって竜巻はかき消され、怪駕は目を疑った。

その壁の向こうには、ローデイとドウアリテイの姿があった。

「香、待たせたな。」

ドウアリテイは、ビクトリケーンの前に手を出した。

彼女はその手を掴み立ち上がった。

「遅いよ…アッキー。」

ローデイは、降魔を睨みつけた。それもかなりあからさまに。

「お前は二度と一美に触れさせない…!!」

「へえ、強気だねえ。」

静かな怒りを示す彼に降魔は気楽に返した。

「所詮、数が2人増えた所で変わらない…」

怪駕は、強気な発言をした。その様子を見たエレクスは答えた。

「2人？とうとう数も数えられなくなったの？」

「なんだと…」

その時、降魔と怪駕の背中に激痛が走った。

2人の背後には、剣を振り下ろした後の状態のウォーズスペシャルとウエザー、その後ろにはメガロドンとバイフーの姿もあった。

「6人、それが正しい答えだ。」

4人は、エレクス達がいる側に立った。

「ぐっ…不意打ちか…」

「ハハッ、戦いつてのはこうでなくちゃね！」

降魔が、右手を突き出し暗黒のエネルギーを放出した。ウォーズ達は、その一瞬の攻撃に驚き、避けられないと感じた。

「私を忘れないで貰おうか！」

その時、降魔の影が揺らいだ。

その影は降魔から別れると、剣で背中を斬りつけた。

それにより暗黒のエネルギーは制御を失い空に撃たれた。

「忍！」

降魔の背後から現れたのは、クノイチだ。

「康介、いくら忍のライダーだからと言って私を忘れないでくれ。」

「なんなんだ…今の技は…」

「忍法、影隠れの術だ。これが私の戦い方だ。」

そう言うと、クノイチも他のライダー達と合流した。

ウォーズ、エレクス、メガロドン、ウエザー、バイフー、クノイチ、ドゥアリティ、ビクトリケーン、ローディ…ここに悪道が加わった総勢10人の仮面ライダー達が出揃った。

「全員集合…つてところか…」

ウォーズはそう言った。

「なんだか、燃えてくるね!」

「僕達で力を合わせれば必ず勝てる。」

「この世界を、救うのは私達よ。」

メガロドン、ウエザー、バイフーが続けて言う。

「ぐっ…」

怪駕は、完全に悔しがっていた。この数に勝てるわけがないと…

しかし、天は「彼女ら」を見捨てなかった。

その時、濃い霧が辺りを覆い始めた。

「なんだ?」

「2人には特別な魔法をかけています。この霧の中でも相手が見える筈。」

その時、怪駕達の脳内に豪炎に話しかけた男と同じ声が聞こえた。

「感謝します。」

その時、ふと後ろには誰かが背後にいた気がした。しかし、それはすぐに気のせいと分かりライダー達に反撃を始めた。

「この霧…周りが見えない!」

「くそっ…どうすれば…」

ライダー達が惑う中、次から次へと攻撃が迫る。背後かと思いい振り返るとその背後から。

次々と迫る攻撃を防ぐ事に精一杯だった。

そんな中、悪道だけは霧の中から出た…というより、出られる様導きがあったという風を感じた。

何故なら目の前に死んだ筈の絶王の姿があったのだから。

「この霧は貴方が?」

「…」

悪道は聞くが絶王は頷きもしない。

「貴方は死んだ筈じゃ…」

「私の事を話さなかったのだな。」

絶王から発せられたその言葉に悪道は背筋が凍った。

「話さなかった事が私に恐怖している証拠だ。」
そう言うのと絶王は槍を構えた。

「どうすればいいの…」

エレクスが霧に翻弄される中、突然左手を掴まれた。掴んだのはローデイだった。

「一美…お前ら、近くの奴の手を取れ。とにかく別れない様にしろー」
その声に反応したライダー達は次々と手を取り、気がつけばそれが一つの円の形になっていた。

「みんないるか？」

ローデイが聞いた。

「私はここよ、隣にレイと香がいる！」

バイファーが言った。

「俺はレイとアンタの隣だ。」

「私は隣にアツキーがいる。」

「俺は香と八代に挟まれている。」

「その私は、一美の隣に…」

次々と他のライダー達が自分の居場所を言っていく…その中で何かがおかしいと気づいた。

「康介と早苗は…?」

エレクスがそう呟いた。確かに8人が繋いだ輪には2人の姿がない。

その1人、ウォーズは悪道とは別に霧から脱出していた。

「他のみんなとはぐれたか…」

その時、金属がぶつかり合う音が霧とは別の場所から聞こえた。

その方向を見ると、悪道と絶王の戦う姿があった。

「早苗と…」

その時、ふと頭の中に昨日会話した内容が流れてきた。

「私は、これからも狙われる事になる。それでもいいのか？」

早苗は、リビングでテレビを見ながら聞いてきた。他人の家だから遠慮気味の彼女は康介にそう聞いた。

「どちらにしろ、行く宛がないんだろう？ならここの方が安全だ。ここに今母さんは居ない。それに、俺と道永は自分で身を守る。気にしなくていい。」

そう言うと、テレビの方を2人は見た。その間に道永が「風呂に入ってくる」と言い部屋を後にした。

頃合いを見て彼は口を開いた。

「狙われるって、誰にだよ。」

「それはもちろん、怪駕に豪災、降魔よ。絶王は私より先に消された。」

「誰が消したんだ？」

そう聞かれたとき、彼女の手は震えていた：

「それは…」

「貴方も抜け出したのだな。」

その言葉で現実を引き戻された。

「康介…来るな！」

「なるほど、意地でも守りたい様だね。」

絶王は悪道がウォーズを見ている隙に必殺技を発動させた。

それを見ていたウォーズは声を張り裂けるくらい上げた。

「早苗！後ろ！！」

「えっ…」

「とりあえず、2人の居場所は後だ。今は迫り来る敵に備えろ。襲われたら叫べ。それぞれの居場所は分かるよな？」

ローディのその声に他のライダー達は一斉に静かになった。しばらくの静寂の後、足音が聞こえた。

その足音は徐々に近づき、拳を突き出した。

「僕だ！」

その拳を受けたのはウェザーだ。その言葉を聞いたメガロドンとバイフーはすぐさまウエザーのいる方向に攻撃を仕掛ける。

「見破られた？」

そう降魔の声が聞こえた。どうやら攻撃が当たった様だ。

再び足音が聞こえた。今度は斧を振り下ろした。エレクスに。

エレクスはその攻撃に一瞬下がるが、すぐさま攻撃を仕掛けた。

「私の正面！」

その声にローディが銃で攻撃する。弾丸が着弾し爆発が起きたのは音で分かった。

降魔と怪駕は動きを完全に封じられた。

これ以上の戦闘継続は不可能、そう考えた直後だった。

金に輝く矢が霧の中をすり抜けドウアリテイに激突した。同じように攻撃を返すが当たる気配はない。

「遅くなった。怪我で中々動けなくてな。」

「どうやら遠距離には勝てないみたいだな。」

怪駕は、エレクス達に言った。

そして、豪炎に雷の雨を降らせてやれと言った。

次から次へと放たれる矢は相手の陣形を崩していく。いつのまにか円は崩れ散り散りになっている。

このまま押し通せる、そう思った時だった。

その時、霧の外から声が聞こえた。

「早苗！後ろ！！」

その後、何かが突き刺さる音、そしてそれを引き抜く音がした。それと同時に霧が突然晴れ始めた。

ライダー達の身体に光が差し始めた頃、その全容も見えてきた。ウォーズが最初に見えた。

その次に悪道と絶王の姿が見えた。

絶王の槍には、赤い血がベツタリと付いていた。

それと同時に悪道は早苗の姿に戻る。

早苗と叫ぶ香と一美の声が街に響いた。

「…」

ウォーズは黙ったままだった。

「これで完了だ。」

撤退を促す絶王の声で怪駕達が引こうとした時、ウォーズが口を開いた。

「人を殺しておいて…何も思わないのかよ。顧みるものはないのか！」

「人を殺して、逆に何を思うんだい？」

絶王から帰ってきた答えはそれだった。それだけだった…

「アンタは…最初からそんな奴だったのか…俺達に見せていたあの顔は偽物だったのか!!」

「偽物なんかじゃないさ。君達が優秀な実験台として育てていく姿は実に面白いものだったよ。山田君。」

そう言うのと絶王達はその場から姿を消した。

「待てよ！話は終わってない!!」

ウォーズが叫んだ後、再び静寂が訪れた。

みんなが…特に一美と香が早苗の近くに走った。

一美が体を起こすと、手に彼女の血がつき真っ赤に染まった。

「一美…香、最期に…私を人間で居させてくれて…ありがとう…」

それが彼女の最期の言葉だった。

街中に噁り泣く声がひっそりと聞こえる中、1人閉ざされた炎に火をつけた者がいた。

東雲早苗が死亡してから数日、卒業式は間近に迫っていた。

そんなある日だった。康介と一美は早苗が倒れたあの場所に花束をそつと置いた。

その花は、悪道が使っていた剣のように赤い花が段々となっていた。

「早苗…」

そう一美が呟き、2人は手を合わせた。

行こうか…、そう康介が呟きそこを後にしようとした。その時、目の前に2人のよく見覚えのある人物がいた。

「久しぶりだね、山田君に清宮君。」

湯山玄武だった。彼は黒いスーツを身につけていた。一美は玄武に近寄ろうとした。その身体を右腕を出す事で康介は止めた。

「人を殺す事に何も思わないのに、献花にはくるのか？」

彼の手には花が握られていた。白色の花だ。

「なんの話だい？それにそんなに睨みつけて。私が何かしたのか？」

玄武はそう言いながら近づいた。

「近寄るな！」

康介は叫んだ。

「ここには、彼女が眠っている。お前なんか踏み入れている場所じゃない。」

「康介、さつきから変だよ…」

怒りを抑えきれない康介を一美は抑えようとした。

「酷いな…別に私は彼女に花を渡そうとしただけだよ。」

「…早苗を殺しておいて、そんな事言うなよ。」

一美は驚きの表情をした。いつもはあんなに優しいあの人が、人を殺すだなんて信じられなかった。

「…」

「早苗は、俺に伝えたんだよ。自分達の上にいる存在を…自分を縛り付けるアンタの存在を！」

あの時、彼女は一瞬話す事に戸惑った。しかし、その恐怖に打ち勝ち『湯山玄武が全ての原因』とその口で伝えたのだ。

「康介…本当なの…」

「ああ。そして、あの日絶王に変身し、彼女を殺したのもお前だろ…」

「フッフ…ハハツ。面白い事を言うんだね。そうだよ。私が殺したんだよ。そして、君のお父さんをアトランティスが消失した日、陥れたのも私だよ！」

康介は驚いた…自分の父親を陥れたのもこの男だなんて…思っっていなかった…

「私はあの研究所で特別研究員として居たんだよ。あそこに。そしてあの日意図的に装置を動かしてアトランティスを思うがままに戦場へと作り替えたのだよ。」

「そんな…」

一美がそう呟く中、玄武は話を続けた。

「実に楽しいひと時だったよ。君達を…白夜総三によって壊れた人間やその関係者達をこの学校に集めて、自分の思うがままに育てるのは。特に君達なんかはね。」

「…フツ」

「ん?どうした?」

玄武は、康介の呟きに耳を傾けた。

「ハハツ…じゃあ俺は最初からアンタの手の上で転がされてたって事か?俺だけじゃない…一美も、道永も、父さんも、他のみんなも…全部アンタの描いたシナリオ通りになったって事か…」

そう話す康介を玄武は笑いながら見ている。

「ふざけんなよ!」

突然の咆哮に彼は驚くが、すぐに元の笑い顔に戻った…非常に憎たらし笑顔に…

「返せよ…俺達の10年間を返してくれよ!!!」

康介は玄武に掴みかからんとする勢いで近づいた。

その彼を玄武は衝撃波の様なもので払い除けた。

倒れた康介は、壁に打ち付けられたが、一美の補助もありすぐさま立ち上がった。

「私を人間だと思わないでくれ。今の私は『皇帝』なのだから…」

そう言うとは彼は宙に浮き上がった。そして、翼が円を描く様に後ろに現れ、醜い怪物の姿を見せた。

ホッパーをより強化した見た目をしている彼…エンペラーホッパーは康介達を見下ろした。

「丁度よかった…これで迷いは無くなった。」

康介は、そう言うとなヴァアバツクルを装着した。

「アンタが人間じゃないなら…獣ならなんの足枷もなく殺せる…」

ウォーズ・ノヴァに変身した彼は、ノヴァ・セイバーの剣先をエンペラーホッパーに向け、空へと飛び出した。

エンペラーホッパーはこれを先程と同じ衝撃波で払い除けた…それも先程より強力なものを。

「今決着をつけるわけにはいかない。3日後…待っているよ。」

そう言うとエンペラーホッパーはその場から姿を消した…

彼が言った三日後…それは奇しくも康介達がアトランティスに送られた日、2月29日であった…

第47話 遠き頂へ

「ただいま。」

2月28日の夜、母は1週間にも及ぶ出張から帰ってきた。

「お帰り、お疲れ様。」俺は母さんに労いの言葉をかけ荷物を持った。そういえば、この10年間ずっと母さんに頼りつきりだったからな…何かしてあげたいとは思っても中々そういう機会が巡ってこない。「あつ、そういえば出張先でお父さんらしき人とすれ違つたんだ。」
「えっ?」

「でも、私を見ても何も言わなかったし、その人すぐにバイクに乗ってどこか行つちやつたから多分違う人ね。」

それこそ父さんだ…そう心の中で思ったが、口にはしなかった。父さんは意図的に自分の生存を隠している。その時が来るまで。

「…もし、父さんがまた母さんの前に現れたどうする…?」

俺はずっと気になつて居た事を聞いた。今までずっと死んだと思つていた人が目の前に現れたら…どうするのだろうか。

「そうね…」そうしばらく考え込み、口を開いた。

「やつぱり、「おかえりなさい」って笑顔で言つてあげたいな…もちろん、色々言いたい事あるけどやつぱり一番はこれかな…」

「そうなんだ…」

「ご馳走様。」

出されたカレーを残さず綺麗に食べ、スプーンを置いた神谷昭彦は皿を流しへと持っていった。

「いつもありがとうね。」

カレーを作つた不知火香は、彼がいつも丁寧な食べてくれ、尚且つ

片付けまでしてくれる彼の行為がとても嬉しかった。彼は時々カレーを食べる為だけに彼女の家を訪れることがあった。彼女は彼女で親の帰りが遅くいつも一人で寂しく夕食を食べている為、彼が来てくれることはとても喜ばしいことだ。

そういえば、初めて出会った時もカレーを食べてくれたっけな…なんて事を薄らと思いつながらテレビをつけた。

「香…」

その時、後ろから昭彦の声が聞こえた。その声は続ける。

「俺は、創作の人物みたいに香の為に命を賭けること、命を張って戦うことはできないと思う。」

「医者になることが…夢だからね。」

「そうだな…だが、お前が無茶をするというなら、全力でその無茶に付き合う…そのつもりだ。」

「…ありがとう。私も、後に引けない理由があるから…頼むね。」

昭彦はその理由が少し分からなかったが、その日は家に帰ることにした。

彼が彼女の家を出た後、自分の部屋に戻った香は机の上にある深紅のバックルと灰色のキーを手を取った…

「でも、まさか先生が黒幕だったなんてな。」

鮫島、忍、レイ、恵理の4人は学校近くのファストフード店で夕食を取っていた。

「そうね…信用していたからこそショックだな…」

ビッグバーガーを食べながら恵理が言う。

「…そんな相手に勝てるのかな…」

レイはやや俯き気味に言った。

「そう思っているうちは勝てないぞ。」

鮫島は彼の背中を叩いた。そして、忍はポテトを一本食べると真剣な眼差しでこう言った。

「そうね…こうなった以上、徹底的に潰すだけだ。」

「こんな早い時間に呼んで…どうしたの兄さん。」

一美は、他の誰よりも早く道永と共に集合場所の学校に来ていた。まだ日も出ていない早朝に…

「これを渡しておきたくてな。」

道永はそう言うのと、懐から金色のバツクル：『アイギスバツクル』を取り出した。

「アイギスバツクル…」

「一美…あの男は絶対に無茶をする。だから、彼が死なない様守つてやれ。」

道永はそう言いバツクルを渡した。

「分かった…」

一美はそのバツクルをしまった。

「おっと、どうやら客を待たせることになるなんてな。」

その時、正面からいつものように能天気な声を響かせながら豪炎に変身した南条翔がやってきた。背後には大量のホッパーがいるが、西本鷲花と火神麒麟の姿はなかった。

「しかし、来たのは2人だけか…」

「そろそろ来るさ。」

道永がそう言うのと、後ろからタイミングよく康介、鮫島、レイ、恵理、忍、昭彦、香の7人が現れた。全員集結した彼らは康介を中心に横に並び立った。

「待たせたな。」

彼らの腰には既にサバイブバックル、又はロードライバーが装備されている。

「この戦いで全て終わらせる。」一美が言う。

「俺達を、二度も殺そうだなんてさせないぜ。」

「僕は、僕たちは最後まで戦う。」

「その為にここまでやって来たのだから。」

「この世の悪を…私達を陥れた罪は重い。」

「これ以上暴れられると、俺達の将来が困るんでね。」

「早苗の為…この世界で生きる人の為に戦う。」

「お前達の道は…この世に要らない。」

「お前達の運命は、ここで終わらせる。」最後を締める康介の声の後、全員はキーンを構えた。

「変身!!」

「Open!」Masked warrior! KAMEN RIDER
DER WAR—Z!」

「Lightning goddess! KAMEN RIDER
ERE—X!」

「大展開!」「仮面ライダーメガロドン!!」

「仮面ライダーウエザー!!」

「仮面ライダーバイファー!!」

「仮面ライダークノイチ!!」

「仮面ライダードウアリティ!!」

「仮面ライダービクトリケン!!」

「Remake the future!」未来を創り変える!」仮面ライダーローディ!!」

9人の仮面ライダーは、最後の戦いへと、その身を構えた。

一斉に襲いかかるホッパーの大群、それらに攻撃をしようとウォーズは拳を突き出した。

しかし、ホッパーは一斉に羽を広げまだ夜の明けない空へと飛び出した。

「何！」

「他の3人が居ない時点で気づいて欲しかったな：他の3人はそれぞれ自分の配置でここから放出されるホッパーを待っている。それも街中で。そして今、彼らの元にホッパーは飛び出したと言うわけさ。」
「ぐっ…」

まさか、西本、火神、湯山の3人が既に街に居るとは…このままでは…

「康介、ここは俺達に任せていけ！」

その声はメガロドンだ。既に飛び立とうとするホッパーを迎撃しているウエザー、バイフー、クノイチもそれは同じ思いだった。

「分かった、ここは任せたぞ。」

そう言うのと、ウォーズ達は街の方へ駆け降りて行った。

「そんな事言って大丈夫なのか？」

「さあな、でもどちらにしるあんたを止めないとこの大群も収まらないんだろ？」

メガロドンは、右腕から手刀を放った。

「ご明察！」

メガロドンの一撃を弓で豪炎は防いだ。

学校と街の位置関係は学校の方が台地にあり少し高くなっている。その台地の斜面を5人は雪崩の様に駆け降りた。

麓に着くと、そこには既に大量のホッパーの姿があった。

ウォーズ達は武器を構えて応撃する。

「これじゃ、街に進めない！」

「康介、兄さん。ここは私達に任せて！」

その時、一美が名乗りを上げた。確かに、ここは任せて進んだ方がいいと2人は考えた。

「分かった、頼んだぞ。」

そう言うとうオーズとローディはそれぞれのマシンを呼び出し、街に向かって走り出した。

「2人とも、行くわよ！」

「ああ。」「任せて。」

エレクスは、スパークキーを銃に装填、放電現象の様に放たれた電撃でホッパーの数を一瞬にして減らしてみせた。

更に、ドウアリティはエレクスが倒し損ねたホッパーを左手に持つ剣に装填したデスクーの毒沼攻撃で捕縛、右手に持つ剣にドミネートキーを装填し次々に切り裂く。

ビクトリケーンは、突風で空中のホッパー達を一掃、雨の様に降ってくるその肉片すらも残さず。

ある程度一掃できた3人は、ウオーズ達の後を追う為に走り出した。

ローディとウオーズはバイクでホッパーが飛んでいく方向へ走らせた。

高速で朝の街にバイクを走らせる2人の元に突如火花が迸った。

彼らの目の前には降魔と怪駕の姿があった。怪駕は斧と剣を両手で持ち、降魔は指の骨を鳴らして待っていた。

「思っていたよりも早かったね。」

「降魔…お前は俺が倒す。」

道永は、バイクのスロットを回して超高速で降魔に突っ込む。降魔はそれを跳躍力で避け、逃げる様に走り出す。

バイクを降りたウオーズは、怪駕に向かって立った。

「また、お前を倒すことになるなんてな。」

「そうね。今度は私が勝つ。」

右手の斧を、投擲斧の様に投げた怪駕は、ウォーズに斧、そして自身を持つ剣で攻撃を仕掛けた。

ウォーズは、斧を素早く右に避ける事で交わり、銃から弾丸を放った。

ローディは銃で飛びながら逃げる降魔を地面に落とした。

墜落した降魔は背中を着地し、一回転すると軽い身のこなしで立ち上がり、拳を構えた。

「さあ、始めようか。」

「いいだろう。」

ローディも、銃を剣に変え銀の刃を光らせた。

降魔は、走り出すと、まず剣を抑えようとローディの右腕に次々と攻撃を仕掛ける。

その意図がすぐにわかったローディは剣を落とさぬ様しっかりと両手で握りしめ降魔の攻撃を凌ぐ。

降魔がローディの視点から一瞬消えた。

夜の闇に同化したのだ。その闇をローディは探す。

降魔が現れたのはローディの背後、右足を突き出し、蹴り飛ばそうとした。

「そこかー！」

ローディは、自身の道を生成する能力で攻撃を防いだ。

弾き飛ばされた降魔は再び立ち上がるうとした。

しかし、それよりも早くローディが神速の右膝蹴りで蹴り飛ばす。

「なんだと…！」

「俺は、二度もお前には負けない…絶対にな。」

ローディキーをドライバーから引き抜いた彼は、そのまま剣に装填する。

「full open!」 「ROAD-Y slash!」

青白いエネルギーを纏った剣は、ローディが走り出すと共に光の筋となり、地表を駆け抜けた。

光の筋は、降魔を切り裂いた。闇に身体を変換して生き延びようとする降魔にローデイはもう一撃、脳天から足元まで一直線に振り下ろした。

「そんな…僕が負けるなんて…」

闇に帰るかの様に、降魔の…火神麒麟の身体は消えて行った。

「これで、まず1人。」

ローデイは、大群で迫るホッパー達を見ると、再び剣を構えた。

「降魔がやられたのか…」

この街の何よりも高い高層ビルの屋上に絶王…湯山玄武の姿があった。

「怪駕、豪炎…降魔が討たれた。計画を少し早める。」

エレクス達はウォーズの元に近づいていた。

「数が増えたな。」

ドウアリティィは、銃を使いホッパーの急所を撃ち抜いていく。

「そうね…ん？」

エレクスはふと上を見上げた。そこには大量のホッパーがいた。奴らは、周りのビルや建物に纏わり付き、まるで女王蜂に群がる働き蜂の様になっていた…ある1箇所を除いて…

「あのビル、おかしい。なんで襲われないんだ？」

「分からない…」エレクスの問いにビクトリケーンは答える。

「2人は先行ってて。」

エレクスは、そう言うビルの中へ入って行った。

「あ、ちよつとイチミン…」

「香、仕方ないから先に行くぞ。」ドウアリティィの催促でビクトリケーン

ンは再び進み始めた。

「了解しました。」

玄武の声を聞き届けた怪駕はそう口にした。

「お前ら、まだ何かする気か！」

ウォーズは、スペシャルキーを構えた。

しかし、それを即座に見切った怪駕は、風力で手の届かないところまで吹き飛ばした。

「…ノヴァは使わないのか？」

「悪いが、ノヴァは最後の切り札に取っておけて言われてるんでね！」

ウォーズは、剣を構え突進した。

怪駕も剣を構えると、ウォーズの剣を受け止め、押し倒した。

「スペシャルにも、ノヴァにもならないお前は、非力…今こそ倒す！」

怪駕は、空に飛び上がると剣をウォーズに向けて振り下ろした…

が、それはウォーズが間一髪避けたことで直撃を免れた。

「避けたか…」

「そこまでよ！」

怪駕の目の前に現れたのは、ビクトリケーンとドウアリティだった。

「2人とも…」

「康介、ここは私達に任せて空のホッパーを！」

「分かった。」

ウォーズは近くに落ちていたスペシャルキーを拾い上げると、それを使い強化変身した。

「I win the battle! KAMEN RIDER
WAR—Z Special!」

翼を展開するウオーズスペシャル、次の瞬間空に舞い上がる。

剣を構えたウオーズは、耳障りな羽音を鳴らすホッパー達を次々と切り裂いていく。

そして、更に迫ってくるホッパー達を倒すべく、身体を前に突き出し高速でビル群の間をすり抜けていく。途中に現るホッパーも翼を研ぎ澄ませ、墜落させる。

ある一定のところまで行くと、広い空間に出た。丁度平地と台地の中間部だ。

「ちまちま倒しても埒があかない。」

武器を銃に変えると、オーバーユニッターを装着した。キーはファイアー、ブリザード、マツハ、ダミーの4種を装填、ベルトのウオーズキーを回転させ必殺技を発動する。

「Re open!」 「WAR—Z prominence!」

銃口から4種類の光の弾が発射される。赤い光：ファイアーの力を持つその弾丸は、ホッパー達の腹部を焼き切りながら貫通、ブリザードの力を得た青い弾丸は、ホッパー達の羽を凍らせ、制御を失った奴らを次々と墜落させる。マツハの力を得た白い弾丸は逃げるホッパーよりも早く進み絶対に逃さない。ダミーの力を得た橙色の弾丸は、一個は二個に、二個は四個にと分裂していき、残りのホッパー達を殲滅していった。

「これで上空はある程度いいか：あとはへばりついているやつか：」
ウオーズは再び高速で飛び始めた：

「あいつ、あんな芸当できるんだな。」

豪災は、学校からその様子を見ていた。

「よそ見をするな！」

横からクノイチの攻撃が迫る。それを雷撃で弾き、更に正面から迫るウエザーの冷氣攻撃を跳ね除ける。

「弾かれた……」

「今度は私が。」

バイフーは豪災に炎を纏った片足蹴りを放つ。豪災はそれを背後に下がりながら緩和、矢を構えると彼女の腹部に押し付け、弦を離した。

倒れるバイフーをメガロドンは、ギリギリのところで支えた。

「ちっ……強い奴。」

「俺は口は軽いが、攻撃はナメてかかると重いぜ。」

『豪災……怪駕……時間だ。』

その時、豪災の脳に玄武の声が響いた。

「どうやら時間らしいぜ。」

「時間？」メガロドンがそう呟いた直後、豪災の体に異変が起き始めた。

その身体は徐々に地面に溶け込み始めた。それも大量の電気を放電しながら……

やがて、地震が起き始めた。その揺れは、徐々に大きくなっていく。

「見て!!」

街を見ると、東西南北の端にそれぞれ巨大な塔が立ち上がった……

漆黒の塔……それこそが豪災の怪人態、バベルだった……

異変は豪災だけではなかった。

「ぐっ……があっ！」怪駕は突然もがき苦しみ始めた。

「どうした？」

「この痛み……あの頃に比べれば……!!」

怪駕は、突如として怪人態、ラバーリングの姿へと化した。

「はあ…はあ…！」

しかも、そのラバーリングは、分裂した。青と桃の2色の体色が特徴的だったその姿は青の男らしい、勇ましさを感じさせるラバーリングと、桃の女らしい、可憐な姿のラバーリングに変化した。

「遂に極限まで達したか…！」

青のラバーリングは暗い声で言う。

「私、うっれしくな〜！」

桃のラバーリングは明るい声、偽っていた頃の西本に近い声で言う。

どちらも前に現れた時の様な片言の喋り方ではなく、普通に話していた。

「私の力を思い知れ!!！」

青のラバーリングがドウアリテイに円形の光弾攻撃を仕掛ける。

その一瞬にドウアリテイは、判断が遅れた。避けようとするもすぐ目の前に攻撃は迫っていた。

「危ない!!！」

その時、目の前に影が現れた。ビクトリケーンだ。ドウアリテイの身体に飛び付き押し倒そうとした。

ドウアリテイは、攻撃を回避したが、ビクトリケーンは違った。身体の腹部に…バツクルに攻撃を喰らってしまった。

地面に倒れた時には、変身が解け香の姿に戻っていた。

「香、しっかりしろー！」

「私は大丈夫、それよりアイツをー！」

致命傷を免れた彼女はすぐに身体を起こすと、彼に攻撃するよう指示した。

「分かった。」

ドウアリテイは立ち上がり、剣を構えると走り出した。

「ここが屋上か…」

その頃エレクスは、あのビルの屋上に来ていた。

そこでは、絶王が塔の建った街を見下ろしていた。

「よく来たね、清宮君。」

「あなた、ここで何を？」

「…もうすぐ、時が来る。」

エレクスは、サファイアエレクスに変身し、少しずつ近づいた。

「なんの？この期に及んで、まだ何かするの？」

「闇に一度堕ちた君達なら、立派に殺し合いをしてくれると思っていて…でも実際は違った。殺し合いを望まぬ人間が生き残った…その人間が、私にとって一番憎い。最強の戦士を作り出すと言う目的を台無しにした貴様をな!!」

絶王…玄武は槍をエレクスに突き出した。

エレクスは、それをギリギリ交わすが、ふと顔を上げると左側には町がジオラマの様に広がっているのが見えた。

「ここで死ぬ!!」

絶王は、氷を纏った蹴りでエレクスをビルの合間に文字通り蹴落とした。

「あっ…」

いくら変身しているとはいえ、この高さから落ちれば命の保証はなかった。

彼女は死を覚悟した…

最終回 彼らの夜明け、永遠に

「ここで死ぬ!!」

「あつ…」

絶王によって、エレクスはビルの谷間へと落下させられた。

死を覚悟した彼女に、何かが近づいた。

「一美!!!」

それは彼女を拾い上げ、再び空へと舞い上がった。

「康介……」

「無茶するなよ……」

ウォーズは、絶王のいるビルを旋回しながら飛んでいる。

「あのクソガキが……ここで散れ!!」

その様子を見ていた絶王は、氷柱状の棘を次々と空中に放つ。

「一美、先に行つてろ!」

そう言うとは彼は、エレクスをビルの屋上に軽々と投げ飛ばした。

攻撃を防ぎながらエレクスは着地、その勢いでサファイアブレードを召喚し一気に迫る。

絶王は、エレクスの攻撃を受ける前に氷の壁を召喚、それを彼女が破壊する為の一瞬で、ウォーズの翼を氷柱攻撃で凍結させた。

制御を失ったウォーズは、絶王の視界から消えた。そして、それと同時にエレクスが氷を砕く音が聞こえた。

制御を失ったウオーズは、なんとかして地面に着地し、ウオーズスペシャルの変身を解除した。

「一美を助けないと…だが、ホッパーを放っておく訳にも…」
「康介!!」

その時、後ろからバイフーの声が聞こえた。振り返ると、彼女の他にも、最初で別れた3人もいた。

「丁度いい」

ウオーズはバイフーにスペシャルキーを、メガロドンにマツハキーを渡した。

「それを貸しておく。それでホッパー達の殲滅を！」

そう言った彼はビルに登ろうと走り出した。

「ちよつと…気をつけてね！」

彼女は、その背中を見ていた。

そして、後ろを見た。

「私は空中のホッパーと豪炎を倒す。地上はよろしくね。」

「分かった、健闘を祈る。」

そう言うと、メガロドンは銃にマツハキーを装填、召喚したマシンウオーリアーに乗り込んだ。

バイフーは、スペシャルキーをベルト中央部にスキャンした。

「大展開!!」 「特別な仮面ライダー!!」

バイフーは、スペシャルの鎧を身につけてバイフースペシャルへと姿を変える。

「遠くまで飛んで行け!!」

そう叫びながらバイフーは翼を広げて空へと駆け出す。竜に翼を得たる如し…いや、白虎に翼を得たる如しその姿は白の残光を残しながら空を飛び回る。

「いい度胸してるじゃねーか。撃ち落としてやる！」

豪災だったバベルは西の塔に迫るバイフーに対して漆黒の雷雲を発生させ迎え撃つ。

雷雲の内部に入り込んだバイフーは、雷鳴の轟を聞いても恐れもせず塔に迫る。そこへ電撃が迫る。

「Re open!」「BAIHU smash!」

電撃を受けたバイフー、だが、必殺のエネルギーを一時的に身体に纏わせ、シールドにした事で、防いだ。

電撃も加わった白銀のエネルギーを纏ったバイフーは、渾身のライダーパンチを繰り出す。

虎の様に鋭く獰猛な拳は、塔を貫いた。

「まず一つ…」

ガラガラと崩れ落ちる塔…しかし、それと同時に崩れたところから復活していく塔。

「悪いが、今のアンタじゃ、この塔は全て倒せないぜ。」

「何!!」

再び雷攻撃を放たれたバイフーは、それをギリギリ交わし雷雲の外へと脱出した。

同刻、ドウアリティは2体のラバーリングを相手していた。

と言うよりは、完全に苦戦していた。攻撃もできず、サンドバッグの様に叩かれ、地面に倒れた。

「私達には勝てない、それを自覚しろ。」「そうだそうだ!!」

「ぐっ…」

それを見ていた香の手には、早苗が使っていたバツクルとキーがあった。

「早苗…一緒に戦ってくれ。」

バックルを装着した彼女は、悪道なキーを構えた。
「変身！」

「悪道ノ鍵…」「施錠…」「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

灰色に燃える炎と共に、悪道が姿を見せた。

「あれは！」

「香…？」

ラバーリングとドウアリティィは、戦いの手を止めて彼女が炎に焼かれるその姿を見ていた。

「ぐっ…ああっ…!!」

「何やってるんだ香!!」

「人間がそれを使えば、死ぬぞ！」青のラバーリングが呟く。

ドウアリティィは、ベルトを外そうと迫る。しかし、炎が邪魔をし近寄らない。

「香、それを外せ!!」

「…私は…止まらない…早苗の無念を…早苗のやりたかった事を成し遂げる為、に!!」

その時、彼女は不思議な感覚に陥った。自分の左手を誰かが握った…そう感じた。しかし、ドウアリティィは近くにいない。

彼女は、それがすぐに分かった。左の方を向き、彼女の名を言った。彼女は名を呼ばれた事に頷いた。

そして、彼女は光の結晶に変化すると悪道の身体に降り注いだ。暴走寸前だった悪道の、香の身体は少しずつ落ち着きを取り戻し、気づけば力を抑え込んだ。

「何、制御した!」「えー、うっそー!」ラバーリング達は空いた口が塞がらなかった。

「香、大丈夫か?」

ドウアリティィは彼女の手を握った。

「アツキー、もう大丈夫。心配してくれてありがとう。」

2人は、正面を向き、剣を構えた。

「いくわよ、私達の力見せつけてやりましょう!」

「ああ、どこまでもついて行くぞ。」

2人は、ラバーリング向かって走り出した。

ラバーリングはそれぞれ怪駕の時に使っていた斧と剣を構えた。

斧を持つ青のラバーリングは、ドウアリテイの足元に向かって振り下ろす。ドウアリテイはそれを見切り、空へジャンプして避けた。左手の武器を銃に変え、彼女の身体中に撃ちつける。

火花のを散らしながら青のラバーリングはアスファルトに身体を叩きつけた。

桃色のラバーリングは、悪道の剣と互角に戦っていた。

「うつつふ、私に勝てるかな！」

ラバーリングは悪道を切り払った。

「今の私に負ける気はない。私の…私達の力なら！」

蛇腹状に展開していく悪道の剣。その剣は地を抉る様に風を巻き上げ炎を纏いラバーリングを貫く。

再び地を滑らせ、ラバーリングにもう一撃剣を振り下ろす。

そう読んだラバーリングは剣を構えた。

しかし、悪道の剣はラバーリングの身体ではなく剣に絡み付いた。その剣を悪道は振り上げ、自分の剣ごと振り投げた。無防備になったラバーリングは、悪道の膝蹴りを喰らい、倒れた。

2体のラバーリングは、元の青と桃色のラバーリングの一体に戻ってしまった。

「そんナ…」

「香、これを使え。」

ドウアリテイは、2本の剣のうち一本を彼女に渡した。

「ありがとう、アッキー。」

ドウアリテイはバックルに刺さっているキーを引き抜くと剣に装填した。悪道も、ビクトリケーンのキーを剣に装填した。

「fully open!!」

「DUALITY slash!」 「VICTORICANE sl
ash!」

2人は、立ち上がるほどの力しかないラバーリングを標的にし剣を突き出した。

炎、風、闇の力を纏った2本の剣はラバーリングの身体を貫いた。

「今度は…人間として…生きた、い…」

ラバーリング…驚花は、誰にも聞こえない声でそれを呟くと、眩い光と共に爆散した。

「数が多いな。」

ローディは降魔を倒した後もホッパー達を掃討していた。その時、バイクのエンジン音が聞こえてきた。

「どけどけ!」

それはマシンウオーリアーに乗ったメガロドンだった。

「メガロドンか。」

「道永さん、助けに来たぜ。」

「大丈夫ですか!」

メガロドンの後ろにはウエザーとクノイチの姿もあった。

「みんな、ありがとう。」

その時、上空からバイファーがその場に降り立った。

「塔は倒せそう?」 ウエザーが聞く。

「どうやら無理そう。倒してもすぐに復活する。」バイファーがそう答える。

「そうだな…もしかしたら、同時に倒す必要があるのかも知れない。」
「道永さん、本当にそうか分からないです。」

「ここはやるしかないぞ。虎山。」クノイチがそう答える。

「：分かった私が攻撃を引きつける、その間によろしく。」

「分かった。」メガロドンはバイフーを送り出した。

「さて、俺達はどうやって塔に向かおうか…」

「それならいい方法がある。」メガロドンの肩をローデイは叩いた。

「こう言うことか！」

メガロドンとその後ろにクノイチを乗せたマシンウォーリアーは空中に敷かれた道路の上を走っていた。

「これなら行ける！」

ローデイの道を生成する能力でローデイ達はバイクに乗りながら空中を移動している。

「僕は東の塔に向かいます。残りをお願いします。」

孫悟空の様に雲に乗りながら移動するウエザーは東に向かって飛んでいった。

「ああ、合図は俺の声で行う。しっかり聞いておけよ。」

バベルはバイフーの方に集中しており自分の塔に近づく4人の姿にギリギリまで気がつかなかった。

「何…ライダー達が塔の近くに！」

クノイチは北の塔の頂上に立ち尽くし、ローデイは西の塔の雷雲を抜け走っている。メガロドンは南の塔、ウエザーは東の塔で必殺待機状態で待っていた。

「いくぞ。」

4人はベルトを操作し、必殺技を発動させた。

「今だ!!」

「再展開!」[ROAD—Y exceed!][MEGALODON
v i k i n g .] [W H E T H E R s t o r m !] [K U N O I C

HI s s a s s i n !」

道永の叫ぶ声で4人は一斉に技を繰り出す。

ローディはバイクから飛び出し右脚を前に突き出した。

メガロドンは右脚を空高く上げ右脚の鱗を見せつけた。

ウエザーは剣に光を集中させ振り下ろす。

クノイチは銃から大量の巨大な手裏剣を放つ。

それらは同時に塔を押し倒した。

「はっ… 困なんて、やるじゃないか。」

バベルは、復活することなくどんどん崩れていく。周りを覆っていた雷雲は徐々に晴れていった。夜空は徐々に東から色をつけ始め暁を迎える寸前まで来ていた。

「怪駕、豪災がやられただと！」

その事は玄武はすぐに分かった。

「あなたは負けよ。」エレクスが言う。

「…仕方がない、こうなったら以上本気を出さざるを得ないか…」

その時、絶王の身体にヒビが入った。顔の仮面が割れると、先日見せたエンペラーホッパーの顔を覗かせた。

「遅かったか！」

その時、ウオーズがビルを登って現れた。

「さあ、仕上げを始めよう。」

「そうはさせるか!!」「NOVA open!」「WAR—Z・NOVA!」

ウオーズ・ノヴァに変身しノヴァ・セイバーを召喚した彼は大剣を突き立てエンペラーホッパーに迫る。

エンペラーホッパーはそれを正面から受けた。しかし、全く動じない。むしろ絶王の鎧が完全に砕けエンペラーホッパーの姿を完全に現した。

空中に浮き上がり、拳を握りしめるとウオーズ目掛けて振り下ろし

た。

ウォーズはそれを避けるが、拳の衝撃でビルが崩れ始めた。

エレクスと共にウォーズは地面に落下した。

ウォーズが下になる事でどちらも致命傷を受けずにすぐに立ち上がった。

「これで死なないとは…戦い甲斐がありそうだ。」

「黙れ、お前は…絶対に倒す!!」

「康介!」

怒りに身を任せて剣を振り上げるウォーズをエレクスは呼び止めようとしたが、止まらない。

エレクスは、新たにバックルを取り出した。アイギスバックルだ。

「私が止める…そう誓ったから。」

サバイブバックルを外し、アイギスバックルを装填した。

「AEGIS open!」
「I protect all and
fight! KAMEN RIDER AEGIS EREX
!」

アイギスエレクスに変身した彼女はすぐさま自身の足で走り出した。

「爆ぜ散れ!!」

背後の翼を剣先を相手に向ける様に動かした。そこから紫色の光線を放つ。

その攻撃を間に入ったエレクスは全て受け止めて、弾き返した。

「一美!」

「康介、自分を抑えて!」

驚きので言葉に康介は一美を見た。

「相手は確かに憎い…でも、憎しみだけじゃ絶対に勝てない。今から始めるのよ、絶望しかなかった過去に夜明けをもたらすのよ!」

彼は彼女の言葉を一言一句逃さず自分の身体に飲み込んだ。

「…済まない、一美。お前の言う通りだな。」

「つまらん…そんな話。」

エンペラーホッパーは2人を見下しながら言った。

「そうか？俺はとて面白い言葉だと思う。今の俺に足りないものを：教えてくれた。」康介はそう反論する。そこには少し余裕があるように感じた。

「まあいいさ。もうすぐ時間だ。夜明けと共に、一部の人間に力をもたらず。」

エンペラーホッパーは鼻で笑い言い放った。

「それで何をするの？」

「闘争心を持つ人間は、力を手にすれば抑えられなくなる。そうして争い、勝ち残ったものを最強の戦士として作り上げる。要するに、お前達はもう用済みって事。」

「散々利用しておいて最後はアツサリ切り捨てるなんてな。その選択、きつと後悔する。」康介は、エンペラーホッパーに恐れもしない。それは一美も同じだ。

「なんだと？」

「なぜなら、その運命を俺達が変わるからだ！」

その時、東の空から金色の太陽が顔を出した。

エンペラーホッパーは、再び紫色の光線を2人に放った。今度はそれを空中に飛び上がる事で回避した。

「お前の運命は、俺達を越えられない！」「NOVA reopen！」

「WARIZ drop NOVA！」

「私達の最強プレイにシビレなさい！」「AEGIS reopen

！」「DISASTER EREX lightning！」

ウォーズは左足、エレクスは右脚をエンペラーホッパー向け突き出した。

「お前達は……ここで死ね!!!」

右腕を突き出し応戦するエンペラーホッパー。

しかし、その腕は2つの光が激突すると同時に裂ける様に崩れ始めた。

「なんだと……!!」

「心も体も怪物に成り下がったお前が、俺達には……私達には……絶対に

勝てない!!!」

ウォーズとエレクスのキックは腕を砕くと、胴体と顔、そして翼全てを打ち砕き、地面に倒れた。

「私が…人間以下…私を侮辱するとは、許さんぞ!!!」

最期の力を振り絞りエンペラーホッパー^{湯山玄武}は、恨みの言葉を吐き捨てると断末魔と共に爆発した。

再び立ち上がった2人は変身を解き、向き合った。

「一美…終わったな。」

「うん…私達に、ようやく夜明けが来たのね。」

「ああ、それも、人生最高の朝明けさ。」

「康介、よくやったな。」

父さんは朝一に俺のところ^{とこ}に会いに来てくれた。

「ありがとう、父さん。」

少し戦いの事を話した後、父さんが突然話題を変えた。

「実は、近々仮面ライダーを率いた組織、或いは会社を作ろうと思ってる。康介も来るか？」

しばらく考えた後、俺は答えを出した。

「流石に、断っておくよ。もう疲れたし。でも、ピンチになった時は絶対に助けるよ。」

そうかと言うと、「じゃあ、その時はよろしく」と言い帰ろうとした。「待つて。」俺はそれを呼び止めた。

「母さんに、会いに行つてあげて。ずっと、待つてたんだから。」

「…愛する息子にそう言われたら仕方ないか…」

「言われなくても行つてくれよ。」

それから時間はあつという間に過ぎていった。卒業式を終え、皆はそれぞれの将来に向かつて道を歩み始めた。

鯨島は水棲生物の研究の為、昭彦は医者になる為、レイは学校教師になる為それぞれ進学した。

恵理は家業であるタイガートラベルに、香は東京に本社を持つ新聞社へ入社。忍は自身の先祖の忍者を未来へ残す為に日本の忍者について研究する学会に入会した。

道永は父さんと共にまた姿を消した。きつと父さんが新しいことを始めるからそれについていったのだろう。だが、それによって一美は少しストレスが溜まる様になったらしい。どうやら彼は毎朝毎晩電話をかけてくるんだそう。せめてメールにしてくれと少々お怒りだった。

一美は、自身の夢だったゲームを作り売り出すという事の為に専門学校へ入学、俺も元々興味のあつた電子部品のメーカーへと就職した。

4月の中旬ごろ、俺と一美は再開した。卒業式以降連絡は取つていたが、顔を合わせるのは久しぶりだ。

「学校は楽しいか？」

「うん、勉強はついて行ける気がしないけど。」

一美は、前より少し大人びた気がした。なんというか、美人寄りに

なったというか。

「そつちも楽しい?」

「まだイロハを教えて貰ってるだけだからね。結局勉強。でも、やっていくしかないよ。」

「そつか。」

俺達は時間になると湧き上がる噴水を眺めて座っていた。

「俺は、上司や同僚達と上手くやってるよ。前みたいな消極的な自分からじゃ想像出来ないけど。」

「私も、既に友達が五人ぐらい居るよ。毎日ゲームやってる。」

俺達は黙ってしまった。いつもなら、話したい事を沢山の話すのに、今日は自分も一美もその雰囲気はない。

「:ねえ。」一美が沈黙を破った。

「なんだ?」

「お昼ご飯にしない?私、叔母さんからパン貰ったら一緒に食べよー!」
「そうだな。」

彼女は、抱えていたバスケットから風呂敷に包まれたパンを取り出した。

とりあえず、俺はバターロールを手に取り、食べた。

「やっぱり叔母さんのパンは美味しいね。」感想をいつも通り言った。だが、一美の様子が少しおかしかった。いつもならありがとうって言うのに。

「実は、今日持ってきたパン。私が作ったんだ。」

そう:だったのか。彼女は頬を赤らめ、そう確かに告げた。

「:ありがとう。」そう素直に俺は返した。

「ええつと:その:」一美は頬を赤らめ俺から視線を晒した。

「なんだ?」

「私:私は、康介に会えてよかった。康介に会えたから私は変わった。ありがとう。」

「ああ、俺も一美に会えてよかった…永遠に忘れはしない。」

第49話 消失した都市と鍵の騎士

「ここが、元アトランティスが あった場所か…」

5月の空が隅から隅まで晴れ渡っている日、康介はアトランティスがあつた山の中の広大な空き地に来ていた。

そこはアトランティスが消えてから何度も再開発の計画があつた。しかし、その話が上がるとびに関係者が謎の死を遂げると言う怪談じみた話が広まり、結局今日に至るまで空き地のままだつた。

そんな場所になぜ彼は居るのか、それは数日前までに遡る。

「ただいま。」康介はいつも通り会社から帰るとリビングに顔を出し母の様子を見るのが習慣となっている。

「おかえりなさい。」

リビングには白夜総三の姿があり、帰ってきた康介に対してそう言った。

康介はその後風呂に直行しようとした、が明らかにそこに居ないはずの人物の姿を見るともう一度リビングの扉を開けた。

「どうしたんだ？」総三は聞く。

「どうしたんだはこっちの台詞だ、何で居るんだよ。」康介はリビングに入り父親の前に立つ。

「康介に用があつてきた、それだけだ。それに母さんに顔を見せておけと言つたのは康介だろ？」

「まあ確かにそうだけどさ…とところで母さんは？」

「今風呂だよ。料理は冷蔵庫の中にあるから温めて食べてくれつて。」総三の前から居ましたよのオーラを出しながら話す様子に一瞬苛立ちを感じたが、空腹には耐えられず冷蔵庫を開けた。

「で、要件つて何だ？」康介は夕食のサラダをテーブルに置き、炊飯器からライスを皿に盛り付けた。

「アトランティス跡地に、正体不明の怪物らしき生物が現れた。それを調べて貰いたい。」単刀直入に言う。

「それぐらい自分でやればいいじゃないか。」康介はライスに温め直したハヤシライスのルーをたっぷりとかけた。

「私は、まだ世に姿を見せる訳にはいかない。だから頼んでいる。それに明日は休みだろ？」総三は康介にどンドン詰め寄る。

そしてその答えが今の状況だ。

「それにしても…」彼は先程から違和感を感じていた。誰がこちらを見ている、そんな感覚がした。

しかし後ろを振り返っても人の影すら見当たらない。気のせいかと再び正面を向き直した…。

「あれは？」そこには、徐々に地面から湧いて出るホッパー達の姿があった。

「なんでこんな所に！」

康介はすぐ様バツクルを装着し、キーを構えた。

「変身！」「open！」「Masked warrior！KAMEN RIDER WAR—Z！」

変身するのはほぼ2ヶ月ぶりの彼、すぐ様ホッパーに対して剣を突きつける。

「ホッパーか、久々の運動に丁度いい！」

現れた10数体のホッパーは瞬く間に消滅する。

しかしそれ以上のペースでホッパーは生成されていく。

「キリがない…」そう言うのと剣にキーを装填する。

「full open！」「WAR—Z slash！」翠色のエネルギーを纏った剣はホッパーを切り裂いていく。

ホッパーがいたところは爆発によって枯れた葉が舞っていた。

「ここは…森か？いつの間に…」

ウォーズは森林へと迷い込んでしまった：そう考えた、だが明らかにおかしい、さつきまで空き地に居たはずだ。そう考え彼は木の葉の道を歩いていく。

しばらく進むと開けた所へと出た。

それを見たウォーズは、驚きで言葉が出ない。

植物の生い茂った建物、荒廃した街、それは紛れもなく自分達が前に戦っていたアトランティスそのものだった。

むしろ腐敗具合が前よりも酷くなっている。

その時、右奥の建物の裏から何か音がしたことに気がついた。

ウォーズはその建物へと近づく。

そこには、ウォーズと似た姿をした赤黒い戦士と、鷲の怪物、更に騎士の様な見た目をした仮面ライダーの姿があった。ウォーズはその騎士に見覚えがあった。確か仮面ライダーロック：そう名乗っていた。彼とは少し前に会ったことがあり、肩を並べて戦ったこともある。

ウォーズはしばらく会話を聞くことにした。

「そいつを離せ！」ロックが言う。

「ここまで追ってきたのか：やはりしぶとい奴だな。」赤黒い戦士が言い放つ。

「アンタ、俺のことなんか気にしないで逃げてくれよ！鷲の怪物が言う。」

「そんな事出来ない、平和に暮らしたいと願うなら人だろうとホールズだろうと助ける！」ロックは剣を構えた。

ロックは、地面を蹴り上げ赤黒い戦士に迫る。それを赤黒い戦士は鷲の怪物を押し倒し避けた。

「お前とは戦いたくないのだから：！」赤黒い戦士は剣を取り出した。「だが剣を向けた以上、返すのが筋って奴だ。その運命呪うんだな。」

赤黒い戦士はそう言うのとロックに向かって剣を振り下ろす。

その斬撃は鎧のない所を敢えて狙い彼を一気に追い落とす。

「これで終わりだ。」「再施錠……」「ネガブレイク！」

右脚にエネルギーを纏いロックに蹴りを放とうとする。

あれを喰らえば死ぬ、そう悟ったウォーズは咄嗟に弾丸を放つ。

その攻撃に気付いた赤黒い戦士は避ける。

「何者だ！」

「おい色違い。そいつを殺す気か？」

「色違い？違う、俺の名は仮面ライダーネガウォーズ。覚えておけ。」

「そうかよ、それよりそれ以上の攻撃をやめてもらおうか。」ウォーズはネガウォーズと銃を構えながら距離を詰める。

「ふっ、ならこいつはどうなってもいいのか。」ネガウォーズはそう言うとうと倒れていた鷲の怪物に剣をかけた。

「アドラー!!」後ろのロックが叫ぶ。

「ウォーズ、その変身を解きキーを全て出せ。そうすればこいつを解放してやる。」

「そんな要求に乗らなくていい！俺がこいつを倒せ！」鷲の怪物：アドラーは叫ぶ。

ウォーズは静かに腰のキーに手をかけ、抜いた。

変身を解き康介の身体が現れた様子を見てネガウォーズは意外だと呟いた。

ウォーズは、自身の持っているウォーズキーを始めとした5本のキー、スペシャルキーを置いた。

「……一緒にノヴァも出して貰おうか。」

「……仕方ない。」康介は隠し持っていたノヴァバックルも出した。ネガウォーズはそれを一つずつ回収するとその場を後にした。

ロックは、変身を解き康介の前に立つ。

「久しぶりだね、康介。」彼は康介の名を呼んだ。

「ああ、2ヶ月くらいぶりだな、優。」

獅童優、それが彼の名だ。またの名を仮面ライダーロック。

「……あの、ありがとう。俺を助けてくれて。」

その時、2人の後ろからアドラーが声をかけた。

「いいって、それより怪我はない？」優は彼の身体を気遣う。

「ああ、なんとかな。そちらの戦士もありがとう…」

「礼には及ばない。」戦って感謝されるなんてことがない康介は一瞬照れた。

「それにしても、2人は何故ここに？」康介は話題を変えた。

「俺達は、ネガウオーズを追って来たんだ。」

優達はここまでの経緯を話した。それに康介はやや驚くが、すぐに納得した。

「つまり、アドラーを救う為にやって来たよ。」

「そうだね。」

それにしても、アドラーの様に正義の心を持った怪物もいるのだな、そう素直に思った。

「で、ここはどこなの？明らかに人が住んでいる様子は無いし…」

「ここは、科学都市アトランティス：だった場所だ。ここが例の戦場だ。」康介が例の戦場と言うと優は少し悲しい顔をしながら頷いた。

「とりあえず、ネガウオーズを探そう：別れると先程みたいに襲われるかもしれない、団体行動しよう。」康介がそう言うと、背後の人物が真っ先に頷いた。

「是非賛成です!!」明らかに優でもアドラーでも無い声に康介は後ろを振り返った。

そこにはグレーのスーツを着たカメラを首から下げている男がいた。

「アンタ誰だよ！というかなんでここにいる。」康介は聞く。

「申し遅れました、私こういうものにして…」そう言うと名刺を差し出した。そこには「北一新聞 天野星也」と書かれていた。北一新聞、インターネットで新聞を読むと言う革新的な方法をいち早く取り入れたことで有名な新聞社の記者が何故ここに…

「実は私、今白夜総三さんについて調べておりまして。それでご息である貴方について行けば何か分かると思いついて行ったら、ここに入ってしまった…」

父親について調べているのか：色々詮索をしたかったが、それは諦めた。刺激して余計なことにならない様にと敢えてそこまで聞か

かった。それにしても、アトランティス跡地で感じた視線はこいつだったのかと一安心した。

「しようがない、俺達から離れるなよ。」

こうして4人はアトランティスを進むこととなった。

途中、音楽の話で優と星也は意気投合し、話しながら歩いているのを眺めながら康介はアドラーに話しかけた。

「なんで、戦うのが嫌になったんだ？」

「俺は、血を見るのが嫌いになっただけさ。誰かが死ぬ所なんて見たくもない…君達はなんでそんな事を気にせず剣を握り戦えるんだ？」アドラーは逆に問いかけた。

「…血を見て喜ぶ奴なんてまともな感性を持っていない奴だけだ。誰だってそんなもの見たくないさ…ただ、それを現実と割り切るしかないんだ。そうやって俺は戦って来た。」

「…俺には少し難しいな。」アドラーはそう呟いた。

「とにかく、簡単に言えば逃げちゃダメだって思う事だ。俺が逃げれば怪物は野放しにされ、より人は死ぬ。そんな事を放っておきたくない。」康介は自身が思う事をそのまま口にした。

「ううああ!!」

その時、前から悲鳴が聞こえた。視線を前に戻すと星也がダークホッパーに捕らえられていた。更に周りには大量のホッパーが出現していた。

「たたた助けて!!」

「今助ける!!変身!!」「施錠!騎乗!向上!…仮面ライダーロック!」
韻を踏んだ変身音と共にロックは姿を現す。ロックは剣を呼び出すとホッパー達を次々と切り裂く。

瞬く間に消えたホッパーを横目にロックは星也を捕らえているダークホッパーに迫る。

「優、気をつけろ!そいつは魔法を使ってくるぞ!」

「分かった、それならレイア、力を貸してくれ!」

「Form up」「大变身!」「ok, change the key: form flame!」

深紅の鎧を見に纏い、ロックは炎の剣を前に構える。

ダークホッパーは康介の言った通り魔法を、それも炎魔法をロックに浴びせた。

しかし、それはまさに火に油という奴だった。その攻撃によりロックの剣はより強化され、天に登るほどの火の柱を生み出した。

それで斬られたダークホッパーは、焼かれた所を痛がり、うずくまっていた。

「星也さん、あつちに!!」その時、ロックの横から斬撃が走った。

そこにはもう一体のダークホッパーがいた。そいつはもう一体のダークホッパーを起こすと2人揃ってロックに迫る。2体の不意打ちの連携攻撃にロックは一気に形成逆転され星也は結局ホッパー達の元だった。

「どうしよう…」アドラーはそう呟いた。

「…優を…星也を助ける!!」康介は走り出した。ロックが落とした剣を拾い上げると一体のダークホッパーに振り下ろす。しかし、人が振り下ろす剣は軽く、簡単に弾かれてしまった。

「やめろよ。なんでそんな無茶な事を…」アドラーが駆け寄る。

「言っただろ…もう逃げたくないんだ、現実から。だから無謀でもやるんだ。」

その言葉をアドラーは心の底から理解し、自身のすべき事が見えた気がした。

倒れる康介の前に立つと、トマホークを構え敵に向かって走り出す。

アドラーは、トマホークを振り下ろす…ダークホッパーはダメージを喰らうが、殆ど無傷だ。アドラーもダークホッパーに吹き飛ばされ康介の隣に倒れる。

「アドラー…どうやら俺達は似たもの同士らしいな。」康介が声をかけながら起き上がる。

「そうみたいだな…康介。」アドラーも再び立ち上がる。

「…俺達は、絶対に諦めない!!」起き上がった2人はそう固く決意した。

その時、康介のサブイブバツクルとアドラーの身体が金色に光り輝いた。

「なんだ…この力は…」アドラーは突然の出来事に動揺した。

「さあな…だが、もしかしたら変身できるって事じゃないのか…俺とお前で。」康介はそう言う。

「変身!!」2人はそう叫んだ。すると、アドラーの姿は新たなキーへと姿を変えバツクルに収まる。

「Open!」「Ever!Never!Over!KAMEN RIDER WARRINGHTS!」

ウォーズの素体に鷲と騎士の鎧を混ぜた様な金色の鎧が装着され、新たな姿へと変える。一言で言うなら騎士風のウォーズ、仮面ライダーウォーナイツの完成だ。

双頭の鷲を象った両刃の斧オートクレールをガツチリと右手に持ちながらウォーナイツは2体のダークホッパーに近づく。

一体のダークホッパーは、同時に剣を振り下ろす。

だが、それは甲高い金属の擦れ合う音と共に弾かれる。ウォーナイツは斧を振り上げるとダークホッパーに攻撃を与える。

「俺達も負けてられないな…行くぞ!」

ロックはキーパットライザーを召喚、「1593」とコードを入力して新たな形態へと進化する。

「サイバーアップ!」

「Password Consent change up!」

ファイヤーウォールフォーム…ロックの身体を灼熱へと変化させる。武器を剣から槍へと変え自身の目の前に迫るダークホッパーを振り払う。

「一気に方をつける!」ロックは槍に自身のエネルギーを集中させる。

「俺達も決めるぞ!」「いつでも行ける!」ウォーナイツも斧を振り上げエネルギーを溜める。

「ガツチングストライク!」「KNIGHTS clash!」

振り下ろされた槍と斧は地面を轟音と共に進む。強烈な炎と氷が混ざり合い光となり2体のダークホッパーに迫る。

避けるのではなく応撃しようと2体は画策しようとしたが、そう考えるまもなく光に飲まれ塵一つ残らなかった。

「よし、やったな。優、アドラー。」

「ウォーナイツ…2人の力があつてこそだよ。」

3人の背後から拍手をしながら隠れていた星也がやってきた。

「いやーやはりお強いですね。」そう言いながら目線はウォーナイツのバックルにあつた。

「少し見せてくださいいな！」彼はウォーナイツキーをバックルから引き抜こうとした。

「やめろよ！」ウォーナイツはそれを後ろに下がる事で防いだ。

「しよがないですね…なら物々交換といきませんか？」

そう言いながら星也が彼らに見せたのは、先程ネガウォーズに取られた筈のウォーズキーだった。それだけでなく他のキー全て星也が持っていた。

「お前…何故それを持っている。」ウォーナイツが聞く。

「こう言う事だからですよ。」そう言つて腰に巻き付けてあるものを見せつけた。それは紛れもなくネガウォーズがつけていたアルファサバイブバックルだった。

「つまり、最初から嘘を演じてたつて訳か…」

「ええ、そのホールズという異界の力、そしてウォーズの抹殺をあの人には望んでいるんでね…」星也はそう言うのとネガウォーズのキーを構える。

「力を持って全てを制す…変身！」「施錠…」「仮面ノ絶望…仮面ライダーネガ・ウォーズ…」

「俺達とやろうつて訳か…アドラーを奪わせない、そして俺を殺さない。」ウォーナイツは再び斧を構えた。

「右に同じだ、行こう康介!!」ロックも槍を構えてネガウォーズに刃先を向ける。

「かかってこい…まとめて撫で切りにしてやる!!」

そう言うのとネガウオーズは剣を装備し2人に迫る。

ネガウオーズのなんも捻りもない単調な攻撃を後ろに下がる事で2人は交わし、ウォーナイツが斧を振り下ろす。

「まだまだー」ネガウオーズは立ち上がると今度はロックへと迫る。

これを槍で攻撃が当たる前に貫く。その勢いでウォーズのキーが全てネガウオーズの懐から転がり落ちた。それをウォーナイツは手に取った。

もはや2人に手も足も出ないネガウオーズは、2人に叫んだ。

「何故だ…明らかにネガウオーズの方が強い筈だ!!」

「俺達とお前では場数が違うんだよ。」ウォーナイツが言う。

「破壊する為の力ではその先には何も無い。でも誰かを守りたいと思う力には平和を守れるという未来がある。抱えている重荷の量が段違いなんだよ!」更にロックが付け足す。

「うるさい…こうなったら、アトランティスごと消えてしまえ!!!」

そう言うのとネガウオーズは銃を周りの建物へと乱射した。それにより腐敗の進んでいるコンクリート壁が一気に崩れ出し、2人の騎士の元に迫った。

「まずい!!」避けきれない突然の出来事に立ち尽くす2人。そして、巨大な破片が迫る。

「俺に任せてくれ!!」その時、ウォーナイツの変身が解け、アドラーが飛び出した。

アドラーは翼を広げ2人にコンクリート片が落ちない様支えた。

「アドラー!大丈夫か!」優が心配そうに聞く。

「こんな痛み…2人に比べれば全然…!」しかし、コンクリート片は更に積み重なり重量を増す。

「早く、出て!」アドラーはそう力を振り絞り叫ぶ。

「お前を置いていけるか!」康介はそう強く言い放った。

「…いいんだ、俺に少しでも正義の味方をさせてくれた事、感謝してる。俺も2人みたいに大切な人を守りたいんだ。だから…最後に、最期に自分の翼で守らせてくれ!!」

アドラーの願いに、康介は応えたいと、そう思った。優もそれは同じだ。

「すまないー」康介はそう言うとロックと共に安全地帯へと逃げる。

2人が逃げ、振り返った時には、アドラーがコンクリートの重荷に耐えている姿は見え、コンクリートの山ができていた。

「そんな…アドラー…」優が落胆の声を上げる。

「…」康介も黙ったまま瓦礫を見つめる。

「仲間を庇って犠牲に…ねえ。ストーリー映えしそうだ。」ネガウオーズはわざと瓦礫の上を歩きながら楽しそうにいう。こんな悲しい時に…そう怒りをぶつけようと康介が口を開いた時、ネガウオーズの下から右腕が姿を見せた。

「本当、そうだよな！」アドラーだ。瓦礫をかき分け現れたその腕はネガウオーズの右脚を捕らえた。

「生きていたのか！」ネガウオーズは驚きで銃を構える。

アドラーは、右腕だけでなく身体全体を地上に上げると、そのまま銃を奪い取った。

「最期は仲良く道連れだ。一緒に地獄へ行こうぜ。」

アドラーは、ズタズタに切り裂かれた両翼の痛みを耐えながらネガウオーズを両腕で捕らえる。

「優…俺にもう一度生きるチャンスをくれてありがとう。康介…俺と共に戦ってくれてありがとう。2人には感謝している、だから絶対生き延びてくれよ!!」そう言うときまだ崩れていない外壁にアドラーは銃で攻撃した。その外壁は一瞬にして2人を簡単に潰してしまった。

アドラーの最期を見届けた2人に、帰還を伝える声が聞こえた。

2人の背後には、黒く空間に輝くホールができていた。

「康介、今すぐ帰還しろ。時間が限られている。」それは総三の声だった。

「分かった…すぐ行く。」康介はそれに答え優と共に潜り抜けた。

「まだ…まだ終わっていない!!」

「大丈夫か、康介。」ホールの先には先程までいたアトランティス跡地が広がっていた。そして、変わった機械を操作している白夜総三の姿があった。

「ああ、色々あったけどな。」康介はそう答える。

「康介、あの人は？」優は聞く。

「あの人は…頭の…」おかしい、そう言おうと康介は思ったがすぐに言い換えた。

「頭のいい父親だ。」その言葉を聞き総三は笑顔を見せた。

しかし、その顔はすぐ真剣なものへと変わった。

「何かがホールを潜ってやってくる！」

「何！」3人がホールに視線を移すと、そこにはネガウオーズの姿があった。

「探したぞ…今度こそぶつ殺す！」ネガウオーズは怨霊の如く蘇りそこにいた。

「死んでなかったのか！」優が驚く。

「父さん、下がってろ。コイツは俺達が倒す。」康介は総三にそう言っ

た。頷いた彼はすぐさま立ち退いた。

「お前は俺達が倒す。お前の運命は俺達が終わらせる。」康介はノヴァバツクルを装着する。

「アドラーの為にも、俺達は戦う!!」優もキーパットライザーを装備しキーを構える。

「変身!!」

「Destiny more than the space! K
AMEN RIDER WAR—Z・NOVA!」宇宙をも超える運命を手にした戦士、漆黒の仮面ライダーウォーズ・ノヴァ。

「疾風!・激流!・烈火!・フォームアップトライ!」蒼炎、激流、疾風を更に纏った鎧を身につけた騎士、蒼き仮面ライダーロックトライフォーム。

2人の最強形態が今ここに並び立つ。

「相棒は鍵!・纏うは鎧!・仮面ライダー!・: ロック!」ロックはそう名乗る様子を見たウォーズも即興で名乗りを考える。

「俺の名は仮面の戦士、仮面ライダーウォーズ!」ウォーズの名乗る姿をロックは見届けた。

「行こう、康介!」優、いつでもいける!」

2人は剣を構えてネガウォーズに向かって走り出す。

ネガウォーズは先程と同様剣を構えた。そして、2人が剣を振り下ろすタイミングで剣を前に出し防ごうとする。

が、そんな抵抗も虚しく剣ごと叩き割られる。

「何!」ネガウォーズが動揺する間にも2人は必殺技を発動させた。

「full power」[WAR—Z drop NOVA!]

2人は声を合わせて叫ぶ。

「ガツチングストライクノヴァ!!」

2人のキックがネガウォーズの胸部に一瞬で迫る。

そして刹那、その脚は地面に着地している。

僅か1秒足らずでネガウォーズは爆散し、爆炎の中へ消えた。

「また迷惑をかけたな。」康介は優に言った。

「困った時はお互い様、ライダーは助け合いでしょ。」優は康介に笑顔で答える。

「どこかで聞いた事ある台詞だな。」

「これは、俺の恩師が言ってた言葉なんだ。って言っても受け売りらしいけどね。」

2人が笑い合っていると、目の前にまたホールが現れた。

「よし、優君、これで帰れる筈だ。」総三は、2人に別れの時間を告げた。

「じゃあ、またどこかで！」優は康介に手を振りながらホールの中へと入っていった。

康介は優の姿が見えなくなるまで見届けた。

「今日、俺全然出番なかったな…」

「仕方ないじゃん、他の人には聞こえないし、そんなにゆっくり話す時間もなかったんだから…」

優はホールの中キーに、ユーズに答えた。

「この世界で、中々いいものが手に入りました…」

「ウオズ…」

NEXT WARRIZ 仮面ライダーエレクス

「久しぶりだな…我が故郷…」

夜の闇に包まれる中光を放つ街をその男はビルの上から見下ろしていた。

彼は、右手に不思議な物を持っていた。それを簡単に表すのなら「ゲーム機」だ。中心にオレンジ色の浮遊体が描かれ、その両側にはそれぞれ操作ボタンの様なものが配置されている。しかし、その紫色のパットには何かを射出する為の銃口が2つ取り付けられている。

「…さあ…始めよう。」

男は、そのゲーム機からオレンジ色の浮遊体を空に解き放った。

「バグスターよ…お前達はどの様な働きをする。」

「これを君に渡しておく。頼んだぞ。」

私達の戦いが終わってから、もうすぐ1年が経過する。

私は専門学生としての日々を送っていた。正直、勉強はやっぱり難しいし時々全てが嫌になることもあるけど、なんだかんだやって来れる。

私は今電車で揺られ自分の住む街へ帰る途中だった。その電車は、

私が住む街の駅に停車しドアを開いた。

「じゃあね、一美さん！」

「さようなら、二葉さん！」

私は学校でできた友人の一人である二葉さんと別れ列車を降りた。そして、改札を出るとそこには見覚えのある顔が私を待っていた。

「久しぶり、イチミン」

「カオリン！なんでここに？」私を待っていたのは、私の親友である不知火香だった。彼女は心なしか少し大人びた様な気がした。そして胸もまた大きき私だつて、それぐらいは……

「いや、休みを貰って来てみたんだ。ほら……もうすぐ『あの日』から一年だし。」

彼女は、あの日という言葉を少し暗めに言った。それもそうだし……

そういえば、あの日からもうすぐ一年か……そんな事を考えながら2人で夕焼けに染まる街中を歩いて行く。

「意外と一年で街の雰囲気も変わるもんなんだね。」彼女は久しぶりの街を堪能していた。

「うーん、なんだかんだ毎日歩いてるから意外と違和感はないかな。そうだ、折角だしどこかで食べていこうよ。」私は外食を提案した、そして彼女もその考えに賛成の意を示した。そして近くのファミレスに入る事にした。

それから数時間、私たちは過去を懐かしみながら食事を楽しんだ。

別れ際……

「それじゃあ、今日はこの辺にして帰るわ……あっそうだ。明日、アイツに会いにいこうよ。」香は突然そう言い出した。

「……分かった。じゃあ、明日の10時に駅でどう？」丁度講義が明日はない……丁度いいだろう。私はそう聞いた。

「オツケー、明日の10時に駅……それじゃあ、また明日。」

「うん。」香はそう言って店を出て行った。ちなみに、彼女が会計を忘れて私が結果的に彼女の分を奢る事になってしまった……まあ明日返して貰えばいいだろう。

それにしても…早苗に会いに行く…なんて久しぶりかもしれない。確か去年の夏に康介と行ったつきりな気がするな。

楽しみではあるが、それと同時に彼女が崩れ落ちる姿も思い出す。

『一美…香、最期に…私を人間で居させてくれて…ありがとう…』

あの時救えなかった後悔と、その時の悲しみを思い出すと、何かがまた溢れそうになる。

「…早苗…」 私は今は亡き人物の名を呟いた。

翌日、私は9時半くらいに駅に着いた。正直、昨日の疲れが取れた感じはしなかった。

今日は休日だからか、人通りが多い気がする。それも親子連れやカップルが。まるで、去年のあの日みたい…

それは、私が2度体感した日。その日は康介の誕生日のお祝いの為にちよつとしたデートをした日のことだった。1度目は何もなく終わった。しかし、2度目は違った。私の目の前に現れたサバイバツクルとエレクスのキー、それらを持って康介の元へ私は向かった。

デジャヴというには少し違うかもしれない。だけど、今日がこのまま平穏で終わる事はないと強く感じている。

だからこそ、私は『バツクル』と『キー』を持ってきた。

「よつ、早いじゃん。」そんな私に声をかけたのは香だった。昨日よりも肌の露出が多い爽やかな蒼と緑の服を着ていた。こいつ、余程見られたい変態なのか…

「うん、楽しみで早く来ちゃった。」私は七割くらいの嘘を混ぜて返した。

「これぐらい早く来ればイチミンより早いだろうって思ったのに、もう来てるし。」香は予定よりだいぶ早く来ている私に驚いていた。流

石に、もう遅刻はしないよ。

「じゃ、行こっか。」私達は、早苗のいる場所まで歩いて向かう事にした。

そこは駅から徒歩で20分くらいのところにある寺、氷蘭寺だ。そこにある墓地に足を踏み入れた。そして私達はまっすぐ彼女の在る場所へと歩く。

『東雲』と描かれた墓石に私達は着いた。

「久しぶりだな…ん？」香は、彼女の墓に何かある事に気がついた。それは私も同じだ。

そこには、赤いグラジオラスの束が指してあった。墓石にも濡れた後がある。

「誰か来てたのか？」彼女は私を見て聞く。私は「分からない」と返した。

東雲早苗には、親が居ない。もしかしたら生きているかもしれないが、アトランティスの件で別れてしまい、彼女は別人となった。今更に分かる手立てもない。だからこそ、彼女の墓参りに来る人物は限られている。

私は、ふと指してある花に気が付いた。これは前にも見た事がある

：

「まさか、康介？」そうだ。これは早苗が亡くなった直後、康介が彼女に手向けた花だ。

「…アイツも来てくれてたんだな。」香もそう呟いた。

「じゃ、私達も花渡して、綺麗にしてあげよう。」そう言って私達は、彼と同じ様に花を差し、墓石を綺麗にした。

「じゃあね、早苗。また来るから。」

私達は、そう言って彼女のいる場所を後にした。

「そろそろお腹すいてきたな。」墓地を後にした私達に襲いかかったのは空腹だった。その頃には、時計の長針と短針がもうすぐ12を指さうとしている。

「じゃ…お昼ご飯に…」

その時だった。目の前に現れたのは、恐怖の顔を浮かべた人々だった。彼らは逃げ惑いこちらへと押し寄せていた。

「何が起きてるんだ？」私は素直に言った。

「まさか…行ってみよう！」香は、率先して人混みの先へと進む。私も離れないよう必死に着いていく。

私達が向かった先では、見たことのない怪物が人々に対して攻撃を仕掛けていた。オレンジ色の頭部らしきものを持ち、両手で持った簡素な三叉の槍で逃げ遅れた女の人に攻撃しようとした。

「危ない！」私は咄嗟に身体を動かして、その槍を止める。

「早く逃げて！」香は倒れていた女の人を起こし、遠くへ逃した。

「なんだ貴様ら…！」その時、奥から男の低い声が聞こえてきた。

私達はそれに身構えた。現れたのは、銀色の西洋の甲冑に身を包んだ戦士だった。

「こいつ…何処かで見覚えが…」香の呟きで、私もそんな気がしてしまった。集中しないと…

「消えろ!!」その戦士は私達に向かって剣を振り回す。私達はそれを後ろに避け、私はベルトをつけた。

「カオリンは早く逃げて！」
イチミンは早く逃げて!

えっ…なんで香が…そう思い彼女を見た。彼女の腰にはロードライバーがある。更に左手にはビクトリケーンのキーが…

彼女の顔を察するに思っていた事は同じだろう。私達は互いに目配せし「ならば協力しよう」という意思を伝えた。

私達は、キーをそれぞれ首元に構える。

「変身!!」

「open!」[Lightning goddess! KAMEN RIDER ERER—X!]

「set up!」[大展開!][仮面ライダービクトリケーン!!]

金色の鎧に、金色の冠のような角を持つ雷鳴の女神エレクス、青色の鎧に、風を思わせる爽やかな発色の体色を持つ勝利の神風ビクトリケーン、今ここに再臨する。

「いくわよ、イチミン。」ビクトリケーンは剣を構えた。

「カオリンこそ、遅れないでよ。」私は銃を構える。

「行け!」騎士は配下に攻撃を指示する。その号令に合わせて配下は一斉に攻撃を仕掛ける。

ビクトリケーンは風のように一瞬にして距離を詰める。風のような速さを持つ彼女に配下は驚きを隠せない。そこへ彼女の太刀が腹部へ次々と斬りつけられる。

配下はそれらの攻撃で次々と爆散していく。

敵を倒し油断している彼女の後ろから攻撃をしようと新たな配下が迫る。

それらを私が電撃を纏った弾丸で次々と撃ち落としていく。電撃を受け感電して身動きの取れない配下達は、次々と地面に倒れ、そのまま爆散する。

「案外、楽勝だな…。」ビクトリケーンは剣を振り払いながら言った。

「でも、まだ終わりじゃないわよ。」その私達に騎士が迫っていた。

「我が配下を一撃で倒すとは…お主らを少々見くびっていた様だ。こちらも本気で戦わねばな。我が名はワイバン、帝国随一の将兵にして、誇り高き国の騎士!」ワイバンはそう自らを高らかに名乗った。「思い出した!アイツ、エンシエントライドドラゴンのラスボス、ワイバンじゃない?」香はそう大声で言った。

「言われてみれば、確かに似てる!」

ここで補足だが、エンシエントライドドラゴンとは、竜騎士が帝国によって自由を奪われた国に平和をもたらすべく戦うゲームだ。

「…来ないなら、こちらから攻撃するまで!」ワイバンは、剣を手にし

私たちの元へ迫る。先に攻撃の的となったのはビクトリケーンだ。彼女はワイバンの剣撃を剣を構えて防ぐが、余りの力の差に押される。

私はサポートに入るべく銃を剣に変えワイバンの元へ迫る。電気を纏った斬撃で、ワイバンとビクトリケーンを引き剥がす。

「サンキュ、イチミン。」

「…集中していくよ。」私達は剣を構え直し、ワイバンを見据える。

その時だった。私の左半身に強い衝撃が走った。

気がついた時には私たちの身体は地面に倒れていた。

「…チーターか。」ワイバンはその衝撃の正体について口にした。

「アンタの戦いがノロマだったからつい手が出ちまったよ。」

ワイバンの隣にいたのは、また新たな怪人だった。名前の通り、チーターの様な模様と足の速さが特徴的な奴だ。

「…お前も、相変わらず足と口は軽いんだな。」

「そうカツカすんなって。協力してコイツらを倒すぞ！」ワイバンとチーターは私達に剣の刃と爪を見せつけて少しずつ歩み寄る。

「ここが貴様らの墓場だ！」そうゲームの悪役らしい台詞を吐きながらそれらを振り下ろす、が、実際は彼らの身体から火花が飛び散る。

後退した2人は何事という顔で前を向く。

「チツ、巻いたと思ってたのにな…」チーターが言う。それと同時に、後方からバイクのエンジン音が鳴り響く。それらは私たちの後ろで止まる。まさか…！

「素直に逃げればいいのに、こんな所で道草食ってんだから追いつかれるんだ。」

バイクから降り、こちらへ歩いてくるのは、紛れもなくウォーズ…康介だった。

「大丈夫か？一美、香。」銃を構え、私達の前に立ち言う。

「主役にしては、登場が遅いんじゃないかって？」私は言う。

「悪い、チーター『バグスター』を途中で見失ってな。」

バグスター…その言葉も…どこかで聞き覚えが。そんな事は今は気にする必要はない。

「貴様も、ここで倒す…！」ワイバンは剣を構え直す。

「…やれるものなら、やってみな。」私達3人は立ち上がり、並び立つ。

「お前達の運命は、俺達の手の上だ。」

「私達の神的プレイで」「シビレなさい！」

それにしても、毎回思うのだが、いくらなんでも「運命は俺の手の上だ」ってダサすぎない？すごい厨二臭くて、私達まで恥ずかしくなる…

そんなこと言ったら私の「プレイでシビレなさい」それはそれでちよつとかっこつけすぎだね。

そんな訳で、私達3人は剣を構え2体に向かって反撃を始める。2体に対してまずウォーズが剣を振り下ろす。そこへ私がチーターへ、ビクトリケーンがワイバンに対して剣で切り裂く。地面に倒れた2体は、立ち上がり反撃を試みるが、それよりも早く私とビクトリケーンの蹴りが炸裂、再び倒れる。

「さあ、これで終わりだ！」そう言ってウォーズは、必殺技を発動させようとしたその時だった。

特殊な射撃音と共に私達の足元に何かが打ち込まれた。それらは煙幕の様に私達の視界を錯乱させる。

煙幕が晴れ始め、何が邪魔をしたのかがよく見える様になった。最初に見えたのは翠色の身体、次にゲームコントローラーみたいな胸部、そして最後に変わったゴーグルとそこから覗くゲームキャラの様な青い瞳。仮面ライダーとは到底思えない様な見た目だ。

「そのベルトは…ゲームドライバー？」

「流石、仮面ライダーの知識は随一…しかし、それでも私のやりたい事についてまでは見切れない様だね。」そう言うとは彼は右腕につけているゲームパットの様なものに、ベルトに装填していた緑と黒のゲームカセットの様なものを装填した。

それから一瞬だった。そのパットに取り付けられている二丁の銃口をウォーズの腹部に押し当て何かを流し込む。

「うぐつ…」すると、ウォーズの体が、徐々に崩れ落ちていく。
「康介！」彼の身体のあちこちに、オレンジ色の何かがノイズと共に浮かび上がる。

「うああー」そして康介の身体は、オレンジ色の物体に飲まれ、全く別の物へと変貌してしまう。

それを一言で言うなら、エンペラーホッパーを人間と同じくらいのサイズに置き換えたものの様だ。ゴツゴツとした肉肌、頭部に浮かぶ大きな複眼、背中に生えた翅、それら全てがエンペラーホッパーの様だった。

「今日のノルマは達成だ。また後日…」そう言うと、意識のないまま操られている康介は他のバグスターと共にこの場から姿を消した。

「そんな、康介！」正直、私は泣きそうだった。たった一瞬を止めることが出来なかった。前みたいに救えなかった…その後悔がまた私の喉元まで登ってきたからだ…

「エンペラーバグスター、お前のデータが揃えば、ウォーズクロニクルガシャットは完成する。」

先程康介をバグスターに変貌させた男は、彼を見ながらそう言った。

「ワイバン、チーター。お前達もこの作戦に必要なだ。しばらく培養して休むがいい。」

「承知」「リョーカイ。」

私は、後悔の念に縛られながらも、香の「行かなきゃいけない場所」と呼ばれる場所に行く事にした。

そこは郊外にある小さな建物だった。

「待つていたよ、香君、一美君」そこに待ち構えていたのは、康介の父である白夜総三さんだった。

「総三さん…」私は、康介が敵に操られている事を伝えようとした。

「…分かっている。康介とは常にバックルとこのモニターで通じ合っている。彼が操られ、敵のアジトにいる事は把握済みだ。」総三さんは、息子が敵に捕らえられたと分かっている割にはやけに落ち着いていた。

「ねえ、貴方。私達に隠している事があるよね？」

そう言い放ったのは香だ。確かに、康介は奴らの事を「バグスター」であると言う事を知っていた。しかし、恐らく総三からベルトを受け取ったであろう香はその事を知らない…

「…奴らは一体何者なんだ？」

「…バグスターウイルス。コンピュータウイルスが人体に感染する様に進化した存在。奴らはゲームキャラとして実体化し感染した人間の身体を侵蝕する事で完全体となる。」

「じゃ…康介も早く救わないと…！」 そうだ…でなければ…

「そうだな、だが今は君達も疲労が蓄積されている。少し休んだほうがいい。それに、完全体まで多少なりとも猶予はある。それからでも間に合う。」総三さんは再び落ち着いた口調で話す。

「それに、そもそも君達では、感染者とバグスターを分離する事はできない。今動いたところで何もできない。」

「そんな…」私は落胆の言葉を発してしまった。つまり康介を助ける手立てはないと言われた様なものだ。

「…他のバグスターはどうなんだ？」 香が聞く。

「ワイバンバグスターとチーターバグスターは、どちらとも感染者と分離するタイプだったらしく、感染者の存在も確認できている。どちらにしろ危険な事には変わりはないが。」

「…この状況、どうやって対処するつもりなんだ？」 香は再び聞く。

「…今、バグスターウイルスが存在する世界と繋がる事が出来ないか試している。そして、その世界からドクターを呼び寄せれば、事

態は収束できるはず。それともう一つ……そうやって総三さんが取り出したのは、アルファサイバインバツクルとノヴァバツクルに似た金色の新たなバツクルだ。

「まだ実用できていないが、私なりにバグスターについて研究して得た成果だ。この2つを使えば、理論上ならバグスターを撃破し患者……この場合なら康介を救出する事ができる。」

「なるほど……にしても、アルファバツクルを何故私に押し付けようとしている？」確かに、総三の手は明らかに香の方を向いている。

「残念ながら、このアルファサイバインバツクルに適性があるのは君しかないらしい。それを分かってくれ。」

「……まあ、しゃーないか。」香はそう言っただけバツクルを受け取った。

「……私にも……」

「分かっている。康介のことを頼めるのは、君しか居ないんだ。」総三さんはそう言うのと私にバツクルを渡した。

「……それじゃ、私はもうしばらく装置を見ている。2人も頃合いを見て頼んだぞ。」

そう言っただけの人は部屋の奥へと歩いていった。

「……うーん、味方と分かっているけど、なんか胡散臭いんだよね。あの……」香はそう言った。

「なんとなく、分かるかも」私もそう返した。

しかし、これで倒した気になってはならない。まだ希望の光が見えた程度なのだから……

丁度太陽が頂点から少し下がり始めた頃、私と香は、康介のバツクルを頼りに、ある場所まで来ていた。そこは運命か否か、かつてアトランティスの事件が起きた場所だった。今は何もなく、岩側が剥き出しになっている。

「……ここが……例の場所だよね？」私は不安になった為確認のため香に聞

く。

「多分…」彼女も不安なのだろう、曖昧な返答をした。しかし、それは次の一声でかき消された。

「よく来たな…お前達。」そこへ現れたのはワイバン、チーター、そしてエンペラーの3人だった。

「今度こそ倒してやる！」チーターが言う。

エンペラーは黙ったままこちらを見ている。

「…康介を返してもらおう！」私は新たなバツクルを装着する。「BOOST…SET！」

「…そうしないと、今日を過ごせないんでね。」香もバツクルを装着する。「a—survive buckle」

私はベルトのツمامミに手を当て、香はキーを構える。

「変身!!」

「A wake! Venus! Over! KAMEN RIDER BOOST ERE—X！」

「悪道ノ鍵…」「施錠…」「悪魔ノ霸道…仮面ライダー悪道…」

私の身体には、ウォーズ・ノヴァと同型の鎧が装着される。しかし、左胸部にはZではなく「X」の文字が現れ、全身は金色に輝く。頭部の冠は青く光り、瞳は通常のエレクス同様赤く染まる。仮面ライダーブーストエレクス、それが今の私の名だ。

一方、香はビクトリケーンではなく、最終決戦の時、総三の元から盗んだアルファサバイブバツクルで変身した悪道に再び変身する。今度はちゃんと人間が変身しても無害になる様に作られているのか、苦しむ様子もない。

「行こう…香…早苗。」私は、気にすることなく2人の名を呼んだ。しかし、この時なんて早苗の名前まで呼んだのだろうか…

「…ああ、3人で…勝とうぜ！」悪道は剣を構え走り出す。私もそれに続き歩き始める。

悪道はチーターバグスターと交戦する。チーターバグスターは、得

意のスピードで勝負に出る。悪道の周りを走り回って混乱させようと目論む。

「…スピード自慢の常套句だな…狩には、「罨」を仕掛けないとね。」そう言うと、悪道は剣を蛇の様に展開して地面に叩きつける。

それを何度か続けるうちに、剣に突然荷重がかかる。チーターが剣に激突した様だ。

「なんで…」チーターは見切られた事に混乱していた。

「お前が走ることしか考えていないからだ。」悪道は剣を収納する。

「チクショー！」チーターは爪を構え悪道に向かって走り出す。

「はあっ！」そのチーターに悪道は剣を構え、左肩から腹部に向かって切り裂く。

チーターが再び身体を起こしたときには、既に悪道が必殺技を発動させていた。

「再施錠…」「悪道炎舞！」

「行こう…早苗…」悪道は、剣を最大限展開して竜の様に変える。その剣を無数に振り下ろす。それら全てがチーターの元に一つ、また一つと振り下ろされ身体を斬りつける。逃げようにも逃げられない。

悪道は、それらを終え剣を一度収納する。

「やあっ！」最後に剣を突き刺す構えを取った。その悪道の攻撃に合わせて剣が一直線にチーターの方へ伸び奴の身体を突き刺した。

チーターは、最後の言葉を発する事すらできずに爆散してしまっ
た。

次に私の番だ。

私とワイバンはゆっくり距離を詰める。

「攻めないのなら、こちらから行くまで！」そう言ってワイバンは剣を振りかぶり私に向かって振り下ろす。

私はそれを待っていた。奴の攻撃は一つ一つの動作が大きい、それは隙も大きいと言う事だ。ならそこを攻めればいい。私は腹部へ電

撃を纏った拳をぶつける。

奴はしばらく感電した素振りを見せ硬直する。そこへ私が今度は左拳をぶつける。

大きく後退したワイバンは地面に膝をつける。

「私のプレイにシビレなさい！」

「Awake open!」Ω—Voltage ERE—X
lightning!」

私は、つまみを回転させ必殺技を発動させる。

ワイバンは立ち上がり反撃しようと試みるが、電気の鎖に繋がれて身動きが取れない。その隙に私は空高くジャンプ、そして両脚を突き出し、雷の様なドロップキックを炸裂させる。

「はっ！」

そのキックはワイバンに命中、それと同時に爆散した。

「その腕…貴様こそ強者だ!!」 奴は最後までゲームキャラらしい大袈裟で格好つけた台詞を言いながら消滅していった。

それぞれ敵を倒した私たちは合流してエンペラーの元へ迫る。

「さあ、ラスボス撃破といこうじゃない！」悪道が最初に攻撃を仕掛ける。エンペラーはそれを受けるが、身体に傷はつかない。

次に私が蹴りを見舞う、しかし、これも効く様子はない。

エンペラーが反撃を行う。私は左拳で殴り飛ばされる。更に悪道へキックを繰り出す。

私達2人はまた地面に転がる。

「ぐっ…こんな所で！」悪道は、そう言ってエンペラーを見上げる。

「そうよ…私は、康介を救う…救ってみせる！」そう、私は口にした。私に取って大切な人を…絶対に救う！

その時だった、私達の後ろに誰かがいる様な気がした。それはまさ

に奇跡と言つても過言ではない：そんな人物がいた。

「マイティアクションX！」彼は、先程の戦士が身につけていたベルトと、ピンク色のカセットを持つている。それを起動したと同時に、エリアが広がり、この空間がゲームのステージの様に変わっていく。「大変身！」白衣を来た戦士は、腕を大きく振りかぶり、そう口にした。そしてカセットを装填、ドライバーのレバーを開いた。

「ガツチャーン！レベルアップ！」「マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！X！」

その人は、自身の前に現れたキャラを選択、そしてベルトから現れたピンク色の画面をすり抜け、ライダーへと変身する。

特徴的なピンク色の髪の毛、ゴーグルにオレンジの瞳、胸部にはコントローラのような模様、全身はピンクに包まれ、すごい派手だ。派手以外の何者でもない。

「お前らがエレクスと悪道…？」その人物は私達に問う。

「ええ…そうだけど。」

「アンタのとおのおっさんから話は聞いている。俺はエグゼイド。バグスター専門のライダーであり医者だ。」おっさん…というのは総三さんのことだろう…とにかく、彼が専門の医師なのだろう。

「…エグゼイド、協力して康介を助けて。」私は、エグゼイドに言う。

「ああ、康介の運命は、俺達が変わえてやらないとな。」あつ、この人も決め台詞に運命ってつけるタイプの人なのかな…

「エグゼイド、準備はできてるか？」悪道が問う。

「ああ、どんなゲームだろうと、ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」その声と共に、私たちは反撃を始める。

まず先程と同じように私達が剣と拳で攻撃を仕掛ける。どちらもエンペラーには効かない、がその後にエグゼイドが手にしたハンマーで攻撃、それは効いたのかエンペラーは後ろに後退する。

「流石は本場、効き具合が違うね。」悪道が言う。

「まあな、俺のプレイが炸裂するぜ。」そう言ってエグゼイドはハンマーのBボタンを3回連打、それを打ちつける。「HIT」のエフェクトと共にエンペラーは後退する。更にもう一度ボタンを3回連打、そ

れを打ちつける。

「ジャツキーン！」ハンマーを剣に変え、今度は赤いガシヤットを取り出し装填した。

「私も混ぜてもらおう！」

「いいぜ！」

「ガシヤット！」「キメワザ！」「ゲキトツクリテイカルフィニッシュ！」

「再施錠……」「悪道炎舞！」

赤と白い斬撃が、エンペラーに膝をつかせる事に成功した。

「今よ！一美！」

「分かった！」「Awake open！」「Over Voltage ER E-X lighting！」私は再びキックを発動させる。

「低レベル縛りでクリアと行こうか！」彼も、腰にベルトに装着しているガシヤットを左腰のスロットに装填する。

「ガシヤット！」「キメワザ！」「マイテイクリテイカルストライク！」

私達は空へと飛び、エンペラーに向かって脚を突き出す。ゲームエフェクトの様なポップなエフェクトと稲妻の様な攻撃がエンペラーに激突する。

エンペラーはキックを喰らい後退、満身創痍で両腕を上げ、爆散してしまふ。

「ゲームクリア！」

「勝った……康介！」

私は、爆炎の中から康介を見つける。彼の身体は、元に戻っている。

「一美？」康介は、そう自らの口でそう言った。私は感極まってつい抱きついてしまった。

「よかった!!」

その頃、物陰で1人の男が、パットに何かを収めていた。そこには、「ウォーズクロニクル」「ナイトオブサファリ」「エンシエントライドドラゴン」と書かれている。

「成功…だな。」そう言つてその場を去つていった。

私達は、エグゼイドと共に総三の待つ場所へ帰る。

「うん、術後経過は良好、だね。」エグゼイドだった彼は、先程の少し強圧的な態度から一変、好青年の様な口調で康介に話しかける。

「ああありがとうございます…こんな…こんな宝生永夢先生に診てもらえるなんて、光栄です！」そうだ、こいつ重度のライダーオタクだった。そんな事すっかり忘れてた。だいたい、この設定使われたの殆どコラボとか番外編ばかりで、本編じゃ空気だったじゃないか…

「…ちよつと大袈裟な気もするけど、笑顔になつてよかつた。」

永夢先生は、笑顔で彼を見ている。

「先生、そろそろお時間です。」そこへ総三さんが入ってきた。恐らく、ゲートが開いたのだろう。ちなみに、これは実際に使えるものらしい。これで過去にも「ロック」というライダーを送り届けたらしい。アンタの科学力どっから出てくる？

「はい、それじゃ。」永夢先生は、立ち上がり総三と共に歩き出す。

「先生！ありがとうございます！」

「アンタ声でかいよ！」興奮する康介を香は宥める。

その隙にも先生はゲートのある部屋に向かっている。私は、どうしても聞きたいことがあつて先生を追いかける。

「待つてくださいい！」

「…どうしたの？「美さん？」」永夢先生は振り返つて聞く。

「…あの、こんな事、お医者さんに聞くのは無礼だと承知で聞きます。患者を救えなかつた時、後悔しますか？」

私にとつてずっと心に残っている後悔、早苗を死なせてしまった事……それが今回の件と被って見えた。その行き場のない感情が今にも溢れそうだった。誰に言えばいいか分からない……。その答えを、誰かに見つけて欲しかったのだろう……人の死に一番近い医者なら、答えてくれると……

「……やっぱり、僕にだって救えない命は沢山あったし、これからもあると思う。救えなかったって後悔するし、その人を思い出して悲しくなる時もあるよ。でも、前を向かなきゃ、もつと救える命も救えなくなる……これで答えになっているか分からないけど。後悔するけど、それと同時に、更に誰かを救いたいって前向きになる。」

更に誰かを救いたい……か。

「答えになつた？」

「ありがとうございます……！」

「一美さん……頑張つてね。」そう言うと、永夢先生はゲートの中へと入っていった。

私は、この件で前向きになれた気がする。これからも、私は戦う、誰かを救うために！早苗、見てて欲しい、私の変身を……！